
闇の断罪者と無の還元者～世界の秘密と魔法使い～

clown

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の断罪者と無の還元者〜世界の秘密と魔法使い〜

【Nコード】

N2153X

【作者名】

clown

【あらすじ】

元々、この世界には魔力と呼ぶものがあり、その力は世界を循環していた。しかし、人は魔力の存在に気付かずに過ごしていた。ある時、人に魔力をそして、それを操る術・・・魔法を教えた存在がいた。

魔法は世界に広がり、6つの組織が世界の秩序を守るため、魔法使いを管理し始めた。『魔法教会』、『聖王騎士団』、『盾を掲げる者』、『賢者の知恵』、『世界樹の頂』、『神の使途』、『この6

つの組織は六魔天と呼ばれ、この世界で絶大な力を誇っている。

そんな世界に一人の少年がいる。名を黒澤 慧。彼は裏の世界と表の世界。二つの世界で生きる魔法使いである。しかし、父親の再婚を期に裏の世界から足を洗うことになった。

はずだった・・・

これは己が守りたいものを守るために力を求めるもの達の話である。

プロローグ

そこは、世界のどこかにある城。その廊下を一人の少年が歩いている。

年は14か15位、黒い髪に黒い瞳。黒いスーツに身を包んでる。正直、スーツが似合っていない。まあ、年も年なのだから当たり前だ。

少年は一つの扉の前で立ち止まった。

ノックをすると返事を待たず入っていった。

「^{けい}慧、ノックをしたら返事を待つのが本当だろ？
直ぐに入ってくる奴があるか・・・」

中には一人の男がいた。少年・・・慧と同じ黒い髪に黒い瞳、
同じスーツに身を包んだ男性だ。年は40代前半といったところか。
・・・
少年と違いスーツを着こなしている。

慧の行動を呆れた声で嗜める。

「それはすまなかった。」

「全然反省していないだろ、お前・・・」

まったく反省の色が見えない慧の態度に諦めたように溜息をつく。

「それで、慧。話とはなんだ？」

書類の仕事をしながら慧に問う。そもそも、慧から話があると言ってきたのだ。

いつも面倒臭そうにしている慧だが、その時は珍しく真剣な面持ちだった。

「ああ、俺、組織を止めるから。」

「そうか・・・って！何を言っている!?!」

当たり前のように言う慧の言葉に思わず頷くが、その意味に気が付き、改めて問い返す。

「だから、この組織を止める。」

「何を言っている？悪い冗談だ。いくらなんでも本気で怒るぞ?」

そう言って怒気を発する。この男が本気で怒ることは珍しい。それほどの言葉だったのだろう。

「いや、本気だ。」

「・・・理由は？ふざけた理由なら・・・」

「親父が再婚するらしい・・・」

その言葉に続けようとしていた言葉を呑み込む

「・・・」

「相手もバツイチで子もいるらしい。
俺が、ここに留まり続けるとその人達にも迷惑がかかるかも知れな
い。」

「・・・お前がそこまで気を使う必要があるのか？お前の父親は・
」

「あなたには感謝している。
あんたが、あの時、この組織に誘ってくれなければここまで強くは
なれなかった。」

男の言葉を遮り、慧は言う。その言葉に、何を言っても聞かない
であろうことは、長い付き合いだ。直ぐに理解できた。

よって、返す言葉は引き留める言葉ではなく、送るための言葉だ。

「ふっ・・・なに、俺が与えたのはきっかけに過ぎない。

それに、お前のおかげで随分助けられた。礼を言うならこっちの方
だ。」

「「「「「「「「」

沈黙の後、慧は入って来た扉へと向かった。

「また会おう。黒澤 慧。」

「ああ、またな。夜城 晟。」

慧が出て行った後、残ったのは夜城一人・・・

「良かったのですか？慧を止めさせて。」

いや、一人ではなかった。どこからともなく一人の男性が現れた。

白い髪に赤い瞳、着ているスーツは夜城や慧と同じものだ。

「盗み聞きとは感心しないな。白河^{しろかわ}。」

「おや、気付いていたでしょ？」

「まあ・・・な。」

「それで、いいのですか？」

「あいつが決めた事だ。それに、止めても無駄だろう。」

「そうですね。しかし、これから寂しくなりますね・・・」

「・・・そうだな。」

夜城はそう言つと椅子から立ち上がり後ろにある窓から空を眺めた。

鮮やかな夕焼けの空を眺める夜城の背中はどこか寂しそうに見えた。

「あいつは簡単に辞めると言ったが、何かとあるだろう。白河、フオローを頼む。」

「ええ、わかっています。慧は私達にとって、家族みたいなものですからね。」

その後の二人を見た者達は、子離れを体験した父親の様だと、後に口をそろえて言っていたという。

プロローグ（後書き）

注意、白河は男です。

プロローグ2

「ここが、俺達がこれから暮らす家・・・か。」

慧が今いるのは櫻木市という街にある住宅街の一軒家。

本来、慧はこことは別の場所で一人暮らしをしていたのだが、父親の結婚相手の子がどうしても転校したくないということで、慧が引越すことになった。

理不尽に思うが、まあ、慧自身、別に拘る事もないので、了承した。

一つ気がかりがあるとすれば、向こうの友人だ。よく学校をサボっていた慧に良く話しかけてくれたり遊びに誘ってくれたり、一緒にバカをやった友人が少ないが、いたのだ。

しかし、まあ、話せばわかってくれるだろうと、とりあえず、考えないことにした。

「再婚相手の人が良い人だといいな、銀^{イシ}」

「わん！」

その慧の言葉に答えたのは一匹の犬・・・いや狼。慧は犬と言いつ張っている。綺麗な銀色の毛並と金色の瞳が特徴のおおか・・・犬だ。

慧の母親は早くに亡くなり父親に育てられてきた。しかし、父親も仕事で忙しく、家にはほとんど帰ってこないため、一人暮らしのようなものだった。

そんな時、傷ついているこの狼・・・いや、犬を見つけ、飼う事になった。

父親は慧が10歳になると全く帰ってこなくなったため、これまで住んでいた一軒家から引っ越し、慧はアパートで一人暮らしをする事になった。

なお、必須条件は動物も大丈夫な所だ。

お金はちゃんと振り込まれたため生活には困らなかった。むしろ、周りの眼をごまかす方が苦労した。

その間にある事件に巻き込まれ、いや、自分から飛び込み、ある組織に入る決心をしたのだが、それはまた別の機会に・・・

それから5年が過ぎ、いきなり再婚する事になったと聞いた時、予想はしていたとはいえ、慧の心境は複雑だった。

それもそのはず。いきなり再婚するといっただけならまだしも、一緒に暮らそうと言ってきたのだ。

正直不満ではあるが、母親が亡くなったのは自分のせいという負い目もあり了承した。

もともと、体が弱く、無事出産できるか危うい状況だったらしい。それでも慧を産むと断固として譲らなかつたそうだ。

無事出産を終えたと思われたが、その1年後息を引き取ったという。

帰ってこなかつたのは再婚相手の家にほとんど同居という形で暮らしていたからだが、慧は知っていて気付かないふりをしていた。

気付いた時には慧にも秘密が出来ており、むしろ帰ってこられる

と困ったからだ。

「さて、それじゃお邪魔しますか。」

「わん！」

家の門の脇にあるインターフォンを押した。

「どちら様でしょうか？」

インターフォンを鳴らすと若い女性の声が聞こえてきた。

「俺・・・私は黒澤 慧、黒澤 瀧とつの息子です。」

「あ！あなたが慧君？ちょっと待ってね。今、開けるから。」

ドアが開くと中からでてきたのは茶色い髪をショートにした綺麗な女性だった。見た目は20代後半位だが、これでも子供がいるらしいのもつと年は上だろう。

本来は驚くところだが、世界の不思議を見てきた慧にとってこの程度、世界は広く、見た目幼女の300歳もいる位なのだ。

「初めまして。黒澤 慧です。そして、こっちが銀インです。」

「わん！」

「初めまして。花咲 桔梗けいけいです。よろしくね、慧君。銀ちゃん。」

「はい、よろしくお願ひします。」

「わん！わん！」

「ふふ、さあ、中に入って。皆待っているわ。」

「どうやら、瀧も既にいるようだ。子供もいるという話だからその子も揃っているのだろう。」

「お邪魔します。」

「ワフ。」

「ここはこれからあなた達のお家にもなるのだから『ただいま』でいいのよ？」

「は、はあ、次は気をつけます。」

「ワン！」

そういつて桔梗さんがドアを開けると久しぶりに見る父親と始めて見る三人の女の子がそこにいた。

「・・・・・・は？」

（え？3人？しかも女の子？聞いてねー！）

「どうした、慧？突っ立ってないで中に入れ。って、銀も中にいたのか？」

「あ、ああ・・・・」

「グルルル！」

ちなみに銀は瀧を嫌っている。それは瀧も同じだ。

「構いませんよ。その子も家族になるんですから。」

「桔梗さん……」

（親父、デレるな。キモイ。）

そんな瀧を無視し、中に入ると……

「う……」

強烈な敵意の視線を浴びた。

どうやらこの三姉妹は慧を歓迎してはいないようだ。正確には二人、見たところ上二人が反対。一番下は恐怖……の表情を浮かべている。

「グルルル……」

そんな三人に向かい、銀は警戒の色をあらわにした。

銀に唸られた三人は怯えてしまった。

「こら、銀。落ち着け。」

慧が嗜めた事で、落ち着いたが、三人からの視線がより強くなっ

たよつだ。もちろん好意の色は見えない。

「さて、全員揃ったことだし、自己紹介から始めようか。」

灌の言葉で自己紹介が始まった。母親が花咲 桔梗。灌と同業でそれが出会いらしい。まあ、あることだ。

長女が葵さん。天城ヶ丘学園高等部の1年。

次女が薫さん。天城ヶ丘学園中等部の3年。

三女が董さん。天城ヶ丘学園中等部の2年。

「それでだ。慧。これからお前は花咲 慧だ。」

「いや、なんでよ?。」

いきなり名字を変えられ反論する。

「そりゃあ、父さんが婿養子の形で結婚したからな。」

「.....」

「いや、桔梗さんの家は結構な名家だな。結婚するなら婿養子で、と言う事になったんだよ。」

(勝手な事を。なら親父は花咲 灌・・・はな、さきそつ だろ。ギヤグか!)

「慧?。」

「……はあ、断る。」

「慧！」

慌てたように、声を荒げた。

三女はその声に怯えてしまっている。

「黙れ、クソ親父。あんたの再婚は別に構わない。反対しないし、したところで無意味な事はわかる。だが、俺の名字を変えるのは断る。」

「……何故だ。」

「愛着があるんだよ。別に、結婚に反対しないし構わないだろ。先方は親父が婿養子になる事を条件にしているが、俺がそれを名乗る事までは含まれていないだろ？」

慧にとって、黒澤の姓は母親との繋がりであり、それを変えることは、夜城や白河といたころの自分をなかつたことにされるように思えたため反論したのだ。

「それは……まあ……」

慧にとって、それは確定事項であり、どう言われようと変えるつもりはない。

今はそんな事よりも……

「親父、それより聞きたい事がある。」

「なんだ？」

「なんで、桔梗さんの子供が娘で三人いるって教えなかった？」

「それは、忘れていたけど！」

胸を張って言う瀧に、呆れる慧。

「はあ、とりあえず、結婚おめでとう。それだけだ。じゃあな。」

「ちょっと待て！どこに行く？」

祝福の言葉だけ送り、この家を後にしよつとする。

「どこって、帰るんだよ、家に。」

「お前の家はここだろ？」

「あのな、いくらなんでも年頃の娘と一緒に住めって、無理があるだろ。向こうだって嫌なはずだろ？」

最初はこちらに引越す気でいたが、一緒に暮らすのが同年代の女の子ということもあり気が変わった慧は元の家に戻ることにした。

その慧の言葉に桔梗が娘達に質問する。

「そつなの？」

「そんなことないよ、お母さん。私達は歓迎するよ。」

長女が代表して答えたが、慧を見る目が敵意まるだした。・・・
が、瀧と桔梗は気付いてないようだ。

「ほら、葵ちゃんはこう言ってくれている。」

(親父にそんな、どうよって顔されてもな。)

慧が戸惑っていると薫が近づいてきた。

「ね？一緒に暮らそう？慧君。」(素直に頷きなさい。でないと後で酷い目、見せるわよ?)

小声で慧にしか聞こえないようにそう呟いてきた。

「・・・わかった。一緒に暮らすのは了承する。だが、花咲の姓名乗らない。これは譲らない。いいな？」

「まあ、いいだろ。さあ、夕御飯にしようじゃないか。」

ちなみに、銀は慧の足元で丸まりながら聞き耳を立てていた。

「はあ、居づらい・・・」

正直この家には慧の居場所は無いとだろう。3姉妹は親父には心を開いているようで、楽しげに話すが、慧には自分から話かけようとすらしてこなかった。慧から話しかけても完全に無視されていた。

銀は今、桔梗の相手をしている。桔梗には珍しいことになったようだ。問題は娘たちだ。

これからどうするか考えていると部屋のドアがノックされた。

「開いてますよ」

「邪魔するわよ。」

そう言って入ってきたのは件の三姉妹だ。

「何かようか？」

「ええ、あなたに言う事があってね。あなたの父親、瀧さんは認めたいわ。良い人だし、お母さんも幸せそうだから。でも、あなたは認めない。だから、今から言う事を守りなさい。」

一つ、お母さんやお義父さんの前では仲の良いふりをしなさい。

二つ、あなたから私達に話かけないで。用がある時は私達から話すわ。

三つ、私達と一緒に暮らしていることを誰にも喋らない事。

わかった？

「・・・俺がこの家から出て行くって選択肢は？」

「無いわ。お母さんが悲しむもの。」

「はあ、ふざけているのか？一方的に押し付けやがって。俺はお前らの所有物でもなければ、自分の自由を削ってまでお前らの母親のためにどうこうする気もない。」

(こいつらは、それが通ると思っっているのか？)

「これからはあなたの母親にもなるのよ？」

「まあ、戸籍としてはな。だが、実際は違う。いきなり母親だ、なんて言われたところで実感なんか湧かないし母親として見るなんて言われて見れる訳が無い。俺の視点は親父の奥さんだよ。」

そう、慧にとっては、あくまで他人。父親の奥さん＝自分の母親という式は成り立たないのだ。

「・・・そう、なら仕方ないわね。こんなこと、したくなかったのだけど・・・」

言いながら近づいてきた長女は慧の手を取り・・・

「おい！いったい何を・・・」

いきなり、自らの胸に押し付けた。

「な!?!」

動揺していたら

パシャ！パシャ！

「え？」

写真を撮られ・・・

パン！

「痛った！」

平手打ちを喰らった。

「何しやが・・・！」

慧はいい加減頭に来たので怒ろうとしたのだが・・・

「これを見なさい。」

「う・・・」

そこに写っていたのは長女の胸を触る慧の姿だった・・・

「この写真をばら撒かれたく無かったら言う事を聞きなさい。いいわね？」

ここまでやるとは思わず、声を押し殺す慧だったが・・・

「・・・分かったよ。だが、その写真で俺が言う事を聞くのはこの件だけだ。それ以上のことで脅してくるなら、それ相応の対応を取らせてもらおう。・・・いいな？」

とりあえず了承と釘を刺すことにした。

「ふ、ふん。できるものならね。まあ、いいわ。私達としても、この条件さえ飲んでもらえればいいからね。それじゃ、お・や・す・み・な・さ・い！」

そう言い残すと三姉妹は俺の部屋を出て行った。

（晟のおっさんよ・・・止めたのは失敗だったかもしれない。）

プロローグ2（後書き）

プロローグ、まだ続きます。

プロローグ3

慧がこの家に来て数日が経った。

転校も済ませ、なんとかこっちの生活にも慣れてきたところに事件は起こった。

「あゝ、あの家に帰らなきゃいけないのって本当に憂鬱だ・・・」

溜息をつく慧。それも仕方がない。3姉妹の態度は相変わらず。父親や桔梗はそれに気付かず、仲が良いと思っっている。

それもまた、仕方がない。慧の様子が多少おかしくても、父親はもの心ついた時からあまり顔を合わせてこなかった。桔梗も慧と知り合ってまだ数日だ。気付くはずがない。

3姉妹、性格には上二人は気付かれない様に嫌がらせしてくる。本心では慧を追い出したいのだろう。親二人は何故気付かない？というレベルにそろそろ達するだろう。

「はあ、もう着いちまった・・・か？」

家の前までくると、もう一度深い溜息をついた。そして、思いつきり息を吸い込み、覚悟を決めようとしたその時、かすかだが、確かに嗅ぎ慣れた匂いが鼻を刺激した。

「・・・血？」

地面を見ると、血の跡が点々と家の門から続き、どこかに向かっている。

その出発点はどうやら、家のようだ。

何があったのか、慧は慌てて家の中へと駆け込んだ。

すると、自分以外のこの家で暮らす者達が、珍しい事に父親も含め、勢ぞろいしており、皆のこちらを見る目が、いつも以上に険しい。
いつもやさしい目を向ける桔梗さんも今日は悲しそうな目をしている。

「親父、一体何が？」

「何が・・・だと？これを見ってみろ！」

父親が怒鳴りながら、次女、薫の腕を指さす。

そこには、包帯が巻かれており、血が滲んでいる。

「お前が連れてきた犬、銀が噛みついたのだ！お前は銀にどういう躰をしている！？」

「銀が？そいつに噛みついた？・・・」

父親の言葉に慧は黙り、何かを考え始めた。

「慧、何か言う事があるんじゃないか？」

その息子の態度に父親は苛立ちながらも、何かを催促する。明確には言っていないが、謝罪を求めているのだろう。

「・・・銀は何の理由もなしに誰かに噛みついたりしない。そいつが何か言っただら？あいつは頭が良いから、人の言葉も理解しているからな。」

慧は父親の言葉、その意味に気付きながら、無視をした。慧は銀の事を良く知っている。それこそ父親の事よりも。よって、謝罪する必要がないと判断した。

そんな慧の言葉に対し、皆、糾弾しようとしたが、先に慧が口にした言葉に遮られた。

「それで？銀は？」

「・・・」

「銀はどうしたかと聞いているんだが？」

嫌な予感はあるが、確証を得るため、この場にいたはずの友の名を口にする。

それに答えたのは桔梗だった。

「私達が帰ってきたら、調度、銀ちゃんが薫に噛みついているところでした。それに怒った瀧さんが、引き剥がして、それでも襲ってきたので、仕方なく・・・魔法で・・・」

「つまり、玄関から続いている血の痕は銀のものなんだな？」

確証を得た慧は家を飛び出そうと玄関に向かうが、

「待て！慧！」

父親に腕を取られ、止められた。

「どこへ行く？あの犬はもう助からない。諦める。」

「離せ！」

慧が強く腕を振ると、掴んでいた父親は吹き飛び、壁へ強かに背中を打ちつけた。

「う・・・」

呻いている父親と父親に駆け寄る桔梗達に慧は告げた。

「俺は、もうこの家に帰らない。戻ってこない。俺の荷物は燃やすなり捨てるなりしてくれ。」

そう、言い残し、慧は花咲家を後にした。

それから、血の痕を辿り銀を探した。そして、思ったより早く見つかる事ができた。

が、先客がいた。

「オラ！邪魔なんだよ！クソ犬が！」

「まったく、汚ねえ、犬だ。血まみれじゃねえか。」

そこには、柄の悪い男達と血まみれで丸まっている銀がいた。

男達は銀を蹴り、踏みつけている。何度も、何度も・・・

「・・・お前ら、何をやっている?」

その、声はとても冷たく、男達は思わず振り返っていた。しかし、ただの少年しかも一人と分かると途端、下ひた笑いを顔に浮かべ始めた。

「何だ? テメー、この犬の飼い主か? なら、ちょうどいい。この犬が俺のズボンを汚しやがったんだ。ほら、見るよ。ここ、血がついているだろ?」

そう言いながら、ズボンを見せてくる。そこにはかすかに血が付着していた。

慧はそれを一瞥すると、銀の所へ向かおうとしたが・・・

「何、無視してんだ。いいか? 俺のズボンを汚したんだ。クリーニング代払って貰おうか?」

一人の男がそう言うと、周りの男たちは笑い始めた・・・が、次の瞬間その顔は凍りついた。

「五月蠅い、消える・・・邪魔をするなら、殺す・・・」

慧の殺気をその身に浴びたからだ。押し殺しているとはいえ、滲

み出た殺気に男達は震え始めた。

「もう一度だけ言う・・・消えろ！」

その声に、ほとんどの者は逃げようとしたが、ズボンが汚れたと言ってきた男だけは違った。頭に血が上り、慧の殺気にも気付かず、逆上し慧に殴りかかった。

「警告は、したぞ？」

次の瞬間、闇が、光さえ呑み込む深淵の闇が男を呑み込み、それも数秒、闇が無くなると、男はボロ雑巾の様に、倒れていた。

「ヒイ！」

周囲の男たちの目には怯えの色しか見えなくなった。

「とつとつ、そいつを連れて消えろ・・・」

「は、はい！」

男達が消え、やっと静かになった。

「・・・銀・・・大丈夫か？」

「・・・クウン・・・」

慧の言葉に、弱々しくも答える銀。しかし、その命は長くないと目に見えて分かる。

「ゴメンな。俺のせいだよな。あいつらに好き勝手言わせてきた俺の・・・お前は俺の変りに怒ってくれただけなんだよな。」

薄々分かっていた。何故、薫に噛みついたのか・・・

最近、薫の嫌がらせが一番酷くなってきたからだ。

今回、銀に見過ごせない位のものだったのだろう。

「・・・・・・・・」

「銀・・・？」

鼓動がだんだん弱くなるのを感じる。血は、闇で止めているが、失われた血は戻すことはできない。

「銀！銀！しっかりしろ！」

このままでは確実に銀の命は失われるであろう。

「銀！」

その胸に抱きかかえ、何度も呼びかけるが反応はもう返ってこない。ほんの微かな鼓動だけが、まだ生きていることを告げるが、もうすぐその鼓動も消えるだろう・・・

「銀・・・死なせるかよ・・・死なせてたまるかよ！」

慧は銀を死なせたくなかった。

「ゴメンな銀、こんな事でしかお前を助けられない・・・恨んでも構わないから・・・だから・・・」

その方法はけして褒められたことではない。銀の存在を変質させるその行いは銀をも不幸にするかもしれない。しかし、それでも慧は銀を助けたかった。それが、自分勝手な我儘だとわかっていても・・・銀を縛ってしまう行いだとしても・・・

『我、深淵をその身に宿すもの・・・名を黒澤 慧、我が血を彼の者へ。我が血を彼のものと我とを繋ぐ証とし、ここに契約をなす。願うなら、汝に幸運があらんことを・・・契約』
「ソトラクト」

祝詞が唱え終わると銀は光に包まれそして・・・

『ん・・・』

銀色の毛並みから、黒く輝く銀・・・黒銀へと変わっていた。

「銀！」

『主・・・一体・・・私は死んだのでは・・・』

「・・・ごめんな。銀・・・使い魔の契約を・・・お前を縛ってしまった・・・」

「ソトラクト」

契約とは使い魔にしたいものに自らの血を飲ませ、契約のための術式と祝詞を同時に行うものである。使い魔となったものは、存在が変質し、自ら魔力を取り込む事ができなくなり、主からの供給か、例外として魔力のこもった食物の摂取により補充することでしか魔力を得ることができない。

魔力が無くなった使い魔は動くことができなくなり、やがて死に至る。食事からの魔力摂取は決して効率がいいものとはいえず、主からの魔力供給がメインとなる。つまり、主に縛られてしまう様なものなのだ。

『・・・構いません。あなたとこうして、歩むことができるなら・・・』

銀は、本能で理解した。自分が慧と離れることはもう無くなったということ、かつての自分とは異なった存在へとなったこと、そして、それを眼の前の主が気に病んでいることを・・・だから、答えた。自分は主と生きることができればそれで良いということ・・・

「・・・銀・・・ありがとう。」

慧は感謝した。出会ってから、いつも自分の一番近くに来てくれた存在に・・・

パチパチパチ！

そこに、いきなり拍手が鳴った。

「誰だ？君は？」

『グルルル！』

いきなりの客人に慧と銀は警戒をあらわにした。

「驚かせてしまったようね。ごめんなさい。それと、私は神凧かなき 美夜みや。よろしくね。黒澤 慧？」

(神凧・・・？面倒なのに見つかったな。)

「天城ヶ丘学園高等部一年の神凧 美夜・・・俺なんかになんの用だ？」

「あら？私のことを知っているの？」

「そりやね・・・で？神凧財閥の御令嬢がいつたいなんの用だ？」

神凧とは日本でも有数の魔法使いの家だ。魔法使いを束ね、管理する六つの組織、『六魔天』の内、魔法協会に所属しており、その発言権はかなり強い。

そして、この神凧 美夜は慧が転校してそれほど日にちが経っていないのにもかかわらず何度も耳にした名前だ。

もちろん、神凧の娘ということもあるが、まだ、一年であるのにも関わらず他の上級生を退け、高等部の生徒会長に君臨しており、魔法の実力は現段階で、魔法協会の大アルカナ22人にひけを取らないと言われている。将来的にはトップの7人、『七大法典』に届く時まで言われている。

(そんな奴がいったい何の用だ？)

「ふふ、そんなに警戒しないでよ。私がここにいるのは偶然よ。でも、私はその偶然に感謝するわ。あなたに会えたもの。」

「.....」

(俺は、不幸だな。)

「そんな不幸そうな顔をしないでよ。不愉快よ？まあ、それはいいわ。それよりも、あなた、その子を使い魔にしたんでしょ？そんなことが出来る人間は・・・それだけの事ができる魔法使いは数が少ない。」

（ちっ！見られていたか・・・通りで俺の名前を知っている訳だ。）

契約は誰でもできる訳ではない。通常の魔法は詠唱を唱えることで術式を構成するが、使い魔契約は、複雑な術式の展開と祝詞を同時並列で別々に行うという特殊な方法で行われる上に、それだけの魔力も必要になるからだ。

「そして、使い魔契約は国、若しくは魔法協会他、六魔天の管理の元、行わなければならない・・・なのにあなたは勝手に行った・・・」

また、この契約は危険を伴う上、強引な契約を結ばれるという事件が過去起こったため、契約は合意の上である事を確認する必要がある、国、若しくは六魔天の監視の下行わなければならないことになっている。

なお、魔法に関しては、ほぼ六魔天が仕切っており、国で仕事をしている魔法使いも、六魔天からの派遣が多い。

「・・・何が言いたい・・・」

「つまり、もし、このまま通報すれば・・・」

「違う、お前の目的だ・・・」

「簡単よ・・・あなた、私のものになりなさい！」

腰に片腕を当て、もう片方の腕で、こちらを指差し、言い放った。

慧は少し悩んだ。これまで活動してきた組織は六魔天とはどちらかと言えば敵に当たる。かと言って、今通報されるのは面倒だ。銀に力の使い方も教えなければならぬ。

そして、選択した。まあ、選択肢などないようなものだが・・・

「選択肢は無い様なものだよな・・・いいだろう。だが、いくつか条件がある。」

「何？できることなら聞いてあげるわよ？」

「一つ、銀も一緒だ。二つ、俺達は物じゃない。場合によってはお前に牙をむくぜ？それでいいのなら、いいだろう。」

「ふふ、構わないわ。私は奴隷が欲しいわけじゃない。それに、その子も元々数に入っているわ。」

そう言うと、手を差し伸べてきた。

「よろしく。慧、銀。」

「ああ、よろしく。美夜。」

『よろしくお願ひします。』

これが、黒澤 慧と神凧 美夜の出会いだった。

この出会いが、どういう結末を迎えるのか、それはまだ分からない。

なぜなら、二人（と一匹）の物語はまだ始まったばかりなのだから。

第一話 慧の新たな家と美夜の目的

元々、この世界には魔力と呼ぶものがあり世界を循環していたが、人は魔力の存在に気付かず過ぎていた。

そんな時、人に魔力、そしてそれを操る術・・・魔法を教えた存在がいた。

その者の名を『始まりの大賢者 オリジン』オブ『ワイズマン』
と言う。

しかし、この名は後から勝手につけられたもので、実際に魔法を
伝えた存在については分かっていない。

神、天使、悪魔、魔王・・・少なくとも、人ではない何かと言わ
れている。

『始まりの大賢者』により魔法は少しずつ広がっていったが、そ
の行いは世界へ広まる前に潰えた。魔法を教えられた一部の者達が、
その力を独占しようと考えたからだ。

もちろん『始まりの大賢者』を始め、その意見に真っ向から対立
した者達もいたが、力に魅せられ、溺れたものが多く、『始まりの
大賢者』ですらその手にかけ、魔法を独占した。

この際、『始まりの大賢者』を殺した魔法を、神さえ殺す終わりの
魔法・・・終焉魔法『エンド・オブ・オリジン原初の終り』と呼び、以降その魔法が歴史
の中で使われることはなく、文献も残っていない。

話が逸れたが、その結果、魔法は世界に広まらず、魔法を使えないものが大多数となった。

その後、魔法使いが人を従えるかと思われたが、そうはならなかった。

『始まりの大賢者』との争いで多くの『魔法使い』は死に、この世界の全人工に対し、魔法使いの数が圧倒的に少なくなってしまうこと、『魔法』が万能でないことも理由の一つだろう。

魔法を使えない人々を支配しようとしたが、叶わず、不思議な力を持つ者達として排斥の対象となり、魔法使いは表舞台から追われた。

そして、魔法が使えない普通の人々により、科学が発展した。そんな中、魔法使いはその裏で数を増やしていった。過去の失敗を教訓にし、少しずつその数を増やしていき、魔法使いを管理する組織もではじめた。排斥運動も収まり、過去の事として、忘れられていった。

そして、ある時を境に人は再び魔法を知ることになる。革命家・クストフ・R・フトスク・・・この男により魔法による革命が起こったからだ。

この男が革命を起こした理由は一つ。再び魔法を世界に広めるためだ。これを支持する魔法使いは多くなかった。

時期尚早という意見が多かったのだ。まだ、魔法社会の秩序の基盤が出来上がったばかりで、今の状態で世界に魔法が知られれば、再び魔法を独占しようと考える者達や魔法で犯罪を起こそうと言う

者達が出てきた時、対応が満足にできず、再び排斥の対象となってしまう。それを恐れての意見だった。

しかし、クストフによる革命は進み、始め半信半疑だった人達も魔法の存在を認知せざる、おえなかつた。既に世界の情報を得る技術は浸透していたため、その情報に歯止めをかけることは出来ず、クストフおよび革命軍『新たな世界』を倒した頃には魔法は世界に浸透してしまっていた。

魔法使いを管理してきた組織や国々はこうなっては仕方がないと考え、むしろそれを利用し、魔法を世界に広めることにした。もちろん当初からの危惧はそのままだが、このままではむしろ世界に混乱が生じてしまうからだ。

そして、その危惧は現実のものとなり、犯罪が増加した。また、魔法を独占しようとしたもの達もいた。しかし、その危惧は予定されていたものであり、それに対抗するため、魔法使いを管理してきた組織が中心となって対魔法犯罪へ対応を始めた。

その組織は全部で6つ、『魔法教会』、『聖王騎士団』、『盾を掲げる者』、『賢者の知恵』、『世界樹の頂』、『神々の使途』、『現在六魔天と呼ばれる組織だ。』

この組織と国々が中心となって、魔法犯罪に対する、マニュアルの作成や人材の育成、そして、魔法を正しく人に伝える方法が進められた。

ちなみに、その一つが、『魔法使い』を資格の一つとすることだ。もちろん資格が無くても魔法は使えるが、制限が設けられる。もし、資格もなく制限を越えた魔法を使えば捕まることもある。

また、『魔法使い』の資格にはランクがあり、ランクが高い程様

々な特典と共に、責務が発生する。

それは、六魔天からの協力要請に応えること。任意という事になつてはいるが、一度断ると目を付けられ、なかなかランクを上げることが出来なくなる。

再び話が逸れたが、これが、今の世界の形だ。

魔法が当たり前に存在し、それが生活の一部となった世界。科学と魔法が融合した世界。

それでも世界は未だ秘密を抱えている。

この世界に魔法を扱う方法を持ち込んだものは一体何者なのか・

この世界は未だ不思議に満ちている・・・

「ところで慧、これからのことを話したいのだけど・・・とりあえず、その服、着替えてきてくれる？あと銀いんだったわね？その子も血の匂いが凄いわ。洗って来てあげたら？」

慧の服は銀の血で汚れ、銀も色が黒く変つてはいるが、血の匂いが凄い。早く洗わないと落ちなくなるだろう。

「と、言われてもなあ・・・帰る場所はまだ無いし、引っ越してきたばかりだから、行くあてもないんだが・・・」

あの家にはもう帰る気はない。また、引っ越してきたばかりのた

め、親しい友人もいない。以前住んでいた所なら、今の自分達を見ても受け入れてくれる奴に心当たりはあったのだがそれも無い慧は困り果てた。

目の前に川があるのでいっそのこと川で洗おうか・・・そんなことまで考えている。

「帰る場所が無い？詳しく聞かせてもらえる？」

「・・・他言無用で頼む。」

美夜が信用に足る人物であることはこれまで様々な人を見てきた慧は一目でわかった。また、銀も始めの警戒以外は大人しいものである。どういいう人物か、性格などは分からないが、大丈夫だろうと判断し、こちらに来ることになった経緯から話した。

「そう、あの花咲姉妹が・・・」

「何だ？知っているのか？」

「そりゃそうよ。花咲家も神凧に劣らない家柄よ？彼女の母親が本家の人間だから、あの姉妹も本家の血筋で魔法の腕もかなりのものよ。」

「本家！？桔梗さんが？」

「ええ、家は彼女の姉が継いだのだけだね。」

自分の父親の再婚相手が結構な名家の出だとは知っていたが、まさか、神凧に劣らない程の家しかも本家の出だとは思ってもしなかった慧である。

何故、それほど名家である花咲家を慧が知らなかったのか、それは、歴史が新しいと言う事と、花咲家は六魔天の一つ『世界樹の頂き』に所属しており、慧が所属していた組織とはあまり絡まなかったからだ。逆に魔法協会とは事ある度に争っていたので、詳しく知っていたのである。

「まあ、花咲家のことは良いわ。それよりも今は、あなた達の今後の住む所ね……」

美夜は少し悩むそぶりを見せたが、直ぐに決断した。

「いいわ、あなた達、家に来なさい。部屋は余っているし、私のものになったんだし、都合がいいわ。」

「それは有りがたいが……タダじゃないよな？」

「私としては別にお金を請求するつもりはないのだけど……そうね、あなた達がそれを気に病むようなら、家の家事を手伝いなさい。それでいいわ。」

「……わかった。それが妥当だろう。これから世話になる。」

『お世話になります。美夜。』

「ええ、じゃあ、とりあえず……迎えの車を呼ぶからそこにいなさい。目立ちすぎるわ。」

そう言い、土手を上がり、携帯でどこかと連絡を取り合っている。

「なんか知らんが、運が良かったのかな？」

『どうでしょう？主は運が良い方ではなかったと思いますが？むしろ、面倒事を引き寄せていたようないかな？』

「あ、やっぱりそう思う？せめて、魔法協会の『七大法典』や『大アルカナ22人』に合わないことだけでも願うかな。」

慧は遠い目をしながら希望的観測を口にする。

『主達は彼らと、良く戦っていましたからね。でも、彼女の素情と主の運の悪さから考えるとそれは難しいかと・・・』

銀はそんな希望をあつさり切り捨てる。

「だよなあ・・・まあ、なんとかなるさ。」

『そうですね。なんだかんだで、なんとかありますよ。』

一人と一匹は気楽に考える事にした。難しく考えてもどうにもならない。お気楽思考は慣れたものだ。

「待たせたわね・・・って、何を二人して遠い目をしているの？」

電話を終え戻ってくると、川を眺めながらも、どこか違う場所を見ている様な二人に若干引いた美夜であった。

所変つて、ここは美夜の家。高級マンションの一室。このフロア

全てが美夜の家だそう。しかも一人暮らし。贅沢である。

ちなみに何故一人暮らしか聞くと・・・

「お父様が見合いだ、なんだと五月蠅いのよ。」

とのことだ。更に、お嬢様が一人暮らしで問題無いか聞くと

「あら、心配してくれるの？大丈夫よ。私を襲おうとしたら、大事な部分を消してあげるから。」

思わず急所を隠した慧であった。

「ああ、さっぱりした。風呂、サンキューな。」

部屋に入ってすぐ風呂に案内され、銀と共にシャワーを浴びた。着替えは迎えに来たメイドさんが持ってきた。サイズをどうやって知ったかは定かではない。

「それじゃあ、座って。これからの事を話しましょう。」

「ああ、そうだな。」

美夜の向かいのソファに座り話す姿勢になる。銀は慧の足元に控えている。

「まずは、そうね。家事は一通りできる？」

「ああ、一人暮らしは長いからな。大丈夫だ。まあ、お嬢様のお口に合うものを作るかは知らないが、普通に食えると思うぞ？」

「そう、なら、分担にしましょう。そうね・・・」

「こうして、とりあえずは、これから暮らすに当たったの注意事項やら何やらを話合った。1フロア丸々美夜の家なのだから別々の部屋でいいのでは？」と慧は聞くが、美夜は

「一々出入りされるの、面倒じゃない。」

と一蹴。同じ部屋で過ごすことになった。

「さて、とりあえずここまでにして、御飯にしましょう。」

「わかった。今日は俺が作るうか？」

「そうね・・・お願いするわ。あなたの腕、見ものね。」

「お手柔らかにお願いしますよ。」

その後、夕御飯を食べ、食休みを入れてから、再びこれからのことに戻る。

ちなみに、慧の料理に対する美夜の評価は・・・

「・・・私より旨い・・・」

不満気だった。

「それで、さっきの続きね。なんであなたを私のものにしたかというと、私がこれから進む道に優秀な人材が必要だからよ。」

「これから進む道？魔法協会の『七大法典』のことか？」

美夜の実力ならこのまま精進を怠らず行けば辿りつけると言われている。それなら、別に慧がいる必要はない。

「違うわ。私は魔法協会に所属し続ける気はないわ。」

その言葉に若干驚く慧。将来を約束されているのにも関わらず自ら捨てると言っているのだ。

「何故か聞いていいか？」

「ええ、今の魔法協会を含む六魔天は国、いえ、世界にも影響力がある。でも、それぞれの組織で閉鎖的なうえ、技術を独占している。そして、なにより一番の問題は、一般人を顧みていないこと。」

そう。確かに、六魔天の影響力は絶大だ。その技術も一般の『魔法使い』よりワンランク以上だろう。

『魔法使い』という資格をもつものにはフリーと言われる者と、六魔天に所属する者に分けられ、結構な違いがある。『魔法使い』の資格を持つ者の大概は六魔天のどこかに入ることを目標としている。

六魔天は魔法を管理していた者達がそれぞれの思想に分かれ出来上がり、現在は魔法の管理と対魔法犯罪組織として機能している。

これらの理由により、国や警察に所属するフリーの『魔法使い』は少なく、六魔天の『魔法使い』を派遣してもらっている国や警察がほとんどだ。

美夜の言う閉鎖的や魔法の独占とは、本来魔法の知識は有用なものは一般に公開されることになっているのだが、そのほとんどの権利を六魔天が持つており、さらに、結構な数の魔法技術と知識を隠匿しているからだ。

更に、魔法犯罪組織は独自の魔法理論や禁忌と呼ばれる魔法に手を出していることが多い。それを狙い、六魔天同士で争い、犯罪組織を取り逃がしたり、果ては一般人を巻き込むことも多くなってきた。

もちろん、全ての六魔天やそこに所属する人がそうとは限らないが、その様な風潮が強いのは確かだ。

それでも批判が少ないのは、それだけの力と実績があるからだろう。

「私は、そんな縛られた組織に所属し続けるのはごめんだわ。なら、どうしたらいいか、一個人では限界がある。なら、自分で組織を立ち上げればいいじゃないってね。」

「ふ〜ん。随分と正義感がお強いことで。」

「違うわよ。ただ、私がそうしたいだけ。私が守りたいものは教会じゃ守れないと思ったから。自分勝手な我儘よ。」

「ククツ、それは教会と同じじゃないのか？」

「そうね。でも、目的はちがうわ。」

その意志のこもった目で見られ、慧は正直迷った。その意志、考

えは慧が以前所属していた組織と同じだ。だが、その道は綺麗事だけでは済まされない。

目の前の少女を、みすみすそんな世界に踏みいれさせていいのか、という考えまで至り、思いなおした。目の前の少女は多分とつくに踏みいれている。そしてなお、どうにかしたいとあがいていると。

「そうか、話は分かったが、一つ訂正させてくれ。俺は美夜が思う程優秀じゃないぞ?」

「嘘ね。だって、その子と使い魔の契約を交わしたじゃない。」

「いや、確かにそうだけど、だからといって、美夜が求める程かと言われるとそうでもないぞ?学校の成績は平平凡凡だし、特技も特にないし。」

「そう、あなたがそこまで言うならそれはそれで良いわ。」

美夜は、納得はしていないが、その事を追求するのは止めた。

「で?手伝ってくれるの?くれないの?まあ、別に手伝ってくれなくても追い出さないから安心していいわよ?」

その言葉を聞き、慧は再び考える。以前所属していた組織の件がある・・・が、一度止めた以上、また戻るのも気恥しい、複雑な男心だった。

そして、出した結論は・・・

「わかった。俺なんかに何ができるか分からないが出来るだけ協力

しよじ。」

その言葉を聞き、美夜はとても安堵した表情となった。

「そう、改めてよろしく、ね。それじゃ、互いの属性について確認しましょうか。」

魔力とは生きているものなら、その大きさは様々であるが、誰でも持っているものだ。そして、個人にはそれぞれに合った適正属性というものが一人一つ必ずある。しかし、まれに二つや三つ持っている人もいる。

なお、属性の相互作用から、最大で3つとなっている。

「ちなみに私は無属性よ。」

「俺は闇だ。」

属性は大きく火、水、風、土、光、闇に大別される。また、雷や氷、時や無はこの基本属性のバランスと合成により発生する属性で、この属性を持つものは例外なく、合成属性の魔法しか使えない。

例えば、風と水を合成することで氷となるが、氷の魔法を使えるのは氷属性をもつものか、風と水属性をもつものとなる。

しかし、氷属性のものは氷属性以外使えないが、風と水属性のものは風と水と氷を使えることになる。

「そう、ところで、気になっていたんだけど、その子どうして銀色に戻っているの?」

銀の毛並はいつの間にか、黒銀色から銀色に戻っていた。

「ああ、それは、契約の際に俺の魔力が強くてたからだと思う。今は落ち着いたから元に戻っているんだ。因みに、銀の属性は氷な。」

「え？その子、ただの犬じゃないの？」

通常普通の動物には属性は無い。もちろん魔力はあるし厳密に言えば属性もあるのだが、魔力が低いため、属性自体判別できず、出てこないからだ。

つまり、銀は珍しいおおか・・・犬なのだ。

「ええ、そうです。俗に言う魔狼と言う奴です。」

「へえ〜凄いのね。」

『当たり前です。主の使い魔ですから』

胸を張ってそう答える銀に、慧は恥ずかしそうに頬を掻き、美夜は微笑ましそうに見ている。

「ところで、慧。学校は？」

「美夜と同じ所の中等部3年。最近転校してきた。」

「・・・ああ！あなたがあの・・・」

何かに思い当たったのか、納得した様に頷いている。

「えっと、「あの」とは？」

「だって、こんな3学期の年明けに転校なんて珍しいにも程があるでしょ？だから結構な噂になっていたのよ。」

慧の知らない所で何故か面倒なことになっていたらしい。しかし、この様子だと名前や顔までは広まっていないようだ。

「そっか、私のことを知っていた様だし、同じ学校とは思っていたけど、後輩だったのね。」

「ええ、敬語のほうがよろしいですか？」

「いいわよ、今までどおりで。まあ、いいわ。明日は休みだし、あなた達に必要なもの、色々揃えなきゃね。」

そう言いながらソファを立つ。

「じゃあ、今日はここまでね。ついてきて、あなた達の部屋に案内するわ。」

「ああ、よろしく頼む。」

慧の長い一日が幕を閉じ、そして、慧にとって、少なくとも退屈しない日々が幕をあける。

第二話 慧と美夜と三姉妹く屋上での対峙く

「ほら、慧、もたもたしないで。さっさと行くわよ！」

「ちょっと待て、美夜！銀、スマンが留守番頼むな？」

『ええ、行ってらっしゃい。主、美夜。』

「行ってきまあす！」「」

こうして、今日の幕が上がった。

慧達はあの後直ぐに眠りに就き次の日、予定通り慧達の私物を買
いに行く事となった。慧が必要ないと言うものまで次々と買われ、
私物なのに自分で選ぶことはほとんどなく、全て美夜が選んだ。

そうしたのは慧自身にも原因があり、最初は二人で意見を出し合
っていたのだが、慧に聞くと必ず、色は黒。なるべく地味なやつ。
としか答えないため、諦め、美夜が全て決めていった。

その日はそれで終わり、次の日は銀に力のコントロールを教える
のに費やした。銀は呑み込みが早く、今週にでも基本的なことは教
え終わると慧は予想している。

美夜はその際、興味深そうに一人と一匹を眺めていた。

美夜曰く面白かったそうだが、慧にとっては何が面白いのかさっ
ぱりだった。

そんなこんなで休み明け、学生である以上、学校へ行かなければ

ならない。

が、慧は美夜が眠りに就いた後も自室で銀に使い魔となったことで、何が変ったのか、何に気を付けなければいけないかなどを遅くまで教えていた。

その結果、二人とも寝坊してしまい今に至る。

「今さらながらだが、良いのか？一緒に登校して？学校で騒がれないか？」

「別に気にすることは無いと思うわよ？少なくとも私は気にしない。」

その当事者とは思えない言葉に慧は呆れるが、こいつなら周りを黙らせるなど訳ないだろうと思いとどまる。が、それは自分には当てはまらないことに思い至る。

「いや、美夜はいいが、俺はどうしろと？」

「黙らせればいいでしょう？」

さも当たり前のように言う美夜。

「いや、俺はそんな力ないから！」

「なら遅刻する？」

「ぐっ……」

言葉を詰まらせる慧。遅刻する位なら、休む方が良いのだが、ここまで来て戻るのも面倒だ。しかし、学生服のまま近辺をうるつくと学校へ連絡が行きかねない。そうすると、父親にも連絡がいくだろう。結果、更に面倒なことになる。

走りながら、そこまで考え、仕方ないと諦める。まあ、転校したばかりで親しい友人もいない。そんなに面倒な事にはならないだろう……と結論付ける。

「って、言うか、何で美夜まで寝坊しているんだよ？」

そう、何故か美夜まで一緒になって寝坊していた。昨日はそれほど遅くまで起きていなかったにも関わらずだ。部屋で何かやっていたのか？

疑問に思った慧は美夜に聞いてみた。

「うっ……それは……」

しかし、その質問に直ぐには答えず、目を泳がせ追求を避けようとする。

が、まだ、学校まで距離があるため、逃れられないと悟ったようだ。

そして、次に出てきた言葉は慧にとって予想外のものだった。

「これでも年頃の少女なのよ？ 一つ屋根の下に同年代の男がいれば、緊張しない訳無いじゃない！ / / / / /」

そんなことを、頬を染めて言う美夜に慧はなんといって返せばいいか分からず……

「・・・そうか・・・スマン・・・／／／／」

と、答えるしかなかった。

あれから、二日経ち、もう慣れたものだと思っていたのだが、実は結構繊細だったらしい。

「・・・・・・・・・・」

しばらく互いに黙り走っていると、登校する生徒達の最後尾が見えた。どうやら、遅刻は免れたようだ。

「もう、大丈夫なようね・・・」

互いに走るスピードを落とし、美夜と慧は今日の予定などについて話しながら、登校する生徒に混ざり、遅刻しない程度のスピードで歩くが・・・

「うつ・・・」

注がれる視線、視線、視線の嵐。まあ、それもそうだ。学校で知らぬ者はいないであろう少女と、更にその容姿も、黒く長い髪に深い蒼の瞳、百人中百人が綺麗と称するだろう造形の女性の横を、極普通の男子学生が親しそうに話ながら歩いているのだ。注目しない訳が無い。

（クツ・・・やはり、時間をずらすべきだったか。明日からはそうしよう！）

そう決意する慧であったが、その決意は無駄になる事を慧はまだ知らなかった。いや、この時の美夜の表情を良く見ていれば少しは予測できたかも知れないが、視線に晒され、俯いている慧には見る事は叶わなかった。

その、楽しそうな表情を・・・

そんなこんなで校門をくぐり、ここからは別行動になる。

慧は中等部、美夜は高等部のため、校舎が違うからだ。

「それじゃ、美夜、また放課後！」

「ええ、ちゃんと、待っていないさいよ？」

「はいはい、分かっていますよ。」

一緒に帰る約束を交わし二人は別れた。

そして、下駄箱の前、上靴を取るため、開けるとそこには一通の封筒が置いてあった。

念のため、カミソリが入っていないか確認し、中を開けると、そこには・・・

「今日の放課後・・・屋上ね・・・」

一見ラブレターに見えるだろうが、差出人が誰なのか検討がつく慧としては憂鬱以外のなものでもなかった。

そして放課後、慧は屋上に向かっている。

「はあ、今日はもう疲れたのに追い打ちだよなあ……」

あれから、教室に入ると慧の予想に反し質問攻めにされた。それだけ衝撃の出来ごとだったらしい。男女関係なく押し寄せてきて、中には「私のお姉さまが〜!」とか、「このリア充が!」などよく分からないことを言っていた奴らもいた。

それらの質問を何とか誤魔化し、やっとの事で放課後……

美夜には予め遅くなる事を告げ、屋上へ向かっていた。

「さて、俺の予想通りの相手なら……また、面倒なことになるよなあ……」

憂鬱そうな表情をしながら、屋上の扉を開ける。すると、予想通りの人達がそこにいた。

「逃げずに来たようね?」

「同じ学校なんだ。逃げたら余計面倒な事になると思ったからな。」

花咲く姉妹がそこにいた。

「で、こんな所に呼び出してなんの用だ?告白……って雰囲気じゃあないよな?」

その質問に答えるのは代表して長女、葵。

「ふん！決まっているでしょ？あの後どうしたの？結局帰ってこなかったけど？」

「言わなかったか？もう帰らないと？それに、俺がどうしようともうお前らには関係ないはずだが？」

当たり前な事を聞いて来る葵に対し何を今さらと言った風に答える慧。

「・・・まああなたの事なんてどうでもいいけど、とにかく今日は家に帰ってきなさい。」

「なんで？俺が帰る理由はないぞ？」

葵の言葉に心底不思議そうに答える慧に葵と薫は苛立ってきたようだ。

「お母さんがあなたを心配しているからじゃない！」

「そうよ！それに、あの約束忘れたの？帰ってこないなら・・・」

「好きにすれば良い。」

「「なっ！」」

俺がどうでもいいように言うと二人とも次の言葉が出なくなった。

「桔梗さんには悪いが、帰る気はない。帰る場所でもない。帰る場所は他に出来たからな。それと、写真をばら撒くのはいいが、ちゃ

んとデータ残っているのか？」

「え？」

「撮ったのは携帯電話だろ？ちゃんとロックかけていたか？」

次女、薫は驚きながら、携帯をいじりだし、写真を確認し始めた。まあ、もう後の祭りだけだな。

「・・・消えている。あんた！人の携帯を勝手に！」

「悪いとは思ったけどな。大丈夫。それ以外何もしていないし見えないから。怨むなら自分の管理能力のずさんさを怨むんだな。」

慧はそう言うつと屋上を出て行くつとするが・・・

「待ちなさい！」

「なんだよ？もう話は終わりだろ？」

「ふざけないで帰ってきなさい！でないと痛い目見せるわよ？」

そういつと、長女は魔法を展開し始めた。

魔法を使うに当たり制限というものがあるが、日常生活を送る上では大して気にするものではない。魔法が生活の一部となっている今、この制限とは、日常生活に必要な魔法を基準としている。

そのため、どの学校でも日常生活に必要な魔法の知識や技術は教えており、普通の学校は公共の場と同じ制限である。しかし、これ

にはいくつか例外がある。

その一つが、ここ、天城ヶ丘学園だ。ここは魔法をより詳しく学ぶ場であるため、制限があると勉学に支障をきたす。よって、制限は緩くなっている。

こういう場所はここ以外もいくつかあるが、どこも六魔天の管理下にあるため、何か不足の事態が起こっても直ぐに対処できるからというのがその理由ある。

もちろん、魔法書も出回っているため独学でどうにかする事もできるし、天城ヶ丘学園のように魔法を教える場所もあるため、制限を無視する者達もいる。

そういったもの達に対応するのが、六魔天や警察、そして、依頼を受けたフリーの『魔法使い』となる。しかし、事前にそれを感知したりすることは未だ出来ていないため、対処は後手になっているのが現状である。

（おいおい、こんなところで、その魔法？頭に血が上って周り見えていないだろう？）

葵が展開している魔法は学園内ということもあり、咎められないのをいいことに上位の魔法を放とうとしている。

こういうことがあるのが、結構問題になっていたりするのだが・
・その対処は学校ごとに独自にとっていたりする。

もちろんこの学園にもあるのだが・
・期待はしない方が良さそうだ。目の前のお嬢様が何かしら手を事前に打っているだろう。

慧はどうするか考える。相手の言葉に頷くのは論外・・・魔法は、こいつらに見せたくない。と、なると当たる瞬間に闇で防御し、やられた不利をするのが妥当か・・・後は屋上から飛び降りて逃げれば・・・と、そんな事を考えながら周囲に気を張り巡らせていると、誰かが屋上に上がってくる気配を感じた。

「この魔力は・・・」

そこで、とうとう魔法が完成し、撃ち放たれた。

「『サラマンダー・エクスプロージョン』」

この魔法は、火を纏ったトカゲを複数召喚し、そのトカゲに触れると大爆発を起こすという、危険な魔法だ。しかも、爆発は連鎖する。

トカゲの数や大きさは術者の技術に比例し、今回は1m級が12体、大半は20?のトカゲを2匹〜4匹なので、大変優秀なことが分かる。

「まずい・・・」

何が不味いのか、それは、この魔法は触れると爆発する。つまり、触れる前から闇を展開しなければならず、使おうとすると見られてしまう。しかも、ここは屋上、逃げ場は・・・やっぱり飛び降りるしかない。

そう思い、先ほど感じた魔力のことは頭の隅に追いやり、屋上の柵へ向かおうとするが、周り込まれてしまった。

「やりなさい!」

葵のその言葉にトカゲは一斉に慧に飛びかかる。

慧は覚悟を決め、目を瞑り、歯を食い縛り、耐える事を選んだ。

が、何も起きなかった。何故なら・・・

「まったく、遅いと思ったら、こんなところで何をやっているのかしら？慧。」

「美夜！」

慧が感じた魔力の主、美夜がそこにいて、トカゲを無に還したからだ。

「あなたは、神凧 美夜！いったいなんのつもり！？」

「どういつつもりも何も、慧は私のものよ？自分のものに手を出されて黙っている訳がないでしょう？」

「あなたのもの？一体どういうこと！？説明しなさい！慧！」

「え？そこで俺？」

何故か、説明を目の前の美夜ではなく後ろの慧に求める葵。その表情は普段は、美夜に劣らず綺麗な顔立ちなのだが、今は鬼の様だった。

「それは簡単よ。だって慧は今、私と暮らしているんですもの。」

また、その問いに答えたのは美夜だった。それが気に入らなかったのか、葵は、今度は美夜に食ってかかる。

「ちょっと、神凧さん。ベタラメ言わないでくれないかしら？」

「あら、事実を述べたまでよ？花咲長女。」

「あなたは！私は花咲 葵！長女なんて名前じゃないわ！何度言ったらわかるの！」

「いや、この学園に花咲は3人いるじゃない。区別するためよ。」

二人は犬猿の仲のようで、言争いをはじめ、慧はそこから気付かれない様に距離をとった。

「あ……の……」

すると、珍しい事に三女の董がこっそりと慧に話かけてきた。

「何？」

慧は正直この子の扱いがわからない。長女や次女は嫌がらせをしてきており、明確に嫌われていると分かるので、対処の仕方も決まってくるが、この三女はどうにも解らない。怯えているのは確かかなようだが……

「えっと……神凧先輩と一緒に暮らしているって……本当ですか？」

「ああ、本当だ。帰る場所も行くあてもなかったからな。」

「私達……の家……じゃ、駄目……ですか……？」

その言葉に若干驚き、何のつもりか分からないが、ただ事実を述べた。

「ああ、無理だ。正直、あの家じゃ気が休まらないし、何より、俺の親父がとはいえ銀（い）を傷つけた。そして、誰も治療しようとしなかった。帰る理由もない。」

「そう……ですか……」

三女は沈んだ表情になった。そして疑問に思う。何故この子が今さらそんなことを……と。

「なあ、何でそんなことを聞くんた？君は俺を怖がっていただろう？」

「それは……私は男の人が苦手だから……お義父さんも慣れるまで時間がかかった……」

「つまり、君は俺のことを嫌っていなかったと？」

「はい……」

三女はその言葉に少し嬉しく思うものの、それでも帰る気にはならなかった。

「悪いな。それでも帰らない。」

「そう……ですか……なら！なら……お兄ちゃんって呼ぶだけでも、駄目ですか？」

「……へ？」

三女の思わぬお願いに変な声を出してしまう慧。

「あ……の……姉妹だけでしたから、兄というものに憧れていて……その……」

赤くなりながらしどろもどろに話す三女、董を見て、まあ、いいかと思う慧だった。

「ああ、好きに呼べ。」

「え？いいんですか？じゃ、じゃあ……慧お兄ちゃん？」

「あいよ。」

「ふふふ／＼／＼／＼」

嬉しそうに笑う董を見て、こんな表情もできるんだなと今さらながらに思う。

そんな間もまだ言い争いを続ける二人……いや、いつの間にか次女も含め三人になっている。

「なあ、董。」

「え！董！？」

名前で呼ぶと驚かれた。

「ん？何か問題あったか？」

「い、いえ、問題ないです！董でいいです！」

「そ、そうか、なら、董、あいつら、なんであんなに仲悪いんだ？」

疑問を口にする。そう、いくらなんでも仲が悪すぎる……というか、花咲長女が一方的に敵視しているみたいだ。

「えっ……と、葵お姉ちゃんには好きな人がいるんです。でも、その人は神凧先輩の事が好きで、だけど、神凧先輩はその人のことが眼中になくて……」

「それで、その不満が美夜に爆発している……と、つまりは嫉妬か……」

「はい。お兄ちゃんが来た時、一緒に暮らしていることを知られないよう強要したのは、その人に家族とはいえ、血の繋がらない他の男の子と一緒に住んでいると知られるのが嫌だったからで……」

なるほど、そういうことか。

「で？次女は？」

「薫お姉ちゃんは葵お姉ちゃんをとても尊敬しているので、だからだ……」

理由を聞いて納得すると同時に、なんだかなあと複雑な気持ちになった。姉妹がしてきた事を許す気にはならないが、責める気も起さない。まあ、次女は別だが……

「……お兄ちゃん？」

押し黙る慧に、怒らせたのかと怯えながらも声を掛ける。

「ん？ああ、まあ、納得はした。それに益々帰らない方がいいことがわかった。」

「へう……」

その答えに落ち込む董。

「そう落ち込むな。まあ、戸籍上とはいえ、俺が董の兄であることには変わらないんだから。」

そう言いながら董の頭をなでてやると、嬉しそうに目を細める。

「さて、そろそろ止めさせるか……」

撫でる手をとめ、言い争いをしている3人へ足を向ける。

「おーい！美夜！そろそろ帰ろうー！」

「ええ、そうしましょう。」

声を掛けるとすんなりとこちらへ振り返り、歩いてくる。

「待ちなさい！」

葵が制止するが

「それじゃあな、董。またな。」

「はい。またです。お兄ちゃん。」

「あら、慧、何時の間に董と仲良くなったの？それじゃあ私も、またね、董。」

「は、はい。神凧先輩！」

完全に無視し、二人は屋上から消えていった。

残った姉妹たちは・・・

「ね、姉さん？」

「お、お姉ちゃん、落ち着いて・・・」

怒る姉を宥めるのに苦労したという。

慧達は帰宅の途につき、今は夕食後のお茶を飲んでいる。

「ところで美夜？何で中等部の屋上なんかに来たんだ？」

ふと、疑問に思った事を口にしてみる。遅くなると連絡はしたが、

場所は伝えておらず、来るとは思っていなかった。

「ん？魔力の気配を探して、そしたら花咲姉妹と一緒にだったからね。悪いとは思ったけど、気になったからつい……」

各個人が持つ魔力の気配は違う。何故かは知られていないが、魔力は本来無色なのだが、人や意思を持つものを通すことによって色がつく……つまり個性が表れる。

その個性を覚えることで、人により範囲はことなるが、魔力で人を識別することができる。が、その差は人によるので、間違うこともあり、確実に出来る者はそれほど多くはない。

「まあ、良いけど……一つ聞いていいか？」

「何？」

慧はあの時、疑問に思ったことを口にする。

「うちの学園にも、魔法を取り締まる委員会か何かあるよな？でも、あの時、長女があれだけの魔法を使ったにも関わらず、何もなかったが、あれはなんでだ？」

そう、本来あれだけの魔法なら感知されてもおかしくはないはずだ。考えられる理由としては、長女が予め手を打っていたか、若しくは、この学園の全体的なレベルが思った程ではなかったか……

「ああ、だって、彼女がそれを取り締まる委員会、風紀委員の人間ですもの。」

「……は？それって、つまり、その委員会の人間なら、どんなに

魔法を使っても咎められないって事にならないか？」

つまり、長女が所属している風紀委員は、通常の風紀委員の仕事の他、学園での魔法の乱用などを防ぐのが仕事となる。

腕の立つ生徒や、『魔法使い』の資格を求める者、将来六魔天に所属したいと思っている生徒の大半はここに自ら志願し、入っている。

特権として、学園内でどんなに魔法を使っても咎められない。

予め手を打っていたかと思われたが、そうではなく委員会の人間だったから・・・しかし、なら余計不味いと慧は言う。

学園内での魔法の使用には本来、制限はあまりないが、取り締まりなどは学園の自治に任せている。なので、下手に大規模魔法を使用しようとする、この学園なら、風紀委員が飛んでくるが、風紀委員が同じような魔法を使おうとしても、止めるものはいないと言う事になる。

「ええ、困った事にね。でも、対策も一応あるのよ？」

それを防止するため、二つの勢力がある。一つはもちろん生徒会。そしてもう一つは『魔法部』という部活らしい。

本来なら、この三つが監視し合いそれぞれの勝手を防ぐ事になっているはずなのだが・・・

「困った事に、今って生徒会は私と副会長の二人だけで行っているのよね。」

聞いた話によると、今代の生徒会役員の大半は三年生で、もう辞

めてしまっており、今まで二人で運営してきたらしい。そのため、そちらには手が回せなかったらしい。

「は、すごいな。でも、何で役員を募集しないんだ？選挙か何かあったんじゃないのか？」

当然の疑問を口にする慧。

「ええ、だけどそれは私が却下したわ。どうせなら優秀な人材が欲しいじゃない？」

「つまり、美夜のお眼鏡に適う人物が副会長しかいなかったと？」

「まあね。いたとしても、風紀委員に所属していたり、拒否されたりだね？」

「ふん」

美夜なら強引に引つ張っていきそうなものなのにと思ったが、口にしない。

「因みに、慧は来年、生徒会への所属は確定ね。」

「ぶっ！」

思わず飲んでいたお茶を吹き出してしまった慧であった。

「汚いわね、もう。」

そう言いながら、布巾で、飛び散ったお茶をふき取る美夜。

「ゴホツゴホツ、すまない……じゃない！なんでそうなるんだよ！」

「あら、言ったでしょ？私が目指す組織を手伝ってくれるって？」

「おい、まさか……」

「ええ、そのまさかよ。」

美夜は、どうやら生徒会を完全に私物化しようとしているらしいかった。

「それは、いいのか？」

「問題ないわ。生徒会の仕事のこと考えた上でも都合がいいもの。」

自身満々にいう美夜に対し、呆れ顔の慧。

『ところで、美夜、その『魔法部』はどうなったのですか？』

今まで、力のコントロールの練習をしていた銀がい気になったのか、それを中断し、美夜に聞く。

「そうだったわね。『魔法部』は魔法の研究のため作られた部活で、そのため、魔法を使用しても風紀委員に咎められない。代わりに、風紀委員や生徒会を監視する役目を負っているんだけど……困ったことに、魔法部は活動禁止なのよ。」

曰く、部活塔を魔法の実験に失敗して半壊させてしまったらしい。所属していた部員の数はそれほど多くなく、腕も経つので人がいなかったらしいが……

「まあ、そういう訳で、今は風紀委員の独壇場というわけ。」

「ふうん。それはまた、面白くない話だな。特に、長女がそこに所属しているのは……」

向こうも表立って何かしてはこないだろうが、目の敵にされている以上は、慧の立場は悪くなる事だろう。

(ん？待てよ?)

「だから、生徒会……なのか?」

「ええ、生徒会に入れば、向こうも簡単に手出しは出来ないでしょうし、あなたも気にせず魔法が使えるからね。」

「といつても、俺の属性は『闇』だからな。あまり、人前で使いたくはないんだよ。」

属性にも様々あるが、『闇』の属性を持つものは極悪人が多い。そのため、『闇』の属性を持つだけで、忌み嫌われるものも多くなる。

美夜の様に、簡単に受け入れる人物は珍しいのだ。

「それを知って良く、俺を誘ったな?」

「あら？あなたは極悪人なの？違つてでしょ？」

美夜はさも当たり前前の様に言い放つた。その様に言ってくれた人は少なく、嬉しかったのだろう。頬を少し紅くし、美夜から視線を逸らした。

「私としてはむしろ何故、正直に話したかが気になるわね。知られたくないのなら、私にも嘘をつけばよかったのに、そうしなかったのは何故？」

その問いに、慧は美夜を正面から見つめ答えた。

「俺の属性が『闇』であることに後ろめたさはないからだ。むしろ、誇りに思う。魔法を人前で使用しないのは、面倒事が嫌いだからだ。必要なら使つた。」

「ふふ、そう・・・慧の魔法が見られるのを楽しみにしているわ。」

「いや、だから、お前が思う程凄くは無いからな？」

慧はそう訂正するが、美夜は受け付けなかった。慧の力を確信しているようなその振る舞いに困り果てる慧だった。

「ところで美夜、今日の生徒会の仕事は無かったのか？随分と早かったみたいだが？」

「まさか、もうすぐ卒業式なのよ？あるに決まっているじゃない。」

何を当たり前のことをと言った様に言う美夜。

「じゃあ、何で早かったんだ？仕事は？」

「……………」

目を逸らす美夜に、慧は確信した。

（副会長に全て押しつけたな？）

そのころ、学園の生徒会室では……

「美夜の馬鹿……！」

泣き叫ぶ副会長の声を聞いたものがいたとかいなかったとか……

第三話 慧、家族と訣別

三姉妹との屋上でのやり取りから数日が経った。

あれから、長女や次女が学校で絡んでくることもなく、慧の周りは平穩そのものだ。

美夜曰く

「向こうも、流石に好き勝手は出来ないでしょ。一応、風紀委員なんだから、模範とならないといけないしね。それに、まだ生徒会に入っていないけど、あなたが私と親しくしているのは登下校をほぼ一緒にしているのを見られているから、あなたに何かあつたら私が動くと思っているみたいね。まあ、実際動くけど。」

とのことだ。

美夜と一緒に登下校し始めた頃は周りも騒がしかったが、今では慧に対し特に何も言っていない。むしろ、その話題は周りが避けようとしている気がするが、慧は気にしないことにした。今年度も残すところ後少し、4月になったらクラスも変わることもあるので大して気にしていない慧であった。

しかし、気にしないと云えないことが一つできた。それは・・・

「失礼します。黒澤先輩をお願いできますか？」

「あら、また来たの？ちょっと待っていてね？黒澤君！花咲さんが来ているわよ！」

「ああ、ありがとう。」

慧は、クラスメイトに返事を返し、お昼を持って董の下へ向かって行った。

「悪い、待たせたな。さて、行きますか。」

「うん！」

それは、お昼を董と一緒に取る様になったことだ。

最初に董が教室に来た時はかなりの騒ぎになった。肩ぐらいまでの黒髪と少したれ気味の優しそうな瞳、綺麗と言うより可愛いと言った方がしっくりくる、少女で、この学園でも上位の人気を誇っている。

そんな少女がいきなり訪ねてきたのだ。しかも訪ね人が美夜と一緒に登校した事で話題になった人物であり、それがつい昨日の話なのだ。騒ぎにもなる。

クラスメイトには関係性を聞かれた慧だが、正直に言う訳もいかず、美夜関連ということではぐらかした。納得はしていないみただが、美夜の名前を出すと皆、引き下がっていった。美夜の影響力というか、なんとというか、始めて凄いと思った瞬間であった。

そんな中、教室で食べる訳にもいかず、屋上で食べる事にしたのであった。幸い董は弁当で、慧も美夜と交互に弁当を作っている。今日は美夜の番だった。

ちなみに、人の目がある所では慧を『先輩』、人の目が無い所では『お兄ちゃん』と董は呼んでいる。

「ねえ、お兄ちゃん。今日のお弁当は美夜さんが作ったの？」

屋上で弁当を広げ、箸をつつしていると董が聞いた。

「ああ、良くわかったな。」

「だって、お兄ちゃんが作ったお弁当と美夜さんが作ったお弁当は雰囲気が違うんだもん。」

「そういうものか？」

まあ、レパートリーが異なるからそうなるか、と結論づける慧。

「いいなあ二人とも、料理ができて・・・」

「やっていれば出来様になるさ。」

「・・・そうかなあ？」

そんな世間話を続けていると

「ところでお兄ちゃん。家に少しでいいから顔を出してよ。お母さん、心配しているよ？」

一緒にお昼を食べる様になり、何度も董が言っている言葉だ。慧自身、桔梗さんには少しとはいえ世話になったのでちゃんと挨拶位はしておきたいと思っているのだが・・・

「長女と次女、親父がいない時であれば構わないぞ？」

董は多分、桔梗だけでなく、他の奴らも含めて会って欲しいと思っ
ているのだろう。しかし、慧は桔梗以外とは顔を合わせたいとす
ら思っていない。特に父親とは今、顔を合わせる訳にはいかない。
思わず殺してしまいそうだからだ。

「もう、お兄ちゃん、そればかり・・・」

このやりとりは何度目か、少しむくれながら仕方が無いと溜息を
尽く董。

しかし、今日はそれでは終わらなかった。

「そうね、いい機会だわ。次の休みにでも挨拶に行きましょう。」

「美夜？」 「美夜さん!？」

そう言っ、いきなり現れたのは美夜と

「美夜、唐突に人の会話に入るのはどうかと思うわ。」

「いいのよ、夢^{ゆめ}。私と慧との仲なんだから。」

金髪の長い髪を腰のあたりで纏めており、碧い瞳が特徴的な女性、
生徒会副会長の源藤^{げんとう} 夢^{ゆめ}だった。

「いや、どんな仲だよ!？」

「どんなって、一緒に暮らしている仲？」

「え!?!」

その言葉に驚く夢と董。

「いや、董は知っていたら？」

「ははは、ここは驚くところかなあと。」

「私は聞いていないですよ!美夜!どういことですか!?!」

「まあ、まあ、落ち着いて夢。その事も含めて話すから。後、二人は夢とは初対面よね?この子は源藤^{げんとう} 夢^{ゆめ}、生徒会副会長よ。夢、こつちが、先日話した黒澤 慧、あと、この子は知っているでしょう?花咲 董、花咲家の三女よ。」

美夜の紹介に続いて互いに自己紹介をする慧、董、夢。

そして、慧が何故美夜と暮らす事になったのかを夢へと説明した。

「そう、そんなことが・・・」

なお、銀については使い魔となった事は伏せている。これは美夜の配慮だ。董にも一命は取り留め無事であることしか伝えていない。

「で?美夜、何だ、挨拶って?」

「それは、あれよ。息子さんを私にくださいって・・・」

「なんだ、その結婚の許しを請うような台詞は！普通逆だし、そんな事実ないだろ！」

一緒に暮らしてはいるが、そんな仲になった覚えのない慧は必死に否定する。

「お兄ちゃん、もうそこまで行って・・・」

「黒澤君、式はいつ？」

「二人とも、分かって話に乗っているだろ？」

「はははは」「

「はあ、で、何で挨拶に行くんだ？」

慧は呆れた様に溜息を尽くと再度、問いかけた。相手は一応、花咲家。本家ではないとはいえその敷地に入る事は、『世界樹の頂』の領域に侵入する様なものだ。神凧家の人間が簡単に入っているのかと、言外に問いかけている。

「まあ、さっき言ったことはあながち間違っていないわよ？慧は私ものになったのだから。でもまあ、ちゃんと話すと、慧のお父様は花咲家に婿養子に入ったのよね？なら、慧も花咲は名乗っていないけれど、『世界樹の頂』側の人間って捉えられていてもおかしくないでしょ？だから、こちら側になる以上、ちゃんと話しておかないといけないのよ。でないと面倒な事になるわ。因みに訪問する事は伝えてあるから、あなたが危惧することは大丈夫よ。」

同じ六魔天とはいえ、それぞれの組織は敵対関係とまではいかな

いまでも仲が良くない。

そもそも、思想の違いで分離したのだ。仲が良い訳が無い。今も互いに保有している魔法の知識や道具を隙あらば盗もうとし、犯罪組織が独自の魔法理論を持っていたら抜け駆けしようとし、争ったりにしているのだから。

「・・・事後承諾か・・・拒否権はないんだな。」

「どうしても嫌なら、私一人で行ってもいいけれど？」

「・・・わかったよ。董や桔梗さんがいるから大丈夫とは思いますが、一応敵陣に行く事になるのだから、美夜一人で行かせる訳にはいかんだろ。」

「あら、心配してくれるの？」

一応女の子である美夜を一人で行かせるのは気が引けるうえに、自分のことでもあるため、結局折れたのは慧であった。

「むっ・・・」

そんな慧に不満をあらわにする董。自分がいくら言っても聞いてくれなかったうえに、自分の家を義理とはいえ慕っている兄に敵陣と言われたのだ。不満に思うのも無理はないだろう。

「どうした、董？そんなに膨れて？」

「知りません！」

そんな義妹の気持ちを察せない義兄は戸惑うばかりだ。

「と、言う事だから、夢。生徒会の仕事、お願いね？」

「ちょっと！美夜！またですか！？」

「後で埋め合わせはするから、お願い？」

頼みこむ美夜に溜息を尽きながらも了承の意を示す夢。どうやらいつもの事らしい。

「・・・大変ですね、夢さん。」

「はあ、何を他人事のように言っているのかしら？4月からあなたにも手伝ってもらいますからね？」

「・・・」

慧は目を逸らした。

「ちょっと！せっかく少しは楽になると期待していたのに！手伝ってくださいよ？ね？」

懇願する夢に居たたまれなくなった慧は渋々ながらも了承した。

「ちょっと、夢。それじゃあ私が何もしていないみたいじゃない。」

夢の言葉に美夜は不満を表すが

「最近できた後輩にかまけて仕事をさぼっている人が・・・」

「わー！わー！わー！」

夢が何か言っているが、美夜が急に叫んだため慧と董には聞こえなかった。

「はあはあ夢、私が悪かったわ。明日からはちゃんと仕事するから許して。」

「わかればよいのです。とりあえず今日のことは了承しましたから、明日からはよろしくお願いしますね？」

「・・・はい。」

ここに力の関係が証明されたのだった。

「と、言う訳で、今日は放課後、董の家に行くわよ？」

「はいはい。」

仕方がないと言った様に慧は了承した。

「あ、あの！私も一緒に帰っても良いですか？」

そこで、董が話に入ってきた。どうやら自分も一緒に帰りたらしい。

「ええ、あなたが良いなら構わないは。それじゃ放課後に校門でね？」

その後は一緒にお昼を取りお開きとなった。その後、教室へ戻ると

「黒澤く！お前、源藤先輩とどついう関係だ！」

という男子生徒からの尋問に合うこととなった。

「慧、なんでそんなに疲れた顔をしているの？」

「大丈夫？お兄ちゃん？」

今は、放課後、花咲家へ向かっている途中だ。

「気にするな・・・なんでもない。」

思ったより、尋問が凄かったらしく、慧は既に疲れ果てていた。

「そう、それならいいのだけど・・・もう着くわよ？」

どうやら、慧が復活する前に花咲家に着いてしまったようだ。

「それじゃあ、準備は良い？」

「ああ・・・大丈夫だ。」

慧の返事を聞くと美夜はインターフォンを押した。すると、久しぶりに聞く女性の・・・桔梗さんの声が聞こえてきた。

「はい、どちら様でしょうか？」

「私、先日連絡させていただいた神風 美夜と申します。」

「あ、神風さんですね？少々お待ちください。」

その直ぐ後、ドアが開き、中から、桔梗さんが現れた。

「お待ちしておりました。神風さん。どうぞお入りください。それと、お帰り董、慧君。」

慧が訪ねてきた時とは違ってとても丁寧な口調で美夜に接する桔梗。そして、一緒にいた董と慧には普通に迎えた。

「ただいま。お母さん。」

「お邪魔します。桔梗さん。」

その桔梗の言葉に董は「ただいま」ところが帰る場所だという言葉が発する。しかし、慧はあくまで自分も客だという言葉で返した。その言葉に桔梗は悲しげな表情を見せるが、客を待たせる訳にはいかないため、二人を居間へ通した。

董は一旦部屋で着替えてくるらしく、二人と一緒に居間へは入らなかった。

「ようこそ、神風の御息女。どうぞお座りください。」

そこには、慧の父親、瀧と

「……………」

不満顔の葵と薫がいた。

「ほら、葵、薫。御挨拶なさい。」

瀧に言われ二人は渋々ながら挨拶をするが、この三人に共通することは、慧を見ていないことだ。

美夜は慧に目線で本当にあなたの父親？と、問いかけて来たが、それに肩をすくめて答えた慧であった。

二人がソファに座ると、桔梗が全員分のお茶を用意してくれた。

「ありがとうございます。それでは、早速ですが本題に入らせて頂きます。」

既に董も私服に着替え降りてきており、花咲家全員集合状態だ。

「あなた方の息子である黒澤 慧さんをいただきたく思っておりますが、いかがでしょうか？」

その問いに答えたのは瀧だった。

「いただくも何も、既にあなたと家の愚息は共に暮らしているのでしょう？それは事後承諾というのでは？」

嫌みを言う瀧に対し美夜は動じず答えた。

「そうですね。それはお詫びしなかりません。彼と出会ったのは偶然でしたので、名字も黒澤と名乗っていたのでまさか、花咲

に縁あるものとは気付きませんでした。しかし、今まで遅れたのはお互いの所属する組織の問題もございましたのでそこは御理解いただけるかと幸いです。」

「そうですね。互いに所属する組織の問題上、仕方がなかったですね。事情を察して発言するべきでした。こちらこそすみません。ですが、それならばなおの事、家の愚息をそちらで預かっていただくわけにはまいりません。」

瀧は自分の発言を詫びると同時に美夜の言った言葉を逆手にとり、拒絶の意を表した。それは、慧を譲りたくないのか、それとも花咲家に迷惑をかけたくないからなのか……。

「そうですね。彼は未だ、黒澤の姓を名乗っておりません。これはつまり花咲とは関係がないことを示しているのでは？」

「それは、そいつが勝手にそう名乗っているに過ぎません。戸籍上は……。」

「魔法使いにとって、自分の名前は重要です。名は自分を示し、表すもの……ここに自らが存在していると主張するものです。戸籍は形式に過ぎません。慧が黒澤を名乗る以上、彼は黒澤 慧です。」

『魔法使い』にとって、『名』とは重要なものである。『名』は自分を示すものであり、魔法も使おうとする際、名前を言うのと言わないのでは威力が異なる。そのため、『魔法使い』にとって、名前は重要な要素といえる。まあ、今の時代は個人の名前はそこまで重要視されていない。しかし、相手は『魔法使い』を管理する六魔天の一つ『世界樹の頂』に所属している以上、否定できるものでもない。『世界樹の頂』は歴史を重んじる性質があるからだ。

「グ……それは……」

美夜の言葉に押し黙る瀧。そこに桔梗が後を引き継ぐ様に言葉を発した。

「確かに、神凧さんの言う通りですね。」

「お母さん（桔梗さん）！」

その言葉に驚く瀧と3姉妹。葵と薫が驚いたのは不明だ。この二人は慧を歓迎していないはずである。心変わりしたわけでもあるまい。

「ですが、それを決めるのは慧君だと思いますが？」

「……ええ、あなたの言う通りですね。慧、どうかしら？」

そして、慧に話が振られた。皆の視線が集まる中、桔梗と董に心の中で謝りつつ、慧はためらいなく告げた。

「俺は、美夜と共に行く。こいつと一緒にの方が、俺は良い。」

「慧（お前）（慧君）（お兄ちゃん）！」

その言葉にそれぞれ表情を変える。美夜は嬉しそうに、桔梗と董は悲しそうに、葵と薫は忌々しげに、瀧はどこかホットした様に……

「この家での生活は苦痛しかない。その、長女と次女は俺を嫌っ

ている様だし、それに・・・親父、あんた俺が嫌いだろ？」

「な、何を言ってる・・・」

「良いよ、否定しなくて。あんたが俺を嫌っていること位、憎んでいること位、もの心ついた時から知っているよ。今だってそうだ。俺が美夜を選んでほっとしたろ？それに、俺が今日この家に足を踏み入れてから、俺の名前、呼んだか？愚息とかお前とかだろ？俺の名前を呼ぶ事さえ苦痛に感じるんだろ？」

慧は今まで思っていた事を吐露する。もう、会う機会もないと思うから・・・

「ち、ちが・・・」

「何も違わない。俺のせいで母さんが死んだ事であんたが俺を嫌っているのは知っているんだ。否定しなくていい。だからといって、銀を傷付けたことを許すつもりもない。」

そう言われ、凶星だったのか、銀を傷付けたことを悔やんでいるのか、おそらく前者だろう、俯いた。

「俺がこの家を出た方が互いのためだ。俺はもう、あんたとは関わらない。親とも思わない。今日、ここで、さよならだ。」

慧はそう言っていると立ちあがった。

「話はここまでだ。桔梗さん少しの間でしたけどありがとうございます。ごめい
ました。」

そして、桔梗にのみ向けてお辞儀をした。

「慧君・・・うん、こちらこそ、息子ができて嬉しかったわ。元気でやるのよ？」

そして、話はこれで終わりといった様に、美夜も立ちあがった。

「それでは、花咲さん。慧はこちらに任せていただきます。ごきげんよう。」

「ええ、慧君をよろしくお願いしますね？」

「お兄ちゃん、あの、私は・・・」

慧は何か言おうとする董の頭に手を載せ

「まあ、戸籍上は兄妹であることに変わりはないから、好きに呼べ。」

「うん！ありがとう！お兄ちゃん！」

嬉しそうに、返事をした董であった。それを葵と薫は忌々しそうに見ていた。自分達が慧を嫌っている事を話されたことと、美夜の思い通りになった事が許せないのだろう。

それに気付いた慧は意地の悪い笑みを浮かべ長女の耳元で囁いた。

「これで気兼ねなく委員長にアタックできますね？」

「な!？」

何でそれを知っている？と、顔を赤くし、驚いた顔になった。

慧はそれを見て満足したのか、父親には目もくれず、美夜の下へと戻り

「それじゃ、帰りますか、美夜。」

「ええ、そうしましょう。慧。」

そして二人は帰っていった。

二人が帰った後の花咲家

葵と薫、そして瀧は正座をさせられていた。

「さて、私が何故怒っているのか、おわかりですか？」

桔梗が珍しく怒っている。その姿に怒られていない董まで震えていた。

三人は分かっているが、言いたくないのか口を噤んでいた。

「「「.....」」」

「そうですか、わからないのですか？なら教えてあげます。何故そんなに慧君のことを嫌っていたのかしら？慧君があなた達にいったい何をしたというの？」

当然の疑問をぶつける桔梗。

「瀧さんの気持ちはわからなくてもないですが、それを慧君にぶつけるのは間違っているでしょう？そして、娘二人、あなた達、慧君を嫌っていたよね？何故嘘を吐いたの？そして、慧君に何をしていたの？洗いざらい吐いてもらいますでしょうか？」

「『ヒィ』！！！！」

花咲家に、大の男と少女二人の悲鳴が響いたのであった。

第四話 真の未来と美夜の叫び

あれから日は過ぎ、今はもう春休み。

美夜はあれから、多忙を極め、終了式が終わるまで帰りも遅くなくっていた。

そして、慧はというと、家事全般を引き受け、専業主夫と化していた。それと同時に、銀に魔法を教えていたのだが、しばらくして問題がおきた。

「ん？・・・銀か？」

夜半過ぎ、布団の中になにかが潜り込んでくるのを感じたが、よく銀が潜りこんでくるため気にせず眠り続けた。この時ちゃんと確認していればまた違った結果となっただろう。

「慧、何時まで寝ているの？いい加減おきなさい！」

「ん・・・美夜か・・・もう少し寝させてくれ。」

春休みに入り、入学式の準備はあるが、今日は珍しく美夜も一日家にいるとのことなので家事を引き受けてくれた。慧はその言葉に甘え、今まで眠っていたのであった。

「駄目よ。夢や董が来ているの。起きて挨拶なさい。」

「ん・・・分かったよ。ほら銀、お前も起きろ。」

そういつて、銀を起こそうと、布団をめくるとそこには

「……え？」

全裸の少女がいた。銀髪の長い髪に綺麗な顔、幼さの中に妖艶な美しさが見える顔立ちだ。頭に犬耳、お尻にフサフサの尻尾がある。

そして、更に状況は悪化した。

「美夜、黒澤君は起きましたか？」

「美夜さん。お兄ちゃんは？」

そして、目撃する。全裸の少女と寝床を共にする慧の姿を……

「……」

沈黙が支配する中、最初に動いたのは美夜だった。

「慧……何か言い残す事はある？」

いいながら、魔力を活性化させ、半透明の球体を創りだしている。

この球体に触れると触れた部分が無に帰る凶悪な魔法だ。

無属性魔法は、全てを無に還すことができる魔法だが、全て無に還すことしか出来ないともいえる。また、一度に消せる数に限りがある。なお、魔力そのものを消すことはできない。

「美夜さん。それじゃ駄目です。少し、苦しませてからじゃないと・・・」

そう言いながら、董は水の球体を創りだした。どうやら董の属性は水のようなのだ。

二人は平然と魔法を使っているが、どちらも『魔法使い』の資格をもっており合法的使用できる。まあ、家の中なのであまり関係はないが・・・

「美夜さん？董さん？なんですかそれは？そんなの喰らったら私、ただでは済みませんよ？夢さん！？そんな見ていないで助けてくださいー！」

「ふふ、頑張ってください。黒澤君。」

その笑顔は黒かったと後に慧は語る。

「「その女は誰よ（ですか）！？」」

そして、魔法が放たれた・・・が、それは慧には届かなかった。その前に、氷にぶつかっていたからだ。

「ん・・・美夜、そして董よ、主に何を・・・するのですか？」

いつの間にか銀髪の少女が起き上がり氷の魔法を展開していた。

「主、大丈夫ですか？」

そういって、慧に顔を近づける銀髪の少女。自分を主と呼ぶ少女、

そんな呼び方をするものに心当たりは一人？しか見当たらなかった。

「もしかして、銀・・・か？」

「はい。そうですが、何故疑問系なのですか？」

「いや、お前、何で人の姿をしているんだ？」

その言葉にきよとんとする銀。

「主が言ったのではないですか、人の姿になった私を見てみたいと。」

「は？いつだ？」

「それはですね・・・」

それはつい数日前のことだ。慧と銀はいつも通り、魔力のコントロールの訓練をしていた。必要最低限のレベルには直ぐに達したが、銀がもつと学びたいと言う事なので、コントロールだけではなく、慧の知る範囲で魔法関係について教えていた。

今回は動物と魔物の違いを教えていた訳だが・・・

「・・・それでだ、動物と魔物の違いは、簡単言えば魔力の強さだ。属性が現れるほどの魔力を持った動物を魔物、それ以外を動物と呼んで区別している。銀も魔物に含まれているな。」

魔物の中には魔力により姿が変質したものがほとんどであり、むしろ、銀の様に変質せず姿を保っている魔物は珍しい。

『そうですね。私以外の魔物にはあまり会ったことはありませんが・・・』

「まあ、それは仕方がないだろ。魔物は人に危害を加えるとされ駆除の対象になっっているからな。今じゃ、山奥とか人がいない場所や魔力が濃い場所、後は秘鏡と呼ばれる場所位にしか生息はしていないだろう。」

魔物は動物と比べ、より凶暴になっている事が多く、人間も捕食の対象としている。そのため、六魔天が中心となり、人里に近づいた魔物は駆除している。これは『魔法使い』の仕事の一つだ。

『だから、私は襲われたのですね。そして、主達に拾われた・・・』

「まあ、お前に気付いたのはあいつだけだな。あの時は大変だった。いきなり、氷属性の魔法を撃つて来たもん、な。しかも、なかなか懐かないし、噛みついてくるし・・・」

『あの時はすみませんでした。』

銀との出会いを思い出しながら懐かしそうに笑う慧に銀は申し訳なさそうに目を伏せる。

「ま、仕方ないさ。たくさん人間に追いかけられたんだからな。人間不信にもなるさ、気にするな。」

慧は過ぎた事だと銀の頭を撫でてやる。

『ありがとうございます／＼／＼．．．ところで、魔物はどうやって生まれてくるのでしょうか？元からいた訳ではないのですよね？私も元から魔物だった訳ではないですし．．．』

銀は頭を撫でられ嬉しそうにしながら、疑問に思った事を口にした。銀自身いつの間にか魔物のカテゴリに入っていたとのことだ。慧に教えられ初めて知ったとのことだ。

「それにはいくつか理由があるが、一番の理由は魔力を過剰に取り込み過ぎて変質してしまう事だろう。大概望まずに変質し、人間に見つかり駆除される。」

『魔力を．．．ですか？』

「ああ、何故そうなるかは未だ定かではない。ただ、どの魔物にも共通する点が一つあって、何故か、野生の動物は襲わない。大体同じ魔物同士でしか喰らい合わない。魔力の強弱で喰うかどうか判断しているみたいだと言う事しか分かっていない。」

『そうですね、確かに、動物はまずそうに感じてしまいます。代わりに、同じ魔物はおいしそうに感じますから、狩るならそちらを狩りますね。あと、人間も捕食の対象に入ります。私は食べた事はありませんが．．．でも何故かは自分でも良く分かりません。本能としか．．．』

そう言う銀はどこか不安そうに声を震わせた。

「大丈夫だよ。俺がいるんだ。お前が誰かを喰うようなことにはさせないし、お前に手出しはさせないよ．．．って、俺が言っても説

「得力はないか。」

「一度、銀を死なせかけてしまっている慧は自嘲ぎみにそう言う。」

『そんなことありません。ですが、これからは私も主を守れるようになりたいです。せつかく使い魔になったのですから。』

「そうか、ありがとうな、銀」

そうやって、再び銀の頭を撫で始めた。銀は嬉しそうに尻尾を振っていた。

「さて、話の続きだが、魔物と動物の違いは分かったか？」

「はい。」

「んじゃ、次は魔物の種類についてだな。魔物といってもいろんな種類がある。大きく分けると、狼型、猫型、鳥型、猿型など、変質はするが、元が何の動物かわかるものはまとめて定型と呼ばれている。まあ、銀の様な同じ形を保っている魔物は珍しいけどな。次にまったく異なる形となったものを異型と呼ばれている。スライムとかだな。そして最後に幻型と呼ばれるもの、これは、伝説上の動物、ペガサスやドラゴンなどの事をそう呼んでいる。」

大きく分けると、定型、異型、幻型と三つに分けられる。細かく分けると、定型の猫型、異型のスライム、幻型のドラゴンなどと区別される。

『ああ、では以前出会ったあれは、幻型の魔物に入るのでですね。』

「まあ、幻型と呼ばれる奴らは自分を魔物と呼ばれるのを嫌っているがな。」

『そうなのですか？』

「ああ、奴らは魔物と違い、魔力を過剰に取り込んでしまっただけでなく、最初からみただけだからな。」

『え？それはいつたい？』

「いや、俺も知らない。聞いたただけだからな。」

幻型と呼ばれるもの達は他の魔物とは違い最初からその姿をしている。何故かまでは慧にも分からない。

ちなみに、世間一般では、ここまでのことは分かっている。慧が知っているのは、以前、不幸にも出会ってしまった幻型に聞いたからだ。その時、銀も一緒だったが、途中で気絶してしまっていたので聞いていなかった。

「でだ、今言ったのが基本の分け方だが、さらにランクがある。それは魔力の量だけでなく知能や肉体の強靭さを総合して、どれだけ脅威となるかで決められる。そして、ランクが高い魔物は人の姿に変身することもできる。」

『へえ、私はどうなのでしょう？』

「そうだな・・・今の銀なら可能だと思うぞ？まあ、まだ魔力の制御の練習が必要だと思っが・・・」

『そうですか、主は私の人型を見たいと思いますか？』

「ん？そうだな・・・銀ならきつと綺麗な女の子に変身するだろうから、見てみたいな。」

この時、言いながら頭を撫でる自分の主を見て、銀は決意した。まずは人型への変わり方から覚えようと・・・

「・・・ということがありまして・・・」

「そ、そういえばそうだったな。」

確かに見たいと思った慧だったが、だからと言ってこんな短期間で出来るとは、しかも布団の中にその姿で潜り込んでくるとは思わず、言葉がでない。

「そ、それでその・・・／＼／＼／＼私の人型はどうですか？」

銀は恥ずかしそうに慧に聞く。慧は・・・

「あ、ああ・・・綺麗だと思う。／＼／＼／」

尻尾を抱え、モジモジする銀を思わず抱きしめそうになるのを堪え、目線を外しながら答えるが、その先には・・・

「「「ジ〜〜〜」」」

わざわざ擬音を声に出して凝視する三人がいた。

「と、とりあえず、美夜！銀に服を着せてくれ！夢さんも董も一度出て行ってくれ。着替えるから！」

とりあえず、4人を追い出した慧は一人落ち着く事にした。

「それで、お兄ちゃん。この子、銀ちゃんって言うていたけど本当なの？」

第一声を発したのは董だった。その後、着替えてからリビングに集合した。因みに、慧は、白いTシャツに黒の上着、黒いパンツ姿でラフな格好だ。一方、銀は白と黒のいわゆるゴスロリの服を着ている。美夜が何故そのような服を持っているか聞くと

「趣味よ、悪い？」

「すごまれたので何も言えなかった慧であつた。」

「ああ、本当だぞ？銀、一度元の姿に戻ってくれ。」

「わかりました。」

直接見た方が早いだろうと思い、銀にお願いした。了承した銀は一度元の狼の姿に戻り、再度人型へと変えた。

「……本当だったんだ……でもなんで銀ちゃんにこんな力が？」

「そうですね。本来高位の魔物しか出来ないと思うのですが？」

その言葉に美夜と視線で会話し、この二人なら大丈夫だろうというところで、これまでの事を話した。

「そう・・・そんな事が・・・」

「でも、お兄ちゃん。実は凄い？」

「いやいや、美夜にも何度も言っているが大して凄くないから。」

董の言葉を否定する慧だが、やはり使い魔を持つと言う事は『魔法使い』として優秀ということなので、そう思われるのは仕方が無い事なのである。

「・・・・・・・・・・」

慧が夢と董の評価を否定している中、美夜は何かを考えている様子だ。

「美夜？どうかしたのですか？」

銀がそんな美夜の様子に気付き、訪ねた。

「うん。決めた！」

いきなり立ち上がり声を上げる美夜にこの場にいる全員の視線があつまる。

「何を決めたんだ？」

慧が代表して美夜に問いかけた。

「ふふ、決まっているじゃない。銀、あなたも学園に通いなさい！」

「「「え!?!?!」」」

皆、驚きの声を上げるが、銀は嬉しそうだった。

「学園に通えば主と一緒にいられますよね？」

「ええ、もちろん！」

どうやら、銀は慧と一緒にいられるのが嬉しいらしい。尻尾が凄
い勢いで振られている。

「ちょっと待て！美夜！それはいくらなんでも無茶じゃないのか？」

「そうですよ！試験とかどうするんですか!?!」

「そうね〜、流石に無理があるんじゃないかしら?」

「慧、董、夢は否定するが

「大丈夫よ！わたしに任せなさい！」

美夜は自身満々に告げる。

「いや、しかし董の言う通り編入試験をクリアするのに必要な学力
を得るまでは時間がかかるだろ?それにいくら俺の使い魔だからっ
て銀は魔物だぞ?」

「大丈夫よ。銀の魔力なら、特例として行けるわ。それに使い魔は主と共にあるものでしょ？後、例え魔物でも使い魔なら、正式に登録すれば駆除の対象からはずれるわ。慧が秘密にしたいなら、わたしの使い魔って事で登録するわよ。」

「む・・・いくら美夜でも銀はやらんぞ？」

そっいいながら、銀を抱き寄せせる慧と頬を赤らめて喜ぶ銀。

それを見てむくれる董と微笑む夢。

「ふふ、分かっているわ。登録は慧がすれば良いわ。」

「だが、俺の場合勝手に契約したからな。不味いんだろ？」

「そっね・・・普通なら不味いけど・・・慧は『魔法使い』の資格は持っているのかしら？」

「まあ、一応。といつても、依頼を無視しまくっていたから最低ランクのFだけだな。」

董と夢は驚くが、美夜は当然のように頷く。

『魔法使い』の資格は最低Dランクから始まり、基準より2ランク上の魔法が公に使えるようになる。この資格を取るためにはそのレベルの魔力と知識、技術が無ければ取る事ができないが、制限があるため、独学では難しい。普通は『魔法使い』に師事するか、天城ヶ丘学園の様な場所で学ぶことで、可能となる。

なお、ランクを上げたい場合は、依頼をこなしたり、昇格試験を

受けたりするが、慧の様に依頼を無視してランクを落とすことはまずない。資格を取るということは、公に使える魔法のランクを上げたいものや、六魔天に所属したいものがほとんどであるからだ。

しかし、慧はFである。このランクは資格を持ったものが罪を犯した時に与えられるGを除けば最低のランクとなる。つまり、それだけ依頼や試験を無視していた訳であり、何のために資格を取ったのか分からない。

その事に二人は驚いたのだった。が、美夜はむしろそう来なきやといった様だった。

余談だが、慧が資格を取ったのは、当時、自分の力を試すのに調度良かったという事と夜城や白河に進められたという事もある。

ちなみに、ランクはGを除けば、F→SSSの9段階。美夜はS、夢はA、董はCランクだ。

割合としてはD→Cランクが最も多く、次のBランクからは段々数が少なくなっていく。代わりに許可が下りる魔法のランクも上がっていく。そして、EやFは、逆に一般人より制限が大きくなっている。数は、SSS並に少ない。

ちなみに、『魔法使い』が制限を越えたかどうかは資格を取った時に渡されるカードに施された魔法により、六魔天に知らされる。自分のランクより上の魔法を使いたい時は、自分よりランクが上の者が一緒におり、許可を得るか、予め申請しておく必要がある、破った場合は罰則の対象となる。

慧は『魔法使い』を示すカードに細工をしており、許可以上の魔

法を使っても気付かれないようにしている。

「なら、大丈夫ね。内の学園の理事長に頼めばなんとかなるわ。」

『魔法使い』の資格を持つことが、『契約』を公式に認させるために必要な事の一つであるからだ。

「理事長？そんな権力を持っているのか？」

理事長の話が出ると、夢と重は納得した顔になった。

「ふふ、それは会ってからの楽しみね。」

そして、楽しそうに笑う美夜であった。

「って、お兄ちゃん！銀ちゃんを学園に通わせるのを認めてるよ！」

その言葉にはっ！とする慧であったが・・・

「主、駄目ですか？」

銀に上目使いで見られ、あっさり陥落した。

「・・・勉強は俺が見てやる・・・」

小さいころから組織に所属していた慧は学校にあまり行っておらず、それを心配した夜城や白河が勉強を教えたため、偏りはあるが、それなりに頭は良いのだった。特に魔法学に関しては抜けている。

「はい！よろしくお願いします！主！」

その言葉に銀はとても嬉しそうに答えた。

そんな二人を見る三人は

(((駄目だ、この男・・・)))

そんなこんなで、慧と美夜、そして銀は学園の理事長室に来てい
る。

「で、うちの理事長って何者なんだ？」

「直ぐに分かるわ。」

そう言つと、理事長室の扉をノックした美夜は中からの返答を待
ち、中へ入つていった。

慧と銀もそれに続き中に入っていくと、そこにいたのは

「いらつしゃい。美夜さん。それと、そちらが、黒澤さんと銀さん
ね。始めまして私がこの学園の理事長を務める外神^{とがみ} 未来^{みらい}です。」

肩まで伸びた蒼い髪に同色の瞳、20代後半に見える綺麗な女性、
『七大法典』の一人『真^{まこと}の未来^{みらい}』がそこにいた。

慧は啞然とし、銀は直接の面識がないため、慧を不思議そうに見
ている。銀は慧の組織のことを知ってはいるが、仕事をしたことは
ない。以前、幻型と会ったのは、慧と旅行している時であり、実際

のところ、銀は裏方面の知識はあまりないのだ。

「それで、お話した件ですけど・・・」

「ええ、大丈夫です。それについてはこちらで済ませておきました。

」

そう言って、理事長は何かをとりだした。

「まず、銀さん。あなたにはこれを・・・」

そう言って、黒地に銀の色をした雪の結晶を模したバッチを銀に渡した。

「これはあなたが使い魔である証です。意匠は私が決めさせてもらいました。無くさないようにしてください。」

「はい。ありがとうございます。」

銀は丁寧にお辞儀をしながらそれを受け取った。

「それと、黒澤さんにはこれを・・・」

慧にも銀と同じバッチを渡した。意匠は銀とは逆に銀地に黒い雪の結晶を模している。」

「はあ、ありがとうございます・・・」

それに対し、軽く会釈して答える慧。

「ちょっと、慧、失礼よ。」

慧の態度に注意を促す美夜だが

「いいですよ。美夜さん。」

理事長はやりわりとそれを制した。

「ちなみに銀さんは黒澤さんと同じクラスです。使い魔と主は共にいるものですからね。」

その言葉に喜ぶ銀と、再び目立つ事、『魔法使い』としての腕を勘違いされる事が嫌な慧は複雑そうな顔をし、美夜はそんな二人を見て笑いを堪えていた。

「ところで、美夜さん。それと銀さん。少し席をはずしていただいてよろしいですか？」

「え・・・何故でしょうか？」

「少し黒澤さんとお話したいのです。駄目でしょうか？」

その言葉に少し悩むが、無理を聞いてもらったこともあり、引き下がった。

「わかりました。それでは、外で待たせていただきます。行きましよう、銀。」

銀は不安そうに慧を見るが、慧は大丈夫と目で答え退室を促した。

二人が出て行き、中には慧と未来の二人きりとなった。

「まさか、あなたがこの学園に編入してくるとは・・・分かっていましたが、信じられない思いですよ、慧。」

「ああ、俺もあんたがここの理事長とは思わなかったよ、未来さん。」

二人は過去何度も会ったことがある。大概、『魔法協会』の邪魔を慧達の組織『断罪の牙』がしていた時にだが・・・

「夜城さん達は元気ですか？」

敵対関係にありながら、世間話をする二人。組織としては対立しているが、個人としてはそれほど嫌っていないようだ。まあ、他も一緒かと言えばそうはいかないが。

「ああ、相変わらずだと思っぞ？俺が抜けてからそんなに日は経っていないからな。」

意外な事にその言葉に未来は驚いて見せた。

「あなたが！？何故！？」

「いや、なんでそんなに驚くんだよ。未来視を使えるあんたなら、分かっていたことだろ？」

『七大法典』の一人『真の未来』が司る法典は真実、魔法は未来を視る事。『真実を見つめる者』とも呼ばれている。しかし、何でもかんでも視る事が出来る訳ではないのだが・・・

「私が視たのはあなたがこの学園に来ることだけでしたから。まさか、『断罪の牙』を辞めているとは思いませんでした。」

「まあ、色々あるんだよ。そっちこそ、魔力全然感じなかったから分からなかったよ。まさか、ここの理事長を『七大法典』の一人がやっているなんて、な。」

慧が言うのも無理はない。『七大法典』と言えば、『魔法協会』のトップ、それが、普段は一学園の理事長をしているなんて思わないだろう。

「あら、学園は人材の宝庫なのですよ？そこに目を付けるのは当たり前的事でしょう？それに、同じ様な事は他の六魔天でもやっているのですよ？」

その言葉に驚くと同時に納得する慧。大人より学生の方が『魔法使い』としての伸びがあり、また、まだ隠された力を持っているかもしれない原石の集まりとあって良いからである。

「まあ、それはいいさ。しかし、良く俺の編入を許したな？銀の件も・・・」

「ふふ、簡単な話です。あなたがこの学園に入ること、良くも悪くも皆、刺激されると思いました。ですから、他の『七大法典』や大アルカナ達を抑えてまであなたの編入を許したのですよ？」

「いや、俺は好き好んで騒ぎを起こそうと思わないぞ？」

そんな面倒事はゴメンだという慧に対し、未来は告げる。その『

未来』を……

「あなたは、美夜さんと関わった。その時点で、未来は決まったよ
うなものです。なにより、もうあなたは、美夜さんとの関わりを絶
つという選択肢はないでしょう?」

「……やっぱり、あいつが元凶か……」

「ふふ、楽しみにしていますよ? 慧。あなたと美夜さんが起こす騒
動を……」

「はいはい。だけど、覚えとけよ。未だ来ていないから未来なんだ。
どんな未来を視たか知らないが、俺にそれが当てはまるとは思っ
たよ?」

そう言い放ち、慧は理事長室から出て行った。

その背中を見送りながら、未来は慧に聞こえないことを承知で言
う。

「ええ、私もそれを望んでいます。美夜を任せましたよ、慧。」

一体、未来はどんな『未来』を視たというのか、それを知るのは
未来以外、いないのであった。

「ねえ、慧、理事長と何を話していたの?」

話しを終え、三人で帰っているところだ。

「別に・・・ただ、美夜が騒動を起こすから頑張れと言われた。」

大分違うが、根本的な所は間違っていない。

「ああ・・・」

「ちょっと！何よ、それ！銀も、何を納得した様な顔をしているの！？」

「だって・・・」

「ですよね？」

視線で会話し、頷くふたり。そんな主従に美夜は

「そんな目で私を見るな！」

少し涙目で叫んでいた。

第五話 入学式

今日は4月7日、入学式。

天城ヶ丘学園はエスカレーター式のため、中等部から高等部へ問題なく上がれる。が、それだと顔ぶれに新鮮味が足りない上に、刺激も少なくいため、『魔法使い』としての成長も滞る。魔法には新たな視点も必要だからだ。

そのため、この学園は高等部からさらに外部からの生徒を募集している。

だから、この再会は必然なのだろう・・・

「なあ、美夜、俺も一応新入生だぞ？何故、他の新入生の案内をしなけりゃならない。」

慧は今、生徒会の仕事の手伝いで新入生の案内をしている。本人も今日から高等部の一年、つまり新入生なのにもかかわらずだ。

「仕方ないでしょ？人手が足りないんだから。一応、風紀委員にも手伝って貰っているけど、彼等はあまり使えないのよ。私は生徒会長で、彼等は風紀委員だからね。命令系統が違うから。」

美夜が風紀委員長に頼み、人手を確保した訳だが、生徒会と風紀委員は仲があまり良くない。よって、必要最低限しか働いてくれないのだ。ここに風紀委員長か副委員長がいれば話は別らしいが、彼

等は彼等で別件があり、手が離せないためここにはいない。

「主、頑張りましょう!」

慧を励ます銀。彼女も慧と同じはずだが、楽しそうだ。こういった事自体、新鮮なのだろう。尻尾を振り、耳をピコピコ動かしている。

そんな銀を見た周囲の反応は

「きゃ〜可愛い!!」

「犬耳に尻尾・・・だと!こんなことが・・・現実に!」

など、概ね好印象みたいだ。

「ほら!銀も頑張っているんだし、もう少しよ。入学式には間に合う様にしてあげるから。私も挨拶があるしね。」

銀や美夜に言われ、仕方が無いと一つ溜息を吐いたあと、再び案内を開始しようとしたところ声を掛けられた。

「すみませ〜ん。講堂にはどうやって行けばいいんですか?」

その声に「あれ?どこかで聞いたことがあるような?」と思いはしたが、頭の隅に追いやり

「はい、講堂にはこのまま、まっすぐ進んでいただくと、案内の矢印がございしますので・・・」

慧は本日何度目になるか分からない台詞を言いながら、声の方へ振り返ると

「え……慧……？」

「……あれ？かんな緩奈じゃないか、なんだ、ここに進学したのか。」

平均より低い身長、桜色の髪をツインテールにしている、可愛いと十分に言える女の子、中学の頃のクラスメイトで数少ない友人の一人、せんかい仙海 かんな緩奈であった。

「え、うん。そうだけど……」

緩奈は久しぶりに会う慧に戸惑った。いきなり転校し、連絡もつかず、この学園にいることしか分からなかった。元々この学園を受験することは決めていたため、慧がこの学園にいることを知った緩奈は更に勉強に時間を費やした。

そして、念願の合格を勝ち取り、慧に会ったらなんて言うてやるうか考えていた訳だが、久々に会ったというのに、当の慧は普通に言葉を投げかけてくる。どう反応を返せばいいか分からなくなる緩奈だった。

「ん？どうした？緩奈。遅れるぞ？」

不思議そうに問う慧に、これまでの苦悩が何だったのか……落ち込むと同時にイライラが募って来た緩奈は爆発した。

「ふざけないでよ！いきなり転校したと思ったら、連絡着かないし！私がどれだけ心配したか……ヒック」

しまいには泣き出されてしまい、慌てる慧。どうすればと、オロオロしていると再び、久々に聞く声が聞こえてきた。

「おやおや、早速女性を泣かせているのかい？慧。ククツ、相変わらずだな。」

そんな人聞きの悪いことを言いながら二人に近づいてくる一人の男子生徒。少し長めの黒い髪、整った顔立ち、喋らなければもてるであろうと周囲に評価される人物、葛城かつらぎ 真樹まさきがそこにいた。

「おい、真樹、人聞きの悪いことを言うな。それじゃ、俺がいつも女を泣かせているみたいだろ？」

「おや？違ったかい？」

その言葉に不機嫌そうな顔をする慧。

「もてた事のない俺にその台詞・・・ケンカ売っているのか？」

「ククツ・・・すまん。すまん。久々に会ったものだからつい・・・な。」

そう言って悪びれもせず誤る真樹にしょうがないといった風に溜息を吐く。

「はあ、相変わらずだな。それと、ほら、いい加減泣きやめ、緩奈。」

そう言いながら、緩奈の頭を優しく撫でる慧。

「グスツ・・・なんで連絡くれなかったのよ？」

涙目で問う緩奈に、慧は困った顔になった。

「そ、それは・・・」

「ふっ、大方、後で連絡すればいいだろうと思っている内に忘れたのだろう。まったく、友達がいない奴だ。」

言い淀む慧の代わりに、その心情を読んだ様に真樹が答えた。

「・・・本当なの？」

「い、いや・・・まあ、確かに真樹の言う通りなんだが・・・、本当にすまん。色々あって、すっかり連絡を入れるのを忘れていた。」

目が座り始めた緩奈に慌てて謝る慧。緩奈を本気で怒らせると大変な事は身をもって知っている慧は、なんとか宥めようと必死だ。

「・・・なら、今度、買い物付き合っつてよ。もちろん慧のおごりで。」

「う・・・わ、わかった。」

少し悩んだ慧だが、それ位で済むなら安いものと、了承することにした。

「へへへ、約束よ？」

「ああ、わかったよ。それより、そろそろ講堂に行ったらどうだ？入学式に間に合わないぞ？」

そろそろ、講堂に入っていないと落ち着く時間もないだろう。

「あ、そうだった！って、慧は？」

「ああ、俺一応、生徒会のメンバーにカウントされていてな、だからこうして案内しているんだ。もう少ししたら俺も行くよ。」

その言葉に、緩奈だけでなく、真樹も驚いた。

「え？慧が生徒会？はははっ！似合わない！」

「慧よ、お前、公僕になり下がったというのか！」

しかし、反応は違う。緩奈は笑い、真樹は憤った。中学の頃、よく学校をサボッており、たまに来たと思えば、真樹とバカやっていたため、この反応は仕方が無い。

「あーもう、細かい話は後でするから。それより、さっさと行け。」

面倒になった慧は話を打ち切る事にした。

「ははは・・・うん。分かった。でも、ちゃんと話を聞かせてよ？」

「うむ、何故お前が公僕の手先と化したのか俺も気になる。ここは引くが、話は聞かせろ。」

なんだかんだ言っていたが、二人とも慧の事を心配していたのだ

るう。また、何の理由もなしに、連絡を入れなかった訳ではないことは二人とも理解している。かといって、それで納得できるかと言えはそうはいかない。その結果が、緩奈の涙なのだろう。

「ああ、分かったよ。あ、それと、これからもよろしくな。緩奈、真樹。」

その言葉に、一瞬「キョトン」とする二人だったが

「ああ、よろしく。慧。」

慧は久々に再会した友人と挨拶をすませ別れた。するとその様子を傍から見ていた美夜に声を掛けられた。

「あら、慧。今の、彼女？随分親しそうだったわね？」

「ん？いや、前の学校の友人だよ。って・・・なんで少し不機嫌なんだ？」

少し機嫌が悪い美夜だが、その理由に思い当たらない慧は聞いてみるが、返答は得られなかった。

「なら、今の男は慧の彼？随分と親しそうだったけど？」

「俺は、ホモじゃない！」

そして、妙な事を口走り始めた。

美夜としては、自分の知らない人が自分の慧ものに近づくのが面白くない訳だが、それが女心かどうかは分からない。あくまで独占欲で

あり、男として慧を見ているかは別な話だ。もちろん、本当に慧がホモだとは思っていない。

慧は慧で、美夜が不機嫌なのは分かるし、自分が原因という事も分かるが、何が不機嫌にさせたのかまでは分からないのであった。

「主、緩奈や真樹も同じ学校なのですね？」

そんな二人の間に入り、慧に話かける銀。美夜とは対象的に久々に会う知り合いに喜んでいいる。

「ああ、そうだな。また、一緒に遊べるな。」

とりあえず、美夜の事は置いておいて、銀を二人にどうやって説明しようか、悩む慧であった。

また、そんな風に喜ぶ銀を見て、美夜は緩奈と真樹への警戒を少し下げはしたが、慧が緩奈とデートの約束をしていたのは聞いていたので（慧はデートのつもりはない）、やはり少し不機嫌なままだった。

『続きまして、理事長からの挨拶です。』

あれから、新入生の案内を続けていたが、良い時間となったので、後を風紀委員の先輩方に任せ、慧と銀は入学式に参加している。美夜も先ほど挨拶を終え、先生方に混ざって待機している。側には夢の姿も見える。慧達が案内をしている際、講堂に着いた新入生を纏めるのが彼女の仕事だった。

『新入生の皆さん、入学おめでとうございます。私は当学園の理事長を務めさせていただいております外神^{とがみ}未来^{みらい}と言います。みなさんも知っての通り天城ヶ丘学園は・・・』

「おいおい、『七大法典』が普通に出てきて挨拶しているよ、いいのか？」

慧は思わずつぶやいていた。

慧が言うことはもつともで、『七大法典』と言えば、世界でもトップクラスの重要人物であり、命だつて平気で狙われるような存在だ。間違つても、こんな堂々と、それも護衛もなしに全校生徒の前に出てくるようなことはない・・・と思っていたのだが違ったようだ。

夢や董も理事長のことは知っていたことから察することは出来たはずだが、片や生徒会副会長、片や、花咲家の息女なため、知っていて当たり前と慧は思っていたが、そうではなく、全校生徒に周知の事実だつたらしい。

「はあ、まあ、あの人らしいか・・・」

「主？どうかしましたか？」

「いや、なに、未来さんらしいなあとね。」

「?????」

銀はよく分かっているようだが、この「外神 未来」という人

物を知っているものからすれば確かに「らしい」行動である。『真の未来』は基本隠れることをしない。曰く、

「私が隠れたせいで他の誰かが傷つくのは不本意ですから。それに、私の目をもつてすれば、奇襲や暗殺など無意味ですから。」

とのことだ。ちなみに、他の『七大法典』で堂々と公共の場に立つものはいない。未来の様に『未来』を見通し、対策を立てるようなことが出来ないからだ。

『・・・それでは皆さんがこの学園で、良き思い出ができるよう祈っています。』

慧が考え事をしている内に未来の挨拶が終わったようだ。

それから、いくつかの工程を経て入学式は終わり、新入生は各々のクラスに行くことになる。

「ねえ、慧。慧はこのクラス？」

教室の向かう中、緩奈が話かけてきた。側には真樹もいる。

「ん？俺はFクラスだ。銀もな。」

この学園では入学の際の成績でクラス訳される。A〜Fの6クラスとSクラスの合計7クラスだ。

基準は魔力だけでなく、知識や技術等も合わせた総合的な力を持つて決められる。よって、魔力だけ高くても、他が駄目ならFクラスとなることもある。なお、内部生は中等部最後のテストの成績で

分けられる。

また、Sクラスは特別なクラスで、特殊な属性を持つものや特別な血筋の生徒など学園でVIPと定めた生徒はそこに含まれる。なお、美夜や葵などは自ら辞退している。

「やった！同じクラスだね！」

「ふむ、俺も同じだな。よろしく頼む。」

「それは、よろこんで良いのでしょうか？」

銀の言う事も最もで、Fクラスはつまり、最低ランクのクラスとということだからだ。

所で、何故この4人がFクラスなのか・・・まず、真樹。魔力、知識、技術、どれをとっても高い成績で、Aクラスで確定かと思われたが、面接の際に見られた、精神面が最低だった。しかし、これだけの力を持つものを逃すのは惜しいとして、最低のFランクとされた。

次に、緩奈。彼女は魔力がずば抜けて高く、属性も『植物』と『土』と『水』そして『光』の合成で、とても珍しいものだった。しかし、制御と知識が底辺だったため、Fクラスとなった。

最後に慧。彼は、面倒臭いと言う理由で、どの教科のテストも前半部分しか解けなかった。そして、魔力検査では業と低く見せた。理由は面倒臭いからだ。結果、Fクラス。慧の場合、自業自得だ。その事を美夜と夢に話した時、美夜は爆笑し、夢は生徒会のメンバーがこれでいいのかと頭を抱えた。

銀は慧と同じクラスにしてもらった様子だったので、同じFクラスだ。

「ところで、慧。その子はだ〜れ？」

「ん？この子か？この子は・・・って、緩奈さん？なにをそんなに怒っていらっしやるのでしょうか？」

緩奈の質問に答えようと緩奈の方を向くと、目が据わっており、銀まで震えて、慧の後ろに隠れている。銀も元は動物なため、本能で恐怖を感じ取ったのだらう。慧も同じく震えている。

「お、お、落ち着いて話そう。この子は、お前らも知っている『銀』だよ？」

「銀ちゃん？銀ちゃんは狼よ？人じゃないわ。誤魔化そうとするなんて・・・なにかやましいことがあるのね？」

緩奈の魔力が上がり、植物達が反応し始めた。これは不味い・・・以前怒らせた時は、公園一つが植物でとんでもない事になったのである。具体的には変な花が咲き、気の幹ほどもある蔦があちこちに生え、樹は大木と化し、元に戻るまで魔法を使っても半年はかかったのであった。

「クククツ 早速修羅場とは、流石、慧。期待を裏切らない男だな。」

「お前は何を期待していたんだ！」

真樹の言葉に思わず突っ込みを返す慧であったが

「へ〜そんな余裕があるのね？」

「ヒッ！」

緩奈の地獄の底から聞こえるような声を聞き、黙ってしまつた。

慧はもう駄目かと思つたその時

「貴様達、何をやっている！」

そんな声と共に現れたのは風紀委員の制服に身を包んだ生徒達だつた。どうやらその中心にいる男がさっきの言葉を発したらしい。その隣には、花咲 葵と、癖のある金髪に紅と蒼のオッドアイの少女が控えていた。

この学園の制服は、黒を基本としているが、生徒会や風紀委員、魔法部の生徒達はそれぞれ独自の制服を着ている。生徒会は黒を基調に赤い装飾が施された制服。風紀委員は白を基調に青い装飾が施されている。最後に、魔法部は、普通の制服に、魔法陣が描かれている。

「魔力の活性化が見られたと思つて来てみれば痴話喧嘩か？・・・今回は見逃してやるからさっさと教室に行くがよい。」

そう言つて、男が踵を返し、他の風紀委員を引き連れ何処かへ去つていった。葵は慧を一睨みし去つていき、オッドアイの少女は興味深気に慧達を見ていたが、中心にいた男に声を掛けられ、集団を追いかけた行つた。

「・・・なんだったの、今の？」

その出来ごとで慧への怒りが夢散したのか、その集団の背を黙って見送っていた。

「ふむ、さつきの男・・・あいつは神藤しんとう 零風れいふう紀委員の委員長だ。かなり強いらしく、生徒会長の神凧 美夜と互角の実力を持つ。

『魔法使い』のランクはS、六魔天に一目置かれており、危険度Sランクの依頼も数度こなした事があるらしい。」

「真樹、どこからそんな情報を仕入れてくるんだ？」

「企業秘密だが、俺の仕事を今後も手伝うというなら教えてやらん事もない。」

「じゃあ、やめておく。」

「そうか、残念だ。」

この葛城 真樹という男は色々なバイトをしている。それもヤバ気なやつばかり。慧が真樹と知り合ったのもそれが関係しているが、今は置いておく。そのバイトのせいか、慧も驚く程の情報を持っている。

ちなみに属性は『風』だ。

「って、それより慧！その子のことだけど・・・」

緩奈は思い出した様に慧に詰め寄るが、真樹に止められる。

「緩奈、急がないとHRが始まる。行きながら聞こうじゃないか。」

「うう・・・わかったわよ。慧、ちゃんと教えてよね？」

「ああ、わかっている。行きながら話すぞ。」

そして、教室に向かう途中、これまでであったことを簡単にだが説明した。銀のことも最初、半信半疑だったが、本当の姿を見て、納得した。なお、美夜と同居していることについては意図的に黙っていた。

銀を使い魔にした事を言った時の二人の反応は

「ククツ、流石慧。俺の見こんだ男だ。」

「ふん。まあ、慧なら、出来るでしょ。それより、あなたのお父さん。ボコツて良い？」

との事だ。慧はこの二人の前では何度か本気を見せた事があるため、特に疑問には思わなかったようだ。

そして、放課後、今日は入学式だけのため、教科書を渡され、今後の日程を伝えられ終えた。緩奈は親と食事の約束、真樹はバイトがあるとのことで、途中までは一緒だったが別れ、今は銀と帰宅している。

生徒会の仕事は今日は無だそうだ。美夜も先に帰っているとのこと。

「主、これから楽しくなりそうですね。」

「そうだな。あいつらが一緒に良かったよ。人間関係を一から築くのは面倒だしな。だが、あいつらが面倒事を持ってくるからな。」

「主なら、何があっても大丈夫ですよ。」

「はいはい。ありがとうございます、銀」

銀はこれからの事を楽しみに、慧は面倒事が減ったのか増えたのか複雑な表情で応えた。

そんなやりとりをしているともう、家の前だ。

「ただいま〜」「ただいま帰りました。」

二人は、自分達の住まいの扉を開けた。すると

パン！パン！

「「「天城ヶ丘学園 高等部への進学 and 入学おめでとう！」「」「」

美夜と夢、そして董が鳴らし終えたクラッカーを持って、祝いの言葉を投げかけてきた。

慧と銀は啞然としていたが

「「「ありがとうございます（ございます）！」「」

そして、入学パーティーが始まった。

余談ではあるが

「なあ、薫、確か薫も俺と同じで進学したよな？パーティーとかあったんじゃないか？」

慧の父親の娘達への態度と桔梗さんの性格からやるだろうと推測したため問いかけた。

「いいんです。あんなお姉ちゃん・・・お姉ちゃんの事よりお兄ちゃんの事が重要ですよ！」

と言われ、なんと返答していいか分からなかった。

どうやら、銀が薫に噛みついた時、薫が慧に何をしようとしたのか聞き、怒っているようだ。

慧としてはそれが嬉しいやら、家族の団欒を邪魔して悪いやらで、複雑な心境だった。

一方、花咲家

「あれ？お母さん。薫は？」

自分の進学祝いに薫がない事を疑問に思い薫は桔梗に問う。

「薫なら、慧君の所にお祝いに行っているわよ？」

「何あの子、姉よりあんな奴の方が良いっていの？」

怒る薫であつたが、それは失敗だつた。

「あんな奴？ねえ、薫？あんな奴つて誰の事？」

「ヒィー！ごめんなさいー！ごめんなさいー！」

自分の祝い事だと言つのに、殺伐とした雰囲気のため全然嬉しくない薫であつた。

第六話 依頼

「はあ、はあ、はあ……」

暗い路地を一人の少女が必死に走っている。その後ろを統一された制服を来た者達が追って来ている。その顔は確認できず、男か女かも不明だ。

「なんで……なんでわたしが……」

少女は思う。今日は、入学式も終わり友人とお祝いしようと、街中で遊んでいた。暗くなり、明日から授業という事もあり、早めに解散して各自帰宅する事となった。

学校に通い、友達とテレビの事や恋愛などの話で盛り上がり、退屈な授業を過ごし、部活動で汗をかき、帰ると母親が晩御飯を作って待っている。

そんな日常が続くと、それまでは思っていた。

（何故こんな事に、こんな事に会う様な生活はしていないし、そんなものを望んでなんかいない！助けて！助けて！戻して！戻して！戻して！戻して！）

そんな少女の前に一人の男が現れた。スーツに身を包んだ金髪の長身の男だ。

「た、助けてください！」

少女は目の前の男に助けを求めた。もう、走る体力も残っていない

い。このままでは追いつかれてしまう。藁にもすがる思いで男に詰め寄るが・・・

「すまん。」

「・・・え？」

ドサツ・・・

少女が今日、最後に聞いた言葉は謝罪の言葉だった。

「さっさと連れて行け・・・」

「「「は、ハイ！」」」

男は少女を気絶させ、追いかけてきた制服達に少女を渡した。

「まったく・・・依頼とはいえ、こんな仕事をしなければならないとは、な。俺も落ちぶれたものだ。」

男はそう呟く。先ほどの制服達の態度から、かなりの実力者と窺えるが、制服達とは同じ組織ではないらしい。

「今の俺を見たら、貴様は笑うかな・・・晟・・・」

その呟きは闇へと吞まれ、消えて行った。

入学式の次の日、慧と美夜に銀が加わった三人は登校の最中だ。

「ふふ、慧も高等部か・・・楽しみね。」

何が嬉しいのか、楽しそうに笑う美夜。それを見た慧は

「別に校舎が同じだけだろ？学年は違うんだから、別にたいしたことは無いだろ？」

と、不思議そうに問う。

「あ、そっか・・・慧と銀は高等部のカリキュラムを知らないのね？ふふ、楽しみにしていなさい？」

「「????」」

不思議そうに首を傾げる主従二人に笑いながら直ぐに分かるわ、と、はぐらかす美夜。

「そんな事より、慧、銀。今日のお昼、何か用事ある？」

「いや、俺はないが・・・」

視線で銀はどうかと問う慧。

「主になら私にも無いですよ？」

いつも一緒だと言う銀。

困った顔をする慧を見て笑いながら美夜が続ける。

「なら、お昼は一緒に取りましょっ？夢も誘っから。」

「わかった。用事はいれないようにしておく。」

「ええ、お願いね。」

そして、いつもは別れる校門までつくが、今日からは一緒に校舎のため、ここで別れる必要はない。代わりに、ここで会う者達がいるた。

「黒澤先輩！おはようございます！」

すぐに別れるというのにわざわざ待っていた董と

「慧！おはよう！」

後ろから合流してくる緩奈。

「ふむ、朝からハーレムか、流石慧だ。」

どこからともなく現れた真樹。

一段と賑やかになってしまった。そして、殺伐とした空気になる。

「黒澤先輩……この方は？」

と、緩奈を指差す董。

「慧、この後輩は誰？それと、何で神凧先輩と一緒に登校しているの？」

そして、慧に親しく声をかける董と、美夜と暮らしていることを昨日話していなかったため（業と言わなかった。言ったらどうなっていたかわからないため）何故、一緒に登校してくるかについて不思議そうに聞いて来る緩奈。

理由を知っている美夜は笑いを堪え、どうやってかは知らないが真樹も事情やプロフィールは知っているようで、笑っている。銀は殺伐とした雰囲気からあたふたしている。

校門前で立ち止まる6人。登校してくる生徒達は視線を送ってくるが、その殺伐とした空気を感じ取り、無視して先を急いでいる。

「あなた達はそこで何をしているの？」

すると、風紀委員の制服に身を包んだ葵に声を掛けられた。その周囲には同じ制服に身を包んだ生徒達が10人程いる。違うところと言えば、葵の腕には副委員長の腕章がある事だ。傍らには薫もいる。

皆、どこかピリピリした雰囲気醸し出している。

「お、お姉ちゃん！こんな朝からどうしたの？」

いきなりの姉の出現に、慧と一緒にいる所を見られ、慌てる董。慧が中等部の頃一緒にお昼を食べていた事や進学のお祝いをしたことなど、慧と親しくしている事を知られているのは分かっていたが、実際にその場を見られるのとは訳が違う。

「董、いつまでもここにいたら遅刻するわよ？早くいきなさい。後、

あなた達も、いつまでもここでたむろされると登校してくる生徒の邪魔だわ。早く行きなさい。」

葵の意見はもつともで、特に反論する理由もないため、教室へ向かおうとする慧達であったが美夜は違った。

「あら、長女、こんな朝から怒っていると直ぐに老けるわよ?」

「なっ!ふ、フン!怒らせるあなた達が悪いんじゃない。それと、生徒会長でありながら、こんな時間に登校して来るなんて、自覚が足りないんじゃない?」

「あら、違っわよ。内のメンバーは優秀なのばかりだから、わざわざ朝早くに来て処理する仕事がないだけよ?」

「何が優秀よ、源藤さんばかりに押し付けているだけじゃない!」

相変わらず仲が悪い二人は言い合いを始めた。風紀委員達も溜息をついて傍観に徹している。どうやらいつものことらしい。

葵は憎らしげにしているが、美夜は楽しんでいる。どうやら、葵イジリは美夜の趣味と化しているらしい。趣味が悪いとしか言いようが無い。

そんな二人をこの際置いて行こうと考えていた慧だが、そこに一人の生徒が割ってはいってきた。

「まあまあ、葵ちゃん。落ち着いて。美夜ちゃんもあまり葵ちゃんをからかわないで上げてよ。葵ちゃんはなんだかんだ言っても素直な性格なんだから。」

その生徒は癖っ毛のある金髪、赤と青のオッドアイの生徒で、葵と同じく風紀委員の制服に身を包み、副委員長長の腕章を付けている。

「ちよつと、光ひかり！何よ、素直な性格つて！」

「え〜！だって葵ちゃん、美夜ちゃんにからかわれているのに気がついてないじゃない。」

「からかわれて・・・つて、神凧さん！本当なの！？」

そう聞かれ笑いを応える美夜に、更に憤慨する葵。

それを傍から見ている慧達は、誰？という顔をしている。

「えつと、ですね。先輩。あの人は聖道せいどう 光さんひかりと言って、風紀委員の副委員長で、高等部の2年生です。『光』属性ですが、魔力の高さと聖道家の人間という事もあって、クラスはSクラスです。」

その中で唯一、光と面識がある董が説明してくれた。

「へ〜。聖道家ね・・・いいとこのお嬢さんなんだ。彼女。」

聖道家とは『聖王騎士団』に所属する『魔法使い』の家系で、名家でもある。家系を遡ると、イギリス人の血も入っているようで、たまに、その血が濃く出るものが現れるという。その者の多くが『聖』の属性に目覚めていることから、先祖のイギリス人が『聖』の属性を備えていたのではないかという説もある。そして、彼女にもその可能性があるのだらう。

なお、聖道家は良くイギリス人の血を家系に入れているが、『聖』属性を持つものを産む可能性を増やすためと推測する。

ここで出てきた属性についてだが、まず『光』。これはその名の通り、光を生み出したり、放出したりする事が出来る魔法だ。『闇』とは対をなす属性であり、一般的に、『闇』の弱点は光と言われている。

次に『聖』属性だが、これは『光』の特殊なものだ。その効果は、『呪』や『腐食』などの属性を完全に払う事ができる。ちなみに通常の『光』では不可能である。

「え〜と・・・先輩？あの人は『彼女』じゃないですよ？」

「へ？どういう意味だ？」

「つまり、『彼女』ではなく『彼』が正解ということだ。」

慧の質問に答えたのは董ではなく真樹だった。

「「え・・・え〜！！」「」

その言葉に驚く慧と緩奈。

それは無理のないことだ。身長は150？位、綺麗な顔立ち、そしてなにより女子の制服を着ている。どこからどう見ても女の子なのだ。

「え？あれで男なの！？」

「ははは、良く言われるよ。でも一応、男の子だよ?」

美夜と葵の争いの仲裁に入っていたはずだが、こちらの会話が耳に入ったのか、緩奈の言葉に返答してきた。緩奈は不味いこと言っ
てしまったかと気まずそうな顔をしているが、言われた本人は気に
していないようだ。

「なんでこんな格好しているのかって顔だね?ふふ、簡単だよ。好
きだからしているんだ。」

「良いのか?校則とかで駄目なんじゃないのか?」

「ん?別にそんな事ないよ?校則ちゃんと読んだ?」

光の返答に、慧は真樹に向かい本当かと問いかける。

「ふむ。本当だな。校則には、『天城ヶ丘学園の生徒はこの学園の
敷地にいる際はこの学園の制服を身につける事』としか書いていな
いな。よって、校則には抵触しない。」

「へ〜、君、良く校則を覚えているね。」

「ふつ、この程度当然だ。」

真樹が校則を覚えていた事が意外だったのか驚く光と当たり前だ
と胸を張る真樹。

「ところで、君が慧君だね?」

「ああ、そうだが?」

「ふうん。君が・・・」

そう言っつて慧の周りを回りながら、慧を観察する光。そして、一頻り観察を終えると

「うん。気に入ったよ。慧君。」

と言っつて、慧の頬にキスしてきた。

その行動に慧はおろか、言い争いをしていた美夜や葵、傍観していた緩奈や董、薫、そしてあの真樹までもが、啞然として固まってしまった。

当の光はテへつと舌を出し

「じゃあ、またね？慧君。それと、皆このままだと遅刻しちゃうよ？」

そう言っつて、去っていった。そしてその場にいたものは皆、予鈴が鳴るまでその場に固まったままだった。

ちなみに風紀委員はと言っつと

「あの男・・・我らが光ちゃんになんとうらやましいことを・・・」

「美夜様と同棲しているだけでなく・・・」

「許さん！黒澤 慧！」

一致団結していた。

「は……これだから内の男どもは」

薫はそんな委員を見て呆れ、深い溜息を一つ。

昼休み、慧は精神的にズタボロ、銀はもみくちやにされ疲れ果てていた。周囲からの視線と質問攻め、そして何より緩奈からの殺気。真樹は助け舟を出してくれず、銀は女子生徒にもみくちやにされていた。

慧がこんなに質問攻めに会ったのは朝の事もあるが、銀が慧の使い魔と自己紹介した事と聖道 光が慧にキスした事が一番大きい。慧はなんとか、自分はいした事がない。魔具に頼った。光先輩とは何でもないなど、言い分けを並べていた。

銀は慧が疲れているのを心配そうに見つめたり、撫でられ喜んでいたりする姿が女子にグツと来たのか、もみくちやにされた。男子生徒が触らなかつたのは不幸中の幸い。触っていたら、慧がボコルか、銀に氷漬けにされていただろう。

慧意外の男に触られるのを極端に嫌う銀であった。

例外は、夜城と白河、後は真樹位だろう。

「さあ、慧。色々吐いて貰いましょうか？」

「黒澤先輩。覚悟はいいですか？」

そして、追い打ちをかけるように、緩奈と董に質問される。

董は緩奈や真樹もいるためか慧を『先輩』と呼ぶ。

「つーか、なんでお前からここにいるんだ？」

そう、今は昼休み、場所は屋上。慧は美夜と銀、夢とお昼を食べるためやってきた訳だが、何故か先客として、この三人までいたのだ。

「真樹から聞いた。」

「葛城先輩に教えて貰いました。」

二人は言いながら真樹を指差す。そこには両腕を腰に当て、高笑いする真樹がいた。

「ハツハツハツ〜！」

「真樹・・・後で殺す！」

慧は真樹を睨むが、目の前にいる二人が逃がしてくれないため、どうにも出来ないのであった。

そこに、傍観していた美夜が仲裁に入ってきた。流石に見るに見かねたのだろう。

「はいはい、そこまで。とりあえずお昼を食べながら話しましょう。」

「

「そうですね。美夜の言う通りです。私も仙海さんと葛城さんの事は知らないので紹介してくれると嬉しいですよ？」

夢からのお願いもあり、お昼を食べながら、共通の友人である慧が紹介する事になった。続けて、これまでであったことの詳細を話し、緩奈も慧が美夜と暮らしている事にとりあえず納得した。

董も緩奈が慧の中学のころからの友人として納得してくれた。

「さて、みんな納得してくれたところで、慧、銀。今日は放課後、生徒会室に集合ね？」

「ああ、わかった。」

「どうやら今日は生徒会の仕事があるらしく放課後の予定が決まった。」

「そっか、慧は生徒会に入ったのよね・・・ねえ、慧。今度の土曜日はあいているの？」

少し悩む素振りを見せ、ならばと、緩奈は慧に休みの予定を聞く。

「ん？土曜か？今の所は何もないがどうしたんだ？」

「忘れたの？買い物に付き合ってくれって言ったわよね？」

「ああ！そういえばそうだったな。わかった。空けておく。」

「うん！」

その会話を聞いていた女性陣と真樹は互いに頷き尾行を決意した。

「?????」

なお、銀は良く分かっていなかった。

「さて、全員集まったわね？」

「といつても、4人だけだけどな。」

放課後、美夜と夢、慧と銀の4人は生徒会室へ集まっていた。

「で？何か急ぎの仕事があるのか？」

入学式も終わり、仕事は無い訳ではないが、緊急のものはない。
役職や分担は事前に決めてある。

会長：神凧 美夜

副会長：源藤 夢

副会長：黒澤 慧

書記：黒澤 銀

会計：空席

庶務：空席

となっている。

「いいえ。理事長から話があったのよ。」

「理事長から？」

「ええ、最近『魔法使い』の資格を持った者や、その資質がある者が誘拐されている事件が発生しているの。知っている？」

「確かにニュースなどになってはいるが、今に始まった事ではないだろ？」

『魔法使い』やその資質のあるものが誘拐される事件はよくとは言わないが全くない訳ではない。研究材料や他国の戦力として誘拐され、売られる事がある。

「ええ、そうね。ただ、今回話題になっている誘拐事件はちょっと毛色が違うのよ。」

「どういふふうに違うのですか？」

銀の質問に美夜は続けて答える。

「今回狙われているのは、珍しい属性を持つものや名家の血統のものばかりなのよ。しかも、誘拐されたのに身代金も要求せず、かといって、どこかに売られる訳でもない。ただ衰弱した状態で発見されるのよ。」

普通、誘拐というリスクを負う以上何かしらの見返りを求めるはずである。身代金なり、身柄を裏の組織や他国に売って儲けたりなどだ。それがないのはかなり不自然である。

「だから今朝、風紀委員達がピリピリして、予定にない身周りをしていたのか。」

風紀委員は定期的に校内を見回るが基本放課後で、朝方は身だしなみのチェック位でしか見回ったりしないのである。一応、生徒会という事で事前に予定は教えられている。まあ、その後の変更などは教えられないことが多いが・・・

「ええ、そういうこと。情報ではまだこの街ではない様だけど、つい昨日は隣町で起きたらしいわ。私達への依頼は他の学校も含めた学生達の保護と誘拐犯の捕縛よ。私達も放課後見回る事になるから。」

「その前に質問が二つ。一つ、どうやって犯人達は被害者の属性を見破ったんだ？個人の属性は厳重に管理されているはずだろ？」

個人が持つ属性は『闇』のような忌み嫌われるものから、『無』のような合成属性もあり、差別されたり狙われたりするため、六魔天と国で個人の属性情報は特に厳重に管理されているはずなのだ。

「それについては理事長でも調べている最中らしいわ。」

「そうか、じゃあもう一つ、これは『魔法使い』の仕事という事での、六魔天からの依頼か？それともこの学園の生徒会への依頼か？」

『魔法使い』の仕事については以前述べた通りだが、この天城ヶ丘学園は敷地内とはいえ、魔法の制限がほとんどない学園の一つだ。そういう学園には『魔法使い』の育成ということはどういった仕事も入ってくる。その仕事の中心となるのが、生徒会、風紀委員そして魔法部だ。

この三つの組織で対応、場合によっては一般の生徒にも協力をあおいで良い事になっている。

慧が言いたいのは『魔法使い』の仕事としての場合と学園への仕事の場合では危険度が違うため、その確認だ。

「この学園への依頼よ。一応、一般生徒への協力をあおげはするけど、今回は風紀委員の委員長と話合つて、一般生徒への協力はなしよ。不安を煽るし、ちよつときな臭いのよね。後、魔法部は休部中にまたやらかして、休学中だから、充てにならないから。」

現在の魔法部部員はどうにも魔法に対し貪欲らしく、たびたび違法な魔法の実験や禁呪レベルの儀式を行っているらしく、学園でも手を焼いているらしい。しかし、面倒事は増やすが、それを不問にする位の成果は上げているらしい。

「わかった。組分けはどうする？美夜と夢さん。俺と銀が妥当だが、今回は珍しい属性や血筋で狙われているんだよね？」

慧は『闇』で、銀は普通にしていれば『氷』だけで特に狙われな
いが、美夜は『無』、夢は『幻』と珍しい属性なため狙われる心配
がでてくる。

「そうね・・・私と銀、慧と夢といったところかしら？」

「「「わかった（わかりました）。「「「

「「「ついで夢さんと話すのは初めてですよね？」

現在、慧と夢は街の中を二人で見回っている。

「ええ、そうですね。大体、美夜か銀さんがあなたの側にいますからね。」

いつも美夜か銀が必ず慧の側にいるため夢と二人きりで話すことはこれまで無かった。

「そんなにいますかね？」

夢の言葉に首を傾げる慧。それを見てクスクスと笑う夢。

「ええ、そうですね。あなたを拾った次の日の美夜は……っと、これは秘密でした。」

「なんですかそれは、俺は捨て犬ですか？」

「あら、状況的には会っていると思いますよ？」

夢が言いたかった事はないが、慧としてはその捨て犬発言の方が重要だった。

そんな話をしながら、身周りを続けるが、特になにもない。ナンパやケンカもあったが、慧が瞬殺した。

「黒澤君、美夜が言った通り凄いですね。」

慧の力を見た夢はそんな感想を告げる。

「いや、これくらいは普通じゃないですか？」

慧はこれが普通と答えるが、実際は違う。夢の目から見てもその動きは清廉されていた。つまり、慧の普通の基準が違つのだ。

慧の周りで親しい同年代は敵方以外では真樹位だった。その結果、真樹の身体能力を基準に置いているため、ナンパやケンカを止めた時の動きを普通と捉えてしまっているのだ。

といつても、それは身体能力や格闘技の話であり、魔法については基準がどんなものか正確に把握している。

「そんなことはないと思いますけど・・・」

夢はこの慧と言う少年は何者なのか、考える。美夜のお気に入りで、悪人ではないことは確かだ。だが、使い魔をもち、今見せた体術は間違いなく夢の周りの人間でもトップクラスだろう。それでありながら、『魔法使い』のランクはFで、本人も魔法はたいしたことではないと言う。

少なくとも、何かを隠している事は確かだ。信用は出来るが、信頼は出来ない。それが夢の慧に対する評価だ。

「・・・そろそろ、時間ですね。」

「え、ええ・・・そうですね。美夜達に連絡しましょうか。」

街を見回つて大分経つが、何事もなく、事前に打ち合わせていた時間になった。

美夜と銀に連絡を取ると、あちらも異常はなかったとのことで、一度合流し解散することになった。

今日は何事も無く終了した。

第七話 気付かぬ内に進む事件

見周りを始め3日が経つが、これといって収穫は無かった。

誘拐事件もそれほど頻発に起きている訳ではないので学園側でもあまり大事にはしないようだ。生徒達は普通に学園生活を過ごしている。

しかし、風紀委員や生徒会の面々は警戒を緩めず放課後の見周りを続けている。それは一重に『七大法典』の言葉の重さ故だろう。これが誰とも知れない『魔法使い』であれば、そこまで警戒は抱かなかったのかもしれない。

「ねえ、慧。今日も生徒会の仕事なの？」

放課後、慧が帰り仕度をしていると緩奈に声を掛けられた。どうやら、3人・・・銀も含めて4人揃って遊べないのが不満らしい。

「悪いな、緩奈。ちょっと立混んでいて無理なんだ。」

「むっ真樹も、バイトだって言っただけで相手してくんないし・・・」

拗ねる緩奈。その表情は寂しそうである。

緩奈は社交的と思われがちだ。実際、入学して僅か4日で、クラスメイトと楽しそうに話している。逆に、慧は休み時間は昼寝をするか、銀や真樹、緩奈と話をする位だ。真樹は真樹で、いつの間にか何処かへ消え、気付いたら戻ってきているといった具合で、少な

くとも中等部からの付き合いである3人の中では一番社交的ではある。

反面、緩奈が本当に心を開いているのは慧と真樹、銀だけである。クラスメイトと友人の一線を確かに引いているのである。だからこそ、放課後、クラスメイトに誘われても遊ぶとといったことはまずない。慧や真樹に用事がある時は素直に帰るのであった。

そんな緩奈の頭を撫でる慧。

「悪いな。でも明日は大丈夫だから。待ち合わせの時間は後でメールくれるか？」

「あ・・・う、うん！明日、ちゃんと遅れないできてよね！」

「ああ、分かっている。気を付けて帰れよ？」

「もう！子供じゃないんだから！じゃあね、慧！」

元気に手を振りながら帰っていく姿は本当に子供の様だよなと思わず思った慧であった。

「さて、銀。今日も見周り頑張りますか！」

「はい！」

珍しく気合いを入れて生徒会室へと向かって行く慧。

そんな主を銀は嬉しそうに見ているのであった。

「……ただいま……」

疲れ切った声と共に慧、美夜、銀が帰宅する。

結局今日も何も無く終わった。事件が起こらない事は喜ばしいが、依頼の中に誘拐犯の捕縛が含まれているため、自分達、若しくは六魔天や警察、フリーの『魔法使い』が捕まえていない限り、続くのである。

事件の取っ掛かりもないため、精神的疲労がかさむのは仕方がないだろう。

慧に関して言えば、それよりも夢と放課後行動する事により学園内で二人は付き合っているのでは？という噂が広まり、周囲からの殺気などによる疲労がほとんどだが……

「とりあえず、私と銀はお風呂に入ってくるわ。」

「わかった。俺は夕御飯の準備をしておく。」

ここ三日の帰宅してからのパターンは美夜と銀が最初にお風呂、その間に慧が夕御飯の準備をし、美夜達が上がったら交替。そして就寝となる。

共同生活も早3ヶ月。互いに慣れたものだ。

そして食後、3人はお茶をすすっている。今日は日本茶だ。

明日が休みと言う事もあり遅くまで遊び歩く生徒が今日は多かつ

たため、必然的に生徒会メンバーも遅くまで見回る事となった。

3人とも疲れてはいるが、食後のお茶は日課となっている。誰が言った訳でもないが、集まってお茶をすすっているのであった。

「それで、慧。明日の事なんだけど・・・見周りまでどうする？」

今回の依頼はあくまで学園への依頼であるため、休日の見周りに強制はない。が、慧達は休日も見周りをする事にしていった。

誘拐は人の目が少なくなる夕方から夜間に行われる事がほとんどなため、慧達の行動も夕方からになる。美夜は慧にそれまでの行動を確認するために話かけた。

「ああ、俺は緩奈と約束があるから、見周りまでは緩奈の買い物に付き合うよ。集合には遅れない様にするから。」

「そう・・・分かったわ。それと、分かっていると思うけど、気を付けなさいね？彼女も珍しい属性、『植物』の持ち主だからね？」

美夜は念のためと慧に釘を刺す。

「ああ、わかっている。ちゃんと送っていくから大丈夫だ。美夜も気を付けるよ？」

慧も心得ていると返す。また、美夜も『無』属性の持ち主のため、気を付けるよう促す。いくら、Sランクの『魔法使い』と言え、まだ学生の身。なにより女の子だ。心配するのは当たり前だ。

「ふふ、ありがとう。大丈夫よ。明日は銀と一日いるから。」

そう言って銀を抱きしめる美夜。

慧は視線でそうなのか？と銀に問う。

「はい！明日は美夜と一緒に主を尾フゴフゴ・・・」

余計な事を喋ろうとした銀の口を強引に塞ぐ美夜。

「ははは・・・、そろそろ寝るわ。銀、今日は私と寝るわよ？お休み、慧。」

「あ、ああ。お休み、美夜、銀。」

銀を抱えて部屋へ行く美夜を啞然と見送る慧であった。

そこは、どこかの実験室・・・

「ゴブ！ゴボツ！ゴボツ！」

緑色の液体の入った大人一人入る位の大きさの試験管の様な容器の中には少年が一人入っており、もがき苦しんでいる。

「クソ！こいつも駄目か・・・いつになったら、我らが神の依代は見つかるのか・・・」

白衣の男はそう言いながら、目の前の装置をいじる。すると、試験管の中にいた少年が吐き出され、地面でもがいている。

「さっさと連れて行け！後、次の被験者を連れてこい！」

「はっ！」

白衣の男は制服達にそう命ずると、疲れたのか、近くの椅子に座りぐったりとしている。

「今回もはずれか？博士。」

その男に声をかける金髪の男。博士と呼ばれた男は金髪の男を一瞥すると、疲れた声で返答する。

「ああ、フリードか・・・そうだよ。今回もはずれだ。魔力、血筋、属性、これまで様々な者を試し、ある程度の関係性は把握した。だが、未だ適合者は現れない。六魔天の縄張りにまで侵入するという危険を冒してまで続けているというのに、成果はゼロだ。」

「・・・・・・・・」

金髪の男・・・フリードは黙って博士の語りを聞く。

「だけど、諦めないよ。かつて『魔法使い』どもが否定した神こそが、人々に本当の祝福をもたらす神なのだ。我らの神が蘇れば、今の世界の不条理を覆すことができる！」

その言葉にフリードは口をはさむ。

「子供たちをこのような実験のため誘拐することは不条理じゃないのか？」

「黙れ！僕達の崇高な目的を果たすためには仕方のないことだよ・・・」

・そう、彼等は人柱なのだよ！何れ神が蘇れば英雄となれるんだ！
彼等も幸福だろう？フヒヤヒヤヒヤ！」

フリードは博士に聞こえないようにポツリとつぶやく

「死んで英雄になることなんて、望んでいないと思うがな・・・」

これまでは死者は出ていなかったし、不適合だった者は見つかりやすい所に置いてきたりしてきた。また、この実験以外、非人道的倫理的な事もしていないことは確認している。でなければ、フリードが手を貸す事は無かっただろう。

だが、これからもそうとは限らない。

その言葉が聞こえた訳ではないだろうが、博士は高笑いを止め、フリードに言う。

「フリード、我らが神を蘇らせるため、連れて来てくれ。依代となるで、あるう人間を！」

「・・・わかった。だが、分かっているな？俺が貴様の依頼を達成した時の報酬を？」

「ああ、分かっているさ。大丈夫。我らの神が蘇れば、君の願いも叶うよ。」

その言葉を聞き、フリードは再び依頼を達成するため、街の中へと繰り出そうとする。すれ違いざまに、次の被験者が制服達に連れてこられていた。その子供はつい先日捕らえた少女であった。その目は怯えきっている

- ・ その少女を一瞥するだけで、そのまま振りかえりもせず歩きだした。被害者が増える前に、どうか依代が見つかる事を祈りながら・

第八話 デートと尾行

今日は休日、空は快晴、絶好の外出日和だ。人によっては一日中家で寝ていたくなるだろう。むろん、慧も普段なら後者の人間な訳だが、今日は緩奈と買い物物の約束があるため、珍しく早い時間に起きています。

「それじゃ、言って来る。また夕方に、な。」

「ええ、楽しんで来なさい。」

「それでは主、また後で。」

慧は家を出て行き、残ったのは美夜と銀の二人となった。

「それで、美夜。この後どうするのですか？主がどこで緩奈と待ち合わせしているかなんてわかるのですか？」

「ふふ、大丈夫。手は打ってあるわ。私達はまず、夢と合流しましょう。」

二人は慧を尾行するための手順を確認しあっていた。

「うーん、慧はまだかな〜・・・」

緩奈は一人、慧を待っていた。待ち合わせの場所は櫻木市の中心

街にある時計塔の下。この時計塔はこの街でも目立つため良く待ち合わせの目印として使われる。

休日と言う事もあり、周囲は友達と待ち合わせをしている者やカップルで溢れている。

「はあ、早く来すぎちゃったな。なにやっているんだろっ・・・」

今日が楽しみだったため待ち切れず、緩奈は待ち合わせの時間より、1時間以上前から待っている。慧と出かけるのはこれが初めてという訳ではない。真樹と一緒にの時もある、二人だけの時もある。しかし、慧と最後に出かけたのは連絡が取れなくなる前、つまり3カ月前になる。また、美夜や董、銀という美少女達も慧の周りに増え、内心の焦りもあり待ち切れなかったのだ。

「でも、考えてもみななかったなあ。慧の周りにあんなに綺麗な人や可愛い子が集まるなんて。中学の頃じゃ考えられなかったのに・・・容姿だって、まあ、私は格好良いと思うけど・・・周りは普通って言っていたから安心していただけに・・・」

ちなみに中学の頃の慧は雰囲気が大人数に大人びていた事とたまに子供のような馬鹿をやっていた事、その二つのギャップから女生徒に実はモテていた。しかし、学校を無断で休むことが多く、忌避されていたため、緩奈は他の女生徒に警戒していなかった。

なお、慧の容姿は黒髪で黒い瞳、少すつり気味の目で顔は整っているが、目立つ訳ではない。まあ、ランクをつければ中の上程度だろう。

周囲の評価は、普通。でも真面目な顔をすれば格好良いのに、とのことだ。

こうして待つこと数十分、そろそろ待ち合わせの時間だ。緩奈は慧を探すようにキョロキョロと周囲を見るが、緩奈の身長は平均より低めなため、また、人の流れも多く、見つけることが中々できない。

そんな時だ。

「よ！緩奈。今日は早いな。いつもならもう少し遅めじゃないか？」

唐突に緩奈の肩を叩きながら慧が話かけてきた。

「もう！遅いよ、慧。待ちくたびれる所だったじゃない！」

現在の時刻は9時50分。待ち合わせの十分前に来たので遅刻ではないが、緩奈は内心の焦りからついそんな事を口走ってしまった。いた。

慧としては緩奈が1時間も前から待っているとは思わず、また、自分も遅刻ではないため、いつも通りに挨拶をしたら怒られた。よってこう問い返すのは普通だろう。

「緩奈、一体何時から待っていたんだ？」

慧としては当然の質問をした訳であり、何も悪気はなかったのだが、一時間も前から待っていたなど、楽しみにしていたのがバレバシなため、言える訳もなく、（慧の鈍さなら気付かないかもしれないが、この時の緩奈はそこまで考えが及ばなかった、）よって、強引に誤魔化すことにした。

「そ、そんな事より！早く行きましょう。慧は夕方から用事があるんでしょう？もったいないよ。」

そう言って、慧の手を掴み、引っ張っていく緩奈。

「ちょ、ちょっと待って！一人で歩けるから！」

引っ張られ、つんのめりながらも、緩奈の手を振り払おうとはせず、そのまま隣に並び、歩く慧であった。

一方その頃

「お、手を繋いで歩き始めたわよ？」

物陰から二人を見守る影が4人。

「え？どこですか？美夜さん？」

「ヴァイオレット、ここではナイトと呼びなさい。」

「はい。ナイトさん。で、お兄ちゃん・・・ターゲットKは？」

見るからに怪しい4人組みが慧と緩奈を尾行している。帽子に、春先だというのに全身を覆うコート、そしてサングラス。警察に通報されていてもおかしくないだろう。

「あの、わざわざ、こーどねーむ？で呼び合う必要はあるのでしょうか？」

「甘いわよ。シルバー、どこで誰が聞いているか分からないじゃない。い。」

「ふふ、シルバー、諦めなさい。こうなったナイトは止められないわ。」

「夢・・・じゃなかった。ドリーム・・・」

しかし、誰も見向きもしない。これはドリームの魔法の応用だ。『幻』で4人の姿を阻害しているのだ。そして、ナイトの『無』で『幻』による魔法の残示を消しているので気付かれないということだ。

ナイトと呼ばれる少女は目に当てていた双眼鏡をヴァイオレットに渡すと、通信機を取りだし、誰かと連絡を取る。

「こちらナイト、そちらからの報告を頼む。」

一泊置いた後、通信機から返答があった。

『ククッ、こちら、ウッド。どうやらターゲットはまず服を買いに向かうようだ。今いる通りをそのまま少し行った所にある洋服店だ。店の名前は・・・』

ナイトは店の名前を聞き、どこにあるか、把握してから通信を切った。

「了解した。引き続き監視を頼む。」

「ラジャー」

通信機をしまつと他の3人に目配せし、尾行を続した。

「ん？」

慧は何かを感じ取り振り返る。

「気のせいかな？」

「慧、どうしたの？」

急に立ち止まり背後を気にする慧に緩奈は問いかけた。

「いや、誰かに見られている気がしてな・・・悪い、気のせいみたいだ。さ、次はどこに行く？」

視線を感じた慧であったが、今はもう感じないため、緩奈に気を取られた男が不躰な視線を寄こしたものと判断した。感じはそうだったものとは違う気がするが、気にしないことにし、次はどこに行くか、促した。

「そう？ならいいけど・・・なら、気を取り直して、次は・・・」

あれから、服や靴などを見て周り、緩奈が気に入った物をいくつか買った。もちろん慧のおごりで。一通り服や靴などは見て回ったため、次はどうするのか、緩奈に問いかける。が、不意にお腹の音が聞こえてきた。

慧が視線を音源へ向けると、顔を赤くした緩奈がいた。

「・・・そろそろお昼みたいだし、御飯食べにいくか？」

「……………うん。」

緩奈は顔を赤くし、慧の言葉に頷いた。

「店はどこにする？」

「慧に任せる……………」

恥ずかしかったのだろう。さっきまでの勢いは也を潜め、大人しくなってしまうた。

その姿に、苦笑を一つすると、慧は緩奈の手を引つ張り近くのファーストフード店、マッドナイトへと足を向けるのであった。

マッドナイト……………不吉な名前だが、その奇抜さがつけて人気のチェーン店だ。

「こちらウッド、ターゲットは近くのマッドへ入る様だ。」

「了解したわ。こちらも向かう。」

相変わらず5人は定期的に連絡を取り合い、尾行を続けていた。

「む……………お兄……………ターゲットK、相変わらず仙海先輩と手を繋いでいます。」

ヴァイオレットはむくれている。ヴァイオレットはKと一緒に帰

ることはほとんどなく、二人きりで出かけた事もない。手を繋ぐ機会もまったくないため、焼きもちを焼いているのだ。

「K、楽しそうですね・・・」

シルバーは楽しそうにKを見て、嬉しそうな顔をしてはいるが、声は萎んでいる。その場に自分がいない事が寂しいのだろう。

「あらあら、Kはモテモテですね。」

ドリームはそんな二人を見て、微笑む。この二人がKに向ける好意は、今は家族に向けるものと同じだろう。だが、これからどうなるのか・・・その事を想像しながら姉の様に微笑むドリームであった。

「慧、私という時より楽しそうじゃない。」

訂正、ドリームが微笑む相手がここにもう一人。ナイトが慧に向ける気持ちは多分、独占欲。しかし、そこに好意は確かにある。

それは前者二人と少し違う。家族へ向ける好意ではない。ならば、なんなのか・・・

ナイト自身もその気持ちは不明なためか、気付いていないのか、とにかく不快な事は確かなので、慧を睨むのであった。

そして、もう一人の尾行者は・・・

「ククッ、これは面白くなってきた。俺としては、付き合いの長い緩奈を選んで欲しいところだが、これは奴が決める事だからな。さて、楽しみが増えてきた。」

親友の周りで起こる騒動を楽しんでいたのであった。

そんな事に気付かない二人はお昼を食べ、相変わらず手を繋いだまま街中を歩いている。

しかし時折

「……ん〜？」

立ち止まり、周囲を見渡す慧。

「どうしたの？さっきから……何か気になる事でもあるの？」

緩奈はそんな慧を不思議そうに見る。マッドを出てからずっとこの調子なのだ。

「……いや、なんというか……さっきから見られている気がするんだよ。途中で途切れたりするし、視線の主が変わったり、増えたり減ったりしているんだが……時々殺気が含まれるんだよ。」

始めは緩奈に向いていると思ったが、どちらかという慧に視線が向けられている事が多い。自分が見られている事から、何か厄介事かと思ひ緩奈を巻き込まない様に業と隙を作ったりして様子を見ていたが、一向に襲ってこないため、そっち方面でもないようだ。

「気のせいじゃないの？」

「うーん、気のせいじゃないとは思うんだが・・・ま、いいか。気にしても仕方がない。」

時々含まれる殺気は気になるが、特に何かしてくる様子もない上に、殺気は主に慧に向けられるため、無視する事にした。

慧は口では気にしないとってはいるが、一応警戒を解く気はない。が、かと言って、緩奈に気を使わせるような事はしない事にしたのだった。

「そっか、まあ、慧がいれば大丈夫だよな？」

「いや、俺弱いから。どうか、守ってください。」

緩奈は慧がいれば何があっても大丈夫と信頼しているが、肝心の慧はむしろ守ってくださいと緩奈に頼むのであった。

「クスクス、わかったよ。何かあったら守ってあげるよ。」

そんな慧に呆れながら了承する緩奈であったが、本当に何かあったら慧が助けてくれる事はわかっているため、その表情は楽しそうだ。

「ああ、よろしく頼むよ。で、次はどこ行く？一通り買い物は終わった見たいだが・・・」

お昼を食べた後、二人は色々な店を見て回ったが、緩奈は何かを買おうとはしなかった。慧の懐に気を使った・・・訳ではなく、欲しいものはあらかた午前中に買い終わったのであった。

「うん。特に買う物はないよ。でもまだ、時間はあるよね？じゃあ次は・・・あ！ゲームセンターに行きたいんだけど、良い？」

「珍しいな。緩奈がゲーセンに行きたいなんて。」

緩奈はゲームセンターの騒々しさが苦手と言う事で行きたがらない。しかし、今日は自分から行きたいと言ってきたため、少し驚く慧であった。

「うん。クラスメイトがね、最近ゲームセンターに良く当たる占いの機械が出たって言っていたのよ。だから試してみたくて・・・」

「へ～そんなに当たるのか。じゃあ、行ってみますか。」

「うん！」

二人はそのままゲームセンターへと足を延ばす事にした。今の場所からそれほど離れてはおらず、目立つ場所にあるため、すんなりと見つかった。

「おお！結構並んでいるな。しかも、カップルが多い。」

噂の占い機の前には20人近い行列が並んでおり、女性同士の者もいるが、カップルの割合が上だろう。

「こりゃ、並ぶと時間的にここで最後だな・・・どうする？並ぶか？」

今日の見周りの集合時間から見てもここで並ぶと他にはいけないだろう。

「うん・・・よし！並ぼうよ！」

緩奈は少し悩むが、どうしても占いをしたいため、並ぶことを選んだ。

「わかった。しかし、本当に多いな。特にカップルが。」

「まあね。この占いは特に恋愛の占いが的中する確率が高い見たいのよ。だから、カップルが多いのね。後、多分だけど女の子同士で来ているのは、気になる男性のプロフィールを調べて来ているんでしょうね。」

「ふん。でもまあ、占いは所詮占いだからな。当たるも八卦当たらぬも八卦だろうに。」

慧は達観したように言う。慧としては、的中率がほぼ100%の未来視の『魔法使い』を知っているので、こういう、機械やテレビの占いにはたいして興味がない。

「もう、占いを甘くみちゃだめだよ？統計学などからより正確になっってきているんだから。」

占いとは、様々な情報から、過去こういふ血液型のようなものがあった。星座のものはこうだったなど、過去に起こった結果を似通ったプロフィールや考えの者に当てはめているのである。よって、完璧に当たると言う事はないが、よほどベタラメな占でない限り、全く当たらないということもまた無いのだ。

また、魔法が世界に広まってから、更に占いの精度は増した。これは、魔力は世界と密接に関わりがあり、これも重用な要因である

からだ。

なお、精度が増したただけであり、的中率は未だ60%位だ。占いとは人の運命を見ることが同義である。よって、そこらの占い師や、統計学の占いは結局その程度である。

しかし、例外はある。一つは未来視、もう一つは古くからの占星術の家系のものだ。この者達が視るものは「過去の結果」ではなく幾つも分岐された「未来の結果」だからだ。

二人は占いについて語っていると、やっと自分達の番に回って来た。緩奈は我先にと除き防止の布をくぐり中に入ってしまった。慧も後続く。

「わ〜！何から占おうかな？」

緩奈は楽しそうに何を占うか悩んでいる。

「よし！じゃあ、恋愛運からにしよう。慧も一緒にやろうっ？」

てつきり付き添いと思っていた慧は緩奈の誘いに戸惑う。別に信じてもないものをやりたくはないのであった。

「いや、俺は・・・」

「いいから、いいから。ほら、ここに、自分の名前、生年月日、好きなもの、属性を入れるんだって。後、いくつかの質問もあるみたいだよ？」

拒否する慧を無理矢理引つ張り、緩奈は自分の隣に立たせ、入力するように促す。緩奈は既に入力を終えていた。

「はあ、わかったよ。え〜と、黒澤 慧つと、生年月日は・・・」

慧は自分のプロフィールを入力し、いくつかの質問に答え、決定ボタンを押した。

すると、流れてきたのはベートーヴェンの「運命」。

「なんだこの選曲は！」

思わず突っ込んでしまった慧であった。

そして数秒後、結果が出てきた。そこには・・・

「.....」

「慧、落ち込まないでよ、もう。占いなんて信じないんじゃないの？」

慧はかなり落ち込んでいる。その理由は

「もう、そんなにシヨクなの？」あなたは、度々騒動に巻き込まれるでしょう。平穩な日常は少ないため、大切にされた方が良いです。『って書かかれていたのが。』

そう、慧の占いの結果は散々だったからだ。

恋愛運も含め、様々な占いを試したが、その結果は惨敗。基本的

な事は以下の通りである。

金運：お金は入るが、直ぐに出て行くため貯まらない。

健康運：直ぐに怪我をし、直ったと思ったら、また怪我をするの繰り返し。

恋愛運：ガンバ！

仕事運：仕事は多く大変です。健康に気をつけましょう。

総合評価：『あなたは、度々騒動に巻き込まれるでしょう。平穏な日常は少ないため、大切にされた方が良いです。』

であったのだ。落ち込むのも無理ないだろう。

ちなみに、相性占いもあり、慧と緩奈の相性は『互いの本当を知っても変わらず支え合うことの出来る間柄です。しかし、友達から抜け出すには苦勞するでしょう。』ということが書いてあった。それを見た緩奈は本当に微妙な顔をしていた。

慧が落ち込んでいると、もう緩奈の家に着くところであった。

「慧、今日はありがとうね。久々に遊べて楽しかったよ。」

「ああ、俺も楽しかったよ。・・・財布は寒くなったけどな。」

緩奈は楽しそうに笑い、慧は苦笑いで返す。

「んじゃ、俺は生徒会の仕事があるから、行くよ。」

「うん。わかった。それじゃあ、またね。」

「ああ、また、学校で。」

こうして二人は別れた。

慧は緩奈の家から十分離れた後、先ほどの占いの結果がプリントされている紙を改めて取り出し、読み返す。

そこには、緩奈に見せた時、業と隠していた部分があった。機械のディスプレイにも表示されていなかった文だ。

書かれている内容は……

『近い内、あなたは大切なものを失う事になるでしょう』

慧はその紙を握り潰し、ポケットに突っ込んだ。

「ふざけるなよ。そんなことさせてたまるか。」

慧は一人つぶやくと生徒会のメンバーが待つ場所へと向かっていった。

そしてその頃の生徒会メンバーは

「さて、君達。どこの学校の生徒だい？」

「くっ……まさかこんな事になるとはね……」

警察に職務質問を受けていた。

慧達にばれないように魔法を使っていた夢と美夜であったが、慧の気配察知が鋭いため、密度と範囲を上げていた。その結果、お店の警報に引っかけたてしまい、今に至る。

「恥ずかしいよ〜」

「大丈夫ですよ。董。みんな一緒です。」

「は〜、失敗しました。まさかこんな事になるなんて・・・」

『生徒会のメンバーは集合時間に間に合うのか！次回を待て！』

「ウッド、一人だけ逃げられると思わないことね。」

第九話 魔法学とペア

今は深夜、獣や一部の人間以外は誰しもが寝静まった時間。もちろん、二人の男女がいるこのホテルも例外ではない。が、二人にとつては今は本番だろう。そのつもりで年齢を偽りここに来たのだ。

だが、今はもうそんな気持ちは吹き飛んでいる。何故なら・・・

「今時の若者は進んでいるな。もうこんな所でことに及ぶのか。」

金髪の男、フリードと制服達がいきなり部屋に入ってきたからだ。

「何なんなのよ！あんたら！私達になんの用なのよ！」

「ひい！助けて！」

制服達に取り押さえられているが、少女は気丈にフリード達を睨み返す。一方、少年は怯え、暴れる様子はない。

「そうだな・・・何の用かと答えれば、俺達の実験を少々手伝ってもらいたくてな。なに、お嬢さん。君に来てさえもらえれば俺達としては問題ない。大人しく着いて来てくれるか？」

フリードは少女の方にしか用は無い。少女さえ来てくれれば、少年には手を出さないと言っている。その言葉を聞き、少年は少女へ何かを懇願する様な視線を向ける。その視線を向けられた少女はシヨックを受けた様な顔になり、暴れるのを止め俯いてしまった。

「良い子だ。一応、実験以外の身の安全は保障しよう。さあ、行くか。」

フリードは制服達に連れて行くよう指示を出し、少女は制服達に引き連れられ出て行った。

部屋に残ったのは少年とフリードだけとなった。

「少年、情けないな。なにもせず少女を諦めるどころか、少女を犠牲にするとは。こんなところに入る勇氣はあっても、少女を守る勇氣はなかったようだな。」

「俺みたい一般人がお前みたいなのになう訳ないだろ。」

悔しさより、助かったという安堵が強い、そんな声だ。

「ま、それもそうか・・・俺はもう行こう。喜べ少年。彼女のおかげで君は日常へ帰ることができるのだから。」

そう言い残しフリードは立ち去っていった。そこに残されたのは一人の少年だけであった。あれだけの騒ぎがあったにも関わらず、辺りは静まりかえっていた。

休日明けの月曜日。誰しも学校に行くのが面倒な曜日だ。少なくとも慧はそう思っている。

「面倒臭い、眠い、寝る。」

「来てそうそう寝るな！」

緩奈は席に着いた途端眠ろうとする慧の頭を何処からか取りだしたハリセンで一閃。スパン！という気持ちのいい音と共に慧の頭に炸裂した。

銀は相変わらずクラスメイトの女子達にモテモテだ。逃げ出したい様だが、本気で暴れる訳にも行かず、困っている。

「痛いな、緩奈。いきなり叩くことないだろう。と、いつかどこから取りだした？そのハリセン。」

慧は文句を言いながら緩奈の方を向く。

「来てそうそう挨拶もなしに寝るからでしょ。まったく、変わらないんだから。」

変らないわね。と苦笑しながら、叩かれた場所を撫でる慧を見る緩奈。ハリセンについては触れなかった。

「それは悪かったな。・・・ところで真樹は？今の時間に来ていないのは珍しくないか？」

そろそろ始業のベルが鳴るところだが、真樹の顔が見当たらないため、見渡す慧。

「そうね。でも、まあ、たまにあるわよ？慧は良くサボっていたから知らなかったのかも知れないけどね。それをいうなら、慧が真面目に学校に来ていることの方が不思議なんだけど？」

緩奈の言う通り、真樹が学校を遅刻したりサボる事もあることはあった。慧はそれに輪をかけてサボっていたため知らないのだった。

また、慧がサボっていないのは『断罪の牙』を辞めた事もあるが、美夜と銀がサボるのを許してくれないためでもある。

そんな会話をしていると、とうとう始業のベルが鳴ってしまった。

「遅刻確定ね。」

「いや・・・ギリギリだな。」

「え？」

そう言っつや、慧は立ち上がり、窓を開けた。すると

「はあ、助かったぞ。慧。」

「まったく、どこから入ってくるんだよ。」

窓から教室に入ってくる真樹であった。

その様子を見ていたクラスメイトの気持ちは一つ

（（（こじ、3階だよな？）（（（

その後、HRを終え一時間目の授業との間の小休止の時間。

「慧、少し良いか？」

「ん？別に良いが・・・なんだ？」

HRが終わると真樹が慧に話かけてきた。その表情は珍しく真剣だ。

「ここじゃなんだ・・・場所を移そう。」

「ああ、踊り場でいいか？」

今の時間なら踊り場は生徒はまずいないだろうと言う事で二人は場所を移すことにした。

「で？話はなんだ？バイトは出来んぞ？生徒会の仕事で忙しいからな。」

慧は真樹の話がバイトの件だと思い先に断りを入れた。以前も同じ様な事があり、了承した結果、カタギじゃない抗争に巻き込まれた事がある。

「いや、今回は違うが、お前達がしている仕事に関係することだ。」

「・・・よく知っているな。」

慧は諦めたように溜息を吐いた。この男に事件絡みの秘密は無理なようだ。

「で？誘拐事件に関してなんだというんだ？」

「ああ、昨夜、とうとうこの街でも事件が起こったらしい。別の学校の者だな。」

その言葉に驚く慧。昨日も見周りは継続して行っていたからだ。

「時間は深夜だ。お前達は身周りを終えた時間なのだから仕方が無い。」

慧が自分を責めないよう気を使い、仕方が無いという真樹。それを察してか思いつめない様に努める慧。視線で続きを促す。

「場所はビジネスホテルだ。俺達と同年代の男女のカップルで、昨夜事に及ぼうとしたのだろう。そこを襲われた様だ。」

「二人とも誘拐されたのか？」

「いや、女だけで、残された男が警察に通報しこの事が発覚した。」

「目撃者は？」

「不思議な事に通報した男以外ゼロだ。ホテルの従業員も気付かなかったらしい。」

「そうか・・・しかし、変だな・・・」

慧は考える。同年代の男女が借りられるビジネスホテルなど防音措置もたかが知れている。そんな所で騒ぎになれば目撃者は増えるはずだ。なのに、目撃者は当時者である男性のみ。

「方法はいくらかでもあるな。変身魔法、催眠魔法 e t c だが、それらを使えるほどの『魔法使い』はそういない。」

真樹も方法を考えるが、自ら否定する。変身魔法や催眠魔法は公には禁止されているうえ、『魔法使い』の資格を持つものも許可なく使用できない。また、そもそも魔法としてのレベルも高レベルなのだ。

「ああ、それに違法な魔法を感知する装置もあるはずだからな。しかし、どうやったのか、魔法を使えば侵入や防音はどうにでもなるが、防犯装置がある以上は無理な話だ。」

先入観に囚われるのは不味いがな、と慧は付け加えるが、不思議な話だ。犯人はどうやって侵入し、少女を連れ去ったのか・・・

「ところで、真樹。その少女の名前と属性は？」

「ふむ、少し待て。」

真樹は懐から手帳を取り出し確認する。

「名前は、「いんのはまはな言葉環。属性は『音』だ。」

「『音』の属性か。そう珍しいものでもないな。しかし、『言葉』、か・・・」

『音』の属性は音により、精神に喜怒哀楽の感情を誘導する魔法だ。音には元々精神に干渉する力があるが、それを魔法により強化することができる。主にカウンセリングなどで重宝される。しかし、この属性自体は基本属性ではないものの珍しい属性ではない。

「なあ、この『言葉』って、あの『言葉』か？」

「ああ、慧の思っている通りの『言葉』だ。といつても分家筋で、『言霊』を使える訳ではないがな。」

『言葉』の家は咲家と同じく『世界樹の頂』に所属する家の者で、宗家は『言霊』と言う魔法が使えることで有名だ。

「つまり、『言葉』の血筋だから狙われたわけだな。」

「そう捕らえて良いだろう。どうやって知ったかはわからんがな。」

そして、二人は黙り込むが、検討が着かない。そこに第三者の声が入って来た。

「慧！真樹！そろそろ授業が始まるわよ！」

階段の上から現れたのは緩奈だった。どうやら二人を探しに来たようだ。

そんな緩奈を見て、慧と真樹は視線で緩奈に誘拐事件の事を伝えるか話し合う。

結論は

「なんの話をしていたの？」

「いや、真樹がまた妙なバイトの話を持ってきてな、断っていたところだ。」

秘密にすることにした。何れ分かることだろうが、その時には全て解決している事を願って……

「駄目だよ、真樹。慧に変なバイトさせちゃ。」

緩奈は以前、誘拐された事があり、それがトラウマになっている。それ以降、近くで事件があると、家に引き籠ったり、新しく、新しい友人を作ることを拒んだりしている。

「ふむ。善処しよう。」

二人は緩奈をそういった事に巻き込まない様にしているのであった。それが、かつて、慧と真樹がした約束でもあるからだ。

場所は講堂。現在ここには、高等部の1年生と2年生が集まっている。

「さて、それじゃあ、魔法について教えるわよ？」

そう言って、少女は講義を始めようとする。

「よし、ちょっと待て。」

それを慧は止める。何故、今、この時にこの少女がいるのか理解が追いつかない慧は改め問う。

「何で、ここにいるんだ？美夜？」

「何故って、魔法学の授業だからよ？」

この学園の魔法学の授業は、1年生と2年生が合同で行う。ここで特殊なのは、1年生一人に2年生一人がついて、マンツーマンで教える事だ。もちろん講義は全体で行うが、その時も補佐するため、ペアを組んだ2年生と隣同士となる。

これは、教師一人では魔法のトラブルに対応出来ないためでもある。講義ならまだしも実技になると、素人が多い1年生は様々な問題を起こすからである。

なお、中等部でも同様の事は行っていたのだが、慧が編入したのが3年だったため、こういった授業は無かったのだ。

「で、俺のペアは・・・」

「そ、私。良かったわね。私は当たりよ？」

このペアは一年間続く。そのため、当たり外れが存在する。

なお、午後の授業は全て魔法学である。授業は一年のクラス分けで行われる。これまでは、新学期初めということで、魔法学は休みだったのだ。

「因みに、慧は特例で銀と二人で一人とカウントされるわ。使い魔と主はペアで数えられるからね。」

「はい！よろしくお願いします。美夜。」

銀は嬉しそうに尻尾を振っている。

なお、緩奈は夢と、真樹は知らない男子生徒と、だ。他の生徒も同性同士でペアを組んでいる。

因みにクラスは関係ない。現にAクラスの夢とFクラスの緩奈が組んでいるのがいい証拠だ。

「なあ、何で俺は美夜なんだ？他の奴らは同性なのに。」

「ああ、簡単よ。私がそうするようにお願いしたの。人数の問題や、慧が使い魔とペアって事もあるけどね。」

確かに、人数的に、2年生の方が、1年生より女子生徒が一人多い。また、1年生は2年生より一人人数が多い（銀がいるため）。そのため、女子と男子で組むペアが必ず一つ出てしまう。その事も考慮してだろう。

同性同士で組むようにしているのは過去異性同士で組んで色々問題が起こった経緯もある。慧は銀とペアなため、問題ないと判断したのだろう。

因みに、3年生はペアはまず組まない。それぞれ受験や『魔法使い』の資格の勉強のため、忙しいからである。中には在学中に資格を取って依頼に取り組むものもいる。

「と、言う訳で、始めましょうか？」

こうして、美夜による魔法の講義が始まるかに見えたが

「ふざけるな！」

一人の男子生徒が声を荒げた。そちらを向くと、1年生が、2年生に不満をぶつけているようだ。2年生の男子生徒は、やれやれという風に首を振っている。

「今年もやつぱり起こっちゃったか。」

「まあ、これは、不満を出す奴もいるよな。どうやって決めているんだ？」

「どういう形で決めているか知らないが、下級生には選ぶ権利はないため、不満を持つものもいるだろう。」

それは上級生にも言えることだと思うが……

「一応、入学の際の成績で決めているみたいよ。葛城君が良い例ね。彼の相手は雷堂らいどう和希かずきといって、『雷』の属性で、2年でもトップクラスの實力よ。まあ、私は別だけどね。夢と緩奈のペアも互いに珍しい属性という理由で組んでいるわ。」

つまり、真樹はAクラスでもトップクラスの人間と同じ位の力と認識されており、緩奈は夢と同じく珍しい属性と言う事で組んだ訳だ。しかし、慧は……暴動が起きるんじゃないかね？と思う慧であった。

「では、あの呆れている人は？」

銀は、今騒いでいる生徒のペアとなっている上級生がどれくらいの実力を持っているのか気になる様だ。

「ああ。あれはSクラスの生徒ね。名前は……忘れたわ。」

生徒会長にあるまじき発言に、慧は呆れる。

制服やジャージにクラスを示す記号が書いてあるため、クラスは分かるが、名前までは分からないようだ。

「仕方ないでしょ。人数が多くて一々覚えていられないわよ。」

「そうですね、ではあの騒いでいる人もSクラスなんですね。」

「そうだな。同じSクラスで組まれたみたいだな。あの上級生、美夜が覚えていないって事は、たいした事は無いようだな。」

つまり、そのペアの相手も同様ということだ。

「まあ、Sクラスは属性の希少さや血筋で決められる事がほとんどだからね。一応言っておくけど、皆が皆、弱い訳ではないわよ？まあ、私達には関係ないわ。さ、始めましょう。」

美夜が仕切り直し、改めて講義を始めようとしたが

「俺に相応しいのは神凧 美夜だ。貴様ではない！」

「……だつてさ。」

「はあく……」

そんな声が聞こえてきた。それを聞き、慧は苦笑しながら美夜を見る。美夜は溜息をついて、ちよつと待っていてと言い、騒ぎの方へ歩いていった。

結構お怒りだ。

「主、大丈夫でしょうか？」

銀はそんな美夜を心配そうに視ている。

「美夜なら大丈夫だろう。ランクSは伊達じゃないって。」

慧は何も心配していない様に言うが、銀の心配していることはそこでは無かったようだ。

「いえ、そうではなく、主が巻き込まれないかと・・・」

銀が最後まで言う前に

「慧！ちよつと来なさい！」

大声で呼ばれた。慧と銀は顔を見合わせると、慧は一つ溜息を吐いて、銀は苦笑を返して美夜のところへ向かって行った。

「ということだ慧。こいつと戦いなさい。」

行くと、かなり御立腹な様子的美夜。どうしたことが、不思議に思っていると夢が耳打ちして来た。

「あの子、黒澤君の事を大分悪く言っていたのですよ。美夜は自分のお気に入りが貶されたのが許せないのね。」

因みに、それは緩奈と真樹も同様で、緩奈は目に見えて怒り、真樹は見た目は変わらないが、かなり怒っているみたいだ。現に、周囲の生徒の何人かが倒れている。

「貴様が、美夜さんのペアの相手か・・・Fクラスの癖に美夜さんに教えを請うなど百年早い！」

「ちよつと、気安く名前を呼ばないでくれる？」

「美夜さん。あなたはこと男に騙されているのです。私がこの者を倒し、目を覚まさせてあげます。」

全く話を聞いていないうえに、良く分からないことをのたまう男子生徒。

「さあ、勝負だ。貴様の様な雑魚、俺様が相手をする必要はないのだが、特別に相手をしてやる。」

その言葉に銀が文句を言う。

「すみません。私の主を悪く言わないで貰えますか？」

だが、男子生徒は銀を一瞥すると一笑する。

「ふん。そいつの使い魔か。みたところ元は犬の様だな。つまり駄犬という訳か。主が主なら、飼い犬も飼い犬だな。二人揃って、馬鹿面を下げて、恥ずかしくないのか？」

その言葉に飛びかかろうとする銀だったが、慧が止めた。

「面倒事は嫌なんだがな。俺の銀を馬鹿にするのはいただけない。その勝負受けてやるよ。」

珍しい事にやる気を見せる慧。

「よし。勝った方が、美夜さんの教えを受けられるという事でいいな。」

「ああ、だが、負けたら、銀に謝れよ。」

「いいだろう。俺が負けるはずないからな。」

二人は講堂の中心へと移動する。その間、生徒達は巻き込まれない様に2階の観戦席へ移動している。

「さあ、それでは始めようか。」

「その前に、お前、名前は？」

直ぐにでも始めようとする男子生徒に慧は待ったをかける。

「俺の名前を知らない？ふん。いいだろう。聞いて驚け！俺はあの『聖王騎士団』十三騎士の一人、『虚無の騎士』サイファー・クロイスの息子、カインド・クロイスだ！」

『虚無の騎士』サイファー・クロイスは美夜と同じ『無』属性の持ち主だ。どうやら、このカインドという少年も『無』属性の持ち主なのだろう。だから、美夜にこだわるのかと納得のいく慧だが、納得いかないこともある。

それは、サイファーは誇りを重んじてはいるが、けして相手を馬鹿にするような男ではなかったからだ。

（まあ、親がそうだからといって息子もそうだとは限らないか。そもそも、この学園自体おかしいな。）

「あっそ。んじゃ、さっさと始めようか。」

「フン！父様の名前を聞いても何の反応も示さないとは・・・無知

にも程があるな。まあ、良い。このコインが地に着いたら開始だ。」

カインドはコインをはじいた。

そして、キーンという音と共にコインが地に着いたと同時にケインが動いた。

「行くぞ！」「無」よ、小さき弾となり彼の者を滅せよ……「無の弾丸」！」

「無の弾丸」は「無」属性の弾を複数作りだし放つ魔法だ。その大きさは小さいが数が多く、避け難い魔法だ。

カインドが放った「無の弾丸」の数は十五発。

慧はその弾を軽く避けた。

「なっ……ふふ、やるじゃないか。だが、次はどうかな？」「無」よ蛇となりて、彼の者を呑み込め……「無蛇」」

『無蛇』は蛇の形をした「無の弾丸」だ。違いは追尾するか否かだが、追尾の特性を付けるのは難しく、難易度はかなりあがる。そのため、数も少なくなり、今回は二匹だけだ。だが、避けても追いかけて来るため、面倒な魔法ではある。

「ははは、この魔法はしつこいぞ！」

この魔法は蛇の名が付いているだけあって、しつこいのであった。慧が避けても、避けても追いかけてくる。

「面倒だな・・・だが・・・」

慧は何を思ったのか、カインドの方へ向かって走り出す。

「何をする気だ！」

カインドは魔法を使わず、動きもせず、その場で構えただけだ。いや、魔法は使いたいが使えない上に、その場を動かしたいのに動けないのであった。同時に二つの以上の魔法を使うのは高レベルの芸当のため、今のカインドでは使えない。そして、戦闘経験が少ないため、次にどう動けば良いのか判断がつかず、動けないのであった。

「よつと！」

慧はカインドの眼の前までくると急に、姿勢を低くし、カインドの後ろに回った。カインドからは消えた様に写っただろう。そして、目前には『無蛇』

「うあ！き、消える！」

いきなり目の前に現れた『無蛇』思わず消してしまった。もし、あのままであれば、『無蛇』の直撃を喰らっていたのはカインドであっただろう。『無』属性を持つものは『無』属性に耐性があるとはいえ、軽傷ではすまなかったはずだ。

慧はその間に、再びカインドから離れている。

「はあ、これで終わりか？なら、今度はこっちから行くぞ？」

そう言い、一歩カインドへ踏み出した。

「く、来るな！来るな、来るな、来るな！」

そう言いながら、狙いも定めずに『無の弾丸』を作り、放とうとした。

「馬鹿が！」

一瞬で、それこそ、この場にいる者のほとんどが視認できない速度で近づき、一撃で気絶させた。

カインドが放とうとした魔法は使用者が気絶したため、無散した。

「お疲れ様・・・って言うほど疲れて無いわね。まあ、ありがとうね。スッキリしたわ。」

「主、やっぱり主は強いですね。自慢の主です。」

カインドとの試合が終わり、皆が、下へ降りてきて、授業が再開となった。カインドと慧の試合は五分も掛からず、あっけなく終了したため、時間は十分にある。

美夜は降りてきたと同時に、芳いの言葉をかけ、銀は抱きついて来た。

「あれくらい、たいしたことないだろうに。」

慧は否定するが

「いえ、普通は『無』を前にすると臆するものです。それをあんな、
いとも簡単に避け、一撃で決めるなんて、十分凄いなと思いますよ？」

夢まで褒めるので、少し後悔する慧。最後の一撃、身体能力だけでは、間に合いそうに無かったので、闇を右足に纏い、脚力を上げたのだが、失敗だったようだ。もう少し、緩めても良かったと後悔する。

「ふふん。慧はこんなものじゃないイタツ！」

自慢する様にする緩奈を小突いて、余計な事を言わせない様にする。

「ふむ。しかし、この学園は不思議だな。『魔法協会』に『世界樹の頂』、『聖王騎士団』、『六魔天の関係者がこんなにいるのは不思議だ。この理事長は『七大法典』だ。普通、『世界樹の頂』や『聖王騎士団』は入ってこないのではないか？」

真樹の言う通りだ。六魔天は互いに仲が悪い。自分の組織の未来を担うものを敵方に預けるようなものだ。

「それは・・・ここだけの話だけど、この学園にいる他の組織の間は性格に難があるものだったり、分家筋だったり、色々な事情で問題がある子ばかりよ。それを理事長が引き取っているのよ。まあ、全員がそういう訳ではないわ。花咲姉妹みたいだね。」

「そんな生徒が固まっているのがSクラスといった訳か・・・」

「ええ、そういう事よ。まあ、Sクラスの人間が皆そうという訳で

はないけどな。」

そう言って、この話は終わりと言つ風に、手をふった。

それから、解散し、授業を各自再会した。最初はペアの相手に慣れるという事で、マンツーマンで教わるわけだが

「ねえ、慧。」

「ん？」

「私があなたに教える事、無い気がするんだけど？」

慧の知識はこと、魔法に関して言えば美夜より上だったりするため、実技の訓練しか教えることは無い訳だが、今回はそういった授業はしない事になっているため、時間が空いてしまったのであった。

「・・・銀がいるだろう。」

「はい！私は美夜にも教えて欲しいですよ？」

なので、慧と美夜、二人掛かりで銀に教える事になったのであった。

第十話 おもわぬ発見

「さて、皆に集まって貰ったのは他でもない。とうとうこの街でも誘拐事件が起こった。誘拐されたのは、言葉環^{ことのはたまき}。年齢は16歳。秋^あ鹿^い学^が園^かの生徒で属性は『音』。属性自体は珍しいものではないが、言葉の血族には『言霊』を持つものもいる。そのため、狙われたのだらう。」

秋鹿学園、天城ヶ丘学園とは違い一般校だ。その生徒が昨夜襲われた。と風紀委員長の神藤零^{しんどうれい}は言う。

放課後、生徒会室に慧達が行くと、美夜と葵が珍しく言い争いもせずに待っていた。今朝方、慧が真樹に聞いた事件について風紀委員と生徒会にも情報が入ったらしい。

そこで、一度情報を集め、整理するため、生徒会と風紀委員で集まって話し合いを行う事になった。

「以上が、昨夜起こった事件について現状で分かっていることだ。何か質問のある者はいるか？」

その問いに手を挙げたのは夢だった。

「目撃者はその少年だけなのですか？」

「ああ、どうやったかは知らないが、ホテルの従業員も他の客もまったく気付かなかったそうだ。」

慧と真樹も今朝疑問に思ったことだ。

「また、そのホテルにあった魔法感知の装置も動作しなかったそうだ。」

この魔法感知の装置とは、どの店でも大概付けているもので、魔法による犯罪行為を防ぐためのものだ。事件のあったホテルにも当然付いているものだ。

それが動作しなかったという事は魔法が使用されなかったと言っても良い。

「そうですね、わかりました。」

夢は知りたい事を聞けたため、下がった。

「他に質問のあるものはいるか？」

皆、隣近所の者とヒソヒソと話はあるが、質問をしようとする者はいない。なら、一度解散しようとして、零は腰を上げるが、待ったをかける者がいた。

「悪い、俺からも一つ良いか？」

「む、黒澤 慧か。何だ？言ってみる。」

上げかけた腰を再び降ろし、零は慧に話すよう促す。

「そのホテルはどこだ？」

「それを聞いてどうする？」

「行つて見るに決まっているだろ？何か、身落としていることがあるかもしれないだろ。」

周囲は慧の言葉使いにざわめきを見せる。年上のもの相手に、その言葉使いはなんだ、とでも言いたいのだろう。しかし、そのような言葉で話しかけられた零は気にせず、慧の質問に答える。

「櫻木駅近くのビジネスホテルだ。名前は『ビジネスホテル ビーツ』だ。住所は・・・」

慧は、零の情報をメモに取り、ポケットに入れた。

「有難うな。それじゃ、行こうか。銀。」

「はい。主。」

そして、銀と共に会議室から出て行った。その後ろ姿に風紀委員はなんだあいつはとののしるが

「うちの慧をあまり悪く言わないでくれないかしら？」

と、美夜が言うと、直ぐに静まり返った。

それを機と取ったのか、葵が場を締めた。

「さあ、ぼおつとしていないで、巡回に移りなさい。まだ、日は高いとはいえ、路地裏など、誘拐が起こりうる場所はあるのだから。」

「」「はー」「」

葵の号令で、風紀委員達は一斉に行動に移りだした。その迅速さは流石だろう。

「美夜、うちのが悪かったな。」

「まあ、いいわよ。慧は気にしなさそうだしね。」

残ったのは零と光、葵。そして、美夜と夢だ。

「そうか。黒澤を追わなくて良いのか？」

「ええ、大丈夫よ。銀もいるしね。場所は分かっているんだから急ぐ必要はないわ。」

「ふっ、信頼しているのだな。」

「まあね。一緒に暮らしてるんだから当たり前でしょ？」

信頼も出来ない相手と一緒に生活する事を許すような性格ではない美夜だ。それが、今も続いている以上、それだけ、慧と銀に信頼を置いているのだろう。

そんな美夜が珍しく、零は内心動揺しているが、表にはださない。風紀委員の長である自分が動揺する事は、他の委員へも影響を与えることを知っているためだ。

「それも、そうだな。では、俺達は先に行く。他の者ばかり働かせ、俺達が動かないのはみつともないからな。」

そう言い、零は葵と光を引き連れ、会議室を出て行く。葵は零の後ろを歩きながら、去り際、美夜を一睨みし、出て行った。

「なに、あの子？」

美夜は葵の行動に首を傾げる。何故、睨まれたか分からないからだ。

「はあ、大変ですね。神藤さんも花咲さんも・・・」

慧と銀は昨夜事件のあったホテルへ来ていた。道は特に入り組んでなく、直ぐに発見できた。慧と銀は中へ入りフロントで『魔法使い』の証明書を見せ、昨夜事件があった部屋の鍵を受け取り、向かう。が、意外な人物も一緒だった。

「それで、何を調べるつもり？既に警察に調べられた後なのよ？」

花咲 薫がどうい風風の吹きまわしか、ついて来たのだ。そのためか銀は不機嫌である。

「主には主の考えがあるんです。勝手について来ておいて、五月蠅いですよ。少し黙ったらどうですか？」

銀は相変わらず、この次女が嫌いらしい。普段はしない冷たい態度をとっている。

「ぐっ・・・」

薫は薫で、珍しく銀に冷たく言い放たれ、落ち込んでしまった。慧としてはいてもいなくても問題ないので放っておく事にした。そ

もそも何故、嫌っているはずの自分について来たか分からないのだ。こちらから話かけて怪我するのは面倒だということまで気にしない事にした慧だが、しかし、銀は気になったようである。

「それで、何故あなたがついて来たのですか？」

薫はその質問に気を取り直し、慧を睨み、胸を張って言う。

「あなたの監視よ。あの生徒会長のお気に入りのあなたなら何かに気付くかも知れないって、神藤委員長のお命令よ。」

慧は、まあ、そうでなきゃ俺について来ることはないかと納得し、薫へ意識を向けるのは止め、何か痕跡はないかと見渡すが、見たところでは特に何の変哲もない。

「ざっと見たところでは変わった所は特にないな・・・銀。ちょっと隣の部屋に行ってくれませんか？3分経ったらこっちへ戻ってきてくれ。」

「分かりました。3分ですね？」

慧は、一緒に借りていた隣の部屋の鍵を銀に渡した。

銀は部屋を出て行き、残ったのは薫と慧の二人となった。慧は気にしていないが、薫にとっては気まずい沈黙だ訪れる。

そわそわし始める、薫をしり目に、「慧はそろそろ、か」と呟くと、いきなり大声で、銀に呼び掛ける。そして、壁を叩いたりもした。

「ちょっと！いきなりなに！？気でも狂ったの？」

いきなりの行動に驚く薫。そう思つのも無理はない訳だが、気にせず続ける。

3分程経過し銀が戻つて来ると、今度は逆隣の部屋、次は下の部屋と最後に上の部屋と、銀に行つてもらい、同じ様に、大声で銀に呼び掛け、銀が行つた側の壁や床、天井を叩いた。

そして、銀が上階の部屋から戻つて来ると、ありがとうと銀に声をかけ、頭を撫で始める。

「……で、一体あんたは何がしたかったの？」

無視され続けいい加減頭に来たのか、低い声で聞いて来る。

慧は無視し続けた方が面倒かと思ひ、質問に答える事にした。

「いや、犯行時、誰もこの部屋でそんな事が起こっている事に気付かなかつたらしいからな。この部屋の防音を確かめていたんだよ。それで、銀。俺の声や、壁や床、天井を叩く音は聞こえたか？」

慧はこの部屋の防音を確認していたのだった。

「いえ、全く聞こえませんでした。」

そのことに、驚く薫と予想通りという顔をする慧。

「銀の耳にさえ聞こえない程の防音と俺が、少し本気で叩いても傷つくどころか、振動さえ漏らさない壁と床……この部屋普通じゃ

ないな。」

銀は元々狼だ。その耳は人より遙かによい。そして、慧の拳は魔法で身体能力を上げていなくとも、少し本気を出せば、簡単なヒビ位は入る。なのに、何も影響がない。

「それが本当なら、この部屋で何かあっても気付かないわね。他の部屋も同じなのかしら？」

「・・・調べてみようか。」

こうして、他の部屋も同じなのか、少し離れたいくつかの部屋で試したが、声や音は響いて来た。意外な事に薫も協力してくれた。

「つまり、この部屋だけ特別な構造になっているって訳ね。」

薫の言う通りなのだろう。一応、従業員に確認を取るが、こんな部屋有るはずがないと聞いていた。これだけの構造にするのはかなりの費用がかかる。このホテルを運営している企業ではまず作らないモノだ。

「この部屋をこの状態にしたのは犯人達と言う事か・・・」

慧は考える。ここ最近修理したと言う事もないらしく、魔法以外ではありえない。なら、どんな魔法なら、こんな事が可能か・・・慧が思いつくのは一つの属性。しかし、その属性を持つ者がこんな事をするはずがない。と否定する。その者は不条理を嫌い、今のままでは変えられないと『断罪の牙』を抜けたのだ。

そんな男が、誘拐などという、不条理に手を染めるはずがない。

「主、例え魔法でこの状態にしたといっても、どうやって魔法を使用したのでしょうか？」

確かに、その問題もある。こういうホテルは各部屋にも防犯措置として、装置を取り付ける事を義務付けられているはずだ。魔法を使えば、従業員が気付かない訳が無い。

「本当、不思議よね。ここの装置、壊れているのかしら？これじゃ、見かけだけじゃない。」

「見かけだけ？・・・そうか！銀、この部屋をあの装置以外、凍らせるー！」

「ちょ、ちょっと！何を言って・・・」

慧は何かを思いついたのか、銀に魔法を使うように言う。薫はその事に驚き、止めようとするが、その前に銀は魔法を使った。

銀は銀で良く分かっていないが、慧の言う事なので、なにかしら意味があると思い、『凍結の世界』という、周囲を凍らせる魔法を使用した。慧に言われた通り、防犯装置は避けて。

「何やっているのよ！こんな事したら防犯装置が動作するじゃない！」

薫は寒いため、足踏みしながら慌てて言う。だが、部屋からは出ようとしなない。付き合いが良いんだか悪いんだか・・・

「そつだな。あれが本物なら装置は動作するはずだ。」

しかし、30分ほど経過したが、従業員も警備員もやってこない。街中なのだ、ここまで時間がかかるのはおかしい。

「・・・ねえ、いくらなんでも誰も来ないっておかしいわよね？」

「ああ、そうだな。いくら警察を待っていたとしてもこれは遅すぎる。」

慧は防犯装置に見えるものを取り外した。すると

「これって・・・」

「そ、お前の言った通り、見せかけだよ。」

それは、防犯装置でもなんでもない。中身が空のハリボテだった。

「はは、これじゃあ、魔法が使われていても分からない訳だ。」

従業員を問い詰めると、本物は入り口にあるものだけで、各部屋にあるものは見た目だけのハリボテらしい。わざと見える所に設置することで、実際はただのハリボテなのに本物と認識させる、昔からある方法だ。

経費削減のため、仕方なくとのことだ。警察は動作までは確かめて行かなかったので、慧達が来ても同じだろうと嵩をくくっていたそうだ。

「これで、このホテルで起こった事はだいたいの予想がつくわね。本物が入口だけなら他のどこからでも魔法を使って侵入できるからね。」

言つと、薫はお茶を一口含む。

「でも、わからない事が二つあります。誘拐犯はどうやって、被害者がこのホテルを使うことを知つたのでしょうか？それと、あの部屋を変えた魔法は一体……」

銀はケーキを頬張る。

3人は駅前の喫茶店で休憩している。調べた内様を整理するためだ。

「前者は、ただタイミングが悪かつただけだろう。多分、元々言葉さんを誘拐する気だつた。そして、都合よくあのホテルに入ったため、実行に移つた。それだけだと思う。」

この街で誘拐を犯そうとする以上、周囲の下調べはしていただろうからな。と付け加える。

「そして、後者は……分からないな。」

心当たりはあるが、慧の中でそれは無いと否定を繰り返しているため、そう答えるしかない。

同じ属性とも考えられるが、あの属性は本当に希少なうえ、扱いが難しい。あの人以外使える者はいないと慧は確信している。

「主？」

銀は黙りこむ慧を心配そうに見つめるが、なんでもないと首を振る。

「まあ、ここまでわかれば今日の所はよしとしますか。さ、俺達は一度、美夜と夢さんと合流しよう。」

「私も行くわ。風紀委員の仕事があるし、この事をお姉ちゃんと委員長に伝えなきゃ。」

元々、慧達の監視に来た薫だ。むしろ、嫌っている慧と一緒に喫茶店にいる事自体不思議だが、どうやら、今回の事で少しは慧の事を認めたらしい。態度が少しだが軟化した。

3人は席を立ち、喫茶店を出て行くのであった。

ところ变つて、場所は櫻木市の中心街の路地裏。

そこで今、まさに誘拐が行われていようとしていた。

「は、離して！」

「騒ぐな！おとなしくしろ！」

抵抗する少女を無理矢理連れて行くこととする男達。

少女は、買い物に来ていたのだが、近道しようと裏道へ入っていた。すると、男達が自分と違う制服を着た少女を無理矢理何処かへ連れて行くこととしていた。いきなりすることに固まってしまった少女は見つかり、今に至る。

「だ、誰か！助けて！」

少女は必死に助けを呼ぶが誰もこない。ここは普段人通りの少ない道で、今日は更に輪を掛けて少ない。男達が入払いをしているのだろう。来るはずがないのだ。

「無駄だ。諦めろ。」

少女は必死に抵抗するが、大人の男数人に抑えられているのだ。どうすることもできない。

「さあ、行くぞ！」

少女達は男達に何処かへと連れられて行くこととしていたが・・・

「まあ、そう慌てるな。」

そこに、いきなりここにいる誰の者でもない声が聞こえてきた。

「誰だ！」

男達は警戒する様、周囲を見渡そうとするがドサツ！という音が聞こえてきた。

そちらを見ると、少女を抱えていた仲間の一人が倒れており、抱えられていた少女は何が起こったのかわからず、キョロキョロと辺りを見渡していた。

その間に、また一人、少女を抱えた男が倒れた。

そこで、男達はやっと「それ」をした人物の姿を捉えた。この辺りの学園の制服に身を包んだ見た目、普通の少年だった。

「何者だ！お前は！何が目的だ！」

「ふむ、変な事を聞くな。誘拐現場を目撃したんだ。どうにかしようとするのが人間だろう？まあ、お前達のような誘拐犯を捕らえるのが今のバイトでもあるがな。」

少年、葛城 真樹は飄々と答える。その言葉に、男は笑い真樹に取引を持ちかけた。

「要は金と言うことか？なら、話は早い。協力しろ。そうすれば、お前が受け取るだろうバイト代より遥かな大金が手に入るぞ？」

「おお！それは良いな！」

真樹はその話を聞き、顔を輝かせた様にする。男達は再び笑う。この場を凌いだら、困んでボコボコして、こいつも売り捌こうと考えているのだ。

「だが・・・」

しかし、そうはいかなかった。

「悪いな。お前らの様な存在を俺も、そしてあいつも・・・見逃す気も許す気もないのだよ。」

その言葉を最後に、真樹は『風』を足に纏い、瞬時に男の懐に入ると、一撃で気絶させた。その動きに男達は着いて行けず直ぐに、

皆、意識を失った。

男達が動かなくなった事を確認すると、一人ずつ縛り、最後に少女達の無事を確認してから、依頼主に電話した。

「・・・葛城だ。誘拐犯を確保した。人を寄こしてくれ。」

『わかりました。風紀委員をやりますので、あなたは彼女達を人目のある場所まで送ってあげてください。』

少し待つと、若い女性の声が聞こえてきた。今回の依頼主はどうやら女性らしい。少女達をどうするか聞くと、送る様言われたので了承した。

「心得た。後、多分だが、この男達は依頼のあった者達とは違うと思うぞ。」

『それは何故ですか？』

依頼主の女性は聞く。しかし、その問いは知らない事に対する問ではなく、生徒に問題の答えを聞く先生のような問いだった。

「フツ、わかっているくせに聞くのだな。まあ、いい。この男達は俺に大金が手に入ると金をちらつかせた。つまり、この少女達を何処かに売ろうとしたのだろう。だが、依頼のあった誘拐犯達は誘拐した者達を必ず返してくる。つまり、すくなくともこの男達はあなたが御所望の誘拐犯ではなかったということだ。」

まあ、こいつらが売ろうとした先がその依頼の誘拐犯達という可能性はあるがな。」

「はい、その通りです。あなたが今回捕まえた誘拐犯は違いました。後、あなたが言った最後の可能性も『視てみました』が違ったようです。そちらはどこぞの国の方々見たいでした。こちらの人間を動かしましたので大丈夫です。」

真樹の答えに満足ですと言った声で答え合わせをする女性は、真樹の言った可能性についても答えを出した。

「流石だな。『真の未来』殿。では俺はこの少女達を送っていく。」

『ええ。よろしくお願いします。葛城 真樹さん。』

真樹は電話を切ると少女達へ声をかけ送っていった。

その場には気絶した男達が残された。

真樹達が立ち去った後、そこに現れたフリード

「ふっ、良い腕の魔法使いだ。将来が楽しみだな。」

そう言いながら、周囲に他に人がいない事を確認すると、フリードは気絶している男達に近づいて行く。その体からは殺気が放たれている。

そして・・・

その日の夕方、ニュースが流れた。それは誘拐犯を捕まえたというものではなく

『今日未明、櫻木街、中心街の路地裏で複数の遺体が発見されました。発見したのは天城ヶ丘学園の生徒で、風紀委員のため見周りをしている中発見したそうです。』

殺人事件のニュースだった。何故、殺人としたかそれは

『どの遺体も、首を鋭い刃物で切られ亡くなっていた様です。』

その事件は、『七大法典』がいるため、基本的に平和な櫻木街に、一夜にして広がった。

「面倒なことをしてくれたね。フリード。」

博士と呼ばれる男はフリードを責める。

「あんな事をしては、今後被験者を確保しづらくなるだろう。」

男達を殺してしまったため、警察も当然、巡視を強化するだろう。また、学校もそれなりの対応を取ることになり、誘拐がしづらくなる。

「すまなかったな。俺達の行動に便乗し私腹を肥やそうとするゴミどもがどうしても許せなくてな。殺ってしまった。」

フリードは全く悪びれずに言う。

「だが、どうせ、もう依り代の目ぼしは付いているのだろう？」

最近の博士の機嫌が良い事、誘拐の依頼が減った事からフリードは問う。

「ああ、そうだった・・・そうだったよ。その通りだよ!」

フリードの言葉に不機嫌そうな顔から一転して嬉しそうなになる博士。

「そう、彼女さえ手に入れば、僕達の神は蘇る。フリード、多少時間がかかっても良い!彼女を連れて来てくれ!」

そう、言いながら、博士は一枚の写真をフリードに手渡した。

その写真を受け取ったフリードは動揺する。その写真に写っていたのは天城ヶ丘学園の制服に身を包んだ少女だ。

「ん?どうしたんだ?その少女がどうかしたか?」

「・・・いや、なんでもない。」

フリードが動揺したのは、博士が指摘した少女ではない。その横にいる、面倒臭そうな顔をした、だが、楽しそうにしている男。最後に見たのは5年前、当時はまだ12歳だった少年だ。

しかし、その顔を見間違う事はない。自分と晁、白河がそれぞれの知識と技術を教え込んだ、唯一弟子と呼べるような存在。それは・

「まさか、こんな形でまた会う事になるとはな・・・慧・・・」

近い未来、必ず会う事になるだろうと予想し、
眩くフリードであ
った。

第十一話 見えなかった未来その結果

「そうか、そちらは成果があったか。こっちは……」

朝、階段の踊り場、慧と真樹は昨日起こった事を話している。

「……と、いうことがあってな。すまない。俺が、風紀委員に引き渡すまで残ってれば……」

「いや、真樹のせいじゃないし、謝るものでもないだろ。」

「だが、緩奈が……」

「それは、仕方がないさ。当分落ち着くまでは緩奈を一人で帰さない方が良いな。」

緩奈は誘拐された事があり、それ以降、こういった事件があると、情緒が不安定になる。以前は引き籠るなど大分酷かったが今では改善されている。しかし、それでも体調を崩すなど、影響はあるのだ。

「そうだな……慧はやはり生徒会か？」

「まあな。今回の事で、学園の依頼から『魔法使い』への依頼に変わるだろうからな。人手は足りなくなるだろう。」

今までは『学園』への依頼だったが、今回の事件で『魔法使い』への依頼となるだろう。そうになると、一般の生徒への協力は不可能になる。これは風紀委員にも言えることで、風紀委員で『魔法使い』の資格を持つものしか動かせなくなる。つまり、人手がいきなり減

るといふことだ。

なお、依頼が取り下げられるという事はないだろう。それだけの力がある者がいないなら話は別だが、この学園にはいる。一人は神凧 美夜、もう一人は神藤 零、そして最後にまだ見ぬ、魔法部部长だ。

「わかった。朝は無理だが、帰りは俺が送る事にしよう。」

「ああ、朝に事件が起こる事はまず無いだろう。人の目がありません。緩奈のこと頼むな。」

二人がそう打ち合わせしていると、件の人物が来たようだった。

「二人とも！何をやっているの？もうすぐ授業よ？」

緩奈は少し顔色が悪く声が震えていた。

「ああ、悪い。直ぐ行く。」

慧と真樹は緩奈の方へ歩いて行く。緩奈は二人が近づくと二人の腕に抱きついて来た。

どうやら、慧と真樹が近くにいなかった事が不安だったようだ。少し震えている。

慧はそんな緩奈の頭を、振るえが止まるまで撫で続けた。真樹に視線で改めて緩奈の事を頼みながら。

「皆さん。わざわざ集まって頂、有難うございます。皆さんに集まっていたいただいたのは、解っていると思いますが、誘拐事件に関する事です。」

未来はそう言うてから話し始めた。今、この場所・・・理事長室にいるのは、風紀委員の委員長、二人の副委員長、生徒会の会長、二人の副会長、そして銀だ。

「これまでは『学園』に対する依頼でしたが、『魔法使い』に対する依頼となりました。原因は昨日の殺人事件です。被害者は昨日、少女二人を誘拐しようとした犯人達でした。」

少女二人は、私個人が今回の誘拐事件の調査を依頼していた『魔法使い』が犯人を捕らえた事で無事でした。まあ、この誘拐犯達は依頼内容の誘拐犯とは別の犯人でしたが。」

その後、その『魔法使い』から連絡があり、風紀委員を向かわせるので少女達を送ってくれる様に頼んだのですが、その間に犯行は行われたようです。」

昨日の事件の全容を話し、一息つく未来。そこに質問が投げかけられた。

「質問が三つあります。一つ、その殺された誘拐犯達が、私達が追っていた誘拐犯ではないという根拠は？二つ、どこの誰に、そして何故、誘拐犯は殺されたのか。三つ、理事長が個人的に依頼した『魔法使い』とは誰ですか？」

美夜が矢継ぎ早に質問する。

「そうですね、まず一つ目の質問から、彼等を捕まえた『魔法使い』」

が言うにはお金目当ての犯人達だったそうです。私達が追っているのは、少なくとも身柄を必ず返す犯人なので、お金目当てではない。よって違うと判断しました。二つ目についてですが、これは私も解りません。三つ目はすみませんが答えることはできません。」

その言葉に慧と銀を除いて、不審をあらわにするが、未来は気にせず続けた。

「今回の依頼は相当厄介なものです。手に余るようなら、拒否していただいて構いません。私からの話は以上です。」

未来がもう話は終わりですと言うと、退室を促すように扉が開き、全員退室し始めた。その表情は皆、絶対犯人を見つけ出すと物語っている。しかし、二人、動こうとしない者達がいた。

「慧？銀？どうしたの？」

美夜は不思議そうに問う。他の皆も立ち止まり振り返る。

「すまん。俺はまだこの人に用事がある。」

「私は、主と一緒にいます。」

その言葉を聞き、不審な目を向ける。美夜以外は・・・

「わかったわ。生徒会室にいるから、終わったら来なさい。人手が足りないんだから。」

「ああ、わかった。ありがとう。」

美夜と慧のやりとりに一部を除き、驚くが、当人達は気にしない。美夜は歩みを再会した。美夜の行動につられるように他の皆も退室を再会した。

全員が退室すると、慧は話し始めた。

「聞きたい。あんたの力でも、あの未来は見えなかったのか？」

慧が指しているのは殺人事件の事だというのは明白だろう。未来の力をもつてしてなら、見えていても不思議ではない。しかし

「すみません。私の力でも、この未来を見る事は出来ませんでした。」

その言葉に驚く慧。未来の力が及ばないことがあるとは思ってもなかったからだ。

「私の力は数ある未来の可能性、運命から近いものを見るものですから、こういうこともあります。それが、とてつもない力を持つ者が相手ならなおさらです。」

つまり、対象の力、魔力や意思等の力が強ければ強い程、曖昧になる。といつても、未来も視るべき未来を絞ればそれにも対応可能らしいが、今回は他にも視ていたので、この未来を視ることは出来なかったのだ。

「なら、今回の相手は……」

「ええ、正直、美夜さんや零さんでは手に余るでしょう。」

その言葉を聞き、考え込む慧。昨日調べた結果、起こった事件。そして、未来の話、それを統合すると、絶対とはいえないが、益々ある可能性が頭から離れない。

「……どうしましたか？慧？」

「なあ、未来さん。これは俺の予想なんだが……」

そして、慧は自分の頭から離れない人物の名前を口に出す。もしかしたらその者が関わっているかもしれないと。

「……確かに、彼なら、私の未来視を妨害出来るでしょう。ですが……」

未来もその人物なら可能だと納得するが、しかし、誘拐事件の犯人とするには、やはり無理があるため、言いよどむ。その人物はこのような事を一番嫌っていたはずだからだ。

「……正直、私も彼だとは思いませんが、注意は喚起します。もし、彼だとして彼とまともにやり合うのは正直私でも無理です。もし、本当に彼が関わっていた場合、最悪、他の『七大法典』に協力を仰ぐ必要があります。」

「依頼は取り消さないのか？」

慧は依頼を取り消すように促すが、未来は首を振る。

今、未来が言った通り、まだ決まっていないが、もし、あの男だったら、学生レベルでは例え美夜や零でも相手は不可能だ。依頼を取り消すのが妥当のはずだが未来はそれをしない。

「まだ、決まった訳ではないと言う事もありますが、一番の理由は、彼等がそれで引き下がるか、ということですよ。」

退室する姿を思い浮かべ、首を振る慧。あれは何を言っても止めない。そう思う。

「なら、知らないところで動かれるより、動向を把握出来ていた方がいいでしょう。」

「そうだな。わかった。ありがとう。話を聞いてくれて。」

慧は未来に頭を下げる。自分の中にあつた疑問を吐きだせたのが良かったのだろう。少しスッキリした顔になった。

「いえ、私も貴重な情報をいただきました。でも気をつけてください。いくらあなたでも、彼の相手は……。」

「わかっている。もし、戦うことになっても逃げる事を優先させるさ。」

そうして、慧も退室しようとするが、今まで黙っていた銀が疑問の声を上げた。

「あの、主や未来がいう『あの男』とか『彼』って誰の事ですか？」

その言葉に、そう言えば、銀を組織に連れて行ったのは『あの男』が出て行ってからだだった事に思い至り、話す事にした。

「『あの男』ってのは、な。危険度ランクSSS。『鋼王』じゆうおうと呼ば

れる魔法使い・・・フリード・ディゼンダー』。俺に魔法と戦い方を教えてくれた、師匠呼べる人達の一人だよ。」

ひとしきりフリードについて銀に話した後、慧は理事長室を出て生徒会室へと向かった。少し遅くなったので早足だ。

その間、廊下の窓から校庭を見るが、まだ、放課後も半ばだというのに一人もいない。

殺人事件が起こったこともあり、一時的に放課後の部活動を禁止したためだ。そんな寂しい校庭を眺めながら、緩奈と董は無事に帰ったのか気にする慧。

緩奈は真樹が送っていったし、董も一緒に帰ると言っていたので大丈夫と思うが、友人として義兄として心配する慧だった。

「大丈夫ですよ。真樹は強いんですから。主程ではないにしても。」

そんな慧に気を使ってか、励ましの言葉をかける銀。最後に慧を押し所がまた銀だ。

そんな銀に何時も支えられているなと改めて思う慧であった。

生徒会室に入ると、美夜と夢が待っていた。

「お帰りなさい。話は終わったの？」

「ああ・・・」

「そう、じゃあ、行くわよ。」

美夜は慧と銀が戻ると早速巡回に行こうとする。

「ちょっと待ってください。美夜、黒澤さんに何も聞かなくて良いのですか？」

夢はその行動を止める。当り前だろう。理事長と密談と言う程ではないにしろ、隠し事をしているのは確かなのだから。しかし、美夜は何も聞いてこない。それは慧も不思議に思うところであった。

「そうね。確かに聞きたい事は色々あるけど、でも今は、この事件を解決するのが先決でしょ？それに、いつかちゃんと話してくれるでしょ？ねえ、慧。」

出会うて間もないのにここまで信頼してくれる美夜に驚くと共に、この信頼は裏切れないと、慧は思い一つ、話す事にした。

「美夜・・・ありがとう。でも夢さんの疑問も最もだ。だから、一つ話しておかなければならない事がある。それはこの事件にも関わることだ。」

「・・・そう、わかったわ。それで、話って？」

美夜と夢が話を聞く姿勢になるのを待ち、話始める。

「俺が残ったのは、理事長に確認したい事があったからだ。理事長の力でこの未来が見えていたかどうかをだ。だが結果は見えていなかったそうだ。」

その言葉に、驚く美夜と夢。未来の力が及ばない事もだが、その

事を『七大法典』確認する慧にもだ。

「理事長が言うには、相当の力の持ち主が相手でない、こんな事にはならないそうだ。つまり、誘拐犯を殺した犯人は、少なくとも『真の未来』と同等かそれ以上ということになる。」

さらに驚く二人。この事件がそこまでのものとは思っていなかったからだ。

「どうする？相手は、少なく見積もってもランクSSクラスだろう。理事長が言ったように拒否しても良いんだぞ？」

SSSを想定しているが、それを言うのは慧としても、フリードの関与を認めるものだったため、避けた。

「・・・ふふ、まさか。例え相手は格上だとしてもだから何だっていうの？私達の目的は、誘拐の防止と犯人の捕縛。確かに私達だけでは無理かもしれないけど、風紀委員も一緒だし、理事長も手は打っているんでしょう？なら、途中で降りる理由はないわ。」

美夜は言う。他の人達の協力があれば可能だと。確かに相手がフリードであっても協力すればなんとかなるかも知れないが・・・だが、美夜や夢、零では荷が重いだろう。慧としては、ここで降りてくれた方が良いのだが、言っても言う事は聞かない事は明白だ。

「そうか・・・わかった。なら、行こう。夢さんも良いですか？」

「・・・ええ、わかりました。それと、すみませんでした。変に疑ってしまって・・・」

「いえ、いいですよ。それに、夢さんが疑ったのは美夜のためでもあるのでしょうか？気にしていませんよ。」

夢は顔を赤くして、そんな事はと俯く。美夜は、夢の背に手を当て、ありがとっねと囁いていた。

第十二話 『鋼王』

あの殺人事件から何も起こらず、数日が過ぎ去った。警察や『魔法使い』が見周りをしていたが、何も成果は得られず、また、誘拐事件もパタリと止んだ。その事もあってか、警察は表立った巡回は止め、また、学園の部活動も再会する事となった。

「事件、パタリと止んだな。不気味でしょうがない。」

「ああ、だが、緩奈の様子が正常に戻ったのは喜ばしい事だ。」

慧と真樹は最近恒例の踊り場での話合いをしている。

生徒会や風紀委員はまだ見周りを継続し、真樹もまた誘拐事件を継続して追っている。

「しかし、未だに解らないな。血筋についてはまだ解るが、属性はどうやって知ったのか・・・」

事件が始まって、もうすぐ一カ月が過ぎようと言うのに未だ、どの様にして属性を知っていたのかが解らない。外で魔法を使うなら未だしも、制限がある以上、公には使わないうえに、『魔法使い』だって、無闇に使って、目を付けられるといった事はしないだろう。

「その事なんだが、慧・・・一つ気になる事がある。」

「なんだ？」

「それが、誘拐された被害者なんだが、女性が多い事と、男性だが、皆、彼女持ちらしい。さらに、カップルで攫われた者達も中にはいる。妙だとは思わないか？」

「リア充どもめ・・・ざまあ見る。・・・ん、うん・・・」

慧は、彼女持ちの者達をののしるが、真樹に冷たい目で見られたため、咳払いをし、誤魔化した。

「確かに、何故わざわざカップルを狙うのか・・・カップルでなければいけない理由でもあるのか？」

「もしくは、カップルからしか、情報を手に入れられないか・・・」

その言葉を聞き、一つ慧の中で閃くものがあった。それは数日前、緩奈と買い物をした時の事だ。

「真樹、一つ調べて貰えないか？思い付いた事がある。」

「・・・いいだろう。どういった事だ？」

「それは・・・」

「占い？」

今は魔法学の授業中、美夜と慧は簡単な手合わせを終え、休憩しており、銀は魔法学の教科書を読んでいる。

「ああ、前に緩奈と行ったゲームセンターに良く当たって評判の占いの機械があつてな。その時、名前や生年月日、属性も入力したんだ。その機械に何らかの細工をしておけば属性を調べられるんじゃないかと思つてな。」

今朝、真樹に話した事を再度、美夜にも話す。占いについては女性の方が詳しいだろうからだ。

「・・・そうね。確かにその可能性はあるわ。でも、そういう機械は結構あるわよ？調べるのはかなり大変だわ。」

占いの機械はゲームセンターなら必ず一台は置いてあつたりする。そして、ゲームセンター自体、数がおおく、全て調べるのにはかなりの労力が必要となる。

「だよな・・・でも、何もしないよりは良いだろう？」

「ええ、そうね。早速、近場当たりから探ってみましょう。念のため、メーカーにも話しておくわ。」

「ああ、よろしく頼む。」

流石は神凧家の息女。普通、一学生がそれを言ったところでメーカーは、動きはしないだろう。例え動いたとしても時間はかかる。しかし、神凧家の言う事なら話は別なのだろう。まったく、よくできた世の中だと溜息を一つ吐く慧。

そこに、今まで教科書を見ていた銀が話かけてきた。

「あの、主、美夜。聞きたい事があるんですけど・・・。」

「ん？何をだ？」

慧と美夜は銀の方へ体の向きを変え、聞く姿勢をとる。

「はい。属性の事なんですけど、基本属性とその組み合わせによる合成属性で決まることは主から教えていただいていたのですが、美夜の『無』や零の『創造』はどういった組み合わせなのかと思いまして。」

確かに、『氷』や『炎』、『雷』と違い、『無』や『創造』他にもあるが、どういった組み合わせでそうなるのか解らないものが多い。

「そうだな・・・まず美夜の『無』だが、これは全属性の合成とされている。そして、神藤先輩の『創造』も同じく全属性の合成とされているな。」

「どちらも同じ合成なのに違うのですか？」

「ええ、合成と言っても、その属性のバランスは異なるのよ。私の場合、『無』だから『闇』の属性が強いみたい。零の『創造』は逆に『光』が強いようね。」

同じ属性の組み合わせでも、属性の適正や強さのバランスで変わるものが合成属性であり、だからこそ、合成属性の持ち主はその属性以外の魔法を使えない。そのバランスを崩すということはこれまで使用していた魔力の運用を変えなければならぬということだ。

例えるなら、交流で動く機械に直流を流すものだ。動く訳が無い。

「では、『音』や『呪』といった属性は？」

「いいところに気がついたな。『音』や『呪』はこれまでの合成とは少し異なる。これらの属性は『亜種』と言われる属性だ。例えば、銀が今言った『音』は『風』の『呪』は『闇』の亜種と呼ばれている。だが、最近はどういった属性は、属性外魔法との合成ではないかと言われている。」

属性外魔法とは、『念話』や『身体強化』など、属性に囚われず使える魔法の事だ。しかし、属性に囚われない半面、技術的にも相当難しい。慧も使えないわけではないが、『身体強化』を使うより、『闇』で身体能力を上げた方が効率がいいので滅多には使わない。

「そう言う事。『音』だったら、『風』と『念話』系、『呪』だったら、『闇』と『念話』系かしら。後は、『風』と『遠視』で『千里眼』とかね。まあ、色々あるわ。ただ、こういった属性は珍しさでいえば、『無』や『創造』に劣るけど、難しさで言えば、それ以上ね。」

属性という概念がないため、どうしても魔法に大切なイメージがしづらい。そのため、扱いが難しく、使いこなせるものは少ないのだ。

「まあ、そういつて事も、応用で似たような事は出来たりするんだけどな。銀、そういつた応用が一番効く属性は何かわかるか？」

「そうですね。『風』じゃないでしょうか？『風』が基本属性の中で一番合成の中に組み込まれていますし、何より、一言で『風』といても様々なものがありますから。」

『風』は、『炎』と比べれば威力は低く、『水』と比べれば操作の柔軟性に欠ける。『土』と比べれば防御は低い。『光』と『闇』に比べ、総合力に欠ける。しかし、ずば抜けて高いのはその応用力だ。『風』を極めれば、様々な事ができる。そして、他の属性では出来ない事、空を飛ぶ事も出来る。

だからこそ、『風』を本当の意味で扱えるものは数が少ない。

「うん。正解だ。」

銀の回答に満足がいった慧は銀の頭を撫でる。いつもの2割増しだ。

「~~~~~//////」

銀の尻尾も2割増しで左右に振られている。

「ふふ、さて、それじゃあ再会しましょうか。」

「ああ、わかった。」

慧が銀の頭を一頻り撫でるのを見計らい、慧に続きを促す。

それに答え、慧は再び美夜の正面に立ち、構えを取る。今回は属性魔法を使わず、身体強化だけで手合わせしている。これは、慧が身体強化の魔法が苦手だからだ。

因みに何故、苦手かというと、『闇』に頼り過ぎていたせいだ。周囲も慧を実戦向きに鍛えたため、身体強化の技術は二の次にしていたのだった。

「慧はまた、生徒会か、つまらないな」

「そう言うな。あいつにも色々事情があるのだから。」

「そうですよ。緩奈さん。それに緩奈さんはまだ良いですよ。私なんか、朝の校門とお昼でしかお兄ちゃんと会えないんですから。」

放課後、緩奈と真樹、董は3人で帰っている。これは、殺人事件が起こってから続く光景で、緩奈と董の安全を気遣い、慧が真樹に頼んだためである。

真樹は慧にもう一つ頼まれていたことはこの後調べる予定だ。いづもなら、授業を後回しにするが、緩奈の事を考えてのことだ。生徒会でも近場から調査することは聞いていたので、真樹は街の一番外側から行う予定でいた。

「そっか、そっだよな。ごめんね董ちゃん。」

「い、いえ、大丈夫ですよ。そんな、謝らないでください。」

なんだかんだで、この二人、結構はやく打ちとけた。真樹は緩奈が自分たち以外を受け入れようとしている事に嬉しく思う。声にも表情にも出しはしないが……

「ふむ。所で、董嬢。君の姉上達だが、その後どうなんだ？」

真樹は気を使い、話を逸らした。また、葵と薫の事が気になるからでもある。二人が慧に嫌がらせをしていた話は聞いていたが、慧

が出て行ってからの話はあまり聞いていなかったので気になっていた真樹は、丁度良いと聞く事にした。

薫も質問の意図をくみ取り、少し悩んだ後話始めた。

「そうですね・・・相変わらずといえは相変わらずですね。やっぱり二人ともお兄ちゃんを嫌っているというか・・・葵お姉ちゃんはお兄ちゃんが、美夜さんが側に着いた事が気に入らないみたいで、薫お姉ちゃんはお兄ちゃんが出て行く時、お母さんにこれまでした事をばらされて、お母さんに怒られた事を根に持っている感じです。でも、以前みたいな、陰湿な感じはなくなりました。それと、薫お姉ちゃんですけど、お兄ちゃんと事件のあったホテルに調査に行つて以降、あまりお兄ちゃんを悪く言わなくなりました。」

薫は慧の事を認め始めた様で、悪くは言わなくなつた様だ。

「ふん。そうなんだ。所で、事件と言えば、あれから全然聞かなくなつたけどもう解決したの？」

緩奈は真樹に問いかける。この友人が一番事情に精通していると知っているからだ。

「いや、まだ解決していない。ここところ、急に犯行は止んだがその理由は解っていない。考えられるのは、警察の巡回が止むのを待っているのか、犯人の目的が達成されたか・・・」

「残念惜しいな。」

そんな声が急に聞こえてきた。

「正解は、ターゲットの目ぼしが付いたから、警察の巡回が止むのを待って犯行に移ろうとしていた……だ。」

そこに現れたのは金髪の男……フリードと、制服達だ。

場所は緩奈家近くの公園。周囲に人影は無く、既に人払いを終えた後だった。

真樹は内心舌打ちをした。気が弛んでいたのだろう。考え事に気を取られて接近を許してしまった。

「あ、あなたは誰ですか？」

緩奈は震えながらも、相手に問う。

「そうだな。今、話題の誘拐犯で、殺人犯とも言えれば解ってもらえるかな？」

フリードはそう言いながら緩奈の方へ近づいて行くが、その間に真樹が入り込んだ。

「董嬢、緩奈と一緒に逃げろ。時間は俺が稼ぐ。」

真樹は董に緩奈を託す。緩奈は、顔が青くなり、足も震え、真樹の声は聞こえないだろうと判断したからだ。

「で、でも……」

「いいから、早く！慧を読んで来てくれ！」

真樹の尋常じゃない叫びに、やっと冷静に考えられる様になった。董は緩奈を連れ、逃げようとするが……

「すまないな、お嬢さん。その少女、仙海。緩奈は置いて行ってくれ。」

フリードは真樹が反応するより早く二人の前に移動し、董が魔法を使う前に、董と緩奈を気絶させ、緩奈を制服達へ渡した。

「つち！」

真樹はそうはさせるかと、制服達へ風の刃を放つが、『黒い何か』が間に入り、風の刃を防いだ。

その隙に、制服達は逃げ出し、それを追いかけようとする真樹は、フリードに立ちふさがれ、追う事が出来なかった。

「……何故、緩奈を攫う……」

「ふむ。少年は俺達の事を探っていただろ？そこまでは調べていなかったのか？」

その言葉に、何時の間にとと思うが、先ほど言っていた言葉に、答えはあった。

「……そうか、あの時、俺が誘拐犯を捕らえた時、見ていたのか……」

「ご名答。いや、少年の腕は凄いと思う。少ししか見ていないが、かなりの力を持っている事はわかった。ランクAは固い。流石、慧

の友人だ。」

そこに、親友の名が出てきた事に動揺する真樹。一体この男は何者なのか……

「何者だ、貴様……何故ここで慧の名が出てくる……」

フリードは董を公園の隅へ移動させながら答える。

「ふふ、何故……か。それは、俺が慧の知り合いと言う事だ。もし、生き残ることが出来たなら、慧に聞いてみるがいい。俺の名は『フリード・ディゼンダー』。『鋼王』と呼ばれる魔法使いだ。」

そして、戦闘が始まった。

真樹は体に『風』を纏い、高速で移動しながら風の刃を放つが、全て避けられるか、先ほど動揺『黒い何か』に防がれる。それは黒く、まるで金属の様な光沢を放っている。

「それは、『鉄』か！」

「ほう、観察眼も優れているな。そう、これは『鉄』だ。」

それは、公園にある砂鉄を使い、作りだした鉄の壁だった。風の刃では切れない程の厚さを誇る……

「ならば！」

真樹は気合いと共に、突風を放つが、全て鉄の壁に防がれる。

「ふっ、その程度で吹き飛ばされるような強度ではないぞ。」

が、そこでフリードは真樹の姿を見失ってしまった。董がまだいる以上、逃げたとは考え辛い。魔力を感じようとするが、風により、そこから中に魔力を感じるため、察知できない。

「やるな。一体どこから来る……」

「……風よ、極限の渦とかせ……サイクロン！リミット・ブレイク！」

「ぬー！」

上空から、落ちながら真樹は『風』属性の最上級の魔法の一つを放つ。フリードはたまらず、重心を落とし、砂鉄で更に分厚い壁を作り防御の姿勢を取る。

全てを削り取る風の渦がフリードに直撃するのを確認すると、真樹は董を担ぎ、その場を離れようとした。

自分とフリードの格が違いすぎるのだ。勝てないと判断した真樹の判断は正しかった。

しかし、意識を一時とは言え、フリードから外したのは間違いだった。

「グフッ！」

鉄の槍が、真樹の腹を貫いた。董に当らなかったのは幸運だろう。

「……何が……」

真樹は振り向く。すると、そこには

「その年でこれだけの魔法。凄いな。訂正しよう。クラスSは固いな。」

そこには銀色の鎧を纏ったフリードがいた。

「・・・なんだ、ゴホ！・・・それは・・・」

「これか？これは、ミスリル銀の鎧だ。いくら風の最上級魔法でもこれに傷を付けることは不可能だ。」

「ミスリル銀の鎧？ゴホツ！ゴホツ！・・・それは架空のものではないのか？」

ミスリル銀とは架空に存在する金属だ。それが実在する訳がない。

「フム・・・。まあ、教えても良いだろう。『鋼』それが俺の属性だ。金属を操り、生成するのがこの属性の力だ。そして、金属を別の金属に変える事ができる。」

つまり、砂鉄（鉱物ではあるが、『鋼』の属性は『鉄』だけを取り出すことが可能。）をミスリル銀へと変えたのだ。金属として全く違う訳だが、それを可能にするのが『鋼』であり魔法なのだろう。なお、このように違う金属に変化させる場合、質量として、1対1の割合にはならない。より優れた金属に変化させる場合は、1にたいし、10も20も使う必要があり、魔力の消費量も大きくなる。

「ゴホツ！そんな属性があるとは・・・世界は、はあ・・・広いな。」

「
真樹は自分の知らない属性に、世界の広さに驚嘆した。しかし、その事に好奇心を働かせる余裕はない。」

「さて、終わりにしようか・・・残念ながら、慧には伝えられなかったようだな。」

鉄が刃の形となって振り降ろされようとした。が・・・

「えい！」

水の弾丸が放たれたため、刀を振り下ろす事は出来なかった。

「ぬう！？」

圧縮された水は鉄さえ貫く。数は少ないが、一発一発が丁寧に圧縮されていたため、フリードも無視する事はできなかった。

「風よ！荒れろ！」

その隙に、真樹は風をベタラメに吹かせ、目くらましをし、董を抱え、その場を離脱した。

「・・・助かった。董嬢。」

「いえ、それより早く手当てをしないと！」

今もなお真樹の腹からは血が溢れて続けている。真樹に抱えられながら、董は傷を抑えるが、溢れ続けている。

「そんなものは、ゴフッ！・・・はあ、後でいい。それより、慧の所へ・・・」

真樹は全力で慧の所へ向かう。緩奈の事を伝えるために・・・

「ふう、逃がしたか。くくっ、慧の周りには良い逸材が集まっているようだな。」

フリードは先ほどまで戦っていた場を見る。用具は拉げ、樹々を倒れ、地面には幾つもの斬撃の痕と穴があいている。この光景を作ったのは先ほどの二人、特に真樹の方だ。

「さて、一度戻り休むか・・・慧・・・来るなら来い！」

そして、フリードが立ち去ると、荒れ果てた公園だけが残ったのだった。

第十三話 戦いの始まり

「真樹！」

慧は学園の医務室のドアを明け、親友の名を呼ぶ。

慧はゲームセンターに占い機の調査に出ていた所で、董からいきなり電話がかかって来たのだ。董は慌てており、声も涙声だったため、詳しい内容は解らなかったが、真樹が大けがを負った事だけはわかったため、美夜達に断りを入れ、急いで来たのだ。

「お兄ちゃん！葛城先輩が！」

董は慧が中に入ると同時に慧に抱きつき、泣く。

「董、落ち着け。真樹はどうだ？」

慧は董を落ち着かせながら真樹の容体を聞くが、董は中々泣きやんでくれず、若干苛立つが、落ち着こうと努める。董に当たっても仕方が無い。そこに

「落ち着きなさい。董さん。それと、あなたが慧君ね？私はミレア・センチス保険医です。それと、葛城君ならそのベッドで眠っています。」

赤毛の長い髪に碧い瞳の白衣の女性、が話かけてきた。

その言葉を聞き、董をミレア校医にお願いすると、真樹が眠って

いるベッドへ向かう。

「……慧……か？」

真樹は慧を探そうとしたが、何処にいるか解らないため、ひとまず学園へ向かった。しかし、そこで力尽きたのだ。

「ああ、俺だ。いったいどうした？」

真樹は辛そうにしながらもあつた事を話す。

「緩奈が例の誘拐犯達に連れて行かれた。最近おとなしかったのは、緩奈に狙いを定めていたから、らしい。」

そこまで一息で言うと、一度、呼吸を整えるために、深呼吸をした。

「そうか、しかし、お前がここまでやられるなんて、一体誰が相手だった？」

「……『鋼王』フリード・ディゼンダー、奴はそう名乗っていた。慧、お前を知っていたようだ。奴はいつたい何者だ？」

真樹の言葉に息を飲む慧。まさかとは思っていたが、その言葉を聞きショックが大きかった。思わず震えてしまう。

「お兄ちゃん？」

その尋常ではない様子に董とミレアは身守るだけだ。

慧は真樹にだけ聞こえるようにつぶやく。

「危険度ランクSSS、『鋼王』フリード・ディゼンダー。俺の師匠の一人だ。」

その言葉を聞いた真樹も、息を飲む。慧が裏に関わる人間だと言う事は直接聞いた訳ではないが何となく解っていた。しかし、ランクSSSと関わる程の深い場所にいるとは思わなかった。しかし、納得することでもある。本気の慧は格が違ったのだから・・・

「戦えるのか？」

だが、今聞かなければいけない事は慧がどこまで深い所にいたかではない。今、聞くべき事は一つ。かつての知り合いを倒して、緩奈を助ける事ができるかと言う事だ。

「出来ない訳がないだろう？」

「ふっ、頼む。」

言う事は全部言いきったからか、真樹は意識を手放した。

「お兄ちゃん？葛城先輩は？」

「大丈夫。眠っただけだ。」

心配する瞳を安心させるように、頭を撫でる。そして、美夜に電話をかける。美夜達は調査を継続しているからだ。

「美夜、どうだ？」

『慧？葛城君と董の様子はどう？』

「董は大丈夫だ。真樹も怪我をしているが命に別状はない。それより、調査の結果は？」

『そう、それはよかった。後、調査の結果だけど、以外と早く見つかったわ。あなたと緩奈が占ったと言う機械よ。不正アクセスの形跡が見つかったわ。場所はちよつと言葉じゃ説明し辛いから。今、銀があなたの所に知らせに行っているわ。』

調度その時、狼の姿の銀が校庭を駆ける所を発見した。

「ああ、今着いたみたいだ。ありがとう。それじゃ。」

慧は電話を切ろうとするが、美夜は待ったをかける。

『待ちなさい！慧、あなた、一人で乗り込む気じゃないでしょうね？』

慧は、美夜の問いに正直に答えるか迷うが・・・

「ああ、行ってくる。大丈夫。緩奈を取り戻したら直ぐに逃げるから、美夜は理事長に連絡して、指示を仰いでくれ。」

『ちよ！慧！』

そこまで言うと電話を切り、待機していた銀から地図を受け取ると、銀と共に向かう。

「ちよつと！慧！慧つてば！」

慧に電話を切られた美夜は溜息を一つ吐くと、これからの事を考える。

「美夜？黒澤君は？」

「慧は、誘拐犯の所に向かったわ。何かあったんでしょ。私たちは理事長に連絡して指示を仰ぐわよ。」

美夜は夢に答えると、理事長の番号にかけようとする。

「美夜、良いのですか？私達も直ぐに向かったほうが、黒澤君一人じゃ、危険ですよ。」

「駄目よ。理事長の未来視が効かない相手に私達だけじゃ、行つてもどうにもならないわ。」

「でも・・・っつー！」

なお、食い下がろうとする夢であったが、唇を噛み、血を流しながら我慢している美夜を見て息を飲む。

多分、美夜は夢以上に慧の事を心配している。だが、理事長に指示を仰ぐことしかできない自分に腹を立てているのだ。

「もしもし、理事長ですか・・・」

そこは、櫻木街の港にある倉庫街。似た様な倉庫と通路が幾つもあり、地図でもないと迷うだろう。その内の倉庫の一つから、光が洩れてきている。他の倉庫には光がともっておらず、異様に目立つ光景だ。

そこから、聞こえるのは男の笑い声、何が楽しいのか、倉庫街に響く程の声だ。

「フヒヤヒヤヒヤ！良いぞ！この反応！これを待っていた！」

白衣を纏う、博士と呼ばれる男。やせ細り、生気をあまり感じないが、メガネの奥の瞳は異様な光を放っている。

「これで、依頼は達成だな。」

フリードはその光景を見ながら、タバコを一本吸う。

そこには、緑色の液体の中で、不思議な光を放つ少女……緩奈が眠っている。

そして、それを見て、博士は狂った様に笑っている。いや、実際、もう狂っているのだろう。過去の神を蘇らせるため、しかも成功するかも定かではない事を、こんな少女を実験台にして、行おうとしているのだから。

そして、それは自分も同じかと苦笑する。

フリードは、かつては夜城や白河、慧と共に世界に対し敵対した。家族を、友を奪った世界に……そして、そんな不条理に満ちた世

界を変えたいと思ったからだ。しかし、あのままでは、何も変らない。変えられないと思い、『断罪の牙』を抜けた。

そして、世界を巡り、不条理をただすため、戦った。幾つもの罪を背負い、いつの間にか、危険度ランクSSS、『鋼王』と呼ばれる様になった。

しかし、何も変わらない。世界は不条理に満ちている。そんな時、この博士と博士が率いる組織、『否定神の探求』に出会った。

この者達はかつて否定された神の逸話の研究していた。そして、逸話を研究する中、過去に実在した神がいる事を知った。その神は不条理を無くし、平等な世界を作る事ができる力を秘めていたが、その力を恐れた魔法使いに否定され滅ぼされたとのことだ。

博士達はその神が完全に滅んでいない事を調べ上げ、その遺物を探し当てる事に成功した。フリードが博士と出会ったのは、適合者を探していた時だった。

フリードはその話を聞き、その神なら自分の望む世界に出来ると思い、協力する事にした。そして今、やっとその願いが叶おうとしている。だが……

「そう簡単には行かないか……」

倉庫の扉が、いきなり蹴破られた。そこに立っていたのは、久々に会う少年と、初めて見る、綺麗な銀色の毛並をした狼だった。

「なっ！貴様はいつたい何者だ！」

博士は、いきなりの来訪者に驚き、制服達に殺すように命令するが・

・
・
「・・・え？」

一瞬の内に、皆、氷漬けにされた。

「『凍結の世界』しかも対象を絞る技術とこの規模・・・凄いな。そこの狼の仕業か？慧。」

「ああ、そうだ。しばらく見ない間に変わったな。こんな事に手を染めるとは・・・何故だ！フリード！」

慧は聞く。何故この様な事をするのかと・・・

「世界から不条理を無くすためだ！これは、そのために必要な犠牲だ！」

「ふざけるな！どうやってそれをしようとしているのかは知らない。だが、不条理をただすために不条理を働くのか！」

不条理を無くすと言いながら、誘拐という不条理を働く、その事に慧は怒る。なにより、その事に、そんな事に、緩奈を巻き込んだ事に。

「仕方がなかるう！これまで、戦い続けた。不条理を無くすために、お前達と別の道を歩んでからも、ずっと・・・だが！結局何も変わらなかった。だが、この実験が成功すれば、それも叶う。」

その言葉に、慧は眉をひそめる。緩奈をあのようなものに入れてどうやって、不条理を無くすというのか・・・

「慧よ、貴様はこの世界にかつて神が実在したことを知っているか？」

「神が実在した？・・・ああ、聞いた事がある。実在する神もいたということとは、昔会った幻型に聞いた。それがなんだ？」

慧はかつて幻型と出会い死にかけたが、どういう訳か、その幻型は留めを刺さず、むしろ傷をいやしながら、そんな話を聞かせてきたのだ。

「ほう、幻型にであっておきながら、無事で済むか・・・流石だな。なら話は早い。その神を蘇らせることが出来たらどうする？」

何を言っていると益々眉を潜める慧に苦笑し、続けるフリード。

「まあ、そう変な顔をするな。貴様も言った通り、語り継がれる、おとぎ話や神話の中には、かつて本当に存在した神もいた。そして、その力が宿ったものを聖遺物と呼ぶが、その力を使えるものは少ない。」

「・・・つまり、緩奈はその聖遺物に適正があったと・・・そういうことか・・・」

「そうだ。そして、あの聖遺物には神の魂の欠片が宿っている。」

言いながら、一つの樹で出来た杖を指差す。その杖にはあちこちに妙な機械が繋がれており、管で緩奈が入った容器と繋がっている。その杖は慧が視ても不思議な力が見てとれる。

「そして、あの装置は、聖遺物に宿った魂をその人間の器へと移すためのものだ。」

「なに？なら、緩奈はどうなる！？」

その慧の叫びに、フリードは俯くと、一言

「死ぬ」

そのフリードの態度に我慢が効かなくなった慧は、闇を纏い、殴りかかった。しかし、フリードに止められる。その腕には、ミスリル銀で出来た籠手はめられている。

「ふざけるな！そんな事、俺がさせない！」

「なら、俺は立ちふさがろう！俺も、もう止まれないのだ！」

そして、二人の魔法使いはぶつかり合う。一人は自分の願いを叶えるため、もう一人は友を、大切な人を守るために。

「銀！緩奈の事、頼む！」

「はい！」

慧は銀に緩奈の事を頼むが、そこに立ちふさがるのは、白衣の男。

「すまないねえ、僕もこの実験には命をかけているのだよ。邪魔はさせない！」

博士は懐から注射器を取りだすと、首筋に当て、何かを自らの中

に入れた。すると、博士の体が、変形していく。
元の肉体より、二周りも大きく、そして、肌から毛が生え、その姿はゴリラそのものだ。

「主、これは！？」

「銀！気をつける！そいつ、魔力増強剤を使用制限の倍以上使って、自分を魔物に変えやがった！」

そう、魔力の過剰摂取で異形化するのは何も動物だけではない。
いや、人間も動物のカテゴリに入る以上、必然なのだ。

「良いのか？慧、他に気を取られていて！」

慧が銀に気を取られた隙を狙い、鉄の刃を振るうが、闇の刃で切り捨てられる。

「気なんか取られちゃいないさ。あんた相手にそんな余裕はないからな！」

今、戦いの火ぶたが切つて落とされた。

第十四話 『氷』の狼と『土』の大猿

『ヴオオオオ！』

白衣を着たゴリラが狼姿の銀に向かい拳を振り降ろすが、銀のスビードの方が上のため、捉える事ができない。

『つつ！凄い威力ですね！』

しかし、銀もまた攻めあぐねていた。ゴリラの一撃の威力は高く、コンクリートの塊をたやすく粉碎する。そして……

『アイス・クロー氷の爪！』

銀は、大ぶりで出来た隙を狙い、氷の爪で切り裂こうとするが、

『クツ！』

ガラスが砕けるような音とともに氷の爪が砕かれた。

『全く、随分と固いですね。』

ゴリラの体は厚い土の塊……いや、もうあれは岩だろう。それに包まれ、固く、銀の氷の爪を通さない。

博士の属性は『土』だった様だ。魔法はそれを行う術式と制御技術でより複雑で高威力の魔法を扱うことができる。しかし、魔物化したこの男にそれを出来る理性が残っている訳は無い。なら、何故このような事ができるのか……それは、増強された魔力にある。

増強された魔力が、失った理性を補って余りある結果を残している。その腕力と増強された魔力で強引に操っている『土』がより厄介な相手としている。

救いは、元々戦闘のセンスは無かったためか、それとも理性をほとんど失っているためかは不明だが、その動きは単純で動きが読みやすいことだ。いくら威力が高くても、当たらなければ意味はない。

『ウホッ！』

『当たりません！』

土を岩の塊へ変え、投げつけてくるが、銀はそれら全てを避ける。

『氷りなさい！』

銀は『凍結の世界』ゲリドゥス・ムンドゥスで動きを止めようとするが、ゴリラに届く前に土の壁に防がれ、ゴリラが凍るのを防ぐ。

銀は確かに魔物だ。しかし、使い魔になるまではまともに魔法を使った事はない。大概、その魔力と『氷』でなんとかしてきたからだ。

銀が使える魔法は3つ。一つは『凍結の世界』ゲリドゥス・ムンドゥス、二つは『氷の爪』アイス・クロウ三つ目は『氷の残像』グラス・ミラーだ。その持ち札でどうやって打ち破るかが問題だ。

銀は、床を、壁を、天井を駆け回り、拳を避け、隙を突き『氷の爪』で攻撃するが、岩の鎧に防がれ、通らない。そこに、ゴリラの腕が振り抜かれるが、ゴリラの体を足場にし、その攻撃を避ける。着地した所に、ゴリラが飛びあがり踏みつけようとしてくるが、

ギリギリで避け、すれ違いざまに一閃。しかし、『氷の爪』の方が、砕かれる。

しかし、銀は不思議に思う。『土』の属性は土を操る魔法だが、何もない所から土を生み出す事は出来ないはず。それはどんなに魔力が高くても一緒だ。この、コンクリートと、鉄屑、ドラム缶しかないこの場所のいったいどこから土を持ってきているのか・・・

『ウホホホホ！』

ゴリラはいきなりドラミングを始めた。

『益々ゴリラですね。いったい・・・つつ！』

銀はその姿を見て驚く。ゴリラの周りに更に大量の土が集まると、岩へと変り、その全身を包んで行く。そして、出来上がったのは、岩でできた更に一回り大きなゴリラだ。

そして、銀はそこで気付く。どこから土を持ってきていたのかを

『つく！』凍結の世界』！』

銀はその元を全て凍らせた。

『まさか、ドラム缶の中身が土とは・・・』

どうやら、ゴリラ、いや、まだ博士として理性が残っていた時、予め用意していたものようだ。銀はそのドラム缶を全て凍らせ、これ以上、土を操る事は防いだ。しかし・・・

『随分とまあ、大きくなりましたね。』

既に十分な量の土は供給され、それは岩へと変り分厚い鎧と化していた。

『ヴオオオ！』

拳が振りあげられ、再び振り下ろされようとした。銀はまた、ギリギリまで引き付け避けようとしたが・・・

『しまっ・・・』

拳のスピードが先ほどまでより早くなっていた事、その大きさが一回り以上大きくなっていった事から目測を見誤り、直撃ではないものの、初めて攻撃を喰らってしまった。

『きゃっ！』

銀はドラム缶や鉄屑の山に吹き飛ばされ、埋もれてしまった。

「銀！」

「よそ見をしていられるのか!？」

「くっ・・・」

慧は銀を助けに行きたいが、フリードを振り切る事が出来ず、助ける事ができない。

『グオオオ！』

ゴリラは銀が埋まっている場所に飛びかかり、踏みつけ、叩きつける。何度も何度も・・・

「銀！くそっ！」

「だから、余所見をしている暇があるのかと言っている！」

「ゴフツ！」

慧は、フリードの蹴りを喰らい、吹き飛ばされるが、体を捻り体制を整える。その際、外まで飛ばされたため、銀の様子を知る事が出来ない。

「使い魔が心配なのは解るが、俺を目の前にして気をそらせる事は自殺行為だぞ？」

フリードと慧、実力で勝るのはフリードだ。少しでも隙を見せる事は慧に取って死以外の何ものでもない。

『ゴホツ！ゴホツ！主、私は大丈夫です。』

そんな声が慧へと届く。

「銀！大丈夫なのか！？」

慧からは見えないが、銀はボロボロの状態ではある。しかし、まだ戦えるようだ。『氷の残像』で直撃は避け続けていたのだろう。四肢で大地をしっかりと踏みしめている。しかし・・・

「ほう、あの状態でまだ立っていられるのか……だが、あれでは時機に終わるだろう。」

フリードの位置からは銀が見えるようだ。まだ戦えるとはいえ、これまで通りの動きが出来るとは思えない。

『主、私は大丈夫です。私はあなたの使い魔なのですよ？この程度、倒せないようではあなたの使い魔は名乗れません！』

「銀……わかった……必ず倒せ！だが、死ぬ事は許さない。良いな？」

『はい！』

そして、慧は再度、フリードとの戦いに集中する事にした。

銀は慧が自分の戦いに集中していると、ゴリラを見上げる。

『さて、主からの命令は絶対ですので、あなたを倒させていただきます！』

銀は『凍結の世界』を続けざまに放つ。土を外部から供給する事はもう出来ないため、鎧を凍らせる事はできる。しかし

『ウホ！』

凍った部分だけが剥がれ落ち内部までは凍らせる事が出来ないでいる。しかし……

『なら、全部剥ぎ落とすまでです!』

そこから、『アイス・ミラー氷の残像』を駆使し、攻撃を避け、『凍結の世界』と、『魔法ではないが、氷の魔力を放つ』アイス・プレス『氷の息』で鎧を剥がしていく。

『ウホ!?!』

ゴリラは薄くなつていく鎧を見て動揺し始める。土を集めようとしているようだが、土が入っているドラム缶は銀に全て凍らされ、先ほど壊れたドラム缶からは土が出ているが、その土も凍っており、ゴリラの魔法は届かない。

そのため、集まらないのだが、ゴリラには理解できないのだろう。その場で暴れ続けている。

『はあ、はあ、はあ・・・後、少し・・・』

銀は魔力を集中し、『氷の息』を放つ。ゴリラは身をかがめ、防ごうとする。その隙をついて、突進する。これが最後と言わんばかりの全力の突進だ。しかし・・・

『ウホ!』

ゴリラは突如横へと転がり、銀の突進を避ける。わざと身をかがめ隙を作ったのだろう。その顔にはいやらしい笑みを浮かべている。そして、ゴリラの拳が突進する銀のへと振り下ろされた。

『ウホホ〜!』

ゴリラは銀を潰した事を確信し喜び、飛び上がり、その胸を

氷の槍が貫いた。

『油断大敵ですよ？』

それは、氷で自分自身を槍と化した銀だった。ゴリラが潰したのは『氷の残像』だったのだ。銀はそれを囮に、頭上へ飛びあがっており、『氷の爪』を巨大化させ、回転しながら突進したのだった。それは傍からみたら氷の槍の様であった。

ゴリラは倒れ伏し、みるみる内に小さくなり、元の男の姿になった。胸を貫かれてはいるが、まだ息はあり、銀は凍結させ仮死状態にした。

『はあ、はあ・・・主、私は勝ちましたよ・・・はあ、早く、緩奈を・・・』

しかし、銀は血を流し過ぎたため、目が霞始めてきている。

『せ、せめて・・・』

銀は気絶する前に、力を振り絞り、『氷の爪』を投げつけた。そして、そこで気を失ってしまった。

銀の投げた爪は、緩奈が閉じ込められている容器に当り、そして

第十五話 VS 『鋼王』

「ちっ！」

慧は闇で作った刀で、フリードが放つ斬撃を捌く。

今、フリードが使用している剣は慧が最初に切り捨てた剣とは違う。ダマスカス鋼、おそらく現存する最高の金属だ。

現在、この金属の精製法は失われ、新たに造り出す事は不可能とされている。科学と魔法を合わせた錬金術でも、精製できていない。それこそ『六魔天』でもだ。

だが、フリードはそれを可能にする。この男の属性『鋼』によるものだ。

「どうした、慧！防ぐだけでは俺には勝てんぞ？」

さらに、身体強化へ回す魔力を上げ、斬撃の速度を上げてくる。慧も、足と腕の闇の密度を上げ、身体強化と同様の効果を上げる事に対応し応戦するが、闇の刀が形を保てなくなってきた。形を維持できない事を悟った慧は、至近距離で闇の刃、『ダイク・エッジ闇刃』を構成し放つ。フリードはその刃を金属の刃を作り、撃ち落とす。

その際に慧はフリードから距離を取り、闇の刀を再び生成する。

「ふっ、俺の教えた魔法を使いこなしているか・・・流石だよ。センスだけならお前の方が上だな・・・慧。」

「それはどうも。」

そう、この魔法はフリードが慧に教えたものだ。それは、フリードも同じような事をしている事からうかがえる。

この魔法の名前は『属性武装』。己の属性に属するもの、フリードなら、金属全般。慧なら闇や影そのものを操り、身体強化の効果を得たり、刀や剣を作ったりする魔法だ。

「うらっ！」

慧は闇の刀を鞭の様にして振り回した。フリードはその不規則な軌道を読み、避ける。そして、周囲の鉄を集め『鉄の弾丸』を放つ。慧は弾丸を、上体を反らすだけで避け、『闇刃』を次々と放つが、全て避けられるか切り捨てられる。

この魔法のメリットはその変幻自在性だ。一々、新たに詠唱しなくとも闇を鞭にも刀にもできたりすることができる。もちろん、無詠唱など、他にもやり方はあるが、一つの『魔法』をなんのタイムラグもなく別の形にし、別の干渉をさせ、現象として起こすことができるのはこの『魔法』位なものだろう。

しかし、この魔法は大変難しく、夜城や白河でさえ、「良くそんな事ができるな・・・」と言わせる程だ。まあ、その魔法に詠唱破棄などで普通に対応できる夜城や白河も異常なのだろうが・・・

ところで、闇を操るのが『闇』属性、金属を操るのが『鋼』の属性の特徴といったが、普通に操った場合、このような事は出来ない。そもそも、闇を操ったところで、影絵などは出来るだろうが、何かに干渉、まして切る事などできない。それは『鋼』にも言える事だ。確かに金属を操り勢いよく振り回せば切れたりもするだろう。しかし、別の金属にしたり、強度を上げたりはできない。

それらを行うのが『魔法』であり、『術式』なのだ。それは他の属性にも言える。ただ『火』を操ったところで、燃やせるものはたかが知れているし、『水』を操ったところで出来る事は少ない。

その事を知るものなら解るだろう。この二人の行っている事の異常性を。本来、『魔法』とは、『属性』『形』『干渉』などを別々の『術式』で決定し、それらの術式を繋ぎ合わせ、結果として『魔法』となる。『呪文』はそれをより正確に行うためのものだ。

例えるなら、銀の『氷の爪』は、『属性は氷』『爪の形』『切り裂く』の三工程の『術式』を組み合わせて『氷の爪』という『魔法』を構成させている。この工程を重ねることでより強力に、逆に省くことで速度があがる。これが、『上級魔法』や『下級魔法』の区別の仕方であり、それを助けるものが『呪文』である。

それは詠唱破棄でも同様であるが、これは、『呪文』に頼らず行うため、『術式』の工程を飛ばしたり、『術式』そのものが雑になるため速度は最速だが、威力は低くなる。もちろん、詠唱破棄でも『呪文』詠唱時とそんな色ない威力を放つものはいるが、その『術式』はもろくなる。

しかし、この『属性武装』という魔法はどういう訳かそれらの工程を無視しているうえに、詠唱時とそんな色ない威力である。それは『闇』や『鋼』そのものを操っているということに関係しているだろう。

なお、どのような場合でも『呪文』を詠唱した方が威力が高いのは確かである。それは、より正確にイメージできるからでもあるが、声に出すことで、世界の魔力に干渉できるからでもある。

「闇よ！襲え！」

慧は闇を津波の様に広範囲に広げ、フリードを襲わせる。このよ
うな『闇』属性の魔法は無い。単に闇を操り『属性武装』による効
果で干渉出来るようにし、質量を伴わせて攻撃しているのだ。

「その程度！」

フリードは気合い一閃。ダマスカス鋼の剣で『闇』を切り裂く。
しかし、『闇』が目くらましを果たし、一瞬とはいえ慧を見失う。

そこに、頭上から、『闇』の槍が雨の様に降り注ぐが、鎧に弾か
れ、攻撃が通らない。いつの間にか銀色の籠手は無くなり、まだら
模様の入った籠手に変わり、同色の鎧・・・ダマスカス鋼の鎧とな
っていた。

「ふん！」

お返しにと、フリードが銀色の剣を複数作り、頭上へ向けて放つ。
その剣は天井をたやすく突き抜け、空へと消えた。しかし、手応え
はない。

そこへ、目の前から慧がいきなり現れた。闇にまぎれ接近してい
たのだ。そして、一閃。ゴギン！という斬撃とは程遠い音が鳴り響
き、フリードは地面を削りながら、耐える。

見ると、フリードのダマスカス鋼の鎧は少し凹んでいる。が、慧
の刀は『闇』にあるまじき、へし折れ方をしている。

「まったく、なんだ？その鎧に剣。なんで俺の『闇』を切れるし、刀
がへし折れる？」

慧が疑問に思つのは当たり前だ。普通の金属では『闇』を切る事など不可能だ。もちろんそれはダマスカス鋼にも言えることで、以前、稽古を付けて貰っていた時も剣に纏った魔力で吹き飛ばしていたのだ。

「なに、俺もあれからさらに磨きをかけたということだ。慧、知っているか？対魔の力を持つ金属の事を。」

「対魔？鉱物以外じゃ、大概術式を金属に掘る位だが・・・俺の『闇』に有効な金属なんて、それこそ架空の金属、ミスリル銀しか・・・っておい！まさか!？」

「そう、そのまさかだ。このダマスカス鋼にはミスリル銀を含んでいる。最初にお前の拳を受け止めたあれがミスリル銀だ。ダマスカス鋼とミスリル銀を混ぜることで、この鎧と剣は出来る。まあ、魔力の消費量は大きくなるがそのおかげで、お前の『闇』さえ切れる。」

慧は呆れる。架空の金属まで再現するその技術と努力に・・・長い時間をかけて研？を積んできたのだろう。己が望む世界を手にするために・・・その執念に呆れると同時に、感嘆する。

「さあ、どうする慧？お前の『闇』は俺には効かない。そして、時間をかければ、あの少女は助からないぞ？」

「くっ!」

慧はどうすればよいか考える。一番はフリードと戦わず、緩奈を助け銀と逃げる事だが、この男を相手に逃げる事は不可能だ。背を

見せれば、殺される。美夜には逃げると言ったが、戦って勝つしか道はない。

どうやって現状を打開しようか考える慧。そこに

『ウホホ〜!』

という、ゴリラの、喜びを大いに表す声が聞こえ、次にズシン!という、巨体が倒れる音が続いた。そして、倉庫の中から絶えず響いていた音は無くなり、魔力も消えた。

「なっ!」

さつきまでこの荒れ狂う魔力の残滓の中でも感じる事ができた暴走した魔力。それがいきなり消えたため驚くフリード。

「・・・くっ、くくく・・・ははは!銀、やりやがった!」

消えたのはあのゴリラと化した男の魔力。銀の魔力は微弱ながら残っている。慧と銀は繋がっているため、この魔力の残滓の中でも無事な事が解るのだ。

「なら、俺がこんな所で負けていられないよな!」

銀が、あの男に勝ったのだ。自分が負けていられないと、慧は気合いをいれる。

そして、魔力と『闇』の密度を上げ、刀に集中する。フリードの刀を、鎧を打ち破るには、それを打ち破るだけの力を込めた攻撃でなければならぬが、今の慧ではそのレベルの攻撃を連続で放つこ

とは出来ない。つまり、一撃で決める必要がある。

流石のフリードもその力に、余裕を無くす。あれは、夜城が慧に教えた技・・・そして慧が己の技として昇華させた、まぎれもない、慧の技。

周囲の闇を一点に集中し、斬撃を放つ。その一撃は『虚無の騎士』さえ消す事が出来なかった、罪を切り裂く闇の牙・・・

「『さいれつこくが罪裂黒牙』！」

「そんなもの！当たらなければ！」

・・・
その一撃は真直ぐな軌道だ。避けられないものではない。しかし・

「なっ！これは！」

闇がフリードの足に絡みつき、動きを制限される。先ほど起こした闇の津波、それにより広がっていた『闇』を操り、捕縛したのだ。

そして

「喰らええエエ！」

「ぬおおおお！」

その一撃は確かに、フリードを捕らえた。

そして、フリードを捕らえただけでは留まらず、直線上にある倉

庫が幾つも切り裂かれ闇に沈んだ。

「はあ、はあ、はあ・・・どうだ・・・」

慧は、その一撃で魔力のほとんどを持って行かれ、息も絶え絶えだ。これで終わらなければ、手札がない。いや、そもそも、この一撃以外、有効なものがないのだ。これまでの攻撃はこの攻撃を当てるための布石だ。干渉できる闇を広げ、動きを封じ、確実に当てるための・・・

「・・・・・・・・」

慧は、警戒を続け、フリードの気配を感じない事を確認すると、急いで緩奈と銀の下へ行こうとする。銀はどうやら、勝ちはしたが緩奈を助けるまでには至らず、力尽きたようだ。でなければ、既に出てきていてもおかしくない。そして、背を向けようとした瞬間

「つつつつ！」

膨れ上がった魔力と殺気に、とっさに、飛ぶ。そして、飛びながら自分がついさっきまでいた場所を見ると、巨大な鉄の剣が轟音と共に突き刺さるところだった。

慧はその衝撃の余波を、両手を顔の前に出すことで防ぐ。

「ふははは！流石だな、慧。俺に、傷を負わせるとは・・・」

慧が着地し、声が出た方を向く。慧が放った斬撃により発生した煙の中から、右肩から下まで切り裂かれ、大量の血を流しながらも、五体満足な状態で、強大な魔力と殺気を放つフリードが笑みを浮か

べながら現れた。

「まさか、この鎧がこうもたやすく切り裂かれるとは・・・魔力で強化したにも関わらず・・・まったく、あきれるな。」

そう言いながら、切り裂かれた所を金属で防ぎ、止血を始める。さらに、切り裂かれた鎧も修復をはじめめる。

「よく言う。俺の斬撃を受けて五体満足でいるあなたにこそ呆れるよ。まったく、これが、魔力の差か・・・」

魔法使いの戦闘において必要な事は、センスや技術、知識。そして経験、魔力が代表的だろう。しかし、この中で、慧がフリードに勝っているのはセンスと技術だけだ。そして何より、慧とフリードの魔力量には差があり過ぎるのだ。

慧の魔力をランクで表すと、実質A〜Sクラスだ。そこに、経験とセンス、技術が入り、『魔法使い』のランクを付けるなら、SSクラスの實力となる。しかし、フリードは魔力量自体SSSクラスなのだ。その差が現状の差と言っても良い。

大けがを負っているのは確かにフリードだ。しかし、焦燥の色が濃く、手札もないのは慧なのだ。

「さて、今度はこちらから行かせてもらおう！」

フリードは駆けだすと、一気にトップスピードに入り慧に突進してくる。慧は横へ飛んで避けるが

「遅い！」

「ぐお！」

突如、背後に現れたフリードに蹴られ吹き飛ばす。その勢いを利用して、距離を取ろうとするが

「せい！」

すぐ目の前に、ダマスカス鋼の籠手がせまり、その一撃が慧の顔を捕らえた。

「ぶはっ！」

慧は鼻血を流しながら、吹き飛び、幾つもの瓦礫の山を崩し、やっと止まる。

「どうした慧もう終わりか？」

フリードは『属性武装』による強化と身体強化の魔法の二重掛けにより、更に速度を増しており、これまでの比ではない。消耗している慧では、どうする事もできない。

だが……

「くそっ！」

慧は、残り少ない魔力で闇を纏い、フリードに向かい突撃する。

「そこなくては、な！」

フリードは、再びダマスカス鋼の剣を生成し、攻撃を繰り返す。慧も『闇』で刀を作り応戦するが、打ち会う度に『闇』は刀の形を

保てなくなっていく。

「くっそ、が！」

慧は『闇刃』を放ち距離を取ろうとするが、フリードの鎧には、体力や魔力が消耗し、制御が甘くなっている今の慧の『闇刃』は万が一にも通らないため、無視して切りかかってきた。慧は距離をとることが出来ず防戦一方。

「これで、終わりだ。」

そして、一閃。『闇』の刀ごと、慧の体は切り裂かれ、倒れる。慧の体から大量の血が溢れ、自らの血でできた血だまりにその身を沈ませていく。

「はあ、はあ、はあ、流石に、俺も血を失いすぎたか……だが、これでもう邪魔するものはいない。これで……」

フリードは慧に背を向け、倉庫へ向かう。神の復活を見届けるために。だが……

「……け……い？」

容器に入っていたはずの少女が、銀色の狼を抱え、ぼつと、フリードを、いや、倒れている慧を見ていた。

「何が……どうやって、容器を……まさか！」

あの状況で、考えられるのは一つ。少女、緩奈が抱えている銀色の狼、銀が容器を破壊した事だ。

フリードは容器が壊れ、どうするか考える。魂を別の器に入れる事は博士にしか出来ない。思考に没頭し、緩奈が、慧の下へ駆けよるのも無視する。しかし、それは、この場の誰も自分から逃げられないと確信していたからでもある。

「け・・・い？慧！すっかりしてよ！慧！」

傍らに気絶している銀を置き、緩奈は懸命に慧の名前を呼ぶ。血だらけの慧の体を抱きしめ、泣きながら・・・

「無駄だ、慧はもう助からない。そして、君もだ。」

フリードは考えをまとめ終えた。聖遺物と緩奈を回収し、一度身を潜める。そして、再び似たような事を研究している組織を探し、協力を仰ぐ事にしたのだ。神の研究をしている組織は実は裏表問わず、結構あるのだ。そこを頼れば問題ないと判断したのだろう。

「そんな事ない！慧は、慧はあんなんかに負けない！」

緩奈は必死に抵抗するため、種を取りだし植物を成長させる魔法を使い、フリードに向けて攻撃するが、フリードは植物を全て切り刻む。その歩みは止まらない。

『植物』の属性は植物を呼び出したり、成長を促進させたり、変化させたりする事ができるが、『鋼』の前には無意味であった。

「無駄だ、君は慧より遙かに弱い。それでは、俺の歩みを止めることすらできない。」

緩奈は必死に魔法を放つが、どれも歩みを止める事すらできない。

蔦は切り裂かれ、樹は真二つに割られ、草の刃も通らない。

そして、とうとう、辿りつかれたしまった。

「残念だったな。お嬢さん。もう、終わりだ。」

「い、嫌！」

フリードは強引に緩奈の腕を取り、連れて行くこととする。緩奈は必死に暴れるが、びくともしない。

「慧！慧！」

「無駄だ、その傷だ。もう助からない。」

緩奈は必死に慧の名を呼ぶ。しかし、反応はない……

ピク……

かと思われた。が……

ガギン！

「ぐあー！」

『闇』の刀が下から打ち上げられ、緩奈を掴んでいた手に一撃、フリードは緩奈をお落とす。

「慧！お前！」

「へ、へ、へ……そう簡単に、俺がくたばるかよ……」

慧はゆっくり、ながらも、確かに立ちあがった。

「慧！」

「はは、緩奈。ありがとうな。お前の声、聞こえた。銀と一緒に下がっていてくれるか？」

「で、でも……」

緩奈は血だらけの慧を見て、一瞬引き下がるが、自分達がいても足手まといにしかならないだろうと悟り、銀を抱き、距離を取る。

緩奈達が十分距離を取ったのを見て取ると、フリードは口を開く。

「ふ、まさか、そんな状態で、まだ立ちあがるとはな。そんなにあの少女が大事か？」

「決まっているだろ、ゴホッ！大事じゃなかったら、はぁ……俺がこんなところにまで来るはずがないだろ……」

「それも、そうだな。だが、どうする？お前では俺には勝てないぞ？」

傷の状態もそうだが、魔力により顕著に二人の優劣が現れている。フリードの魔力はまだまだ残っており、慧はもう、ほとんどない。この状態でどうやって勝つというのか……

「……勝てるさ……いや、必ず勝つ。」

慧の目は諦めておらず、まだ勝つ気でいるらしい事がわかる。その目に息を飲むフリードだが、首を振る。もう、打つ手などないのだから。

「まあ、まともな方法では、確かに勝てないだろうな。だが、まともじゃない方法なら、まだ、道はある。行くぞ……」

そして、慧は実行する。まともじゃない方法、外法中の外法、禁呪と呼ばれる魔法を……

「闇よ、俺を喰らえ！」

「なっ！止める！慧！死ぬ気か！」

「あんたを倒せるなら、緩奈を助けられるなら、それも良いかもな。まあ、死ぬ気はないけどな……行くぞ、覚悟を決めろ！フリード・ディゼンダー！」

「『闇黒武装・幻型黒龍王』」

慧がそう、唱えた瞬間、闇が慧を呑み込み、そして、姿を変える。蝙蝠のような翼、蜥蜴のような尻尾、鋭く大きな角と爪、そして、恐竜のような顔、と牙……

黒い、闇の龍王がそこにいた。

正確には、闇がその様な形を取っているのであり、慧の肉体が変化したわけではない。大きさとしては、慧より少し大きい位だが、その質量、威圧感は莫大なものだった。

実際の龍と異なるのは、全身を覆っているのが鱗ではなく、『闇』そのものという点だろう。

『グオオオオオ！』

叫び声とともに、踏み込むと、高速でフリードへ近づく。フリードはその動きについて行き、剣で迎撃しようとするが、振り下ろされた爪の一撃は

「何！」

たやすく、フリードの剣を切り裂いた。

慌てて距離を取るフリードに今度はシッポが襲いかかる。

「グフッ！」

フリードは直撃を喰らい、吹き飛ぶ。

その尻尾は闇の塊であり、大きさに似合わず、とてつもない質量をもっている。その一撃は、ダマスカス鋼とミスリル銀の鎧をゆがませる程だ。

これはいったいどういうことか・・・未だ、魔力量という点ではフリードの方が圧倒的に有利である。しかし、今、押しているのは慧だ。

「ゴホッ！はあ、はあ、なんていう量の『闇』だ・・・魔力の差を覆すか・・・」

それは、『闇』に理由がある。そもそも慧の『属性武装』は『闇』そのものを操る魔法だ。つまり、この魔法の力は操る『闇』の量に比例する。つまり、魔力の差を覆すほどの『闇』だということだ。しかし、通常は魔法であるため、己の技術と魔力で操れる量に制限が設けられている。

なら、何故、魔力がほとんどない状態で、これほどの『闇』を纏うことができるのか・・・それは、『闇』に己を喰わせることで、魔力の変りとしている。そして、そこに制限はない。が、己を喰わせると言う事は自殺行為そのものなのだ。

ここで、喰わせている己とは、魔力であり、知識であり、意識であり心であり、魂である。つまり、人として生きるために必要なものを犠牲にし、力を得ているのである。

そのため、今の慧に理性というものはない。あるのは、『闇』に秘められた破壊衝動。そして、己の命を危険へと至らしめたものを排除しようとする指向性だけだ。

慧は咆哮を上げると、フリードへ向かって突進する。その角で突き刺そうというのだ。

フリードは体制を崩しており避けられないと瞬時に悟ると、周囲にある金属を掻き集め、『属性武装』の密度を上げる。そして、慧を迎え撃つ。

『グオオオオ!』

「うおおお!」

ズウン!という大地が震える音と、空気が震える音と共に、ぶつかり合う『鋼』の王と『闇』の龍・・・

フリードは慧の角を掴み、その突進を止めていたが、ズルズルと押されている。少しでも気を抜けばこのまま角に貫かれる。

「はあああ！」

しかし、それでは終わらないフリード、気合いと共に、一步踏み込む。そして、慧の突進が完全に止まる。が、

「何！」

突如、掴んでいた角が伸び、フリードの鎧ごと肩を貫いた。

「ぐあああ！」

痛みに怯みそうになるが、それを堪え、鉄の塊で竜を型どり、慧の横から突っ込ませる事で、強引に引き剥がす。貫かれた肩からは大量の血が吹き出ている。

「くそっ……『属性武装』が……」

フリードの『属性武装』が剥がれる。別に魔力が切れた訳ではない。先ほど、制御できる以上の金属を操ったため、強制解除されたのだ。慧の突進を止めるだけの強度を保ちながら、慧を引き剥がすため、身に纏うのではなく別に金属を操ったため、フリードが制御できる量を越えたのだ。

確かにフリードの方が魔力は大きく、操ることのできる金属の総量は大きいかもしれない。しかし、一度に操ることのできる量でいえば、慧の方が上だ。それは慧の方が制御が上だからだ。だから

こそ、フリードと戦い、傷を負わせることが出来たのだ。

そして、なにより……

「相変わらず、『闇』との相性が良すぎだろう。それに……はあ、慧と戦うのにこの時間は不味かったか……」

今はもう、夜。あたりは微かな光はあるが、ほとんど闇に包まれている。

現在、制限なく『闇』を扱える慧にこの状況は幸とも不幸とも言える。この状況は『闇』の力を存分に振るう事ができるが、禁呪を使っている慧には命をより早く縮める結果となっている。

『グウウウー！』

慧は鉄の竜を引き裂き、地を踏みしめると、大きく息を吸う。その口には『闇』が集まり、濃縮されていく。

「これは、不味いな……」

フリードは、本日二度目の危機を感じる。本能が警報を鳴らす。あれを喰らっては、いや、放たせてはならないと……

「我が司りしは『鋼』の力……『鋼』に属する全てのものよ、我が呼び声に答え、その力を我に貸せ……」

フリードは初めて呪文を唱える。

「『全ての金属はただ一つ、我が前に立ち塞がるものを切り裂く鋼

の刃・・・その刃こそ王の剣・・・」

『鋼』の魔法は希少故、知られていない。だから、これはフリードだけ魔法。そして、フリードが使える最高の切れ味を誇る魔法・・・『鋼王』の由来となった魔法・・・その名を・・・

「『おうけん・こうじん王剣・鋼刃』！」

『グオオオオ！』

全ての敵を切り裂く鋼の刃を持つ王の剣と、全てを呑み込む闇の光線が交差した。

そして・・・

「慧！慧！しっかりしてよ！」

慧は、『闇黒武装』が解かれ、気を失い倒れた。緩奈はそんな慧を揺さぶり、起こそうとする。出血がひどく、このまま気を失い続ける、体温が低下し死に至ってしまう。

慧とフリードの戦いは会い打ちだった。慧の放った闇の光線をフリードは切り裂く事が出来ず、呑み込まれた。そして、慧はその闇を放った後、急激に『闇』が薄れ、禁呪が解除された。

「い、いったいどうすれば・・・」

銀は未だに気絶しており、周囲に人影は見当たらない。そもそも、

慧とフリードの戦いで辺り一面の建物は破壊しつくされており、人がいたらまず助かっていないだろう。

慧の血は未だ止まらず、体温も下がってきている。慌てる緩奈は頭が働かず、どうすればよいのか、思い付かない。

「君の植物に止血できるものはないのか？」

そこに、声が掛けられた。視線を上げると、直ぐそこにフリードがいた。全身ボロボロで、出血も酷く、立っているのがやっとのようだ。これまで感じていた威圧も感じない。

「あ、あ、あ・・・」

「はあ、緩奈といったか？すっかりしろ！今、この場で慧を助けられるのは君しかないのだ。」

緩奈はその声で正気に戻り、改めてフリードをみる。そして、不思議に思う。先ほどまで慧と殺し合いをしていた男が、自分を誘拐した男が、今度は慧を助けようと言っているのだ。

「な、なんで？なんであなたが慧を助けるのを手伝ってくれるの？」

「手伝いはしない。俺はアドバイスを与えるだけ。全ては君の腕にかかっている。」

しかし、緩奈は納得しない。フリードをじっと見上げる。

「はあ、慧とは古い知り合いなんだよ。多分君よりな。だから、こんな所で死なせたくはないのだ。まあ、ついさっきまで、慧を殺そ

うとしていた男の言葉だ。信じられないかもしれないが・・・」

その言葉を、そこに含まれる真摯な思いを感じ取り、緩奈は首を振る。

「ううん。信じるよ。少なくとも、あなたが慧に死んで欲しくないと思っている事は本当だと思う。それで、どうすればいいの？」

緩奈は聞く。どうすれば慧を助けられるのかと。

「ゴホツ・・・はあ、先ほど俺に使った植物の種はまだ持っているか？」

「う、うん。あるけど？」

そう言って、種をだす。『植物』の属性は、植物に働きかけることにより、その植物の成長を促進させたり、植物に本来の成長とは異なる成長をさせ、新種を発生させる事もできる。さらに、植物を召喚できたりもできる。しかし、緩奈は好き勝手に召喚出来る程の技術がない。そのため、種をいつも持ち歩いている。

「なら、それを慧の傷に植え、成長させて、止血に使い。全て使うなよ。残りの種で、傷を癒す植物を作り、治療するんだ。」

緩奈は言われた通り、実行し、慧を治療していく。

しかし、フリードには心配な点が一つある。禁呪を使った以上、記憶や心、命を削っているだろうからだ。どれだけ削れているかにより、緩奈の絶望も変わるだろう。

緩奈はひとしきり、慧の治療を終えると、フリードに先ほど生み出した薬草を渡す。

「……良いのか？俺は……」

「慧を助けるのを手伝ってくれたお礼です。」

断ろうとしたが、有無を言わさぬ緩奈の態度に、苦笑し、感謝してから使用する。

「これで、一命は取り留めた事だろう。しかし、禁呪を使用した影響は俺にも解らない。もしかしたら君の事を覚えていないかもしれない。」

「……そうですか……でも、それでも、慧は慧です。もし記憶をなくしていても、また作ればいいんです。」

その言葉に、フリードは強いなど、感想を漏らすと踵を返す。

「どこへ行くんですか？」

「なに、先ほどの慧の一撃で聖遺物も消えてしまったからな。君にこだわる理由も無くなった。ここには、捕まるのでな。逃げるのだよ。」

「そう、ですか……」

「ああ、それと、慧が起きて今日の事を覚えていたら言っておいてくれ……もう、禁呪は使うな。大切なものを失うぞ……とな。」

「わかりました・・・」

緩奈は確かに頷く。あの慧はもう見たくないと思う。見ていただけでわかる。あれは大切なものを削る魔法だと。

緩奈が頷くのを確かめると、フリードは一度も振り返らずに去っていった。

フリードが去って、どれくらいたっただろうか、慧の呼吸も安定してきた時、周囲が騒がしくなり始めた。

「慧！銀！」

その声に緩奈が振り返ると、美夜が駆けよってくる場所だった。

こうして、一連の事件の幕が下りたのだった。

第十六話 守るべき日常

そこは、慧とフリードが戦った場所からある程度距離をとった場所。戦闘があっても慧達には気付かれない位には離れている。

慧とフリードの戦いが終わってからそれほど時間は経っていない。そこに一人の男と一人の少年がいた。

少年は喜々として炎の弾丸を放ち、男はその攻撃を必死に避けている。男は体力も魔力もほとんど残っていない。また、傷も深く、本来の動きが出来ない。

「はあ、はあ、はあ・・・まさか、こんな時に貴様が出てくるとは・・・『神の使途』、『七大天使』が一人、ウリエル！」

ウリエルと呼ばれる少年。『炎』を司る『魔法使い』で『六魔天』が一つ『神の使途』のトップ『七大天使』の一人だ。その炎は『神の炎』と呼ばれ、『神炎のウリエル』と呼ばれている。本名は不明だ。

ちなみに、見た目は少年だが、実際は男より年上だ。

これだけの存在がこんな時に出てくるのはタイミングが良すぎる。見張られていたのは確かだろう。

「いやいや、こんな時だからこそだよ、『鋼王』。君は正直、厄介だ。消耗した今でなければ、僕でも倒せるか怪しい程に・・・黒澤慧には感謝してもしきれないよ。」

「何故だ？狙われる理由に心当たりがあり過ぎて解らないのだが？」

男・・・フリードがこれまで行ってきた事を考えれば、理由は幾つも思いつく。だが、どれかまではわからない。

「ふふ、気にしなくていいよ。君はここで死ぬんだから。そして、君を殺したら次は黒澤 慧だ。彼は、野放しにしておけば君以上に厄介になる。」

その言葉を聞き、フリードの雰囲気が一変した。

「おい、馬鹿天使・・・慧に手を出してみる・・・無残な姿を晒すことになるぞ？」

「つつ！・・・ふふ、それだけ消耗して、まだこれだけの殺気を放てるんだ。流石だね。でも、今の君では勝てないよ？」

そして、巨大な炎を一瞬で作り、頭上に掲げる。

「さようなら！」

そして、魔法を放とうとしたとき

「そこまですー！」

『七大法典』の『真の未来』が現れ、その炎を構成する酸素の時間を止め、かき消した。

いくら魔法とはいえ、炎である以上、燃えるためには酸素が必要

になる。魔力の消費量が無視すれば、酸素が無くとも可能だが、ウリエルは強引に維持するのは止めた。

「君は、未来じゃないか・・・何故邪魔をするんだい？」

「彼には私も用事があるのですよ。ここは手を引いてくれませんか？ウリエル。」

フリードは未来の出現に驚くと同時に、周囲へ視線を巡らせる。囲まれている。

「それは無理だね。今殺さないと、もうこんなチャンスは巡ってこない。邪魔をするなら君も燃やすよ？君一人では僕は倒せないからね。」

未来とウリエルではウリエルのほうが上なのだ。未来だけでは、消耗したフリードと組んでもウリエルには適わない。

「誰が一人と言った？なあ、ウリエル・・・」

「・・・『七法典』、『調和のシール』君まで・・・か、それに・・・大アルカナ『正義』に『魔術師』か・・・これは厄介だね。」

ウリエルが未来へ敵意を見せると、その後ろから一人の男『調和のシール』、その両脇に、白い服に身を包んだ男『正義』とマントを被り性別不明の者『魔術師』が現れた。

「そういうことだ。ウリエル。ここは引いて貰おうか？」

『調和のシール』が攻撃の姿勢をとる。そして、『正義』や『魔

術師』、未来も攻撃の姿勢に入る。

そこにさらに

「アハハハ！何？何？面白い事になっているじゃない！私も混ぜてよ！」

「・・・これはまた、面倒なのが来たね。『世界樹の頂』の『アースガルズ』アルカ・トイ・・・何で君まで来たんだい？」

赤いドレスに身を包んだ、なだらかなウエーブを描く長い金髪の女性・・・世界樹が繋がっているとされる世界の一つ『アースガルズ』の称号を持つ女性、アルカ・トイが笑いながら降りてきた。

「何で？決まっているじゃない。こんな面白そうな事、関わらなきゃ損でしょ？さあ、戦いましょう！」『魔法協会』に『神の使途』、『世界樹の頂』そして『鋼王』・・・こんな面々が一堂に会することなんて、まずないわ！」

アルカは戦いたくて仕方が無いと言った様だ。この言動から戦闘狂である事がうかがえる。だが、アルカがそうなるのも無理のないことだ。今この場には世界でもトップクラスの实力者が集まっているのだ。

「アルカ、退きなさい。私達が戦えば、この街がどうなる事が・・・私達はその『鋼王』を回収できれば良いのです。」

この場にいる者達が、何の準備もなく争えば、まずこの街は地図から消える。それだけの力を持った者達が集まっているのだ。そのため、未来はアルカを退かせようとするが、戦闘狂のこの女性が聞

く訳が無い。

「ふん！私には関係ないわ。『未来』を覗き見るしか能のない雑魚は消えなさい。この、陰険ストーカー女。」

その言葉に、流石の未来も黙っていることはできなかつた。

「陰険ストーカー……ふ、ふふふ……戦闘狂が何をいいますか……聞きましたよ？また、男に逃げられたようですね？戦闘でストレス発散は止めてもらえませんか？八つ当たりはみつともないですよ？」

アルカは何故それを！？と、驚いた顔をするが、こんなところで男に振られた事をバラされ、顔を真っ赤にする。

「言ってくれるじゃない……このペチャパイ女……」

「胸ばかりに栄養が行って、頭は子供並のお馬鹿さんが何を言いますか……」

未来とアルカはフリードやウリエルを完全に無視し、言い争いをしている。その光景に、周囲は啞然とするが、二人は気付かない。どうやら、この二人かなり仲が悪い様だ。

「何をやっているか知らないけど、邪魔ものが減るのは良い事だね。さて、それじゃあ、戦ろうか？」

ウリエルは再び炎を作り出す。フリードは魔力を振り絞り『属性武装』を展開する。シールは魔法陣を構築し、『正義』は剣を『魔術師』は杖を構える。

一触即発、そんな状況で

「悪いけど、みなさん動かないでくれますか？」

「「「なっ！」「」」

『魔法協会』の面々とウリエル、アルカ、そしてフリード、それぞれの周りに『白い炎』が立ち上ると同時に、一人の男が姿を現す。いや、一人だけではない。周囲を同じスーツに身を包んだ集団が囲んでいる。フリードが感じた気配はこの者達だった。

「久しぶりですね。フリード。そして、『六魔天』の皆さま方もご無沙汰しています。」

シールが代表して、現れた男の名前を呼ぶ。

「・・・『白炎魔王』しわかわ 白河 えんや 炎耶・・・」

皆が唾然とし、動けない中、白河はフリードへ近づく。

「久しぶりですね、フリード・・・その様子だと、慧に大分やられた様ですね。慧の友人に手を出すからですよ？」

その言葉に目を見開くフリード。何に驚いたのか、それはこの過保護者があの状況を知っていて、出てこなかったことに、だ。

「知っていたのか・・・なら、何故出てこなかった？慧が禁呪を使つたのは知っているよな？」

「あれは、慧の戦いでしたから・・・組織を抜けた慧に、私達があまり介入する訳にはいかないですよ。」

フリードは慧が『断罪の牙』を抜けていた事に驚く。しかし、その後の言葉にその驚きはかき消された。

「それと、禁呪ですが、慧なら大丈夫ですよ。まったく影響が無い訳ではないですが・・・」

「何！？いったいどういうことだ！？あれを使えばただでは済まないはずだ!？」

フリードが驚くのも無理はない。あれを使えば確実に命を削るのだから・・・

「それは、慧の属性の力ですよ。慧はただの『闇』ではないのですよ。」

「なら、なんだと言うのだ？」

フリードが知る限り慧の属性は『闇』だ。相性が凄く良く、制御できる『闇』の量が圧倒的以外は何も変わらないはずなのだ。

「それについては、後で説明しますよ。それより・・・さて、みなさん。私達の『王』が来ましたよ?」

白河はフリードとの会話を切り、白炎に囲まれ動けないでいる『六魔天』達にそう言う。

そして、六魔天はその言葉を聞き、顔色を変える。フリードは、

苦い顔をしている。

空気が変わりとてもつもないプレッシャーがその場にいる者達を襲い、一人の男が現れる。

「悪いが、フリードの身柄は譲ってもらおうぞ?」

『夜皇帝』、『夜城 晟』であった。その出現と同時に、白河は『白炎』を消す。夜城が出てきた以上、誰も下手に動けないと解っているからだ。

「夜城 晟・・・君が出てくるとはね・・・」

ウリエルは冷や汗を流し、ひきつった笑いをする。他の『六魔天』を相手に余裕を絶やさなかったこの少年が明らかに引いている。それだけの存在なのだ。

「『夜皇帝』・・・はあ、『白炎魔王』にお前まで・・・『正義』、『魔術師』、ここは退くぞ。危険度ランクSSSSしかも『王』を冠するもの達が3人・・・やっていられん。」

危険度には『魔法使い』と同様にランクが存在する。その中でも『王』を冠する二つ名を持つ者達は更に危険な存在とされる。それこそ『幻型』と同じ位に・・・

シールに『正義』、『魔術師』はフリードの捕獲を諦め去っていく。

「お前はどつする?ウリエル?」

「くっ……ここで『鋼王』を殺せなかったのは悔やまれるが……僕も君達を一人で相手にしてまで、戦ろうとは思わない。退かせてもらおうよ。」

その言葉に、ウリエルは悔しそうにし、最後に諦め、捨て台詞を残して去って行った。

夜城は最後に残った二人、未来とアルカに近づいて行く。

「や、夜城様！」

アルカは恍惚の表情をし、夜城を様付けで呼ぶ。何故か……アルカは夜城一筋なのだ。ちなみに、未来がいった男とは夜城の事で、逃げられたとは、実際に、夜城を捕まえようとして逃げられたという意味だった。

まあ、何度も告白して、断られ続けているので間違いではないが……

「アルカ、ここは退いてくれないか？」

「は、はい！わかりました！」

夜城がアルカの頭を撫でると、アルカは素直に言う事を聞き、退く。慧の女性の頭を撫でる癖はここから来ていたりする。

「さて、最後に未来……慧が世話になっているみたいだな……」

慧が、未来が理事を務める学校に通っていることは白河の報告で解っている。なお、慧が未来の学校に通う事を『魔法協会』は、は

じめ拒否したのだが、夜城と白河の説得という名の脅しのため、認めざる負えなかったのであった。

「いえ、うちの美夜も慧にお世話になっていきますから気にしなくて良いです。」

「美夜？」

「神風 美夜 『魔法協会』の期待のホープですよ。」

「そうか・・・慧は元気そうだな。さて、未来。悪いがフリードはこちらに頂く。いいな？」

「ええ、あなた方なら構いませんよ『七刻』の一つ『断罪の牙』、『夜皇帝』・・・夜城 晟さん。」

『七刻』とは、裏の世界で力を誇り、その存在が裏の秩序守っていると『六魔天』が判断した七つの組織の事だ。この組織が潰れると、裏の秩序が破られるとまでいわれている。

その一つが『断罪の牙』なのだ。

「未来・・・その『夜皇帝』って、どうにかならないか？」

「は？」

夜城は、未来にそう呼ばれ、本当に困った顔でそんな事を言ってきたので思わず疑問を声にだしてしまっていた。

「クスクス、未来さん。晟は『夜皇帝』の二つ名が嫌なんですよ。」

前、慧に「その二つ名ってまるで、女遊びを極めた男のような名だよな？」って言われてから、凄く気にしているんですよ。」

その言葉に、未来は呆れ、フリードは「ははは！確かに！その通りだな！痛っ・・・。」と笑い、それが傷に響いたため苦悶の表情で蹲っている。

「はあ、すみませんが無理です。私が決めた訳ではありませんし・・・。」

「そうか・・・すまないな。変な事を言って・・・それじゃあ、俺達は行く。慧の事よろしく頼む。」

「ええ、任せてください。」

「さて、行くぞ。フリード。」

「くくくっ、ああ、抵抗はしないさ。晟。」

そして、フリードと『断罪の牙』はその場を去って行き、未来も帰って行った。

事件解決から数日、ここは病院のベッドの上、慧はあの戦いで治癒魔法では完治しない位消耗していたため、入院している。

慧とフリードが合い打ちで倒れた後、美夜が夢と風紀委員、そして魔法協会の『魔法使い』を引き連れ到着した。その時にはもう既に戦いは終わっており、その惨状に啞然としていた。そして、傷だ

らけの慧と銀を見つけた美夜は急いで病院を手配。そして今にいたる。

因みに犯人グループは皆、奇跡的に死んでおらず、『魔法協会』で取り調べをしているところだ。

慧は禁呪を使い、記憶などを失うと思われたが、幸い消えずに済んだ。慧自身、その事は不思議に思っている。しかし・・・

「もう、あの魔法は使わないで・・・」

と、緩奈に涙ながらお願いされたため、今後は使わないようにしようと思いを固めた。使わないで済むように強くなるように・・・

「で、慧？つまり、あなたがたどり着いた時、緩奈が実験のための容器に入れられていた。目的は聖遺物に封じられていた神の魂を緩奈に移植し、神を蘇らせる事。しかし、慧達が邪魔をしようとしたため、犯人グリープのリーダーは魔力増強剤を使い、暴走。慧と銀で犯人達を倒すも、気絶。気付いたら、あの状態になっていたと・・・」

その言葉に頷く慧。慧は病室で美夜から事件の事を聞かれている。

銀や緩奈、真樹も入院していたが、慧より一足先に退院していた。慧の傷自体は治療術者や医者も驚くほどの速度で直ったが、消耗が激しく、未だ退院できないでいる。

「はい。そうです。」

美夜は銀や緩奈からもあの夜何があったのか聞いていた。その中

で、いくつか腑に落ちない事がある。

「ねえ、聞くけど、理事長の未来視を妨害するほどの力を持った人はどうしたの？あのリーダーは違うわよね？」

「わからない。俺と銀が知る限りではいなかった。」

「あの倉庫街の惨状は？」

「それも解らない。いつの間にかあなっていた。」

美夜は絶対に慧は何かを知っていて隠していると確信を持っている。しかし、慧は美夜が確信を持っていると解っていても、全てを語ろうとしない。

「ねえ、慧。私はそんなに信用できないかしら？」

「いや！そんなこと・・・」

「なら、なんで隠し事をするの？」

美夜は泣きそうだった。自分は慧を信頼しているのに慧は自分を信頼してくれないのかと・・・緩奈や真樹は知っているのに、自分に教えてくれないのかと・・・のけものにされているようで、悔しいのだ。

慧がこの様な傷を負ってまで戦ったのに、自分は何も知らず、何も出来なかった。その事が拍車をかけている。

慧はそんな美夜の雰囲気を感じ、どうするべきか悩むと、唐突に、美夜を抱きしめた。

慧自身もどうしてそうしたかは解らないが、そうしたくなつたのだ。

「ちょ！け、慧！？」

珍しく慌てる美夜。しかし、慧は放そうせず、耳元で囁く。

「ごめんな、美夜。心配かけて、隠し事して。でも、ごめん。今はまだ話せない。美夜のこと俺も信頼しているよ？でも、だからこそ、全てを話したら嫌われるんじゃないか、とか、色々頭をよぎってさ、話せなくなるんだ。だから、もう少し待っていて欲しい。そんなに時間はかからないと思うから・・・駄目か？」

美夜は耳まで赤くし、慧の胸でただ頷くだけだ。しかし、それで伝わったのだろう。慧は美夜の頭を撫で始めた。

二人の世界が広がるうとしたが、そこに乱入者が

「お兄ちゃん！何をやっているの！？」

「主！私も撫でてください！」

「むっ・・・なら私も参加する！」

董、銀、緩奈がいきなり現れた。

「な、な、何でいるの！？」

美夜が再び慌てだす。それに答えたのは夢だった。

「ふふ、皆で黒澤君のお見舞いにきたんですよ。そうしたら、二人の話声が聞こえたもので・・・」

「立ち聞きしていたと?」

「ええ、すみません。」

夢は全然申し訳なさそうにせず言う。

そんな中、未だに慧に抱きしめられ撫でられている美夜に銀達は詰め寄り、交替しると迫るが、美夜は退く気がない。

「あなた達は、よく撫でられているでしょ?」

「「「関係ないです!」「」」

そして、暴れる3人。と抵抗する美夜。慧はその光景を苦笑いで見ている。

夢は微笑み、真樹は写真を撮っている。

「おい!真樹!何時の間に現れた!?!と云うか、何を撮っている!」?

「なに、何かに使えるかな、とな?」

慧は呆れ、再度この部屋にいる者達の顔を見渡し、思う。

この日常を守りたいと・・・

第一話 魔法学へ復習へ

そこは、何処かの高層ビルの一室。窓から綺麗な夜景が見える。そこに7人ほどの人間が集まり何かを話しあっている。

「この街にあるのか？」

一人の、線の細い、茶髪の男が代表し、上座にいる女性に問いかける。

「ええ、正確には、もうすぐこの街に到着すると言った方がいいわね。もうすぐ開催される遺物の展覧会。そこに展示される予定の品それが、私達が求めているものね。」

肩にかかる位の黒い髪を持つ女性がそう言うと、その言葉に、この場にいる全員が感嘆の声を上げる。

「もうすぐか・・・わし等の秘宝がこの手に戻るのも・・・」

そのしわがれた声と白髪から、老人と言う事はわかる。しかし、発せられる生気は老人とは思えない程に満ちている。

「ククク、御老功、やる気だね」

一目で染めたとわかる金髪の男が老人の様子に、軽口を叩くが、老人は気にしていないようだ。

「でもでも、チャンスはこの機会だけですよね？これに失敗すれば

またどこに保管されるか解らなくなります。」

オドオドした声でしゃべる桃色の髪を一本の身つ編みにした少女。その品はそれだけ貴重なものなのだろう。

「落ち着け。だからこそ、我らは入念に計画を立てて来たのだ。失敗などするはずがない。」

大柄な坊主頭の男が腕を組み、落ち着いた声で、オドオドする少女に言い聞かせる。

「……………」

俯いていた青く長い髪を腰まで伸ばした小柄な少女は顔を上げ、無言で上座にいる少女に視線を送る。

それにつられ、皆、その上座にいる女性に視線を送る。その行動から、この女性がリーダーだと言う事が伺える。

その視線を受け、黒髪の女性は立ちあがる。

「さあ、取り戻すわよ……私達の留守中に奪われた鍵を、秘宝を……そして、再び封印するわよ。それが私達『七鍵しちけんのもりびとの守人』の役目なのだから……」

「ふあ……眠い……」

慧は大きなあくびをし、寝むそつに言う。

「それは慧が昨日あんなに激しくしたからでしょ？私も足腰立たなくて大変だったわ。」

美夜は慧の自業自得と言う。

「むう〜美夜ばかりズルイです。主、今度は私の番ですよ？」

銀は不満そうにし、次は自分の番だとアピールする。

「わかった、わかったから、落ちつけ、銀。」

3人は現在登校中、かなり際どい会話をしている。周囲の生徒もその会話の内容に聞き耳をたて、顔を赤くしている者、膝を折り絶望しているもの様々な反応を見せているが、当人達は気付かない。

「しかし、今のリズムゲームは凄いな。良いリハビリになったよ。」

「ゲームの話かよ！」「」

「え？」「」

慧は退院したのはいいが、免疫力が低下しており、元に戻るまで外に出る事が出来なかった。しかし、体力を回復させたいので、室内で運動をしていた。そこに、生徒会の用事から帰った美夜が、暇を持って余し、ゲームを持ち出し対戦となった。結果、中々決着がつかず、先に体力が切れたのが美夜だったと言う事だ。足腰が立たなくなっただとはそういう事である。

その時、銀は緩奈と董と出かけていたため、遊ぶ事が出来なかつ

たため、不満そうにしていた。銀が慧と離れる事は珍しい。今回、銀が慧と別行動をしたのは、慧の免疫力を戻すための薬を買いに行っていたからだ。緩奈と董はその付き添いだ。

「ところで慧、今日の放課後、会議室に集合ね。」

「会議室に？なんでだ？」

生徒会の仕事をするなら生徒会室に集まるべきだが、何故か会議室に集まれという。

「誘拐事件や、魔法部の休部で伸びていたけど、『生徒会』と『風紀委員』、『魔法部』に今年入った新入生の顔合わせをするの。慧も知つての通り、この三つの組織はその関係上、互いの事を知つておく必要があるからね。」

『生徒会』『風紀委員』『魔法部』は互いが越権行為をしない様に監視し合っている。その際、メンバーが誰なのか解っていないと、互いに誤解を生み、仲たがいに発展し、学内の治安が低下してしまうからだ。

以前、生徒会のメンバーが風紀委員とは知らず（その頃は制服に違いはなかった）魔法を使用した生徒を取り締まったところ、学校全体を巻き込んだ抗争へ発展しかけた事もあるのだ。

「ふん．．．わかった。正直、風紀委員の人数多いから、覚える自身ないけどな。クラスメイトの顔も覚えてないし。」

「そうよね、あそこだけ一般の委員の数、異常に多いから、困るのよね。私も未だにクラスメイトの名前を覚えていないのに．．．」

「主、美夜……せめてクラスメイトの顔や名前位は覚えましょうよ……」

全く覚える気のない二人に呆れる銀であった。

「さて、これまで、魔法について学んできましたが、ここで一度復習したいと思います。この基礎が出来ていないと、これからがさらに厳しくなっていくますからね。」

午前中の通常授業を終え、午後の魔法学の授業を行っている。今日は各クラスで講義になる。なお、今回の講義は、1年生と2年生は別々に行っている。常に一緒だと、1年生の気が休まらない事もあるが、2年生の授業に遅れが生じるためでもある。

「まず、『魔力』についてですね。これは、どんなものにも大なり小なり存在するエネルギーのことです。『魔力』は世界を循環しており、一定幅以上に増えたり減ったりしません。また、この『魔力』は純粋なエネルギーであり、属性という色は付いていません。」

『魔力』とは燃料の事とらえればよい。違いは、増えれば、一定値まで減衰し、減れば一定値まで増加する。また、魔力を使用しても、目的を果たせば、世界へ戻って行く。

「次に、『魔素』についてです。この魔素には『火』、『水』、『風』、『土』、『光』、『闇』の魔素が存在します。この『魔素』を元に『属性』という概念が生まれました。6つの魔素から世界は

構築されており、『魔力』はその魔素に力を与えるためのエネルギーと考えられるでしょう。そして『属性』とは、『魔素』が『魔力』により力を持った事で発言された現象から分けられる一つの区別の方法です。」

つまり、『属性』とは『魔素』が『魔力』を得てどのような結果を残すかで変わるものである。火が付けば『火属性』雷が起これば『雷属性』などだ。この様に、現象として『魔素』単体では起こらない現象を区別するために『属性』という概念はつくられたのだ。

「まあ、『属性』については今のところ、深く考えなくてもよいです。自分達が何の魔法が向いているのかを判別するための単位として考えていただければよいです。」

『属性』はそこまで簡単なものではないが、それほど重要というわけでもない。重要だとしたらそれは各属性の性質や、相互関係である。なので、今は置いておく。

「次に『魔法』です。『魔法』は、どのような事象を起こしたいか、それに合った『属性（魔素）』、『形』、『干渉（現象）』を『術式』で確定し、それぞれの『術式』をさらに『術式』で繋いで、一つの『魔法』として発現させます。この構成要素がどれだけあるかで『上級』や『中級』、『下級』などのランクが付けられます。」

なお、一般的に知られている魔法や教科書に載っている魔法はこれまでの顕？により最も効率が良い『術式』で組み立てられており、普通は皆この魔法を使用する。しかし、珍しい属性は、研究資料が足らず、自ら見つけていく必要がある。

「また、『魔法』を発現させるのに必要なものが『魔素』と『魔力』

です。『魔素』が無ければその属性の魔法を使う事ができません。例えば『水』の魔素の無い所では『水』の魔法は使えないのです。なお、人は6つの魔素を秘めているため、周囲に水の魔素が無くても使えますが、無理に使い続けると死んでしまいます。よく、魔力を使い過ぎれば死ぬと言われてきましたが、正確には、体を構成する魔素が無くなり死に至るということです。また、『術式』に『魔力』を流し、『魔素』に方向性を与えることで、『魔法』は様々な現象を起こします。ただ単に、水の魔素に魔力を流すとただの水の塊になります。」

その言葉に一人の生徒が手をあげ、質問をする。

「先生！神風先輩の『無』属性とかはどうなるんですか？『無』属性は基本の6つの属性の合成ですよ？つまり6つの『魔素』の合成ということですよ？なら、一つでも欠けた場合はどうなるんですか？」

「良い所に気付きましたね。『合成属性』については後で話しますが、『無』属性のように全ての属性、つまり6つの『魔素』の合成の場合、一つでも魔素が無ければ、魔法は発動しません。が、そもそも、世界には大なり小なりどこにでも6つの『魔素』は存在するため、その様なことはまずありません。例え火山地帯や乾燥地帯でも『水』の魔素は少ないですが存在するのです。よって、意図的にそのような状態を作らない限り、威力の強弱はありますが、魔法を使えないといったことはないのです。」

「わかりました。」

その回答に納得した生徒は席へ座りなおす。

「さて、続いては、先ほど出てきた『合成属性』についてですね。『基本属性』は『火』、『水』、『風』、『土』、『光』、『闇』の6つです。これは魔素がこの6つのみだからです。さて、この6つの内、二つ以上を組み合わせたものを『合成属性』といいます。例えば『水』と『風』で『氷』などですね。この『基本属性』の組み合わせと強弱のバランスで個人の属性が決まります。

なお、なぜこのように個々人で『属性』が変わってくるかは血筋や精神面、個人を構成する魔素のバランスなどが関係しています。よ、自分の魔力が染まりやすい色、自分の魔力に引き込みやすい魔素、これが個人の属性というものです。」

世界を構成する6つの魔素を基本属性と定義している。この組み合わせで様々な属性が生まれるのである。

「なお、『氷』属性を持っていなくても、『水』属性と『風』属性を持っていれば『氷』属性の魔法を使えます。しかし、魔力の消費や『術式』は多くなります。逆に『氷』属性を持つものは『風』や『水』属性の魔法を使えません。

これは、『属性』のバランスによるものです。『氷』属性をもつひとは『水』と『風』が絶妙なバランスで『氷』となっており、これが崩れると、『氷』の魔法は使えなくなります。また、だからといって『水』や『風』の魔法が使える訳ではありません。

例えば、魔力という電気で『水』という機械を動かそうとしても、その電気は『水』という機械を動かすのに適さないため、機械は動かないと考えればよいと思います。」

つまり、定格を外れると使用できないということだ。

「さて、ここまで基本的な『魔法』『魔素』『属性』について説明してきましたが、最後にひとつ、『属性外魔法』について説明しま

す。これは、身体強化や念話など『属性』に関係しない魔法のことです。これらは『属性』という枠がないため、誰でも使える可能性があります。ありますが、『属性魔法』と違い、イメージがし辛く、『術式』の構成も難しく使える人は少ないのが現状です。」

そう言い終わると同時に、見計らった様にベルになる。

「時間のようですね。以上が魔法の基礎になります。各自復習を怠らないようにしてください。では終了します。」

魔法学担任の教師が出て行くと辺りは急にざわめきだす。

「け〜い〜・・・何が何だかさっぱりだよ〜」

緩奈は授業が終わると直ぐ、慧の下へ向かう。魔法学の知識と制御が不得意な緩奈にとって辛い時間だったのだ。理解が追いついていない。

「はあ、夢さんに教えてもらっているだろ？」

「う〜、夢さんは丁寧に教えてくれているんだけど、丁寧すぎるんだよ〜」

緩奈は夢にマンツーマンで教えて貰っている。そのため、技術としては良くなってきているようだが、知識までは追いついていない。また、丁寧過ぎて、緩奈にはチンプンカンプンのようだ。それでも成果が出てはいると言う事は、それだけ夢が根気よく教え、緩奈もそれに答え頑張っている証拠だろう。

「主が教えてはとうですか？」

銀は慧に教えて貰っており、慧の教え方がうまいことを知っている。

「そつだよ！慧！前は教えてくれたじゃない！」

中等部の頃は慧が緩奈に教えていた。だからこそ、進級できていたとも言える。しかし、高等部に入ってから慧は緩奈に教えていない。

「それは、仕方ないだろ？生徒会の仕事で忙しくて付き合えないんだから。」

慧は生徒会に所属しているため、放課後時間が取れない。そのため、緩奈に勉強を教える時間がないのだ。真樹は、バイトがあるため、教える事はできない。

「それに、今は夢さんに教えて貰えるんだから、大丈夫だろ。」

「む……でも……」

緩奈は納得していない。緩奈が重要視しているのは、教え方のうまい下手ではない。いや、もちろんそれも関係するが、一番は、慧に教えて貰いたいと言う事だ。

「はあ、わかったよ……時間があつて気が向いたら教えるから、そんな顔するな。」

仕方が無いと溜息を吐きながら、緩奈の頭に手を乗せ、撫でる。

「うん！へへへ・・・」

とことん緩奈に弱い慧だった。

「主、私は？」

銀は慧の制服の裾を引っ張り、自分へは教えてくれないのかと言
う。

「もちろん。銀へは引き続き教えるよ。」

「はい！」

いや、訂正。銀にも弱いのであった。

第一話 魔法学（復習）（後書き）

黒澤 慧は甘えられると、甘やかしたくなる人間である。

第二話 顔合わせ

「失礼しまゝす。」

「失礼します。」

慧と銀は、朝、美夜に言われた通り、会議室に来たところだ。

「あの二人が、あの・・・」

「へっ・・・すごいもんだ。」

「ふん！何かズルしたに違いない・・・」

二人が入ると既に結構な生徒が集まっており、入って来た二人に視線を向けてきた。すると、どういう訳かチラチラと二人を見ながらヒソヒソと何かを話し始める。慧と銀は居心地が悪く、出て行きたくなったが、美夜に言われてるため、とりあえず空いている席に着く事にした。

この二人、なんだかんだで、基本的に美夜の言う事は聞く。行くあてのない二人を拾った恩人でもあるし、慧の事を事情も知らず、なのに信頼してくれる女ひとだからだ。そのため、慧は美夜にも甘い。

「主、何故でしょう？凄く見られているんですが・・・」

「うっん・・・そうだ！銀が可愛いからだよ。」

慧はとりあえず、銀の頭を撫で、気を紛らわせる事にした。周囲

の視線の理由は解らないが、気にしても仕方が無いからである。

「くうくん……」

銀はとろつとした目になり慧の膝を枕にして体から力を抜く。

慧はとりあえず、顔合わせが始まるまでこうしていようと決めた。

「はあ……あなた達、何をやっているのよ……」

そこに、花咲 薫が話かけてきた。この前の事件以降、この様に話かけてくる事が多くなつた。入院している時、桔梗と董と一緒に来た位だ。葵は来なかつたが。

「なんだ、薫か……何か用か？」

慧は薫の事を名前で呼ぶ様にしている。花咲次女と呼んでいたからそう呼ぶよう言われたからだ。なお、慧は基本下の名前で呼ぶ。が、親しくない相手は名字で呼ぶ。風紀委員長の神藤 零を神藤先輩と呼ぶのもそのためだ。なお、葵は長女と呼んでいる。

「用って程じゃないけど、良い？あなたと銀は誘拐事件の犯人を二人だけで捕らえたことで、有名になつているわ。下手の事をすると、あつと言つ間に知れ渡るから、気を付けなさい。」

「ああ、だから、この状況か……あれ？でもこれだけの奴らに知られているのに、教室とかでは特に何もなかつたが？」

そう、これだけの人間に知れ渡つて教室では何もないのは不思議だ。何かしら聞かれたり、視線にさらされてもおかしくない。

「それは、理事長がこの事件に関して緘口令をしいたからよ。何故かはわからないけどね。」

「そうか・・・あの人か・・・」

何故、この事件に緘口令をしいたか・・・それは、この事件に『鋼王』が絡んでいるからである。特に証拠も残されていないが、危険度ランクSSSの人物が絡む事件の痕には、何かしら普通じゃない者達が集まることも多いためである。

興味本位で覗きについて、それらに目を付けられでもしたら目も当てられないだろう。

また、その惨状は酷く、倉庫街と言いながら、倉庫はほとんど残っていない。これを行ったのが、偽ってはいいるが慧とばれる。もしくは知りもしないのに慧がやったと言う噂が広まるのを防ぐためである。『闇』の属性は勘違いされやすいため、こういうアフターケアも重用なのである。

「まあ、『風紀委員』や『魔法部』には知られているけどね。気を付けなさい。中にはあなたに対抗意識を持つ同学年の人達が結構いるから。」

「はあ、俺、たいして強くないのに・・・あの事件だって銀が居なければ無理だったのに・・・」

慧は面倒な事になったと、溜息を吐く。最近溜息ばかりだ。

(この分じゃ、そろそろ『属性』をばらさなきゃいけなくなるな。)

慧はこれまで、学園で属性魔法を使ってこなかった。魔法学でも属性外魔法を中心に使っていたため、『属性』を知られていない。これまでは問題は無かったが、目立ってしまっている以上『属性』にも興味をもたれ、不必要な僭索が始まるだろう。そうすれば、美夜や緩奈、董にも迷惑がかかる。なら、その前に『属性』をばらした方がましだと慧は思っている。

「まあ、いいや。忠告ありがとうな。」

「ふん！別に・・・あなたに何かあるとお母さんや董が心配するからよ。それだけ。じゃあね。」

慧がお礼を言つと、董は、顔を少し赤らめ、去って行った。

ちなみに、その間ずっと、銀は慧に撫でられていたのだった。

そして、数分。慧が未だ銀を撫でていると扉が開き、8人の生徒が入ってきた。『神凧 美夜』、『源藤 夢』、『神藤 零』、『花咲 葵』、『聖道 光』、そして、慧の知らない3人の女生徒。魔法部 部長『夜月 湊』、『副部長』、『姫神 氷』同じく副部長『雷堂 刹那』だ。

慧はその姿を確認すると、銀を撫でるのをやめた。銀はそれに気付き、起き上がり座りなおした。

「さて、皆、わざわざ集まってくれてありがとう。今日は、今年新しく生徒会、風紀委員、魔法部に入った生徒の顔合わせです。これから学園の治安を維持してく仲間です。互いの顔をしっかり覚えておいてください。それでは、人数が多いので、風紀委員からお願い

するわね？」

美夜は代表してそう言うと、風紀委員から各自自己紹介が始まった。風紀委員は委員会のため、各クラスから必ず2名選出される。慧のクラスからも2名出されているが、顔も名前も覚えていないためわからない。クラスは7クラスのため、14人となる。

しかし、実際に動いている人数は多い。それは、他の委員会の人間も風紀委員として活動できるからである。有事の際は風紀委員長の権限で、風紀委員として動かせる。風紀委員の人数が多く感じるのはこのためである。

なお、魔法部も他の部活を動けせるのだが、今の部長になってからは一度もない。それは部員が優秀と言う事もあるが、一番の理由は、部長が他人に命令するのに向いていないからだ。おどおどしているとかではなく、自由奔放すぎるのだ。

話しを自己紹介に戻そう。各自、クラスと自分の『属性』どんな魔法が得意かを話している。薫の属性は『風』のようだ。得意な魔法は『風繩』らしい。

『風繩』とは、風を縄状にし、相手を捕縛したり、鞭の様にも使える魔法で、見えない上に、そこに『風刃』の『術式』を組み込むと、捕縛されると同時に切り刻まれるという拷問魔法と言ってもいいだろう。因みに『中級魔法』に分類される。

他の委員も同じ様に自己紹介をしていく。慧が気になったのは薫の他に二人。一人はSクラスの女生徒で『アリア・スカイ』蒼い髪に蒼い瞳をした女生徒で、『空』の属性を持つ。

『空』は『火』と『風』そして『光』の合成属性だ。珍しい属性の一つで、『火』や『風』、『光』に術式を組み込まなくても、雷を纏わせる事ができる事が特徴の一つだ。

しかし、慧が気にしたのはそこよりも『スカイ』と言う性だ。『スカイ』と聞いて思い浮かべるのは『天空の騎士』『アルト・スカイ』。『聖王騎士団』13騎士の一人だ。十中八九アルトの娘だろう。

そして、もう一人、Aクラスの生徒で『ガイ・イグニール』赤みがかった髪に茶色い瞳、属性は『火』のようだが、結構な使い手だ。魔法使いのランクで表すならBは固い。まあ、単純な戦闘力での話だが……。

なお、慧は『魔法協会』について詳しく、他の『六魔天』についてはさして詳しくないといったが、だからといって他の組織の者達と戦った事がないわけではない。『虚無の騎士』が良い例だ。単に、一番争っており、勝手に覚えてしまったのが『魔法協会』というだけだ。その『魔法協会』にも慧の知らない人間は存在する。他の組織もまたしかり。

なお、六魔天のトップ達で慧の事を知らないものはいない。顔や名前を知らなくても、彼の『王』三人に弟子がいるとしてその存在は知られている。また、その力は『六魔天』のトップ達に勝るとも劣らないからでもある。

なお、『鋼王』『白炎魔王』『夜皇帝』とまともに戦えるのは、『六魔天』のトップ達の中でも多く見積もっても半数以下だ。だからこそ『六魔天』は『七刻』の中でも『断罪の牙』と、他にとある二つの組織を特別視している。

次に自己紹介をしたのは魔法部の部員。魔法部の新入部員は全部で五名のようだ。

その中に凄く目立つ奴がいた。それも慧の記憶に残るほど。それは

「1年Bクラス、大門 東吾（だいまん とうご）つす！属性は『土』で、得意な魔法はえ〜と・・・『ゴーレム』を作る事つす！よろしくお願いするつす！」

あまりの大声に印象に残ってしまったのだった。

ところで『ゴーレム』とは、意志なき人形の事だ。その体の構成は一つの『魔素』で、動力は『魔力』だ。簡単な命令しか遂行できないが、術者とのリンクを切るかコアを破壊しないと、何度も再生する厄介なものでもある。

そして最後、慧と銀の番になった。

「黒澤 銀（くろさわ いん）。属性は氷です。得意な魔法は『凍結の世界』、『氷の爪』、『氷の残像』です。黒澤 慧の使い魔です。よろしくお願いします。」

その銀の自己紹介にざわめきが起こる。一つは得意な魔法に『凍結の世界』という『上級魔法』が入っていたから。ついでに言うと、『氷の爪』は下級、『氷の残像』は中級だ。もう一つは使い魔だからだ。使い魔といっても様々で、銀のように人の姿を借りる使い魔は珍しいのである。そもそも、人の姿に変身出来る事そのものが珍しいのだが。

そのざわめきを美夜が静め、最後に慧が自己紹介をする。

「黒澤 慧（くろさわ けい）。属性は『闇』得意な魔法は、『闇刃』。よろしく。」

その言葉にさらにざわめきだす。『闇』とは、勘違いされやすい属性といったが、ここでもそれは同じだ。そのため、ざわめきだし

たのだろつ。

因みに、得意な魔法と言つのは嘘だ。もし答えるなら『属性武装』だろつが、言つても解らないだろつということ、良く使う魔法を言っただけある。

「はいはい！静かにしなさい！」

美夜が再度静める。

「それじゃ、顔合わせは終了です。湊、零何かある？」

美夜は湊と零に聞くが二人とも首を横に振つたので、解散する事にした。

「それじゃ、解散！」

そう言つて、この場を締める美夜。しかし、そこに待つた、の聲がかかった。

「待つてください！」

声を発したのはAクラスのガイ・イグニールであった。皆の視線がガイに集中するが、臆することなく美夜を見る。

「何かしら？」

美夜はガイの方へ体を向け、話しを聞く姿勢をとる。

「お願いがあります。黒澤 慧と試合をさせてください！」

その言葉に周囲はざわめきだす。慧は面倒臭そうに拒否の視線を美夜に送るが、美夜は嫌な笑いを浮かべる。そして、後ろの、部長や委員長など、各組織の上位陣と話始める。そして、さほど待たず、結果は出された。

「いいわ。認めます。でも、それだと、風紀委員と生徒会だけになるわ。そこで魔法部からも一名選出して貰って、1対1対1の決闘をしてもらいます。それでよろしいですか？」

「はい！ありがとうございます！」

ガイは深く頭を下げた。慧はというと恨みがましい視線を美夜へと送る。すると美夜は、

『いい加減。實力を見せてね？無理にあなたの過去を聞き出そうとは思わないけど、それくらいならいいでしょ？』

と、念話を送ってきた。

慧は、また、溜息を吐き

『解ったよ。美夜がそういうなら、仕方が無い。少し、本気で相手しよう。』

『期待しているわ』

慧は思う。本当に、溜息が増えたな・・・と。

場所は円形の壁に囲まれた場所。周囲は観客席となっている。その中央に、審判役の零に慧とガイ、そして魔法部代表として、東吾がいる。

ここは、天城ヶ丘学園の敷地にある魔法戦闘を行う場所だ。この他にもいくつかあり、魔法学や練習の場として使われている。使用するには申請が必要だ。

周囲の観客席には風紀委員と魔法部、生徒会の面々がおり、更に

「慧先輩！がんばれ〜！」

「慧！負けちゃだめよ！」

「ふっ……」

何故か董に緩奈、真樹までいる。

「おい、何でお前らまでいる？」

「なに、神凧先輩から聞いて、緩奈が応援に行こうって聞かなくてな。で、どうするんだ？」

今日はバイトもないため、緩奈と下校する所に、美夜から緩奈に電話がかかって来たそうだ。なお、董には薫が連絡を入れたらしい。何故入れたかは、この事があとで董にばれるという面倒だからだ。

「何がだ？」

真樹の質問に慧は解っていないながら問い返す。

『本気でやるかどうかだ。一応弱いふりはしてきたらう？』

『美夜から実力見せろって言われているからなあ。それに、余計な僭索を他の奴らにされる前に『属性』だけでも見せた方がいいし・・・とりあえず、勝ちはあるさ。』

『そうか・・・慧、お前、神風先輩に弱過ぎないか？』

『・・・言わないでくれ・・・』

自覚がある分他の人間言われると、結構堪えるのである。

「さあ、それじゃ、準備は良いか？」

三人が対峙する中、零が聞いて来る。その言葉に、ガイと東吾が返事をし、慧は真樹との念話を切ってから頷く。

「それでは、試合始め！」

零は開始の合図を出した後、結界の外にでた。

この舞台の外壁には結界を展開する魔方陣が掘られており、中から外に対する物理干涉、魔法干涉問わず、遮断する。

ここで魔法陣が出てきたが、『呪文』と『魔方陣』の違いは、その継続性と魔力を何処から持つてくるかにある。

『呪文』は発動してから一度消えると、再度『呪文』を唱える必要がある。また、自らの『魔力』を使用するため、強弱は使用者の

魔力に左右されるのが基本だ。

一方、『魔法陣』はその陣が消えなければ、何度でも使用できる。また、『魔力』は最初の発動時のみ自らの魔力を必要とするが、維持するのは周囲の魔力である。しかし、威力は誰が使用しても同じとなってしまう。

これが、『呪文』と『魔法陣』の違いである。

話を試合に戻そう。開始の合図を聞き、とった行動は別々である。東吾はゴーレム生成のために呪文を唱え、ガイは『火』属性の下級魔法『火の球』イグニス・ピラを無詠唱で放つ。数は9つ。全てを慧に向け放つてくる。最後に慧は最初から逃げていた。思いつき背を向けて。その背に向かい『火の球』が投げつけられるが、慧は振り返らず全て避ける。

周囲からは笑い声、普通に見たら慧は必死に逃げているだけだろう。しかし……

「九つ全て、視界にとらえないで避ける……なかなかやるわ……あの子……」

「そうだな。九つの『火の球』を操るイグニールも中々だが、それを見ないで避けるのもそうそうできるものではない。」

「ん〜美夜は〜良い子を見つけたんだね〜。」

上から、魔法部の湊、氷、刹那だ。見る者がみれば、この三人と同じ感想を持つだろう。

それは、舞台にいる者達も同じだ。

「ちつ！今のを、視認もせずには避けるか・・・流石だな。だが・・・これなら・・・」
「火よ我が魔力を喰らい炎の竜となりて彼の者を喰
フレイム・ドラゴン
らえ 炎の竜」

『火』と『炎』の違いは何か？それは火力に他ならない。通常『火』は『風』によりその威力を上げ、『炎』となるが、『火』の魔法に通常以上に魔力を注げば『炎』になる。結局、威力が高いか、低いかの違いだからだ。しかし、『火』に魔力を必要以上に込めることは効率が悪いため、普通しない。やるとしたら、『魔力』が通常より高いものだが、だとしても、上のクラスの者達は『魔力』を必要以上に込めるようなことはしない。

であれば、『術式』に細工をしたり、『魔具』を使用したりより、効率が良い方法を模索する。もし、使うとすれば、それはそれ以外の手が無い場合である。つまり、この場合、この魔法は不要なのだ。また、『火』は基本属性であるが、消して弱い訳ではない。『炎』には火力で負けるだけである。

「凄いつすね！黒澤君は！俺も負けてられないっす！『形無き者に
ブイラ・テッラ
仮初の意志を与え、形をなせ・・・土人形』！」

ガイは『炎の竜』を操り慧へ放つ。

東吾は土で作ったゴーレム、大きさは人より一回り程大きいものを9体、慧へ向かわせる。

「何で、俺ばかり狙うんだよ！」

何故か二人は手を組んでいる訳ではないのに慧だけを狙う。

「俺は、まず一学年の中で最強の座を手に入れ、ゆくゆくはこの学

園の頂点に立つ！そのためにお前が邪魔だからだ！事件を一つ解決した位で良い気になりやがって！」

「そんなの俺が知るか！」

ガイは逃げる慧の逃げ道を塞ぐ様に『炎の竜』を操るが、慧はさらにその動きを読み巧みに避ける。

ガイが慧に決闘を申し込んだ理由はつまりは嫉妬だ。自分より先に名前を広められたからだ。

『炎の竜』を巧みに避けた先には土人形が3体、土で出来た剣を振り下ろす所だった。

「よつと！」

慧は振り下ろされる前に内一体の懐に飛び込み、振り下ろす向きを強引に変えてやり、一体を破壊。更に、踏み込んだ人形を突き飛ばし二体とも転ばせた。

「凄いつす！俺は、黒澤君の実力が見たかったんすよ！想像以上で嬉しいつす！」

東吾は純粹に慧に興味があっただけらしい。

「何気にお前の方が性質悪いな！この野郎！」

興味本位でケンカを吹っ懸けてくる。なかなか性質が悪い。何故なら、目的がないからだ。こういう手合いは自分が満足するまで続けるので、慧にとって関わり合いたくない性格のトップにはいる。

「ちなみに！魔法部の部員は皆そうつすよ！」

更に三体、上空から飛びかかって来る。中々俊敏だ。更に、先ほど破壊した土人形も再生し、転ばせた二体も体制を立て直している所だ。慧はその人形達の位置を把握し、さらに後ろから迫って来る熱を感じる。

「迷惑な部活だな！美夜が頭を抱える理由がわかったよ！」

慧は人形達をギリギリまで引き付け、タイミングを計り、身体強化で、一気に、加速し避けた。

「なっ！」

「しまった！」

土人形六体、と『炎の竜』が衝突し、土人形はコアを破壊され再生できない。『炎の竜』は健在だが、威力は格段に落ちている。

二人は別に組んでいる訳ではなく、慧だけに集中していた。だからこういふ事が起こったのだ。

「ふむ・・・よく見えているな。」

「わっ！流石だね！でも、あの数のゴーレムを操るなんて、大門君だっけ？彼もやるね！」

「フン！」

上から順に零、光、葵の台詞だ。相変わらず葵は慧を認めたくないようだ。

「ふう〜危ない。危ない。」

全然、余裕そうにそう言う慧。ガイは悔しそうにし、東吾は目を輝かせている。

「や、やるじゃないか・・・だが、次で終わりだ!」

ガイは、一度『炎の竜』を消し、再び詠唱にはいる。

「凄いつす!凄いつす!俺も全力で行くつすよ!」

東吾も残った『土人形』を崩し、再びゴーレム生成に入った。

「あ〜・・・どうしよう」

慧は悩む。この隙だらけの状況で攻撃するべきか否かを・・・しかし、本気も何も属性魔法さえ使用していない状況で終わらせるのはな〜と思い、攻撃するのを思いとどまる。

「慧?何で攻撃しないの?」

「ふむ・・・まあ、属性魔法さえ出さずに終わらせるのは・・・な」

「え?あの距離で攻撃できるんですか?」

董は慧の移動速度、攻撃範囲を知らないため、あの距離で攻撃できるとは思わなかったので緩奈と真樹に聞く。二人は、顔を見合わ

せて、頷く。あれくらいの距離なら、本気でなくとも慧なら一瞬で詰めることが可能だと知っているからだ。

そうこうしている内に二人の魔法は完成した。

ガイの魔法は上級魔法の一つ、『フレイム・マグナス・イグニス燃え広がる大火』巨大な火球を落下させ、さらに広範囲に火が燃え広がる殲滅系の魔法。

東吾が作成したゴーレムは巨大な岩石の人形が一体。以前、銀が倒した岩のゴリラよりは一回り程小さいが、かなりの大きさであることは確かだ。

「はあ、面倒だな。『属性武装』でいきますか・・・無詠唱って、誤魔化せるしな。」

慧は『闇』で刀を生成し、まず、上空の大きな火の塊に接近。闇の刀を突き刺すと、炎が黒く染まり、黒炎と化し、慧の刀に纏わりつく。次に、刀を一閃。黒炎がゴーレムを切り裂き、コアごと燃やし尽くす。

「な・・・」

「に・・・」

ガイと東吾は啞然とする。何が起こったか解らないからだ。

「で？まだ、やるか？」

その隙を突き『闇刃』を二人の周囲に展開する。

「・・・俺の負けだ。」

「まいったっす・・・」

決闘は慧の勝ちで終わった。

三人が舞台からだと、銀が慧に抱きついて来た。他に、美夜と夢、風紀委員の委員長メンバーと薫。魔法部の部長達もいる。

「よくやったわね！慧！」

美夜もそう言いながら抱きついて来る。銀と違い、出る所はそれなりに出ているため、対応に困る慧だ。

「ふむ。イグニール。まだまだだな。しかし、力は十分にある事はわかった。これから共に精進しよう。」

「は、はい！」

「あなたのゴーレム生成も中々だったわよ。」

「あ、ありがとうございますっす！」

ガイと東吾もそれぞれのトップから言葉を貰っている。まあ、抱きつかれているのは慧だけだが・・・

「ね、僕から質問いいかな？慧君？」

「な、なんででしょうか？ 聖道先輩？」

慧は若干退きながら答える。以前、頬にキスされて依頼苦手なのだ。

「もう！ 光で良いってば！ それより、慧君は『闇』の属性だったんだね？」

「え、ええ、そうですが何か？」

『闇』は何かと勘違いされるため、何を言ってくるか解らず、とりあえず身構える。

「なら、最後の火の塊を黒く染めて、自分のものの様にできたのはなんで？」

その言葉に、周囲の誰もが耳を傾けてくる。魔法部部长は何かを知っているようで、笑っている。

「え？ なんでって・・・それが『闇』の一番の特性だからですよ？」

『闇』の特徴は何か、以前にも話したが、『闇』を自在に操るのが『闇』属性の特徴だ。しかし、一番の特徴は『侵食』にある。『火』は『破壊』、『水』は『柔軟』、『風』は『速度』、『土』は『硬度』、『光』は『浄化』というイメージがある。このイメージは当たらずとも遠からずであり例えば『光』は正確には『浄化』の特性はない。あるのは『聖』の属性だ。といつても、確かに光にも『浄化』の特性はあるにはある。しかし、それは完全な破壊と言う意味での『浄化』だ。逆に『火』は『破壊』のイメージがあるが、何かを作るのには『火』が必要であり、『創造』や『再生』としても使

えたりする。まあ、実際に出来るかといったら、そうそう出来ないが・・・

そして『闇』のイメージは『侵食』。何ものにも染まらず、逆に染める。これがこの属性の一番の特徴であり、特性だ。ならば、何故、以前『鋼王』と戦った時には使わなかったのか。

それは『侵食』にはいくつか条件があり、その一つに『その『術式』を理解していなければならぬ』というものがある。『鋼王』の魔法はその『属性』もあり、慧でも見ただけでは理解不能だったため、『侵食』が使えなかったのだ。しかし、ガイの魔法は『教科書』通りの魔法に毛が生えたようなもの。あの程度であれば、簡単に侵食ができる。

「大門だっけ？お前のゴーレム生成はほぼオリジナルだろ？だから、お前のゴーレムは『侵食』できなくてな。仕方がないから、イグニールの魔法を喰らわせてもらったというわけだ。」

ゴーレム生成は皆、独自の『術式』を研究しており、ほとんどがオリジナルだ。そのため、『侵食』は使えなかったのだ。

なお、慧なら、どちらか斬ることができたが、それだと、色々誤魔化せないため、あえて『侵食』を使用したのだ。

「そ、そんなことが・・・」

「あ、後、美夜の『無』や夢さんの『幻』、神藤先輩の『創造』も多分無理です。」

これらの属性に『侵食』が効かないのはそれぞれ訳があるが、今はそれは置いておく。

蛇足だが、『侵食』を使用しない方が、慧は強い。何故なら、いくら染まらないとはいえ、何か混ぜられているのは事実。『闇』はその濃度が純粹で濃いほど力を増すからである。

「まあ、その魔法部 部長は知っていたようですが。」

慧の言葉に皆が湊を見る。

「・・・私も『闇』属性を持っているから。『侵食』についても当然知っている。でも・・・」

そう言い、一度言葉を区切ると慧を見る。その目は面白いおもちゃを見つけた子供の様だった。慧は嫌な予感がしてならない。

「『侵食』をあんな簡単に使えるのは普通できない。それとあの『闇』の刀・・・うん。それはいい。とりあえず、美夜はいい子を見つけたということ。何処で見つけたの？」

慧が動揺する様を見て、十分満たされたのか、最後まで言わず、濁して終わった。とりあえず、慧は安堵すると同時に後悔した。『侵食』は『闇』の特性で、基本だと思っていたが、実際に使うものは少なかつたらしい。

「何処で？橋の下だけど？」

その、美夜の言葉に全員が啞然としたので、誤魔化す事に成功したのだった。

第三話 魔法部 部長からの手紙

決闘があつた次の日、慧は『魔法部』の部室を訪れている。理由は簡単。今朝、下駄箱に一通の手紙が入っていたからだ。

中身には・・・

『あなたの秘密をばらされなければ放課後、魔法部の部室に一人で来るように。』

夜月 湊』

と、書いてあつた。

昨日の決闘で使用した『侵食』に加え、『属性武装』についても何か感づかれたようだ。そのため、銀には一人で生徒会に行つてもらう事にした。事情を伝え、用事があつて帰つた事にして貰つている慧である。

「すみません。夢さん。仕事、手伝えなくて・・・」

事件もあり、生徒会の仕事がいささか滞り始めていた。結果、また夢が悲鳴を上げる事になりかけていたが、慧と銀もいるため、そうはならずにすんでいた。美夜は相変わらず、仕事をしない。しかし、今日は慧がいないため、夢と銀だけの作業になる。

(後で、差し入れ持っていこう。)

そう、心に誓う慧であつた。

そんな事を考えていると、魔法部の部室の前に着いた。

魔法部他、部活動の部室は部活塔と呼ばれる建物にある。これは本校舎とは別に建てられており、部活中に不慮の事故が起こっても、本校舎に被害が及ばないようにするためである。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか・・・失礼します。」

「どござ。」

慧がノックし声をかけると、直ぐに返事が返って来た。

入室すると、部長の夜月 湊が椅子に座ってこちらを見ていた。見たところ他に部員はいないようだ。

「この手紙はあんたからの物で間違いないよな？」

慧は手紙を取り出し、湊に見せる。湊はその手紙を一瞥すると頷く。

「ええ、出したのは私。鬼でも蛇でもない。」

「・・・聞こえていたのか。」

先ほど入る前に言った言葉が聞こえていたため、どんな地獄耳だと思っ慧である。

「好きな所に座って。話をしましょう。そのために人払いをしたのだから。」

慧はとりあえず、近場にある椅子に座り話しをする事にした。

「そんなに遠い所だと話がし辛い。」

「十分だろ・・・」

魔法部の部室は、部屋がいくつかに別れており、ここはさほど広くは無い。それほど離れていないので話す分には問題ない。

「そう・・・なら・・・」

そう言って湊は慧の直ぐ目の前の椅子に座る。

「で、俺の秘密っていうのは、いったいなんだ？」

一々話を脱線させてられないので、本題に入る事にした。

「・・・心当たりがあるから、来たんじゃないの？」

「誰にでも秘密の一つや二つあるだろ？どれのことかな・・・とな。」

秘密は誰にでもあるものだ。心当たりが無いと言った方が不自然になる。ならいっそ、秘密がある事を認めて、相手がどんな秘密を知っているか突き止めた方がよい。口を滑らせ余計なことを喋らないですむ。

「そうくるの・・・。いいわ。私が握っている秘密は2つ。正確には、秘密かどうかは解らない。でも、私の感が告げている。あなた

はこの事を知られたくないと……。」

その前置きの後、湊は指を一本立てる。まずは一つということだ。なお、立てた指は中指。慧は突っ込もうか迷ったが、脱線しそうなので止めた。

湊は残念そうにしながら続ける。

「まずは一つ、『侵食』について。私も『闇』属性をもっているけれど、あんな簡単にできるものではない。教科書通りとはいえ『術式』を理解する事もそうだけど、それを制御する技術、なにより、相手の魔法を利用する……まず『魔法使い』ランクFの人間にできる事じゃあない。」

『侵食』を行うためには相手の『術式』を理解していなければならぬ。これは、『魔法』が複数の『術式』で構築されている事に関係する。下手に侵食すると、『術式』同士が妙な干渉を起こし暴発する事もあるからだ。それを、あんなに簡単に、しかもその魔法を利用するなど、そうそうできるものではない。

それこそ、『闇』を持つ者でも上位のもの……最低でもAランクの実力者ではないと無理だ。

「……どこから俺の『魔法使い』のランクを知ったんだ？」

「蛇の道は蛇。」

いったいどこから情報を得たのか大いに気になるが、調べようと思えば『魔法使い』のランクは調べられるため、流す事にした。

「まあ、俺、制御は割と得意だからな。あれくらいは……な。」

「そう・・・ならもう一つ。あなたの使った『闇』の刀・・・あれは何？」

「何？とは？『闇黒の剣』の応用で、形を刀にしてただけだが？」

そう、『闇』属性の魔法で、一般的に知られる剣の形を取り、武器として使用できる魔法は『闇黒の剣』だけであり、刀の形をしたものはない。が、『術式』の『形』を『剣』から『刀』に変えれば可能だ。それほど特別な事ではない。

「嘘。あれは少なくとも私が知る『闇黒の剣』ではなかった。『闇黒の剣』は『術式』で『闇』属性の剣をつくる魔法であって、『闇』そのもので剣を模る魔法ではない。」

慧はその言葉に、驚く。しかし、どうやって『闇』そのもので模ったのかを知られたのか解らないため、その事を認めず、探る事にした。

「何のことだ？魔法陣じゃあるまいし、『術式』は見えないだろ？どうして『闇』そのものだと思ったんだ？」

『術式』とは、『形』や『属性』、『現象』を確定し、繋ぐものだが、『魔法陣』以外は直接見る事は普通できない。『魔法陣』は『魔法』を継続させるため、その陣自体が『術式』となっている。よって見る事ができるのだ。

しかし、見る事が出来なくても理解する事はできる。方法の一つとして、『呪文』を聞く事だ。『呪文』は『イメージ』をより正確に浮かべるものだが、同時に、それが『術式』となっている。それを聞く事で『術式』を理解できる。もう一つは、魔法に直接触れることだ。『魔法』が発動しているということは、『術式』が表に出

ていると言う事だ。危険は伴うが、直接触れれば『術式』を理解する事は可能なのだ。

しかし、決闘の時、慧は無詠唱で行った。その刀に直接触れてもいないのにそれを理解する事は出来ないのだ。

「誤魔化しても無駄。確かに私には細かい事は解らなかった。でも、この子達の目はごまかせない。」

湊が言うと、二羽の鳥が現れ、目の前の机に乗った。純白の鴉と漆黒の鴉だ。

「こつちの白い方が『メラ』、『光』属性。こつちの黒い方が『クス』『闇』属性。二人とも、自己紹介して。」

湊がそう言うと、最初に黒い鴉が前に出てきた。

『初めまして。慧様。私は『クス』。湊様の使い魔です。以後、お見しりおきを。』

黒い鴉は透き通るような女性の声で話しかけてきた。

次に、白い鴉が前に出てきた。

『おう！坊主！俺が『メラ』だ！よろしくな！』

こちらは渋い男性の声だ。

「ああ、よろしく。黒澤 慧だ。で、夜月先輩。この二羽がどうしたんですか？」

慧は薄々感づいて来たが、聞く事にした。すると、湊は『クス』を抱いて、こちらに向き直る。

「この子は、さっき言った通り、『闇』の属性を持った鴉。それも、私達より遥かに長く生きている。この子が言うには、あなたの『闇』の刀は『魔法』ではなかったって……」

慧の予想通りの答えだ。何故なら、この鴉、二羽とも、かなり高いクラスに位置している。多分、『幻型』だ。正直、『幻型』が向こうについている以上、言い分けは難しい。しかし、どうやってその判断したのか知りたいため、聞く。

「『クス』だったよな？何で俺の『闇』の刀が『闇』そのものだと解ったんだ？」

その問いに、クスは湊と念話を交わす。そして、話しがまとまったのだろう。答えてくれた。

『それは……本来、属性魔法は、『術式』で、引きこむ『魔素』を決め、『魔力』を流し、起こる『現象』を使用する事です。しかし、慧様が使用した魔法は、『魔力』を餌に『魔素』を引きこみ、『術式』で『魔素』を操っていました。』

つまり、本来『魔法』を使用するための手順が違うのだ。『術式』で己に合う『魔素』を集め、『魔力』を流し、『現象』を起こすはすが、『魔力』を喰らわせることで『魔素』を集め、『術式』に引き込んでいく。この場合、『魔素』は『属性』とはならない。それもそのはず、『属性』とは『術式』により決められるものである。もし単に『魔力』を『魔素』に与えることで『属性』となるな

ら、そこら中で『属性』による『現象』が起こり大混乱だ。

つまり、慧の様に、魔力を集めてから術式に組み込めば『属性』への変換は行われず、『魔素』を操れるのだ。しかし、これはそう簡単にできるものではない。意図的に魔力により魔素を集めると言う事は大変難しいのだ。

『何故、そんな事が解るかという顔ですね？答えは簡単です。私は『闇』に属する『幻型』です。『闇』の魔素を見る事ができるからです。』

その回答を聞き、納得したので、自分の魔法について説明する事にした。

「そんな判断の仕方があったのか・・・まいった。降参だ。クスの言う通り、あれは『闇』の属性魔法じゃない。『属性武装』といって、『闇』そのものを操る魔法だ。もちろん、『属性魔法』としても使用できる。『侵食』は『属性』としての力だしな。」

言い終わると、慧は初めから思っていた疑問を投げかけた。

「夜月せんぱ・・・」「湊でいい。」「湊せんぱ・・・」「湊・・・」
・・・湊。それで、俺の秘密を知ってどうしようと言うんだ？『属性武装』は教えられないぞ？」

「解っている。私としては教えて貰いたいけど、クスとミラが・・・」

「止めとけ、嬢ちゃん。嬢ちゃんには無理だ。』

『ええ、あれは純粹な『闇』の属性でなければ出来ませんし、リス

クが大きすぎます。失敗すれば『闇』を制御できず、魔力を喰いつくされて最悪死にます。』

『属性武装』は『魔力』を餌にする訳だが、失敗すると、魔力を喰いつくされ、『火』の魔素なら、焼かれ、『水』なら、水分を吸われ、『闇』なら闇に吞まれ、下手したら死んでしまう。かなり危険な魔法なのだ。

「と、言う訳で、それはない。・・・慧、あなた、私のものに「却下だ」・・・何故？」

湊の台詞を慧は途中で遮り拒絶する。

「その契約はもう美夜としている。だから却下だ。」

「そう、残念。・・・なら、私の研究に付き合って。」

「研究？」

慧は、不審感をあらわにして問い返す。魔法部の噂は美夜から嫌と言うほど、愚痴と一緒に聞かされているからだ。

「・・・大丈夫。あなたが思う程の事はしない。今回の研究は遺物の研究。過去の遺物について調査して、偽物か本物かの検討、ならびに過去の逸話の実証。」

「いや、実証は無理だろ？」

実証はそもそも遺物が無ければ不可能だ。遺物自体、入手が困難なのだ。簡単にできる実験ではない。

「それも大丈夫。今度、櫻木市の博物館で遺物の展覧会がある。その際、とある遺物を公衆で解錠して本物か偽物か真偽を確認するらしい。私の研究対象はその遺物。」

櫻木市の博物館は大きく、様々なものを展示している。特に人気なものが『遺物』だ。神話に登場するものや、現代に語り継がれるもの、誰にも知られないものなど、様々な遺物を展示している。しかし、それが本物か偽物かの審議は不明だ。

今回の展覧会はこの街にある博物館のものだけでなく、全国各地から、『遺物』のみを集め行う。その中で目玉となるのが、その真偽の検証だ。遺物は危険なものも多く、また、どの様にすれば使用できるか不明なため、検証はなかなか出来ないが、今回は一つだけの様にすれば使用できるか解つたものがある。それは・・・

「その遺物は『パンドラの箱』。開ければ世界にありとあらゆる災厄が降り注ぐ禁断の箱・・・」

「『パンドラの箱』か・・・それが本物なら、開けさせるわけにはいかないよな・・・」

慧は自室のベットに寝転びながら、今日、湊に言われた事を思い出していた。『パンドラの箱』についての研究、検討までならいいだが、実証は流石に不味い。本物なら、世界に災厄が溢れてしまう。

「だが、博物館は『賢者の知恵』の領域だから・・・」

『賢者の知恵』は『魔法』の研究や『遺物』の研究などを行う、『六魔天』でも研究に主軸を置いた組織である。単純な力言えば他の『六魔天』に劣るが、所持する『遺物』、『魔具』の数は最も多く、厄介な相手なのだ。

「まあ、そうそう本物がでる訳はないか……。研究だけは手伝わらないとな。」

慧としては、別に美夜達にばれるのは問題ない。しかし、一般生徒にばれるのは本意なのだ。よって、手伝わしかない。しかし・

「なら、別に俺じゃなくてもいいよな……。」

そう、手伝うだけなら慧でなくても問題ない。しかも『幻型』を使い魔にしているのだ。知識だって問題無いはず……。なのに何故慧に手伝わせるのか……

「何が俺じゃなくてもいいの？」

「み、美夜!？」

慧は考え事に集中していたせいか美夜が部屋に入ってきた事に気付かなかった。呼びかけられ、ベットから起きる。銀はまだお風呂のようだ。

「慧、私が何を聞きたいか、解っているわよね？」

「あ、ああ……。」

今日、慧は生徒会を休んだ事だろう。美夜はあの事件以降、慧の行動を把握したがる傾向にある。それほどしつこい訳ではないが、多くなつた事は確かだ。そしてもう一つ・・・

「・・・・・・・・」

慧は今日あつた事を話すかどうか考える。が、美夜になら大丈夫だろうと思ひ話す。後で知られて、拗ねられるのも面倒だからという事も理由の一つだ。

「それがさ・・・」

慧は今日あつたこと。『属性武装』の事、湊の頼みごとを話した。

「そう・・・わかつたわ。その魔法が危険だから、あまり周囲には知られたくない。その秘密を守ってくれる代わりに、慧が湊の手伝いをする・・・と・・・」

「ああ、そういう事になつた。駄目か？」

慧は美夜に問う。美夜が駄目と言うなら、慧は拒否するつもりだ。まあ、独自に調べはするが・・・

「駄目ではないわ。でも・・・」

そう言うと、美夜は慧の胸に頭を押し付けてくる。

「そういう事はまず、私にはなしてよ・・・湊の後っていうの、なんだか嫌・・・」

「あ、ああ・・・こ、今後は美夜にまず話す・・・よ」

慧は動揺する。美夜はお風呂あがりのためか、パジャマ姿で、妙に色っぽい。しかも、甘えたような声を出すのだ。普段はそんな事がないため、慧の心拍数はかなり上昇している。これがもう一つ変わった事。最近の美夜はこのような行動が多くなってきたのだ。ふとした時にこの様な行動をとり、普段とのギャップから、慧は慣れる事ができないでいる。

「み、美夜・・・そろそろ、離れてくれ。」

慧は美夜に離れるよう頼むが・・・

「嫌・・・今日は一緒に寝よ?」

「い、いや・・・それは・・・」

「駄目?」

拒否使用とするが、美夜に上目使いで見られ、あっけなく陥落した。

「・・・わかりました。」

そこに丁度、銀も戻ってきた。

「あ!美夜!ずるいです!私も主にくつつきます!」

こうして、慧の夜は深まるのであった。

『ところで嬢ちゃん。』

「何？メラ」

ここは、天城ヶ丘学園が管理するマンションの一室。天城ヶ丘学園では、遠い所から進学してきた生徒のために、寮の代わりに、マンションやアパートを貸し出ている。

と言つても、各マンションやアパートに住んでいるのは学園の生徒だけなうえ、管理人は学校の教師。また、男子と女子は別になっているため、寮とさほど変わらない。変るのは、自炊が必須という点位だろう。

湊はお風呂あがりに、丁度缶ジュースを飲んでいるところだった。

『なんだって、あの坊主に頼んだんだ？別に研究位あの坊主でなくても良いだろ？』

『そうですね。確かに慧様は優秀でしょうが、湊様が拘る理由はなはずです。』

メラもクスも不思議なのだ。いくら『属性武装』という珍しい魔法が使えると言つても、それが今回の研究に関係するかと言えばそうではない。なのに、わざわざ、脅す様な慣れない事をしたのだ。

「ええ。メラとクスの言う通り。研究自体は慧でなくても問題ない。

」

『なら、何でだ？』

「美夜は、誰かに甘えない。例外は夢だけ。なのに、慧にも甘えて
いる。それが不思議。」

湊は美夜とは夢に続き、長い付き合いである。家柄は、美夜は神
凧家の息女。湊は特に名家の出と言う訳ではない。だが、お互い珍
しい属性保持者と言う事もあり、話すようになり今に至る。

これまで、湊は美夜が夢以外の誰に甘える所を見た事はなかった。
湊自身も含めて。なのに、慧には甘えている。少なくとも湊の目か
らはそう見えた。だから、不思議なのだ。

「だから知りたい。黒澤 慧という人物を・・・もし、美夜に相応
しくないのであれば、その時は・・・」

その言葉を言い終わると同時に、手に持っていた缶ジュースが潰
れた。中身は入っており、『スチール』の表記が入っている。

『そ、そうか・・・』

『が、頑張ってください・・・』

『幻型』の使い魔2匹が冷や汗を流していた。

第四話 進む準備

「さて、展示会の準備は順調に進んでいるか？」

清潔感が漂う広い部屋。多くの作業着とスーツを来た者達が、しきりに行来きしている。

「はい。ダリウス様。当日には十分間に合います。」

一人の黒いローブ姿の男、ダリウスに、スーツを来た男が答える。スーツの男は時折荷物を運ぶ者に指示を出しており、この現場の指揮を任されている者なのだろう。

「そうか、それはよい。後は、あの遺物だが・・・」

「はい。それは先ほど現地で護送していた『魔法使い』の方々から連絡があり、空港を無事発つたそうです。その際、襲撃などは無かつたとの事です。」

指揮を任されている男はテキパキと答える。

「ふむ。全て順調ということだな。」

「はい。後は本番当日を待つだけです。」

「よし、ではこの場は君に任せる。頑張ってくれ。」

「はい--」

そして、ダリウスは広間から出て、この博物館に用意された自分の仕事部屋。いや、もう自室と言っていていいだろう。そこに戻っていく。

ダリウスは椅子に座ると、一息つき、名前を呼ぶ。

「月影……」

「はっ、ここに……」

すると、いつの間にか、黒い装束に身を包んだ一人の男が物陰に跪いていた。顔まで黒い布で覆われ、本当に男かどうかわからないが、声や身体つきから、男と察する。

「今、『七つの鍵』と『パンドラの箱』は無事、空港を発った。こちらに着いた後も、『六魔天』の『魔法使い』達が護衛に就く。皆、A～Bランクの魔法使いだが、奴らが相手では不安だ。お前達も気付かれないよう護衛についてくれ。あちらの空港で襲撃が無かったと言う事は、こちらで待ち構えていることは確かだろうからな。」

「わかりました。その任、承りました。しかし、一つ聞いてもよろしいですか？」

月影と呼ばれる男は、顔を上げ、その黒い布の隙間から見える黒い瞳で依頼主であるダリウスを見る。

「なんだ？」

「そこまで心配でしたら、Sランク以上の『魔法使い』に頼めばよろしいではないですか？何故このようなまどろっこしい事を？」

月影の疑問はもつともである。そんなに大事なもので、AとBランクでは心もとないのであれば、Sランク以上を動かせばいい話である。『賢者の知恵』の『十杖』の一人なのだから。そうしないのは何か理由があるはずだが、その理由によってはこの依頼自体放棄する必要が出てくる。場合によっては、自分の組織が壊滅する危険だつてあるからだ。だからこそ、少しの疑問でも聞いておかなければならない。それが、一組織の長としての役目だ。

「うむ。そもそもこの『パンドラの箱』と『七つの鍵』は周囲からしたら眉唾物だ。『賢者の知恵』のSランクの者達の多くはこのような仕事を引き受けてはくれない。他にも仕事はあるからな。そこらを優先するだろう。」

私が直接依頼してもいいが、職権乱用ということで他が五月蠅いなど、ダリウスは付け加える。

「かと言って、フリーの『魔法使い』は信頼が置けない。だから、AとBランクの者達に依頼したのだ。このランクなら、他の『六魔天』も比較的協力してくれるからな。この地は『魔法協会』の管轄と言つ事もあり、『魔法協会』の魔法使いにも手伝わってもらう事になっている。」

表向きは中が良い事を演出するため、このような協力もしている。しかし……

「『魔法協会』の『真の未来』が用意した魔法使いだ。信用しても良いだろうが、可能性として、この者達が遺物を盗むことも考えられる。お前達にはそちらの監視も頼む。」

裏では、この様な事が幾つも行われている。そのため、下手に他の『六魔天』の高ランクの魔法使いに協力して貰うと、それを奪われる可能性が増えるのだ。それなら、裏の組織に依頼した方が良い。裏の組織の者達は活動資金を得るために、このような仕事を受けている。『断罪の牙』もパトロンからの依頼を受け資金を得ている。つまり、もし、信用に値しない場合、資金を調達できなくなり、潰れてしまうのだ。よって、『六魔天』に協力を仰ぐより、裏の組織に頼んだ方が、信用が置ける。更に裏で一組織をつくるということとは相当の手練ということだ。なら、実力も申し分ないということでもある。

しかし、表だって裏の組織を動かすのは不味い。なので、一々面倒な手配が必要になってくるのだ。

「わかりました。差し出がましい事を言い、申し訳ございません。この依頼必ずや我ら『影』が達成してごらんにいれます。では……」

その言葉を言い終えると同時に月影は目の前からいなくなった。

部屋に残ったのはダリウス一人。

「頼むぞ月影……私の手のひらで踊っていてくれ。ククク……」

そこは夜の闇に染まった場所。一寸の光もなく、何がいるか目では解らないだろう。

「月影様、何故あのような者にあそこまで下手にでるのですか？」

しかし、そこには確かに人の気配がある。

「止水。我らの目的のためにはあの黒ブタを利用するのが一番なのだ。余計な不審感を抱かれるのは不味いのだ。」

互いに見えないはずだが、それなのに何処にいるか解るのか、自然に話している。

「雷蔵……そうは言つが……」

「どうやら、最初に言葉を発したのが『止水』次が『雷蔵』というらしい。」

「ふ、何、後少しの辛抱だ。あの男は『パンドラの箱』の中身、その表側しか見えていない。それに、勝手に開けてくれると言っている。なら、開けてくれるのをこちらは待つだけだ。問題はそちらよりも鍵守達だ。全く、こんな極東までよくきたものだ。まだ見つからないのか？」

「はっ、部下達に潜伏先を調べさせていますが、未だ不明です。」

止水は月影の言葉に闇の中で膝を付き答える。

「空港を見張らせていた部下が、全員この地に降り立つ所を目撃し、その情報をこちらに伝えた後、七人は姿を消しました。後に残されたのは部下の死体のみ……」

雷蔵は淡々と語る。しかし、怒っているのは確かだ。時折バチツという音と共に青い電気がほとばしっている。

「落ち着け雷蔵。部下の敵を討つためにも奴らを探し出すのが先決だ。潜伏先を探すのは我らでも困難だが、近々、奴らは必ず姿を現す。移送中の『遺物』を狙ってくるだろうからだ。そこで始末するぞ。」

「「はっ」」

そして、その場からは人の気配もしなくなった。

「皆さん、御集り頂有難うございます。」

天城ヶ丘学園 理事長室そこにある生徒達が集められている。

生徒会副会長 源藤 夢

風紀委員 副委員長 聖道 光並びに花咲 葵

魔法部 副部長 姫神 氷並びに雷堂 刹那

の面々だ。

「集まっていたいただいたのは、あなた方に依頼があるからです。内容は、今度開かれる展示会のメインとなる『遺物』を空港から、この街の博物館まで移送する際の護衛です。他の『魔法使い』達と協力して任務にあたっていただく事になります。他にも依頼を受ける魔法使いの方々もいますので拒否してくださっても構いません。」

そこまで未来が言うと、夢が手を上げ質問する。

「何故、私達だけなのですか？」

夢の疑問はもつともだ。本来、このような依頼はまず生徒会長や風紀委員長、魔法部部長を通して伝えられるものだ。その者達の都合が悪い場合は夢達が呼ばれることもあるが、今回は特にそういった事はない。

「それが、『六魔天』関係者で、『魔法使い』ランクがAとBの魔法使いという条件付きの依頼なのです。今回、移送する『遺物』が皆さんもご存じかと思いますが、『パンドラの箱』と言う事もあり、フリーの魔法使いには依頼したくないそうです。また、Sランク以上に依頼しないのは・・・皆さんも『六魔天』に所属しているなら解りますよね？」

その言葉に頷く一同。集められたのは皆『六魔天』に所属する『魔法使い』およびその関係者だ。なお、それぞれの所属は『魔法協会』が夢、氷、刹那。『世界樹の頂』が葵。『聖王騎士団』が光だ。本来、『六魔天』に所属する事は大変難しい。しかし、葵は花咲家の息女。光も聖道家の人間。女神 氷は『女神組』の娘で『魔法協会』の関係者だ。そして、源藤 夢、雷堂 刹那の二名は自力で『六魔天』の一つ『魔法協会』の所属を掴み取ったのだ。

おそらく、この中で、最も腕が立つのは夢と刹那だろう。実戦経験が他と違うのだ。

「わかりました。」

夢はその返答に満足し、引き下がる。そのタイミングに合わせ今度は葵が手を上げる。未来は、目線で質問を促す。

「今回の依頼ですが、そこまで大事な物なら、夢さんや刹那さんは

別として、私達学生よりもっと経験豊富で、腕の立つ魔法使いに依頼するべきではないのでしょうか？それに、聞いた限りではかなりの人数ですよ？いくらなんでも嚴重過ぎませんか？」

「いくら『魔法使い』のランクが高いと言ってもまだ学生である。

学生でランクの高い者の大半はあくまで『昇格試験』によるものであり、実戦経験は、あるとはいえ学園への依頼がほとんどだ。学園への依頼は『六魔天』の方で厳選し、学生の手でも負える様な軽い依頼がほとんどなのだ。

「この学園で『魔法使い』としての依頼を受けるのは大概、Sランクの美夜か零、湊。後は、『六魔天』所属の夢と刹那になる。前回の『誘拐事件』に関しては人手が足りないため、例外的に『魔法使い』の資格を持つ生徒達を動かしたが、本来はまずない。」

「そうですね・・・まず、最初の質問から答えましょう。簡単に言えば、実戦経験を積む良い機会だと思ったからです。あなた達は基本、『昇格試験』で昇格した方々が多いですよ？『六魔天』もまだ学生のあなたがたに高ランクの依頼はしません。ですが、それでは中々成長出来ないでしょう？今回は他に『魔法使い』も多くいるため、丁度良いと思っただけです。あなた方を選んだのは問題ないと判断したからなんですよ？」

その言葉に葵を始め、少し表情が緩む。『七大法典』の未来に認められた事が嬉しいのだろう。

「そして、もう一つ。今回、人数が多い理由は2つあります。一つは移送する『遺物』が全部で8個あるからです。『パンドラの箱』とその封を解錠する七つの『鍵』。護衛する遺物が多いため、必然的に、護衛者も多くなります。もう一つは、『遺物』を狙って襲ってくる者達が必ず現れるからです。」

その言葉に皆驚きの表情をする。

「何故それが解っているかと言うと、博物館に予告状が届いたそうです。なので、かなりの数の『魔法使い』が動く事になります。」

「そうですね・・・でも、何故、予告状なんか出したのでしょうか？」

予告状を出せば警戒が強まるのは当たり前だ。他に狙いがあり、
囷として使うならまだわかるが、今の所、犯人の目的は『パンドラの箱』を狙っていると言う事しか解らない。これさえもブラフの可能性はあるが・・・

「それは、犯人に聞いてみなければわかりませんし、愉快犯ということも考えられます。ですが、念には念を入れておいた方が良いでしょう?」

「・・・そうですね。ありがとうございます。」

葵はまだスッキリはしないが、とりあえず下がることにした。

「では、他に質問はありませんか?」

皆、首を横に振る。その姿を見て、一つ頷くと解散とした。

「それでは、返事は今週末までお願いします。それでは、良い返事を期待しています。」

そして、皆が理事長室から立ち去り、廊下を歩きながら、どうするか話しあう。

「で、あなた達はどうするの？今回の依頼受ける？」

葵が皆に確認する。別に誰が受けるから受けないという事はないが、受けるのであれば連系や役割などを事前に話しあっておく必要があるからだ。他に『魔法使い』がいるとはいえ、確認しておいて損はない。

まず、先に口を開いたのは、氷と刹那。魔法部の二人だ。

「私たちは、依頼を受けることにした。」

「湊の〱研究対象が〱『パンドラの箱』だから。」

湊が研究している『遺物』が『パンドラの箱』のため、調査するには丁度良いと二人は考えたようだ。

「そう、夢さんあなたは？」

今度は夢に話を振る葵。夢は何かを考えていたようだが、一度頷くと、葵を見返す。

「私も受けます。最近依頼を受けてなかったので、丁度良い機会です。」

夢は生徒会の仕事が忙しく、最近は依頼を受けていなかった。『六魔天』の方も、夢が学生と言う事も配慮し、依頼を拒否しても、特におとがめは無かった。なお、これはちゃんと返答したからで、慧の様に無視すれば、処罰の対象となる。

「そうですか・・・私はもちろん受けるとして、光は？」

最後に、光に声をかける。光はまだ悩んでいるようだ。

「うん・・・僕は今回はパスかな。あまり、他の『魔法使い』と会いたくないし・・・」

光は暗い顔で、そう答える。何か嫌な事でも思い出したのか、普段と違い憂鬱そうだ。葵は何か知っているのか、その事には触れず、話しを纏める。

「そう・・・わかったわ。それじゃあ、私の方で理事長に話しておくから、日時や集合場所は私から連絡するわ。」

それで良い？と葵が問うと、皆了承に意を伝え、解散となった。

一方、理事長室。

そこには、未来と真樹がいた。夢達が立ち去った後、入れ替わり真樹が訪ねてきたのだ。もちろん。未来が呼んだ訳だが・・・

「それで、理事長、今回の依頼は『パンドラの箱』か？」

真樹から話しを切りだす。真樹はフリーの『魔法使い』でランクはBだ。しかし、その実力はSランクに相当するため、未来は真樹に個人的な依頼をする事が良くある。今回もそうなのだろうと真樹は当たりをつけている。

「ふふ、話しが早くて助かります。今回は、夢さん達を陰ながら手伝って上げてください。今回のダリウスからの依頼はいくつか腑に

落ちない点が多いです。予告状が良い例ですね。」

「ふむ。了解したが、なら何故その依頼を断らなかつたのだ？」

真樹は了承するが、なら何故その依頼を受けたのか不思議に思い問う。

「ふふ、何事も経験ですからね。あの子たちには経験を積んでもらいたいのですよ。」

「そうか、未来視はどうなのだ？」

「それが、その『パンドラの箱』が本物かは解りませんが、少なくとも私の未来視を妨害する程の力はあるようです。」

「どうやら、今回の『遺物』は本物かの真偽は不明だが、未来の『未来視』を妨害する程の力は秘められているようで、未来にも見えないようだ。」

「それなのに、依頼を受けたのか？」

「ええ。あなたに頼めば大丈夫でしょう？何でしたら、慧に協力を要請しても構いませんよ？」

「……そつちが本命か……悪いが、今回は俺一人でやらせてもらおう。」

未来の思惑はともかく、真樹は、慧に協力は端からするつもりはないようだ。それは、誘拐事件の際の傷は完全に癒えたとはいえ、また直ぐに無茶をさせるのは不本意だからだ。また、慧が無茶をし、

怪我をすると緩奈も元気をなくすためである。

「そうですか、私としては別にそれでも構いませんけどね。ふふ、慧の体の事を気遣っているんですね？慧は良い友人を持ちましたね。」

微笑む未来に、真樹はソツポを向きながら、言い返す。

「ふん・・・ただ、あなたのいいように動くのが嫌なだけだ。では、失礼する。」

そして、今度こそ本当に未来一人になった。

「・・・以前は美夜が騒動の中心になると視ていましたが、どうやら、変ってきているみたいですね。まあ、どちらにしろ慧が中心にいる事に变りはありませんか・・・」

場所は变つて、ここは街にある図書館前、慧は現在湊と董、緩奈と図書館に来ている。銀と美夜は生徒会の仕事だ。夢は今日は理事長に呼ばれていた。

慧は湊の研究を手伝う約束をしていた訳だが、授業が終わると携帯に連絡があり、櫻木市の図書館に集合とのことだった。美夜と銀に断りを入れ、図書館に向かっていた。なお、学園の図書館では駄目か聞くと、

「もう、調べ終わっている。」

と、言う事で、市の図書館に向かっていた。その途中、二人で帰っていた董と緩奈と出会い、二人も図書館に行くと言うので一緒に向い、今に至る。

ちなみに、緩奈と董は事件以降仲が良く、よく一緒に帰っているみたいだ。

「で、何から調べますか？」

「・・・『パンドラの箱』が出てくる神話や文献。昔話や童話、絵本。なんでも良い。全部探して、共通点や、信憑性が高い部分を抜き出す。学園には昔話や童話、絵本の類がないから、そちら中心でお願い。」

「解りました。それじゃあ、探してきます。」

慧は湊に言われた書物を探すため、とりあえず検索機で場所を調べる事にした。湊はその背中をジッと見ていた。

その二人を更にジッと見る緩奈と董。

「どう思います？緩奈さん。」

「そうね・・・夜月先輩は慧にこれといった好意を持っている訳じゃないわ。そうね。」

「ですね・・・あの目は観察でしょうか？」

「そうね、どついう人間か見極めようとしている目ね。でも気は抜

けないわ。慧の事を知って、見方が変わるかも知れないし・・・」

「そうですね。引き続き監視しましょう。」

そんな二人は周囲からの視線に気付かない。

（ ）（ ）何をしているんだろう？この子達？（ ）（ ）

第五話 パンドラの箱 考察

『パンドラの箱』とは、有名なところでいえば、ある巨人が神に、火を人間に与えてはならないと言われたにも関わらず、与えてしまった。それに怒った神は、人間に罰を与えるため、『パンドラ』という女性を作り、一つの箱を預け、人間の世界へと送った。その箱は決して開けてはならないと言われていた箱だった。しかし、『パンドラ』は好奇心に負け、その箱を開けてしまった。すると、あらゆる災厄が箱から溢れてしまった。最後に『エルピス』つまり希望だけが残り、人間は絶望せずに済んだ。と言う話だ。

しかし、この話しには諸説ある。『パンドラの箱』とは『箱』か『壺』か、『パンドラ』に神が与えた能力、『箱』を開けたのは誰か、『箱』の中身とは何か・・・等についてだ。特に多いのは『箱』の『中身』についてだろう。そして、それは誰もが注目する所だろう。

まず、飛び出したものについて。これは大きく分けて二つ。とび出したものが災厄か祝福かと言う事。『パンドラの箱』は人間に罰を与えるものである事はまず間違いないだろう。つまり、災厄が飛び出したと言う事はそのまま、災厄が世界に満ちたと考えればよい。では祝福が飛び出すとはどういう事か、それは二通りの考え方がある。一つは『パンドラ』から『幸運』や『祝福』が無くなった。もう一つは、人間の世界を一つの箱とみだて、世界から『幸運』や『祝福』が飛び去った。だが、それだといくらでも解釈出来てしまうので、おそらく、災厄が飛び出したと、ストレートに考えて良いと思う。

そして、もう一つ。最後に残ったものについてだ。一つは予兆説。最後に残ったものが予兆（未来予知）で、未来を知らずに済むから、人は絶望せずにすむ。という説。もう一つは希望説。最後に希望が出てきたため、人間は絶望せずに済んだという説だが、これには他の捉え方もある。

一つが、偽りの希望。これがあるため、人は絶望することも許されないと言う事。もう一つが、希望そのものが災厄と言う説。希望があるため未来が解らず、諦めることを知らない人間は、永遠に希望とともに苦痛を味わわなければならないと言う説だ。

「と・・・まあ、こんなところか？」

慧はとりあえず調べられる範囲を調べ、湊へ報告した。本の数が膨大なため、全ては読めなかったが、基本的なところはほとんど一緒なものが多いため、とりあえず大きく違うところだけを、閉館までに出来る範囲で調べたのだ。

今は近くの喫茶店に場所を移し今日調べた事について、湊と話している。なお、緩奈と董も一緒だったりする。二人が監視している事はバレバレだったため、声をかけ、調べるのを手伝って貰っていた。これはそのお礼も兼ねている。もちろん慧のおごりだ。

「ええ、今日一日で調べたにしては上々。」

湊はあまり表情を動かさないが、満足はしているようだ。

「それで、あなたはどう思う？特にこの『希望』について・・・」

湊は慧の意見を聞きたいのか、興味深気に聞いて来る。表情は変わらないが、眼の色が変わっている。

「そうだな・・・希望そのものが災厄と言う説かな。といつても希望によつて永遠に苦痛を味わう事になるとかじゃないけどな。」

「それは何故？」

その答えには緩奈や董も興味がある様で、ケーキを食べていたフオークを置いて、慧の言葉の続きを待つ。

「神が人にどの様な罰を与えようとしたのか、神が言う罰とは何か・・・正直解らないけどな。永遠に苦痛を味あわせるなら、こんな周りにくい方法を使う必要はないからな。さらに、人は慣れる生き物だ。苦痛が続けば慣れて、それが当たり前になり苦痛を感じなくなる。なら、永遠という事はまずない。まあ、神がそこまで解つていたかは知らないけどな。」

でだ、『希望そのものが災厄』と言うのは、人は絶望の中に希望があれば、それを追い求める。そして、それを掴もうとした瞬間にその『希望』が失われると、さらなる絶望を味わうことになる。つまり、この『希望』そのものが『絶望』という災厄なんじゃないかと言うのが、俺の考えだ。」

慧は自分の考えを言うと、コーヒを一口、口に含む。視線は湊へ向けられており、どうだ？と問いかけている。

「・・・仙海さん。董さん。ふたりはどう？」

湊はそんな慧を無視し、緩奈と董に問いかける。いろんな見解が欲しい様だ。

「え〜と、難しい事はよく解らないけど・・・『希望』がそのまま

の意味で、救いとして残ってくれたらいいなって、私は思います。」

「そうですね。私も緩奈さんと同意見です。救いがないのは、悲しすぎます。」

緩奈と董の意見を聞き、慧は、自分は捻くれているなど、地味にシヨックを受けていた。

「そうですね・・・『希望』が救いであつたらいいわね。」

二人の意見に、湊は少し頬を緩ませた。

「で？湊の意見は？」

今度は慧が湊に話しを振る。この無表情な部長がどういう考えなのか興味が出てきたからだ。

「それは・・・」

「「それは？」」

三人は湊の次の言葉を期待して待つ。が、

「ひ・み・つ」

無表情にそんな事を言われたため、なんとも言えない雰囲気になったのであつた。

「それで、湊と調べた結果はどうだった？」

「そうだな・・・大体世間一般に知られている事がほとんどだ。まあ、詳細は異なったりはしたがな。これと言って新しい発見があったりはしなかったよ。」

「主、お疲れ様です。」

今は、全員帰宅し、お茶を飲んで、今日の互いの成果など、世間話程度に話している。

「美夜と銀は生徒会の仕事進んだのか？」

「ええ、銀が頑張ってくれたからね。」

美夜は銀の頭を撫でながら言う。

「美夜も今日は仕事をしていましたよ。主も夢もいませんでしたからね。」

銀は尻尾をふりながら答える。言われた美夜は苦笑する。普段仕事をしないのだから、仕方が無い事だ。

「そう言えば、夢さんはどうしたんだ？確か理事長に呼ばれていたよな？」

「ええ、何でも、今度、博物館である『遺物』の展覧会。そのメインである『パンドラの箱』の護送の依頼みたいよ。他にも風紀委員の副委員長や魔法部の副部長も受けるらしいわ。」

夢は依頼の話があつた後、一度生徒会室に行き、美夜にその旨を話していた。数日の間はそちらの準備で生徒会の仕事を休む事も話している。

「『魔法使い』への依頼か？ならなんで美夜や源藤先輩、湊へは話しがいかないんだ？」

慧はそこら辺の事情に疎いため、疑問を口にする。

「そうね。それが、『六魔天』の問題の一つなのよ……」

美夜はその事情について慧と銀に説明する。すると、二人は段々呆れた顔になって行く。

「『六魔天』同士でそれかよ……仲が悪すぎなだ、おい。」

「そうですね。それでよく今の体制が保っていますね。」

『六魔天』同士で、魔法の技術や『遺物』などを得るために争っているのは知っていた。しかし、既に他の『六魔天』のものをわざわざ強奪するなんて犯罪まがい、嫌、犯罪までやっている事に慧は呆れ、銀はそんな関係で、今の体制を整えていることにむしる感心している。

「まあ、全員が全員、信頼がない訳じゃないわよ？未来さんとかね。でも、『六魔天』のトップ陣の中には率先して、強奪しよう命令する人もいるからね。そのせいで、全体的に互いへの信頼が低下しているのよ。私も頭が痛いわ。」

美夜は頭を押さえながらうなだれる。

「その関係で、今回は美夜には依頼が来なかった訳か。」

「ええ、そうよ。まあ、夢なら大丈夫でしょうけどね。」

美夜は心配していないようだ。慧と銀は夢の実力をしらないのでそこまでのものなのか美夜に問う。

「ふふ、二人はまだ、夢の実力を見ていないものね。銀は一度見ていると思うけど、夢の『幻』はかなりのものよ。みる機会があれば、良く見ておくことね。」

「へーそれは楽しみだ。『幻』の属性を使う魔法使いには会った事なかったからな。」

慧がこれまで対峙して来た中には珍しい属性の者もいたが、『幻』は始めてなため、結構楽しみだったりする。

「そうね・・・今度の魔法学の時間にもお願いすれば、見せて貰えるかもね。」

「そうか、その時は美夜からお願いしてくれ。俺のお願いだと、聞いてもらえない可能性が高いからな。」

慧は、その時は銀か美夜にでもお願いして貰おうと考える。何故なら、未だに夢には信頼されていないと感じるからである。きつと自分からお願いしても無理だろうと思うのであった。

「そうかしら？まあ、慧がそう言うなら、私から頼むけど・・・」

「ああ、よろしく。」

こうして、今日も終わろうとしていく。

「ところで、何時、銀は夢さんの魔法を見たんだ？」

「それはですね。いぜ、むぐっ……」

慧の疑問に素直に答えようとする銀だったが、美夜に口をふさがれ、抱えられてしまった。

「はいはい！銀は今日も私と一緒に寝ましようね！」

そして、銀は美夜に連れ去られていった。

「……なんだったんだ、いったい？」

何がなんだかわからない慧であった。

「それで、鍵と箱は何時こちらに着くんだい？」

ここは、マンションの一室。そこで7人の男女が話しあっている。場所は以前とは違う様だ。見える景色も内装も異なっている。最初に口を開いたのは茶髪の男だった。

「え、え〜と、今週の日曜日……朝9時に隣の県の空港に着きます。そこから車を使い、高速道路でこの街に向かう予定です。はい。」

「

桃色の髪の少女がその問いに答える。

「ふむ。襲撃するなら、空港を出発してからじゃな。空港には人が多すぎるからの。」

老人は襲撃するタイミングを提案する。

「おい、おい、御老功！いいじゃね〜か！無関係の人間を巻きこんじまったって！そんなの気にしていたらとりもどせね〜じゃね〜か！」

金髪の男が老人に反論する。

「たわけ、小僧。わし等の目的は鍵と箱を取り戻す事であり、殺戮ではないわ。吐きちがえるな。監視の奴らまで殺しおってからに……」

「いいじゃね〜か！あいつらだって裏の人間だ。その覚悟くらいあったらうよ。」

どうやら、この金髪の男が『影』の監視者を皆殺しにした張本人らしい。老人は金髪の男の軽率な行動をしかるが男はどこ吹く風と聞き流す。そこに、

「……ケンカ……良くない……」

青い長髪の少女にそう言われ、老人と男は罰が悪そうな顔をし、互いに顔を逸らす。

「ふつ、『ヘレン』の言う通りだ。今はケンカしている場合ではない。ところで『エル』、あちらでは『奴ら』の監視が厳しかったため、襲撃せず、日本まで来たわけだが、どうだ？」

坊主頭の大柄な男がリーダーである黒髪の女性へと声をかけた。どうら、この女性が『エル』、青い髪の少女が『ヘレン』と言う様だ。

「そうね・・・こちらはまでは及んでないみたい。襲撃は『メウス』の言った通り、『遺物』が空港を出てから行っわよ。『ヘルメ』と『カリオ』は『遺物』がちゃんと積み込まれたか監視をお願い。『カリオ』、『ヘルメ』が暴走しないように抑えてね。」

老人は『メウス』というようだ。『メウス』はその言葉に満足気に頷く。逆に金髪の男、『ヘルメ』は不満そうにし、大柄の男『カリオ』は溜息を付きながら頷く。

「『ピュラ』と『ヘレン』、『メウス』と『シオドス』は、私と待機。タイミングを見計らって動くわよ。」

『ピュラ』と呼ばれた桃色の髪の少女、『ヘレン』、『メウス』に茶髪の男『シオドス』がそれぞれ、返事をする。

「間違いなく、『六魔天』の用意した魔法使いと、ダリウスが雇っている、私達から鍵と秘宝を盗んだ実行者が、邪魔すると思うわ。だけど、一番の懸念である『奴ら』はここにはいないわ。必ず、奪い返しましょう。」

「『おう(はい)！』」

第六話 護送任務へ襲撃へ

「それはこっちだ！」

「はい！」

「これは……こちらで良いですよね？」

「しつかり固定しろ！壊れたら洒落にならねえからな！」

ここは、櫻木市の隣の県の海^{かいてい}雑市にある空港。今、ここでは『遺物』を輸送用のトラックに積み込んでいるところだ。様々な遺物があり、中でも特に嚴重に固定され、他の『遺物』とは別のトラックに積み込まれている8つの『遺物』がある。

「これが、『パンドラの箱』と『鍵』か……」

「うう……布と箱で包まれて中身がわからない」

氷と刹那は積みまれていく荷物を覗いているが、布と箱で包まれ、外装も解らない。せつかく近くにあるのに、結局展覧会まで見る事ができない事につかりする二人である。

「二人とも、遊びではないわよ？」

葵はそんな二人に呆れている。

「まあ、私達の任務は博物館までの護送ですし、空港内ではいくら

なんでも仕掛けてこないでしょうから、良いじゃないですか。二人も、移送が始まったら、ちゃんとしますよ。」

夢はそんな葵をなだめ、葵も夢が言うならと、注意するのを諦めた。

光以外の4人は未来に、依頼を受領する旨を話し、具体的な日付や通るルートなどを教えて貰っている。どうやら、空港から高速道路を使って博物館まで運ぶようだ。電車の場合は、空港から積み込む場所まで、いささか距離があり、渋滞もおこりやすいため、向いていないということで却下したらしい。

「おまえ達が、『真の未来』が寄こした魔法使いだな？」

そんな4人に一人の男が話かけてきた。

「俺は、ランクル・トラス。今回の護送任務の責任者だ。」

今回の護送の責任者であるランクル・トラスは、『賢者の知恵』に所属する『魔法使い』でランクはA。ガタイの良い男で、くすんだ金髪、焼けた肌。実戦経験豊富な魔法使いだが、高圧的な態度をとるのが玉に傷な魔法使いだ。が、優秀であることには変りはないため、この男が責任者となったのだろう。

「はい。私は源藤 夢、こちらから順に、花咲 葵、姫神 氷、雷堂 刹那です。今回の任務では指揮下に入ることになります。よろしく願います。」

代表して夢はそう言い、頭を下げる。それに続き、他の3人も頭を下げる。

「ふん！『真の未来』が寄こすからどんな奴らかと思えば、小娘だらけ、しかもまだ学生じゃね〜か・・・たつく、あの女も何を考えられているんだか・・・まあいい。俺達の任務は『遺物』の護送だ。他にもベテランの魔法使い達がいるからな。お前らは邪魔にならない様にだけしとけ。指示は後で出す。じゃあな。」

言いたい事だけ言い、ランクルは去っていった。

「何？あの人・・・」

葵は苛立ち、氷も怒っているようだ。刹那は変わらずボケ〜としている。

「まあ、ああいう人もいます。どの様な人が責任者でも、私達のやる事に变りはありませんから・・・そろそろみたいですね。行きましよう。」

どうやら積み込みの準備が整った様だ。合図があったので、夢達はそちらへ向かう事にした。

『こちらカリオ。積み込みが終了した。物は黒い車両に積み込まれている。どうやら、あの車両だけ、障壁の術式を刻まれているようだ。』

カリオはもの影から気配を消して、積み込み作業を見ている。もちろん周囲への警戒も怠ってはいない。ヘルメもカリオと共に監視している。

『それだけじゃねえみたいだぞ。あの車の素材そのものが対魔法素材で出来ているみたいだ。生半可な魔法じゃ、びくともしねえな。』

対魔法素材とは、魔力を中和し、魔法を無効果する素材のことだ。これは、特定の場所でしか取れず、数も少ないため、かなりの値段がする。また、この素材は一定量以上の魔力は中和することが出来ず、その場合、塵となる性質がある。

「それはまた嚴重ね。ところで、確かにそのトラックで良いのよね？それが囿で、実は……って事はない？」

エルは再度確認する。『遺物』は布と箱で包まれており、外見からだけでは判断できない。可能性として、嚴重に積まれた『遺物』は偽物で、本物は別ルートでという事になりかねない。

『それは大丈夫だ。俺もヘルメもヒヒシと感じるからな。鍵の気配と箱の異常性を……』

『鍵守』達は長年、鍵と箱を守って来た。そのため、自分の管理する鍵の存在は己の根源から感じる事ができ、また、『パンドラの箱』ほどの異常性を持った『遺物』を身代わりとして持つてくるとは思えないため、本物だという確信がカリオとヘルメの二人にはあるのだ。

「そう、わかったわ。空港を出て、高速道路に入ったら仕掛けるわよ。二人は、後からきて。」

『わかった。』

エルは通信を切り、全員を見渡す。

「もうすぐよ。皆、準備は良い？」

「」「はい(うむ)！」「」

「どうだ、止水……」

「残念ながら、我らの監視網に引っかけられませんね。どうやら、相手にもかなりの隠密の使い手がいるみたいですね……」

止水は月影へと答える。二人は、空港の屋上から、周囲を警戒している。

「それもあるだろうが、一番の理由は『パンドラの箱』だろう。この辺り一体の探査術式が狂っている。封印を解錠していないでこれだ……まったく厄介な代物だな。」

『パンドラの箱』の異常性は術式さえ狂わす様だ。規模が大きければ大きいほどその影響は大きくなるだろう。もし、魔法を使用するなら、『呪文』や『魔法陣』などを小規模で使用し、より正確に『術式』を構成する必要がある。規模が大きくなればなるほど影響を受けやすいうえ、『術式』が甘いと狂ってしまう。月影達の探査術式が狂ったのは前者のためだろう。

「ですが、それだけの力を秘めていると言う事です。」

「そうだな……雷蔵、そっちはどうだ？」

『こちらも見えません。』

月影は雷蔵に無線で聞くが、雷蔵の方でも見つからないようで、声に苛立ちの響きが混ざっていた。

「そうか、一度戻れ。そろそろ車が発進する。奴らは必ず移動中に襲ってくるだろう。そこで、殺るぞ。」

『はっ！』

「さあ、来い！鍵守ども！まずは一番邪魔な貴様らからだ！」

「ふむ……箱のせいで気配が読みづらいな……中は……無理か。外は……ふむ……屋上と、駐車場……他にも多数……」

少年が一人、空港から離れたビルの上にいる。

風の気配を読み取り場所を特定するが大体の居場所しか解らない。箱の影響もあってか、つかみ辛く、正確かどうかも解らない。

「『パンドラの箱』か……本物かどうかは解らないが、碌な代物ではないな……っと、そろそろか……」

少年は箱が動くのを感じ場所を変えるため、風を纏い空へと消えた。

「それにしても、箱と鍵、別々に分けるとか、罠を使うとかしなくてよかつたのか？」

氷はトラックの上でそんな事を言う。今は『遺物』の移送中。高速道路の料金所の手前だ。ランクルを始め、Aランクでも手錬の魔法使い達は荷台の中で待ち構え、夢達はトラックの上で待機している。他にも何台かのトラックの上に魔法使い達がいる。夢達はその内のトラックの一つにいる。

「罠は無理ね。あの箱の異常性はわかってるでしょ？あの異常性を完全に防ぐなんて無理よ。それと、別々にわけるとも却下ね。結局、箱を開けるには全て揃ってなければ無理なのだから、別々に分けるより一括して護つたほうが良いわ。」

氷の問いに答えたのは葵であつた。葵達4人も箱の異常性に気付いており、魔法を使用する際の注意事項も打ち合わせしている。

「それにしても、今が6月でよかつたですね。」

「そうだね〜丁度良い気温だよ〜」

なお、4人の格好は学園の制服だ。各自スカートの下に短パンやスパッツを着用している。もう少し早ければ、場所が場所だ。今の格好では肌寒かつただろう。

ところで、なぜ4人が学校の制服か・・・それはこの制服が結構優秀だからだ。防弾、防刃は当たり前。軽い障壁の術式も刻まれており、そこらの防護服より断然優秀だからだ。

「さて、もう高速道路だ。そろそろ……来たな……」

高速道路に入っすぐ、後ろからこちらへ向かってくる車を発見した。

「単に追い越そうとしている……訳ではないみたいね！」

その車から、多数の『火の球』イケニス・ピラが飛ばされてきた。

「ここは私が！」

葵は同数の『火の球』を詠唱し、放つ。互いに激突し轟音と共に煙が上がる。どうやら、全て撃ち落とせたようだ。

「流石ですね。」

「つつ！まだよ！」

その煙を突き破って、稲妻が走った。『雷』属性の魔法で『集束』サンダする雷』だ。

「……『稲光』」ライトニング

今度は刹那が高速詠唱で複数の『稲光』ライトニングを『集束する雷』の横から放ち強引に向きを変える。

「えーと、刹那さん？」

「……なにか？」

刹那の雰囲気がかれまでの、のんびりとしたものから一転。目つきも鋭くなり、纏う空気も別種のそれになったため、葵は戸惑う。

「はあ、相変わらず、人が変わりますね・・・」

刹那は普段はのんびりとしているが、本気を出すと人が変わったようになる。

「まあ良いです。それより・・・こちら後部車両の花咲、襲撃者が現れました。」

葵は無線を使い、周囲に連絡を入れる。

『わかった。各員、それぞれ、迎え撃て。今回の目的はあくまで護送だ。博物館にさえ着けば、ダリウス様もいる。向こうも諦めるだろう。』

博物館に行けば、他に『魔法使い』もいるうえ、何より『十杖』のダリウスがいる。そこまでいけば、向こうも簡単に手出し出来なくなる。

「解りました・・・と、言う事だから。こちらから攻める必要はないわ。迎撃と牽制に集中しましょう。」

「」「了解!」「」

「やりおるの・・・逸らされたわい。」

『集束する雷』を放ったメウスはそれを逸らされた事に感心する。

「下級魔法の『稲光』を横合いから連続で放つこと中級魔法の『集束する雷』を逸らしたのね。良い使い手がいるじゃない。シオドス！トラックに近づきなさい！」

「そうしたいのは山々なんですけどね・・・よっと！結構な数で、中々どう、も！」

シオドスは次々に放たれる魔法の雨を車を右に左に進路変更する事で避け、避けようのない攻撃はメウスが雷の魔法を、ピユラが火の魔法を使い、撃ち落としていく。

「仕方がないわね。あまりやりたくないのだけど、まずは周囲のトラックを行動不能にするわよ！へレン！」

呼ばれたへレンは車の屋根の上に乗り、詠唱し『闇刃』ダイクエツジを放つ。その数はざっと100を超える。

しかし、向こうの魔法使いの数も多く、同数の魔法が放たれ、撃墜してこようとする。が、

「『光よ、輝き照らせ！』一閃光〈フラッシュ〉！」

その光に照らされた『闇刃』は急激にその長さを伸ばし、トラックへ突き刺さる。

『閃光』は強烈な光を放ち、目くらましをする魔法だが、この様に『闇刃』を伸ばすこともできる。『闇刃』だけでなく、他の『闇』属性の魔法でも可能だ。これは、影に一方から光を当てると、その

影が伸びることと同様の現象だ。『光』と『闇』はなにも相反するだけではないのだ。

その目くらましと、急激に伸びた『闇刃』の予想外の動きに、後方のトラック数台は直撃を喰らい、その動きを止める事になった。そのトラックに乗っていた魔法使い達も投げ出され、したたかに地面に叩きつけられている。いくら魔法使いといえど、高速で走る車から投げ出されればただじゃ済まない。が、彼等もプロだ。死んではいないだろう。よっぽど運が悪くない限りはだが……

「さて、残りはどれくらいかしら？」

エルは残りの車両の数を確認する。

「後方のトラックは……へえあれだけ喰らってまだ3台も残ってるわ。それと……前方と両脇合わせて3台、ターゲット含めて7台ってところかしら。」

「大分減りましたね……弾幕も少なくなりましたし、もう少しで追いつけそうです！」

シオドスは少なくなつたとはいえ、未だ放たれる魔法を次々と避ける。ピュラとヘルメもその手を緩めず撃墜していく。そこに、ヘレンも加わり、『鍵守』達の方が押し始めた。

「よし！皆、何時でも乗り移れるようにしなさい！」

博物館までの道はまだ序盤。戦いはこれから更に激化していく。

「止水、現状は？」

現在、『影』達は高速道路の別の入り口から入る所だ。どうやら、予め、車を待機させており、本人達は、護送車が料金所で捕まっている間に魔法で移動したのだろう。既に準備万端といったところだ。

「どうやら、護送のトラックの大半はやられたようです。残りは全部で7台。そろそろ、トラックに飛び移りそうですね。」

「わかった。今からだ、飛び移った後になるだろう。戦える人数は限られる。よって、私と雷蔵、止水で飛び移り、『鍵守』どもを殲滅する。他のものは私達が飛び移った後、後方に移動し、増援がないか、監視をしてくれ！」

「「はい！」「」」

そして、『影』達も戦いに参加する。姿を見られるのは不本意ではあるが、見られたからと言って、何か困るわけでもない。

「さあ、邪魔ものどもを一掃するぞ！」

「ふむ、はじまったか・・・」

少年は頭上から、高速道路で行われている魔法の撃ち合いを観察している。

「相手は相当の使い手のようだな。俺も、準備を始めておくか・・・」

「

少年・・・真樹は『呪文』の詠唱を開始した。何時でも援護が出るように・・・

第七話 護送任務〜VSシオドス〜

「銀ちゃん！私は紅茶でお願い！」

「わかりました！」

「・・・今頃、夢さん達は依頼を遂行中か・・・」

慧は目の前に広がる光景を無視し、そんな事を口走る。

「そうね。せつかくの休みなのに、大変ね。」

「そうだな。」

美夜は椅子に座り、雑誌を読みながら、平然と返してくる。

「あ！私も同じでいいですけど、砂糖は付けてください！」

「はいー！」

「・・・」

慧は無視して、美夜の隣に座り、一息着こうとしたが、やはり我慢できず、目の前にいる二人に声をかけることにした。

「・・・それで、そのせつかくの休みに、お前らは一体何の用だ？」

「？」

慧の目の前には、緩奈と董がリビングのソファに座り、テーブルの上に勉強道具を広げている。銀は二人に出すお茶の準備をし、美夜は雑誌を広げ、くつろいでいる。

慧は先ほど起きたばかりで、シャワーを浴びてリビングに顔を出した。すると、そこに今の光景が広がっていたのだ。思わず無視して、全く関係のない事を口走ってしまった慧に、美夜は普通の返してきたが、流石に無視は出来ないので何故いるか聞く事にした。

「慧（お兄ちゃん）に勉強を教わりに」

異口同音。二人は同時に同じ事を言ってきた。

「緩奈はどうやら、魔法学の補習があるみたいで、主を頼りに来た様です。董は、まあ、主に会いに来たのでしょうか。」

「お、ありがとう。銀。」「ありがとうね。銀。」

銀は二人が訪ねてきた事情を話しながら、慧と美夜にはコーヒーを出す。二人はお礼をいいながら、受け取り、一口飲む。

「で、訪ねてきたと・・・まあ、今日は、特段用事はないから別に構わないが、そう言う事は事前に言って置け。」

今日は日曜日、湊の研究の手伝いも休みだ。今日の家事は美夜が担当するため、特にすることもない。が、準備というものがある。事前に言っておいて欲しいと慧は文句を言う。

「え？美夜さんに言っておいたわよ？」

二人は不思議そうに首を傾げる。慧は美夜に視線を送るが、美夜

は雑誌から顔を上げようとしな。

「美夜？」

「……………」

「忘れてたな？」

「えへ」

「はあ」

「どうやら、美夜が慧に言うのを忘れていたらしい。まあ、良くある事だと慧は溜息を吐く。

「で、何処を教えて欲しいんだ？」

慧は頭を切り替え、何を聞きたいのか緩奈に問う。

「え〜と……………ここなんだけど……………」

「ん？どこだ？」

慧は椅子から立ち上がり、緩奈の隣に腰を下ろし、緩奈の横から教科書に目を通す。その際、緩奈の顔が赤くなり、他3名の視線が強くなったが、慧は気付かない。

「え、え〜とね……………この、属性の相互関係についてなんだけ……………」

緩奈は顔を赤くしたまま、解らない所を指差す。

「あゝ、ここか・・・丁度良い、銀も聞いとけ。まず、基本属性の関係からだが、火は風に強く、風は土に強く、土は水に強く、水は火に強い。これが、基本4属性の関係だな。そして、光と闇、だが、光は闇に強く、闇は光以外の4属性に強い。これが、基本的な考え方だ。これは、解っているよな？」

その言葉に、緩奈と銀は頷く。美夜と董は既に理解しているだろう事なので、慧は二人に聞いている。

「うん。それは解ってるよ。だから、慧はイグニール君の魔法を『侵食』できたんだよね？」

「ああ、そうだ。『侵食』の条件として、属性の力関係もあるからな。まあ、『光』も『侵食』できないこともないけどな。今言ったのは、基本の相互関係だが、この他に合成属性も入って来る。これは、法則より、ほとんど暗記だな。だが、自然のあり方とほとんど同じ様なものだから、覚えやすいと思うぞ。例えば、『氷』は『火』や『炎』に弱いし、『雷』は『土』に弱い。緩奈の植物も『火』や『炎』に基本的には弱いな。」

「そうだね。でも、美夜さんの『無』属性は？」

緩奈は不思議そうに聞く。

「『無』属性に弱点はない。」

「それって、反則じゃない？」

緩奈は驚くが、それには美夜が反論する。

「確かに、『無』属性は弱点はないわ。でもね、これといって、何かに有効というものでもないのよ。そのうえ、無にする以外の方法がないから、応用も聞かないし、結構不便なのよ？」

美夜は、苦笑しながら答える。

「そう言うことだ。どの属性も一長一短、弱点が無くても、使いづらかったりするんだよ。基本属性を極めた方が、有用だったりするしな。でだ、相互関係に戻るが、弱点だからと言ってその属性に勝てない訳ではない。例えば、火と水だが、火の火力が上回れば、水を水蒸気にする事で破ることだってできる。雷だって威力が強ければ、岩を抉るしな。といっても、弱点を上回るには、『術式』に工夫したり、魔力を更に使う必要があるから、消耗は大きくなるんだけどな。」

そこで、コーヒーを一口飲み、一旦言葉を切る。

「ここまでは大丈夫か？」

慧は銀と緩奈に問いかける。銀は迷わず首を縦に振るが、緩奈は首を捻る。

「え〜っと・・・基本属性の関係はそのままだけど、やり方次第でその関係を覆せるって事でいいんだよね？後、合成属性はほとんど自然のあり方と同じだけど、『無』属性の様に弱点が無い属性もあると。ただ、どの属性も一長一短・・・で、いいんだよね？」

「ああ、その通りだ。」

慧は言いながら、緩奈の頭を撫でる。緩奈は恥ずかしそうにするが、嬉しそうでもある。

「で、補足だが、属性の考え方には他にもある。例えば、火と水に雷を加えれば小さい魔力で『爆発』の魔法を使用できる。他に光の魔法で闇の魔法の範囲を広げたり、やり方次第で、弱点を補ったり、強化したり、色々出来る。まあ、今回はそこまで考えなくても良いと思うぞ。教科書にはそこまで載っていないからな。」

「そっか・・・ありがとう。慧。で、次んだけど・・・」

こうして、休日の勉強会が続いて行く・・・

「くっ・・・皆無事!?!」

「ええ、大丈夫です。ありがとうございます。氷さん。」

「いや、夢の言う通り、事前に詠唱しておいて良かった。」

「でも・・・ほとんどやられた・・・」

氷は、事前に詠唱していた『氷』の魔法である『氷の盾』アイス・シールドを使用し、自分達の乗る車は守ることは出来たが、周囲の車までは守れず、ほとんどが壊れ、残りは7台となった。

「この弾幕の中を良く避けるわね・・・」

「ええ、しかも的確に直撃コースだけ撃ち落としています。かなりの使い手ですね。」

「……来る！」

刹那が指した方向を見ると、直ぐ目の前に襲撃者の車が迫っていた。

「くっ……」

次の瞬間、襲撃者の車の屋根を突き破る様にして、光の柱が上った。夢達はその光から目を逸らし、トラックにしがみつく。次に、目を開けると……

「あら、まだ学生じゃない。『六魔天』も酷いわね。こんな子達にこんな危険な事をさせるなんて。」

エルは『六魔天』に呆れ、

「いやいや、ピユアやメウス老の魔法を撃ち落としたのは彼女達ですよ。学生とはいえ、かなりの使い手ですね。」

シオドスは運転席から見ていたのか、その腕を賞賛する。

「ふむ……わしの魔法を逸らしたのはそちらのお嬢さんか……」

メウスは『サンダー・ピラ雷球』を展開して、何時でも撃てる状態の刹那に目を向ける。

「え、え、えくと、先に謝っておきます。ごめんなさい！」

ピュラはいきなりあやまり、

「ピュラ、何のことかわからない・・・後、嫌み・・・」

「へう！ごめんなさい！ごめんなさい！」

ヘレンはいきなり謝るピュラに突っ込みを入れる。

「・・・あなた達は何者？何故、あなた達が、箱と鍵を狙っているの？」

葵は、時間稼ぎも含め、襲撃者に問う。それを受け、最初きよとんとしていたエルだが、笑いだす。

「ははは！あなた達は何も知らないで、私達の邪魔をしているの？呆れるわね。」

「どつという意味よ！」

その笑いが癪に障った葵はエルに再度問うが、答える前に無線にランクルからの指令が入った。

『敵の言葉に耳を貸すな！皆、迎撃しろ！』

その言葉に、周囲の車両にいる魔法使い達は反応し、夢達がいるにも関わらず、エル達へ魔法を放とうとする。

「・・・はあ、シオドス、ここはお願い。ピュラは右、メウスは左、

へレンは前方。私は本命を狙うわ。」

「了解」「」

エルがそう言うと、指示通り鍵守達は動き、魔法を放とうとしていた魔法使い達は、その行動に追いつかず、魔法を放つことが出来ずに倒れて行く。

「さて、お嬢さん達の相手は私が務めさせていただきます。」

夢達の前にはシオドスと呼ばれた青年だけが残った。

先制攻撃は刹那だった。展開していた『雷球』をシオドスに向かって放つ。しかし、シオドスは軽々と避け、避けきれないものは、何時の間に展開したのか、『氷の剣』グランス・ソードで切り伏せる。

「氷属性・・・」

「なら、私が！」

今度は葵が高速詠唱で、『炎の槍』イクニス・スピアを二本展開し、接近する。

「へへ炎属性ですか。確かに相性は最悪ですね。・・・ですが・・・」

シオドスはその『炎の槍』の連撃を軽々と避け、葵の両手を『氷の剣』で撫でる。

「つつ・・・」

「槍術は駄目ですね。素人と言う訳ではないみたいですが、その程度の動きでは……僕じゃなきゃ、切られて終わってしまいましたよ？」

『氷の剣』に撫でられた箇所は凍りついており、葵は『炎の槍』を手放す事になった。手放された『炎の槍』は車から落ち、消滅した。

「葵さん！」

「大丈夫です！」

夢に声を掛けられた葵は、すぐさま炎で手の氷を溶かし問題無いと手を見せる。

「相手の方が、上手です。全員で行きましょう。」

「それが、いい……」

夢の言葉に刹那が同意し、氷と葵も頷く。

「『氷よ、槍となりて彼の者を貫け！氷の槍』！」
グラス・ランス

「『それはまるで氷の槍……』
イリュージョン・グラス・ランス
幻影・氷の槍』

氷は『氷の槍』を5本作り放つ。本来なら無詠唱でも二桁は作れるのだが、『パンドラの箱』の影響で、高速詠唱でも5本しか作る事ができない。それを補うため、夢は『幻』の魔法で、『氷の槍』の幻を作り出し放つ。

その間に、葵と刹那は詠唱を開始している。

シオドスは再び避けきれないものを『氷の剣』で切り伏せようとするが

「何!？」

その『氷の槍』は幻だったため、体制が崩れてしまう。そこに本物の『氷の槍』が放たれるが、シオドスは『氷の盾』グラス・シールドを使用しその槍を受け止める。

「……いや、びつくりしました。まさか『幻』とは……『氷の幻影』や『陽炎』のような魔法ではなく、純粹な『幻』の魔法は初めて見ましたよ。」

『氷の幻影』や『陽炎』も認識をずらす魔法だが、媒体として、氷や火が使われる。しかし、夢の幻は純粹な『幻』の魔法のため、そういうものがない。何が違ってくるかというと、応用の範囲が違う。『氷の幻影』や『陽炎』は氷や火の属性魔法のため、幻にも限界があるうえ、元が氷や火のためばれやすい。しかし、夢の『幻』にはその限りが無いのだ。

「『……集いて、放て……サンダー・ゲイザー集束する雷』」

続けて、刹那が『集束する雷』を放つ。その大きさはトラック一つを丸呑みにする位であり、体勢を崩しているシオドスは避けることはできない。

「……」

シオドスは雷に呑み込まれる。葵は詠唱を未だ続けており、夢も

再び詠唱を開始している。氷は『氷の盾』を展開し、魔法を撃ち終え、隙だらけの刹那の前に立つ。

雷の砲撃が終息していくと、そこには……

「『クリスタル・アイス・ウォール氷結晶の壁』……いつのまに……」

結晶の様な氷の壁が立ちふさがっていた。

「はあ、危なかった。凄い威力だね。」

その壁が消えると、無傷のシオドスが立っていた。既に体勢を整え得ており、そう簡単に魔法を当てる事は出来ない。

「……何故、この中でその様な魔法をそれだけのレベルで、しかも詠唱無でできるのやら……」

氷はさつきから不思議に思っていた事についてしまう。それも仕方が無い。氷達は先ほどから詠唱して魔法を使っているが、それでもしっかり詠唱しないと本来の力は発揮できないでいる。高速詠唱や詠唱破棄では、普段より遥かに威力や数が低く、少ないのだ。

「まあ、これでも長年その鍵と箱と付き合ってきましたからね。その対策は万全と言う事ですよ。」

シオドスはその悪態をわざわざ拾う。氷はその言葉に眉を潜める。

「長い付き合い？それはどういう……」

不思議に思った氷が問い返す前に、葵の詠唱が終了した。

「氷さん！離れてください！」サラマンダー・エクスプロージョン『爆発する火蜥蜴』！」

葵は触れると爆発する蜥蜴を50？位の大きさのものを7匹召喚した。そして更に……

「『……火の蜥蜴を形作れ……幻影火蜥蜴』」イリュージョン・サラマンダー

夢は同じ大きさ、色、形の火蜥蜴の幻を12対作りだした。

「これは、これは、面倒な魔法ですね。」

「行きなさい！」

葵が指示を出すと、幻も含め全部で19匹の蜥蜴が飛びかかっていく。しかし、グラススは的確に幻を無視し、本体だけを凍らせて、弾いて行く。弾かれた火蜥蜴は、車の後方で次々と爆発を繰り返す。

「厄介ですが、所詮、幻は幻。実態が無い以上、影が出来ないのは通り……本物は全部弾きました。残りは全てまぼろ……」

言い終わる前に、火蜥蜴が腕へ張りついた。そこで、シオドスは言葉を途中で止めてしまった。なぜなら、その蜥蜴にも影は無く、シオドスは幻と判断し、無視したのだが、しかし、幻のはずの火蜥蜴が腕に張りついたのだ。そう、質量を伴って……

「……しまった！」

時既に遅く、張りついた火蜥蜴は爆発し、グラススは車から吹き

飛ばされた。

「・・・やりましたか？」

夢は煙で見えない後部を見つめながら言う。

「煙で解らないな。それより、夢。今のは？」

氷は今の魔法について尋ねる。夢の使用した魔法が解らなかったからだ。

「簡単な話です。本物の火蜥蜴の内、一匹だけ、影を『幻』の魔法で消しました。その変りに、幻の火蜥蜴に影と質量を伴わせて。敵の目を盗んで出来たのが、一匹だけだったのが、残念ですが・・・」

氷はその技量と、応用範囲に驚く。『幻』の魔法は単体ではそれほど脅威ではないが、誰かと組むとここまで厄介になるものとは思わなかったからだ。

「ふう・・・終わったわね。」

煙が晴れるとそこには、シオドスの姿は無かった。何かが道路に叩きつけられる音が聞こえたため、落ちたと判断し、安堵の息を吐く。

「さあ、他の所の援護に行きま・・・」

葵は、シオドスを追い払ったと思い、気を抜いてしまった。それが、間違이었다。

「葵！後ろ！」

「え？・・・くふっ・・・」

氷が何かに気付き、声を上げるが、気を緩めてしまった葵は反応しきれず、後方から、側等部にかけて繰り出された蹴りをまともに喰らい、道路へ落とされてしまった。

「葵さん！」

夢は急いで安否を確認するため、後部へ向かい、葵が落下したところを見る。そこには、身体強化を使用したのだろう。無事着地した葵がいた。

「ふう、大丈夫なようですね。それよりも・・・」

夢は再び前へ視線を向ける。そこには片腕から血を流してはいないシオドスがいた。

「まったく、油断したよ。おかげで片腕が使えないじゃないか。」

「・・・どうやって、助かった・・・？」

刹那はシオドスがああ状況からどうやって前に移動したのか解らず、思わず聞く。

「ん？ああ、簡単だよ。トラックに張りついてだよ。危なく落とされる所だったけどね。」

シオドスはなんでもなしに首をすくめる。落ちたのは『氷の

『剣』か何かだった様だ。

「さて、一人離脱だ。次は誰かな？」

シオドスは再び、『氷の剣』を展開し、向き直る。夢達も再び構えを取る。その時、

「皆！奴らが来たわ！警戒しなさい！」

エルの声が辺りに響き、夢達やシオドスもそちらに思わず目を向けると、そこには、エル、ピュラ、メウスの所にそれぞれ黒装束に身を纏ったもの達が降り立っていた。

第八話 護送任務く『影』く

「さて、その『遺物』は元々私達が管理していた物・・・おとなしく返してくれないかしら？」

「何が、管理していた、だ。この様な『遺物』は個人で持つべきものではない。我々『六魔天』のような公平な立場のものが管理するべきだ。」

「ふふふ、何が公平な立場よ・・・『遺物』を独占したがっている俗物の集まりが！」

『箱』が積まれたトラックに飛び移ったエルを迎え撃っているのはランクルを始めとした『賢者の知恵』の魔法使い達、八人だ。

「何とでもいえ！この『遺物』を貴様達に渡さないことに変りはない！」

「そう・・・でも、あなた達程度で、私が止められるかしら・・・ね！」

エルは言うや否や、敵との距離をつめ、まず一人、至近距離から勢いを乗せた掌底で、吹き飛ばす。

「早い！」

続いて、まだ、反応しきれていない内に、近くにいた魔法使い二人に足払いをかけ、体勢を崩した所に、至近距離から両手に集めた

『レイ・インパクト光の衝撃』で車から弾き飛ばす。

『光の衝撃』とは、光線の様に、突き抜けさせず、光同士をぶつけあい、その衝撃で相手を吹き飛ばす至近距離専用の魔法だ。光速の粒子をぶつけあって生じた衝撃はかなりの威力になる。

次に、魔法を撃とうとする魔法使いに対し、『フラッシュ閃光』を使い、目を眩ませ、その場から飛び退る。その後には同士撃ちする魔法使い達がいた。『閃光』のタイミングが絶妙で、魔法を撃つことを止めることが出来なかったのだ。

「……呆気ないものね……っつ！」

「全くだ。使えねえ……」

背後から、『イグニス・ピラ火の球』が襲いかかり、エルは素早くその場を飛び退った。

そこには、仲間を縦にして、こちらに突き出しているランクルがいた。

「あら、仲間を盾にしている男が言えるセリフじゃないわね。」

エルは皮肉を言うが、ランクルは意に還さず、盾にしていた男を道路へ放り投げた。その光景に眉を潜めるエル。

「まったく……胸糞悪いわね、あなた。まだ後ろの子供たちの方がましよ？」

「うるせえ！行くぞ！」炎よ、燃え盛る龍となりて彼の者を喰らえ
フレイム・ドラゴン『炎の竜』！」「

ランクルは『炎の龍』をエルに放つ。しかし……

「こんなもの……」

エルは手のひらを龍へ翳し

「『光よ……集束し、穿て！光砲！』」

エルの手のひらから光の砲撃が放たれ、『炎の龍』は無散した。その光景に呆気にとられるランクル。

「ちっ、『炎は剣となり、全てを焼き切る……炎剣』！」
フレイム・ブレイド

しかし、ランクルはすかさず炎の剣を作り、切りかかる。

エルは上段からの斬撃を、半身を引くことで避け、そのまま一歩踏み出し、掌底を入れようとする。

ランクルは掌底を受けるが、後ろへ飛ぶことで衝撃を最小限にとどめる。

「くそ！」

そのまま後ろへ飛びながら態勢を立て直し、別の魔法を詠唱しようとするが、すかさず接近していたエルに邪魔をされ、詠唱できずに終わる。

エルの攻撃を何とか避け、再び炎剣で攻撃を仕掛けるが、フェイントも混ぜた攻撃は軽々と身切られてしまう。

「何なんだ！貴様は！」

ランクルは自分の攻撃が効かないどころか、本領さえ発揮させてもらえない事に苛立ちを覚え、攻撃が大ぶりになってしまった。その隙を逃すエルではない。

「……『光の衝撃』」

攻撃が大ぶりになった隙に、懐に飛び込み、『光の衝撃』を撃ちこむ。

「ぐふっ！」

吹き飛ばされたランクルは車の上から落ちていった。多分、受け身も碌に取れていなかっただろう。

ランクルはAランクの魔法使いで、経験も豊富だ。しかし、自己より強い者とはこれまで対峙してこなかった。その前に逃げていたのだ。ランクルの嗅覚は鋭敏で、勝てない勝負からは直ぐに逃げてきた。そのため、生き残れてきたのだ。それは、決して悪い訳ではない。だからこそこれまで数多くの依頼をこなし、Aランクまで登り詰められたのだから。

しかし、今回は逃げる事はできなかった。いや、『パンドラの箱』のせいで気付かなかつたのだ。対峙した女性が、自分より遙かに強い事に……

エルが乗るトラックにはもう護衛はいない。周囲を見ると、ヘルンもピュラもメウスも既に片づけ終わっていた。シオドスだけが未だ戦っている。対峙していた相手は四人だったはずだが、三人に減

っており、どうやら一人減らしたようだ。代わりにシオドスは片腕に負傷していた。

（あの子達、シオドスに傷を付けたの・・・やるわね。まあ、でもそう長くは持たないでしょうね。こっちはさっさと回収させて貰いましょうか。）

エルは周囲を確認してから、トラックの貨物室に入ろうとした。その時・・・

「そこまでだ、鍵守達・・・」

その声を聞くとすぐ、エルは声を荒げる。

「皆！奴らが来たわ！警戒しなさい！」

鍵守達が、警戒すると同時に、黒装束に身を包んだ者達が現れた。エルの前に一人、メウスとピュラにも一人ずつ、それぞれ対峙している。

いつの間にか、並走する様に車があり、そこから飛び移ってきたようだ。

「こうして、直接会つのは初めましてだな。我らは『影』。依頼により、貴様らにはここで死んでもらう。」

「ふん！ただの泥棒風情が『影』なんて大層な名前ね。」

エルは不愉快そうに吐き捨てる。

「まあ、いい機会ね。私達から『遺物』を盗んだこと、後悔させてあげる！」

『影』と『鍵守』の戦いが幕を開ける。

「美夜、次は何を買うんだ？」

「え〜と、・・・お肉ね。」

「了解。」

現在、美夜と慧は食品などを買いに来ている。緩奈と董が訪ねてきた関係で食糧が足りなくなったからだ。銀には二人の相手をしてもらっている。

「それにしても、あいつら、よく家に来るよな？」

休みに緩奈と董は良く美夜の家に来る。それが不思議でならない慧である。

「誰か会いたい人でもいるんでしょう？」

美夜は何故気付かないのかと、呆れた顔で言う。

「ふむ・・・ああ、そうか！銀に会いに来ているんだな。」

「なんで、そこで銀なのよ？」

美夜は頭を抱える。鈍すぎだろう。

「え？だって、銀、可愛いだろ？俺の自慢の使い魔だからな。」

慧は胸を張って答える。美夜は再度苦笑する。どれだけ銀が大切なのか、と。

「ふふ、ところで・・・ちゃんと自分の家って思ってくれているのね。」

慧は何の事を言っているのか不思議に思うが、すぐに何の事か思い至り、顔を赤くする。

「まあ・・・な／＼／＼。俺と銀が帰るところはもうあそこいつか、お前のところしか、ないしな。」

慧のその言葉に今度は美夜が顔を赤くする番だ。

「そっか・・・／＼／＼／ふふ・・・」

美夜は嬉しそうに笑う。その姿を見る周囲の反応はというと・・・

「あら、新婚さんかね？」

「初々しくていいわね」

「最近良く来るカップルだな。」

「今日は犬耳の嬢ちゃんと一緒にないのか。」

と、言われていたりするが、当の本人達は気付かないのであった。

「え、え、え」と、あなたが私の相手ですか？」

ピュラは目の前の相手止水と対峙する。

「そうだが・・・貴様の様な者にも『鍵守』が務まるのだな。」

止水は馬鹿にした様に言い、ピュラを挑発する。

「うっ・・・た、確かに・・・で、でも！これでも『鍵守』の一人です！行きます！」

ピュラは『火の球』を12発生み出し、放つ。

「ふっ、そんなもの・・・」

止水はその全てを普通の刀で切り裂く。

「・・・火は柱となり、天を突く・・・火柱！」

その事に内心、驚くが、表には出さず、次の詠唱に入る。今度の魔法は足元から上空へと登る火の柱。狭いトラックの上では避けられない。

「ぬ！『水よ！我を包め！水牢！』」

止水は水の魔法で自分を包み、防御する。

「『フレイム・スピア
炎槍！』」

ピュラは火柱が止む前に炎槍を生み出し、突撃する。両手に一本ずつ、周囲に四本、合計六本だ。

「せい！」

ピュラは両手の槍を火柱の中へと突き刺した。

「よし！」

手応えがあり、ピュラは仕留めたと思った。しかし、

「何が良いのだ？」

「え？」

火柱の中から、声が聞こえた。次の瞬間、火柱が掻き消え、巨大な『水の蛇』が一体。他に2mサイズが4体、計五体の『水の蛇』が止水の周囲を囲んでいる。巨大な『水の蛇』が火柱を消し、残りの『水の蛇』の内、二体が、炎槍を止めていた。

「くっ……」

ピュラは直ぐに飛び退り、その手に持っていた炎槍を手放す。同時に炎槍は『水の蛇』に呑まれ、消えた。

「さて、次はこちらの番だな。」

止水は『水の蛇』を放ち、ピユラは炎槍で迎撃する。蛇は自在に動き槍を避けるが、ピユラも再度両手に持った炎槍、空中の炎槍を巧みに動かし、蛇を撃墜しようとする。

「はっ！」

ピユラの炎槍がとうとう『水の蛇』の一体を捕らえるが、その蛇は槍が刺されると、爆発し、炎槍も消し飛ぶ。

「なっ！」

「ふっ……動揺している暇はないぞ？」

続けて『水の蛇』が飛びかかって来るため、ピユラは炎槍で攻撃する。今度は、『水の蛇』は避けようとはせず、わざと炎槍に当たりに行き……

「くっ……！」

再度爆発……全ての炎槍が消し飛ぶ。

「炎そ……くはぁ！」

ピユラは再び炎槍を発動させようとするが、残った巨大な『水の蛇』が絡みつき発動出来なかった。

「くく……捕らえた。このまま絞め殺すでしょう。」

「グッ……ケホッ！ケホッ！グウ……」

「『雷球!』」

メウスと雷蔵は同時に雷球を打ち合う。同数、同威力のため、互いに打ち消し合う。

「『雷刃!』」

二人は雷の刃を作り出し切り合う。数合、切り結んだ後、互いに距離を取る。

「歳の割に良くやる。」

「ほほ、まだまだ若い者には負けんよ。」

「『……集束する雷』」

メウスは『集束する雷』を短縮詠唱で撃つ。

「こんなもの!」

雷蔵は『雷刃』に魔力を込め、一閃。『集束する雷』を切り捨てる。

「ぬう……これも駄目か……やりおるのう……」

「当たり前だ。ところで一つ聞きたい、俺の部下を殺したのは貴様か?」

「お主の部下?何の事じゃ?」

メウスは雷蔵の言う部下が誰を指すか薄々気付いてはいるが、訪ねる。

「しらばっくれるな！貴様たちを監視していた者達だ！」

雷蔵は激昂し、メウスはまあ、その事じゃろうなと溜息を吐く。

「わしではないよ……じゃが、部下を殺され怒るお主の気持ちが見えない訳ではないが、主らもわし等から『遺物』を盗んだらうて。その間に殺されたものもあるぞ？それは自業自得と言うものじゃ。」

メウスは冷静に答えるが、雷蔵はだからどうしたと言う。

「それでも、部下を殺された事に变りはない！老人、貴様が殺していないと言う事は本当だろう。だが、貴様は部下を殺した奴の仲間だ……死んで貰うぞ！」

「はあ、まあそれが当たり前の反応かのう……さて、わしとて未だ死にたくは無いからもう。向かい撃たせてもらう。」

再び、二人は『雷刃』による切り合いを始める。

その早さ重視の斬撃は避けることや体術などの近接戦闘を行う隙は無く、斬撃のみの打ち会いになる。正確にはその隙はあるのだが、互いに同じ属性のため、譲る気がないのである。

そして、その打ち会いは何合目になるのか解らない。しかし、段々と明暗が分かれてきている。そして……

「くっ……」

雷蔵の膝が折れる。

「なんだ……これは……」

雷蔵は体を動かそうとしているが、体が痺れて動かないようだ。

「何、歳よりの知恵じゃよ。お主より、この属性との付き合いは長いからの。」

メウスは斬撃を放ちながら、微細な電気を雷蔵の体へ流し続けていた。その結果、体が硬直し動けなくなったのだ。

「悪いの、さらばじゃ!」

メウスは『雷刃』で雷蔵を切り伏せる。

「残念じゃった、の!?!」

しかし、メウスの背中を斬撃が襲った。

「そうだな。残念だったな。」

背後には何故か、雷蔵がいた。メウスは斬撃をまともに受け、血を流し、膝を着くが、直ぐに飛び退き、最後に斬撃を放った雷蔵に向き直る。

「いったい、どういふ手品じゃ?」

メウスは目の前の光景に目を疑う。目の前にはメウスが切った雷蔵とメウスを切った雷蔵の二人がいるからだ。黒装束のため、全くの別人とも考えられるが……

「何、こういう事だ。」

雷蔵が指を鳴らすと、倒れていた雷蔵は煙となって消えた。

「なっ！？まさか、分身の術！東洋の技か！」

「そう言うことだ。」

雷蔵が使用した技は正しくは『影分身の術』だ。実態を持つ分身を作る技だが、相当の術者でない限り、本体より遥かに劣る分身しか出来ない。どうやら、雷蔵はその『相当な術者』に当てはまるようだ。

魔法の形態には今では廃れ、一般には知られていないものが存在する。雷蔵が使用した『影分身の術』はそんな魔法形態の一つで、『東洋術』と呼ばれている。なお、今世界的に使用されているのは『西洋術』と呼ばれている。慧達が使用しているのがそれだ。

魔力を使用するのは同じだが、『東洋術』は『西洋術』に比べ応用が効かず、また大変な知識、技術そしてなにより修行がいる。そのため、使用できるものも限られており、廃れていった。

「確かに『雷』の属性についてはそちらの方が一枚上手のようだが、それだけでは、決まらないのが戦闘だ。」

「ぐっ、油断したの……」

「エル！」

ヘレンは珍しく声を荒げる。

「・・・ヘレン。あなたはそこで援護をお願い。どうやら、一筋縄ではいきそうにないからね。」

エルはヘレンに大丈夫だと手を振り答え、再度、月影と対峙する。

「『光よ・・・集束し、穿て！光砲！』」

エルは光の砲撃を放つ。その砲撃は月影を捕らえるのだが・・・

「残念、外れた。」

「くっ！」

砲撃を受けたはずの月影が突如背後から現れ、切りかかって来る。エルはそれをギリギリで避ける。先ほどからこの繰り返しなのである。

「『闇よ刃となり彼の者を切り裂け！闇刃！』」

ヘレンが『闇刃』を放つが、

「ふっ『影刃』」
シヤド・ウ・エッジ

月影の影から刃が生み出され、その刃を迎撃する。

「……………!」

「全く、何なのよ一体……」

確かに目の前にいるのは本物だ。感じる威圧は、明らかに分身ではない。もし分身を使用するとしたら、雷蔵の様に、威圧は下げるものだ。なのに、魔法を放つと先ほどの様に突如背後から現れる上に、『影』を操り攻撃を防ぐ。一体どういう事なのか……エルのこれまでの経験の中でもない事だった。

「くくく……もう、終わりか？」

「まさか、まだまだ、これからよ……」

エルは再び攻撃を仕掛けようとし、ヘレンは援護しようとする。しかし、月影の言葉に動きを止める。

「そうか、だが、貴様の仲間達はどうか？」

「何を言って……」

「エル!ピュラとメウスが!」

ヘレンの叫びを聞き、二人の方へ視線を向ける。そこには『水の蛇』に締め付けられているピュラと、血を流し膝を着いているメウスがいた。

「二人とも!」

エルは思わず二人を援護しようとする。それが不味かった。

「いいのか？それで？」

「しまっ……！」

月影は背負っていた刀を抜き、エルを襲う。しかし、体は魔法を撃つ寸前。衝撃を堪えるため、体に力が入っており、硬直し動く事ができない。エルは避けられない事を悟り、せめてと体をずらし、急所を外そうとする。

刀がエルを切り裂く。その直前……

「『……闇黒の剣』」

「へレン！」

へレンが『闇黒の剣』をつくり、月影の刀を止めていた。

「エル……下がって」

「だが！」

「くく……交替しようが、どちらが先か後かの違いだけだ！」

月影は強引にへレンを突き飛ばす。例え魔法でつくった剣であっても物理的な切り合いになる以上体格差、純粋な腕力の差がものを言うのは当然だ。

「きゃー！」

「ぐっ！」

突き飛ばされたヘレンをエルは受け止め、共に倒れる。

「さて、終わりにしようか！」

月影が再び刀を振り下ろす。ヘレンは『闇黒の剣』で防ごうとするが、月影の斬撃の方が早く、間に合わない。その時

「『アイス・バード
氷鳥！』」

「『テッラ・サーペント
土蛇！』」

「『ウインド・ウルフ
風狼！』」

『氷の鳥』が月影の刀を凍らせ、『土の蛇』が止水の『水の蛇』を喰い干切り、『風の犬』が雷蔵の片腕に爪を立てる。

「はあ、はあ、なんとか間に合いましたか……」

「遅いわよ、シオドス」

氷鳥はシオドスが

「ピユラ、大丈夫か……」

「あ、ありがとうございます！カリオさん！」

土蛇はカリオが

「なんだ、だらしねえな！御老功！」

「ふん・・・もう少し遅ければ、わし一人で殺っておったわ！」

風犬はヘルメが、それぞれ放ったものだった。

時間は少し遡る。

「何者だ？あいつら？」

「解りません。敵ではないようですが・・・」

「味方と言うには、殺気を纏い過ぎている・・・」

月影達の登場に、思わず視線を向けてしまう。

「・・・厄介なのが来ましたか・・・どうやら、早めに終わらせた方が、良いですね・・・」

「「「！？」」」

シオドスの醸し出す空気がいきなり変り、夢、氷、刹那はシオドスへ視線を戻すと共に、構えをとり、警戒心を強める。

「すみませんが、こちらにも余裕が無くなってきました。ここからは本気で行かせて貰います。』・・・氷は鳥を型どり、空を駆ける冷酷な刃となる・・・氷鳥』」

シオドスの周囲に、『氷の鳥』が1羽、2羽・・・まだ増え続ける・・・

「氷さん。あの魔法は？」

夢は同じ属性を持つ氷にどのような魔法か、確認する。

「『氷鳥』・・・その羽、一枚一枚が、氷の刃でできている自在に飛び回る氷刃だ。しかも凍結の魔法が掛けられている。切られた部分が凍る。厄介な魔法だ。」

『氷鳥』は鳥の形を模した氷刃の魔法だ。なら、『氷刃』で良いのではないかと思うが、『氷刃』では『氷鳥』の様に自在に飛び回らせることはできない。なぜなら、イメージがしにくいからだ。もちろん刃を飛ばす事は可能だ。しかし、それではどうしても直線の動きになってしまうのだ。だからこそ、動物の形を取らせる。そうする事でより自在に動かすことが出来、また、応用の『術式』も組み込みやすいのだ。だから、『龍』や『蛇』、『鳥』や『犬』などを模る。これらは、操作性に長け、より技術が必要とされる魔法となっている。

もちろん、『水』や『闇』、『植物』など、元からイメージしやすい属性は、動物などを模らなくても自在に操れたりするのだが、結局は術者の腕次第だ。

「逝け！」

『氷鳥』は全部で20羽にも及ぶ。それらが空を飛びまわり、攻撃を仕掛けてくる。

「『……雷球』」

刹那は詠唱速度が早い『雷球』を詠唱し、『氷鳥』と同数の20発程放つが、『氷鳥』は自在に動き『雷球』を避ける。

「『幻の翼で羽ばたけ！幻鳥！』」

夢は幻の魔法で鳥を生み出し、『氷鳥』へ向かわせる。しかし、『氷鳥』は『幻鳥』を避けようとしなない。幻のため、当たる訳がないからだ。

「ふっ、そんなもの、所詮は幻、当たる訳が……」

「さて、それはどうでしょう？」

『幻鳥』は『氷鳥』に激突した。幻の鳥は消え、氷の鳥は砕け散り、風に流されていった……

「何!？」

シオドスが驚くのも無理は無い。実態のない幻の鳥が『氷鳥』に激突したのだから……

「氷さん!」

「ああ!『氷鳥』!」

氷はシオドスより数は少ないが、『氷鳥』の詠唱を終え、迎撃に移らせる。上空では『幻鳥』と『氷鳥』がぶつかり合いを始める。

しかし、やはり物量は、シオドスの方が多く、押されて行く。

「……本体を狙う……」

刹那は、『雷刃』の詠唱を終え、術者であるシオドスを狙う。あれだけの数の『氷鳥』を動かすにはかなりの集中力が必要になるため、動く事ができない。出来たとしても、どちらかがおろそかになる。そう、刹那は判断したのだ。

「疾っ！」

刹那は『雷刃』で一閃！シオドスを切り裂くが……

「これは！」

刹那が切ったのは氷の像だった……

「残念でしたね。」

「ぐっ……」

その像の後ろからシオドスが現れ、強化された蹴りが飛ぶ。それを腕でガードするが、態勢を崩していた刹那は、車から吹き飛ばされる形となった。

「刹那！」

氷は刹那が吹き飛ばされた事で、動揺してしまい、『氷鳥』の制御が弛んだ。それを見逃すシオドスではない。

「仲間思いですね。ですが・・・」

シオドスの『氷鳥』が氷の『氷鳥』を撃ち砕く。

「その隙を突かない理由はないですね。」

「しまっ・・・！」

「氷さん！」

『氷鳥』が氷の足を切り裂く。切られた部分は凍り、足から力が抜ける。夢は、氷とシオドスの間に割って入る。

「がはっ！」

シオドスは『氷の槌』アイス・ハンマーを氷に向かい、横から振り切る。が、夢が間に割って入ったため、『氷の槌』に吹き飛ばされたのは夢となった。

「さて、後は君だけだよ。」

「くっ・・・」

氷は追い込まれる。足は動かず、周囲は『氷鳥』で囲まれ、逃げ場もない。魔法を詠唱する時間もなく、防ぐ術もない。『氷鳥』は既に、全て砕けて消えていた。

「『パンドラの箱』の影響で、まともに魔法が使えない状態。この状況で、ここまで戦えた君たちには賞賛を送るよ。でも、これで終わりだよ。」

氷は身を屈め、どうやってこの状況を打破するか考えるが、思い付かない。そして、諦めかけたその時

「伏せる！」

どこから聞こえてきた声に反応し、氷は伏せる。

「きゃ！」

「なに！」

すると、強烈な風が吹き荒れ、『氷鳥』が次と碎け消える。氷もシオドスも急な突風のため、目を開けていられなかった。

次に、シオドスが目を開けると氷の姿は消え、『氷鳥』も僅かを残し、消えていた。

「今のは、風の魔法？一体・・・」

誰が今の風を起こしたのか、先ほどまで戦っていた少女は何処へ消えたのか、周囲を見渡し、考えようとしたが、その思考は途中で中断された。

「へレン！」

その声に振り向くとへレンが月影の刀を受けるところだった。エールは魔法を放とうとし、硬直状態だ。

「あちらが優先ですね！」

シオドスは『氷鳥』を操作し、エルとヘレンを助ける事に集中する事にした……

「……ここは？」

氷は一向に来ない衝撃に目を開ける。すると、目の前には空が広がっていた。

「気付いたか？」

「なっ！君は誰だ！離せ！」

「待て！暴れるな！姫神先輩！」

氷は自分がどういう状況にあるのか、気付くと暴れ出した。なぜなら。見ず知らずの少年にお姫様抱っこされているからだ。

「危ないのだ！暴れるな！」

その大声に、はっ！とし、我に帰ると、下を見る。すると、建物が小さく見えていた。そこで、改めて現状を確認する氷。自分は今、空を飛んでいるのだ。そして、深呼吸し、冷静になり、頭を働かせると、少年に問う。

「君が助けてくれたのか？君は一体誰だ？」

「はぁ……俺の事は他言無用で頼む。葛城 真樹。あなたと同じ

学園の一年だ。ここへは理事長から個人的な依頼で来ていた。」

真樹は監視していた事等を簡単に説明する。

「そうか・・・色々言いたい事はあるが、助かったよ。ありがとう。」

「・・・いや、これも依頼の内だ。」

真樹はこの後の行動を考えながら、とりあえず、抱えている少女を何処に避難させようか、風の魔法を駆使し、周囲を探りながら考えるのであった。

第九話 鍵守VS影く一人目く

『もしもし、お兄ちゃん？今どこ？』

「ん？今か？まだ商店街だ。」

美夜と慧はまだ買い物途中だ。先ほどまではスーパーにいたが、こんどは商店街に場所を移している。ものによっては、こちらの方が安いからだ。

『そうなんだ。あのね、お母さんから電話があつて、帰らなきゃならなくなつたんだ。だから、晩御飯、一緒に食べられなくなつただよ。ごめんね。』

「そっか・・・まあ、気にするな。どうせまた来るんだろ？その時でもいいさ。」

『うん。ごめんね。あつ！緩奈さんに代わるね？』

続いて、董から緩奈に相手が変わる。

『もしもし、慧？私も帰るね？』

「そっか、董の事頼むぞ？」

慧は緩奈が何故帰るかまでは聞かない。大体の理由は察することができる。董を一人で帰さない様にしてくれたのだろう。

『うん。わかってるよ。それと・・・』

「ああ、銀も一緒に連れて行け。その方が安心だからな。」

『うん！ありがとう！慧。』

「いや・・・気を付けて帰れよ？」

『うん。じゃあ、また、明日。』

「ああ、またな。」

慧は電話を終えると美夜へその内容を伝える。

「そう・・・仕方が無いとはいえ、残念ね。でも・・・」

そう言って、美夜は慧の手にぶら下がっている買い物袋を見る。

「この量、消化しきれるかしら？」

「・・・どうだろう？」

緩奈と董の分も計算し、食糧を買っていた訳だが、二人が帰るため、その分、余分となってしまうのは当然。この量を消費しきれるか、心配になる二人であった。

高速道路のトラックの上では『鍵守』と『影』が全員揃い、対峙している。

時間は空港を出発してから大分経つ。だが、まだ博物館には着かない。通常なら、隣の県からなら、高速道路を使用すれば4〜5時間程で着く距離だ。しかし、時刻は既に16時を回っており、とっくに着いていてもおかしくは無い時間だ。なら、何故着かないのか、それは戦闘により、思ったよりスピードを出す事が出来ないからだ。戦闘の余波により、いくらプロの運転手とはいえ、通常通りのスピードを出す事は出来ないでいたのだ。しかし、ここまでの戦闘がありながら、事故も起こさず、車を走らせ続けてきた運転手達には尊敬を覚える。まあ、ほとんど意識を飛ばしかけているようだが・

だが、ゴールも目前。既にトラックは櫻木市に入っている。

「全く、遅いわよ・・・もう櫻木市に入ったわよ？」

「すみません。彼女達が思ったよりも手ごわくて・・・」

「仕方ねえだろ！カリオが重すぎんだ。おかげでバイクの速度が上からなかったんだよ。2台用意出来なかったのか？」

「む・・・ヘルメ、お前の運転も下手くそだったぞ。何度コケかけた？」

エルの言葉にシオドスは謝り、ヘルメは悪態を吐き、カリオはヘルメの失態をばらす。

「うるせえ！この筋肉ダルマ！コケかけたのもお前の筋肉が重すぎるからだろうが！無駄に付けやがって！」

「しかし、運転すると言つて聞かなかったのはお前だろう？そのくせ、失敗は人のせいにするのか？ガキだな。」

「到着するなり、ケンカ始めんな！バカども！」

エルは、来てそうそうケンカを始める二人に怒鳴る。エルに怒られ、二人は一応矛先を収めた。

「はあ、さて、それじゃあ、全員揃った事だし、時間も無いわ。さつさと、こいつら倒すわよ！」

「」「おう！」「」

「さて、ではやるぞ、ピユラ。」

「はい！カリオさん！」

カリオは『土蛇』を止水に向かわせる。ピユラはカリオが止水の相手をしている間に詠唱を開始する。

「火は点る。一つ、二つ、三つ・・・まだまだ点る四つ、五つ、六つ・・・」

ピユラの周りに火が次々と点って行く・・・

「何をする気だ！」

止水はピユラの詠唱を邪魔するため、再度『アクア・サーベント水蛇』を放つ。

「邪魔はさせぬ。」

しかし、カリオがそれをさせない。「土蛇」で「水蛇」を即座に蹴散らす。

「くっ……同種の魔法では属性の不利は覆せぬか……なら……」

止水は『分身の術』を使い、詠唱する時間を稼ぐ。カリオは『土蛇』を操り、止水の分身体を潰していくが、分身体も巧みに『土蛇』の攻撃を捌き、止水本人には届かない。その間にもピュラは詠唱を続ける。

「『個々に点りし火は小さく弱い。されど、一つに集まれば、水をも焼く、大火となるう。大火は連なり龍となり、我に仇名す者を喰らい、焼き尽くす。火の竜』」
イグニス・ドラゴン

複数の火が集い、大きな火の球となり、大火の球が連なり、『火の竜』と化する。

『火の竜』と『炎の竜』一体何が違うのか、それは火力だ。普通に考えれば火より炎の方が火力は上。よって『炎の竜』の方が、威力も上だと思うだろう。

「カリオさん下がって！」

ピュラは『火の竜』を止水に向けて放つ。その大きさはランクルの『炎の竜』を雄に超え、その威力さえも超えている。『火の竜』は止水の分身をその体で一薙ぎ、全ての分身は『火の竜』の体に触

れ、燃え尽きた。

しかし、実際は違った。この『火の竜』は複雑な『術式』とより多くの魔力を使用する事で、『炎の竜』をゆうに超えるものとなった。その威力は『上級』に分類されるだろう。しかし、これはあくまで『火の竜』だ。何故なら、『火の竜』を構成するものはあくまで『火』だからだ。『火』を集い、連ねる事で全体としての威力は『炎の竜』を上回る威力としている。

「本物は・・・そこ！」

分身の中に隠れていた止水本人に『火の竜』を向かわせる。

止水はそのまま『火の竜』の吞まれる。そのはずだった・・・

「『・・・蛟』」

しかし、止水の詠唱が終了し、再び『蛇』が出現。『火の竜』を止める。

「・・・な、何・・・それ・・・」

「・・・先ほどまでの『水蛇』とは違うな・・・」

『火の竜』を止めたのは先程までの『水蛇』とは異なっていた。蛇体に四肢を有し、頭に角と赤い髭を持ち、腰から下はすべて逆鱗となっており、尾の先に瘤がある。なにより、その個体から感じる魔力は圧倒的であった。

「こいつは『蛟』、日本では水の神とさえ称えられる竜の一種だ。

これまでのものとは格が違う。」

そして、『蛟』は『火の竜』を喰い千切るうと喰らいつく。

「『土蛇』よ！」

カリオは『土蛇』を『蛟』へ向かわせる。『土蛇』は『蛟』へ喰らいつくが、びくともしない。属性の弱点を無視するほどの魔法なのだ。

カリオ、ピュラと止水の間で、『火の竜』、『土蛇』と『蛟』がぶつかり合う。

「で、御老功、こいつは？なんか見た事ある格好なんだが？」

「はあ、貴様が殺した者達の上司じゃそうじゃ。」

「あゝ・・・そんなもいたな。」

ヘルメは、そう言えばそんなこともあったなと言うが、実際は覚えていない。鍵守達の中でも好戦的で、多くの敵をその手にかけてきたため、一々覚えていないのだ。

「・・・そうか・・・貴様が・・・」

「あ？なんだよ？怒ってんのか？そっちだって似たようなものだろう？死にたくないなら、こっちの世界に関わるなってんだ。」

確かに、ヘルメの言う事も最もだろう。しかし、それで納得できるものではないのだ。

「・・・殺す！」

雷蔵は『雷刃』へ供給する魔力を上げ、ヘルメへと切りかかる。

「へっ！そうこなくっちゃ！」

ヘルメは懐から銃を取り出し、撃つ。その銃から放たれたのは銃弾ではなく、風の弾丸だった。しかし、雷蔵はその攻撃を避け、近づいてくる。

「なら、これだ！」

次に放ったのは同じく風の弾丸。しかし、今度の風の弾丸はバラバラに散らばる。それは正に散弾だ。

「くそ！」

雷蔵は上空へ跳びその弾丸を避ける。

「ほら、次だ。」

ヘルメは更に上空に向かって風の散弾を撃つ。上空では身動きが取れず、避ける事ができない。

「ちっ・・・『爆』！」

雷蔵は『雷刃』を散弾に向かい、投げ、一言唱える。すると、『

雷刃』は爆散し、その身に宿した雷を当たり一面に放出する。その雷により、風の散弾はかき消された。

「へっ！やるじゃねえか！」

「馬鹿もの！油断するな！」

攻撃を防がれたと言つのにのんきに構えるヘルメにメウスは叱責を飛ばすがヘルメはどこ吹く風、気にせず、雷蔵の行動を待つ。

雷蔵は落ちる雷にまぎれ、ヘルメに接近し、『雷刃』を再び振るうが、ヘルメは軽々と避け、至近距離で、銃を突きつける。

「あばよ！」

ヘルメはためらわず、引き金を引く。今度は幾つもの風の斬撃が放たれ雷蔵は切り刻まれる。

「何！？」

しかし、それは分身だった。そして、完全な隙が生まれた。ヘルメの右前、下方、銃を突き出すことで死角になっている部分から雷蔵は接近し、『雷刃』を振るう。

「むー！」

「御老功！」

「だから油断すると言つたんじゃー！」

しかし、その斬撃はメウスの『雷刃』に防がれる。雷蔵はすぐさま距離をとり、体勢を立て直す。

「今のはなんだ？」

「分身の術、東洋の技じゃよ。」

メウスは今の技をヘルメへ説明する。

「そう言う事だ。言っておくが俺の『分身』は実態を持つぞ？」

そして、雷蔵は再び『分身』を作り出す。その数……本人含め12体。

「……どれが、本物が解るか？」

そして、一斉に跳びかかる。

「んなの！全員潰せばいいだけだ！手伝え、御老功！」

「生意気言いおる。だが、その通りじゃの！遅れるなよ！小僧！」

本人とそんな色ない力を持つ分身達に対し、二人は全て潰すため、雷と風を乱れ撃つ。

「三対一か……良いハンデだ。」

「言ってくれるじゃない！」

エルは月影へ接近戦を仕掛ける。その周囲にはシオドスの『氷鳥』が飛び交っている。

エルの攻撃に合わせ、『氷鳥』が月影へ向かうが、月影は『影刃』で『氷鳥』とエルを迎撃する。影の刃は自在に動き、『氷鳥』を次々と撃墜。エルも近づく事かできない。

「……『カリゴ・ブラチウム闇に引き込む腕』」

そこに、ヘレンが『闇に引き込む腕』を発生させる。多くの闇の腕を発生させ、敵を拘束する魔法だ。

闇の腕により、『影刃』は拘束され、その隙に、エルは月影の懐に飛び込む。既に展開されている『光の衝撃』を月影へとぶち込む。その衝撃に月影は弾け飛んだ。

「「「!?!?!」」」

その事に驚く三人。『光の衝撃』は吹き飛ばす魔法であり、弾け飛ぶなどあり得ないからだ。

「こっちだ。」

「あ……!?!?!」

「「ヘレン!」」

いつの間にか、ヘレンの背後に回っていた月影の刀をまともに喰らい、血を流し、ヘレンは倒れる。月影は、足元で呻くヘレンの髪

を掴み、強引に立たせ、二人の前に突き出す。

「うう……」

「さて、この娘を助けたければ、言う通りにするんだな。」

「貴様！」

「……不味いですね……」

その行動に、エルは激昂し、シオドスは唸る。ただでさえ相手の手の内が解らないうえ、ヘレンを人質に取られたのだ。このままでは全員殺やれるのは目に見えているが、かと言ってヘレンを見捨てることもできない。

「さて、まずはこの鬱陶しい鳥どもを消して貰おうか。」

「……仕方がないですね……」

シオドスは未だ残っていた『氷鳥』を消す。他に手が無い。

「ふっ……さて、ではさっさと終わらせようか。」

月影の影が変化を見せる。影から正体不明の塊が姿を現す。それは、醜くうごめく影の塊だ。例えるならスライムかも知れないが、その気味悪さは、それではない。

「……何？それ……」

エルはその気持ち悪さに鳥肌をたてる。シオドスもその気持ち悪

さに顔をしかめる。

「これが何か知りたいか？これは『鵺』という『魔法』だ。『鵺』とは得たいの知れないものの事を言う。こいつはまさにそうだろう？」

『鵺』とは日本の妖怪や物の怪である伝説の生物だ。これは、得体のしれないものを指す事もある。今回は後者の意味で、月影が名付けた『魔法』だ。

「これが、魔法？随分と趣味が悪い魔法ね・・・」

エルは悪態を吐くが、月影は意に還さない。現状、絶対的な強者は自分であるからだ。

「さて、まずは、貴様からだ、娘・・・ころ・・・」

せ・・・月影はエルを殺すように、そう、『鵺』に命令を出すはずだった。しかし、最後まで言う事は出来なかった。その前に、ヘレンが自爆したからだ。

「ぐあー！」

「ヘレン！？」

正確には自爆ではなく、密かに発生させていた『闇玉』を至近距離で放つたため、ヘレンも一緒に吹き飛んだのだ。

『闇玉』とは闇の玉を作り、その中で更に小さい闇の玉を複数発生させる。小さな玉は大きな玉を破り外に出ようとしますが、大きな玉の方が強く、破れない。そのため、中で跳びまわり、段々加速し

ていく。そして、一定値が過ぎると、全てが一点で激突し消滅する。その消滅のエネルギーが膨大で、巨大な爆発となる。

何故、この状況でこの魔法を使用したか、それは、この魔法が本来設置型の時限式魔法のため、気付かれにくいからだ。案の定、月影に気付かれることなく、魔法は成功した。

しかし、それだけの威力を至近距離で浴びたヘレン本人もただでは済まない。その威力により、吹き飛び、高速道路から落ちて行つた。下は調度、川だったのか、水に落ちる音が聞こえた。

「シオドス！」

「分かっています！」

シオドスはヘレンを助けるため、飛び出そうとする。その際、月影の事が頭から完全に抜け落ちていた。それが不味かった。

「……やれ……」

「ぐあああああ！」

黒い触手がシオドスの足を貫き、トラックに縫いとめた。

「シオドス！」

エルは急いで『光刃』を飛ばし、触手を切り裂く。切り離された触手の一部は掻き消え、シオドスを足からは血が噴き出す。

「……やってくれる。だが、所詮子供の浅知恵だったな。」

「……嘘……」

視線を戻すと無傷で、月影が立っていた。

「……本当に、何なのよ……あなた、本当に人間？」

「失礼な事を言う。俺は確かに人間だぞ？」

エルは目の前の存在に、不審感を覚える。あの距離で爆発を受け、ただで済むわけがない。いったい何なのか、時間があれば、良いのだが、その時間もない。もう、高速道路も終わりを迎える。料金所では、更に数多くの『魔法使い』が待ち構えているだろう。エル達『鍵守』にとつてリミットは博物館ではなく、高速道路を出るまでののだ。

「……もう、タイムリミットね……皆！各自離脱！それぞれ敵を撒いて、集合！いいわね！」

エルは返事を待たず、『フラッシュ閃光』を放つ。

「くっ！」

月影はあまりの光量に目を覆う。攻撃を仕掛ける事が出来なかった。

「……逃がしたか……」

目開けると、エルもシオドスも消えていた。

「ピユラ！離脱するぞ！」

「はい！」

ピユラとカリオはエルの声を聞き、すぐさま行動に移る。

「戻れ！」

カリオは『土蛇』を戻し

「『爆』」

ピユラは一言、呪文を唱える。すると、『火の竜』を構成する火球が爆発を起こす。そして、その爆発は連鎖を起こし、トラックを吹き飛ばす。その光景はまるで竜が暴れているようだ。

「・・・ちっ！炎で視界が・・・」

止水は蛟でその爆発から逃れるが、爆炎でピユラとカリオの二人を逃してしまった。

「小僧！退くぞ！」

一方、メウスとヘルメにもエルの声は届き、メウスはためらわず、退こうとする。しかし・・・

「うるせえ！逃げたかったら一人で逃げろ！俺はこいつを殺る！」

頭に血が上ったヘルメは逃げようとせず、未だ続けようとする。

「馬鹿もの！他のものも皆退くのじゃ！一人残れば生き残る事など不可能じゃぞ！」

7人掛かりでもこの三人に勝つ事が出来なかったのだ。一人ではどうしようもない事は明らかである。しかし、頭に血が上り、むきになったヘルメは止まらない。

「『風刃』！」

風の刃を周囲に飛ばす。しかし、5人の雷蔵は『雷刃』軽く切り裂く。あの後メウスと二人掛かりで攻撃を仕掛け、なんとか5人まで減らす事ができた。しかし、やはり一筋縄ではいかず、手こずっている。

「効かんよ。その程度。そして、貴様は判断を誤った。その老人が退くと言った時、おとなしく退いておけば、助かったかもしれないのにな。」

「何をいつて・・・」

「ぬ！？これは・・・」

二人は体を動かさそうとするが、言う事を効かない。これは、ヘルメが雷蔵に使用したものと同じ・・・

「同じ属性だ。一度喰らえばどういいうものか解る。そして、再現もな。まずは貴様からだ！死ね！」

雷蔵5人の『雷刃』がヘルメへ振るわれる。ヘルメは動く事も出
来ず、ただ、その刃を見ている事しかできなかった。そう、ヘルメ
は……

「ぐう……ゴホツ……」

「何!？」

「……」

ヘルメはメウスに突き飛ばされ、トラックから落ちて行く。『雷
刃』に貫かれたメウスの姿を見ながら……声を上げようとしても、
助けようとしても麻痺した体はいうことを効かない。そして、ヘル
メは高速道路に落ち、最後に見たのは、立ち上る雷だった……

「……逃がしたか……止水、そちらは？」

「すみません。逃がしました。」

止水は悔しそうに報告する。

「そうか、まあ、良い。雷蔵、そちらは？」

「一人仕留めました。しかし、右腕を持っていかれました。老人と
思っただけです。」

雷蔵の右腕は炭化し、もう動かす事も出来ないと一目でわかる状

態だ。そして、もう片方の手には、黒こげで、生前の姿も分からなくなつた、ヘルメが引きずられていた……

「ここで初めて会つたのよね？」

「そうだな。まさか、『私のものになりなさい』なんて言われるとは思わなかつたよ。」

慧と美夜は買い物物の帰りに始めて出会つた、川の土手に立ちよつている。

「なあ、なんであの時声をかけてきたんだ？」

慧は今まで気にはなつていた事を聞く。普通、血だらけの犬を抱きしめて叫ぶ男には近寄ろうとは思わないだろう。

「ん？それは前にも言つたわよね？」

確かに、理由は聞いた。だが、優秀な人材は他にもいる。あの時の慧はただ、使い魔契約をしただけだ。確かにそれである程度に力がある事は解つたかもしれないが、それだけでは、慧にこだわる理由は薄いのだ。

「ああ、だが、それだけじゃ、俺にこだわるには薄いだろう？」

「……そうね。なんて言つたらいいのかしら……あの時の慧を見て、銀のために、泣いて、捕まる危険を犯してまで、助けようとするあなたを見て、そんなあなたなら、私の夢を笑わないでくれる

かなって、手伝ってくれるかなって・・・ううん。手伝って欲しいって、側で見ていて欲しいってそう思ったのよ。」

美夜は何でかしらねと一人つぶやく。美夜自身、良く分かっている。理由は無い。ただ、慧の事が欲しいと思ったのだ。

「そっか・・・まあ、そんな事もあるか・・・」

「うん・・・」

二人は流れる川を眺める。夕日で赤く染まる川を・・・

しばらく互いに無言で川を眺めた後、「行きましょ」という美夜に意識を戻し視線を川かわ外そうとする。が、慧の視界の端に何か映った。

「ん？ちよつと待ってくれ、美夜。」

「慧？」

慧は視界に映った何かを確かめるため、河原へ降りる。美夜も不思議に思いながら慧の後に続く。

「・・・確か、ここら辺に・・・！？美夜！救急車！」

「え？一体何が・・・っつ！解ったわ！」

そこは、草が生い茂り、普通なら見つかりにくい場所。そこにいたのは、背中から血を流し、長い青い髪をその血で赤く染めている少女であった。

第十話 慧の昔話

「クソ！」

苛立ちをぶつけるため、壁を殴る。強化も何もしていないため、殴る度に拳に血がにじむ。

「おい！ヘルメ！やめろ！」

「クソ！クソ、クソ、クソ！」

カリオに止められるが、それを無視し、ヘルメは殴り続ける。

「ほつときなさい。その内落ち着くわ。それより、これからの事よ。メウスは死に、ヘレンも行方不明。展覧会は・・・『パンドラの箱』が解錠されるのは、次の土曜日。それまでに手を考えないと・・・」

「展覧会前に盗むというのは？」

シオドスはそう提案するが、エルは却下する。

「それは無理ね。あの博物館の構造を調べるのに時間がかかるし、隠し部屋や金庫もあるでしょうね。それに、あの『影』という組織への対抗策もないうえに、ダリウスまでいる。見た目は太ったブタだが、あれで『十杖』に数えられる程の強さよ。」

『影』達の強さは、流石は裏で一つの組織を成り立たせる事が出来る程と言って良い。止水の『蛟』や雷蔵の『影分身』もさることながら、問題は月影だ。属性はおそらく『闇』かそれに属する何ら

かの特殊なものだろう。特に『鵠』への対抗策が思いつかない。そこにダリウスまで加われれば、勝てる見込みは薄い。

「そ、そうですね。『パンドラの箱』の影響下であれだけの力を振るうことが出来るという事は、あの人達も対抗策は万全と言う事でしようから……」

「うむ。しかし……どうする？このままでは解錠されるぞ？あれが解錠されては災厄が溢れだす。だが、問題はそんな何処にでもある不幸^{もの}ではない。一番の問題は……」

「そうね。一番の問題は、あの中に眠る……いえ、眠らされている『希望』……ね。表側だけ見てくれればいいけど……裏返されたら……」

一同は沈黙する。箱の中に眠る希望。その裏とは一体何なのか……

「んなこたあどうだっていい！奴らを殺せば、それで済むだろ……」

ヘルメは拳から血を流しながら、そう叫ぶ。少しは落ち着いて来たようだ。

「ふふ……ええ、そうね。言い方は悪いけど、その通りよ。もう手段は選んでいられないわ。」

エルは決意を固めた目で仲間を見渡す。

「……展覧会当日に襲撃をかけるわよ。一般人がいる以上、『影』

達ならまだしも他の『魔法使い』達は手を出せないわ。一般人を公の場で巻き込んだ場合、ただじゃ済まなくなるだろうからね。私達はその内に『箱』を狙うわよ。巻き込みたくないなんて言っていないわ。」

「……では、それまでは？」

シオドスがそれまでどうするか、代表して指示を仰ぐ。

「そうね……シオドスは傷を癒しなさい。学生達に受けた傷、結構深いんでしょ？それと、カリオとピュラは博物館の調査をお願い。当日、何処で解錠するのかとかね。後、ヘルメ……あなたが戦った奴と戦わせてあげるから、勝てるようにして置きなさい。私はレンを探しておくわ。こういう時の集合場所は決めてあるからそこを回りながらね。あの子がいるのといないのじゃ、違うから……」

「」「おう(はい)！」「」

「……ん……」

「主！美夜！目を覚ましました！」

「あら、本当？おはよう……って、言っても、もう夜中なんだけどね。」

「気分はどうだ？吐き気とかないか？」

少女は目を覚まし、起きたばかりでうまく働かない頭のまま、自

分の顔を覗き込む三人を見上げる。

「……………わ……………」

「ここは、私の家よ。あなた、河原に血を流して倒れていたの。病院で治癒魔法をかけて貰ってからここまで運んだのよ。」

その後、救急車を呼び、医者に治癒魔法をかけてもらった。本来なら入院するべきなのだが、どうも、高速道路で大きな騒ぎがあったらしく、ベッドの空気が無い状況だった。怪我自体は治っており、治癒魔法による影響がないか、経過を確認するだけだったので、家まで連れて帰って来たのだ。

治癒魔法は属性外魔法の一つで、扱いが難しい魔法の一つだ。属性外魔法では最も難しいものの一つだ。更に言わせれば、医学などの専門の知識も必要となり、扱いを間違えれば相手を殺してしまう事もある。そのため、扱える者は少ないのだ。美夜や慧、『王』と呼ばれる者や『六魔天』の中でもまず、その魔法を専門に扱うもの意外は使用できない。

「それで、どうして河原で倒れていたの？」

美夜は担当直入に少女に尋ねる。少女はまだ、頭が働かないのか、目の焦点も合っていない。

「……………どうして……………倒れていた……………」

「あなたの名前は？」

今度は銀が問う。しかし、まだ呆然としている。

「私の・・・名前・・・？私は・・・ヘレン・・・倒れていたのは・・・切られた・・・から・・・！！！！痛っ！！」

ヘレンは急に何かに気付いたかのように、目を見開き、勢いよく起き上がる。しかし、傷は塞がったとはいえ、まだ痛覚は残っており、思わず蹲る。

「お、おい！大丈夫か？いきなり起き上がるから・・・」

慧は蹲るヘレンの背中を痛みを和らげる様にさする。

「あ、あなたは・・・？」

「ん？俺は黒澤 慧だ。で、こっちの黒髪の美少女が神凧 美夜、こっちの銀髪の美少女メイドが黒澤 銀だ。」

慧のその紹介に、顔を赤くし後ろを向き蹲る美夜と、嬉しそうに慧に抱きつく銀。今日はメイド服を着ていたりする。

「そう・・・私は、ヘレン・・・ヘレン・ルティス。」

「そうか、よろしくヘレン。」

慧はそう言い、ヘレンの頭を撫でる。ヘレンはその行動に驚くが、特に何もせず大人しく撫でられている。少し、表情が緩んでいる。

「それで、ヘレン。起きたばかりで悪いが話を聞かせて貰って良いか？」

「慧の問いに、首を縦に振って答えるヘレン。」

「じゃあ、私からね。ヘレン。あなた、血だらけで河原に倒れていたの。一体どうしたの？」

美夜の問いにヘレンは、黙り込む。正直に答えて良いものか悩んでいるためだ。そして出した結論は……

「……黒ずくめの男に背中を切られた。そして川へ落ちた。後は解らない。」

全てを正直に話さない事だ。本当に嘘を混ぜて話す事。シオドスに学んだ誤魔化し方だ。

「そう、何故襲われたか、理由は解る？」

その問いに、首を横に振る事で答える。

「そっか……分かったわ。後は……ご両親、若しくは親族は？日本にいるの？」

見たところ、北欧系の特徴が強い少女だったため、その様に美夜は聞く。しかし、その問いにも首を横に振って答える。

「じゃあ……誰と来たの？その人の連ら先は解る？」

「……仲間と一緒に……連絡先は……わからない……」

「そっか……後は……私からは特にないわね。慧、銀。あなた達からは何かある？」

美夜の問いに、銀は首を横に振り、慧は手を上げて質問がある事を主張する。

「なあ、へレン・・・お腹空いていないか？」

「・・・え？」

「いや、もう夜中だろ？それまでずっと寝ていたから、お腹減っていないのかと思ってな。」

へレンはまじまじと慧を見る。普通、警察に連絡するなり他にも色々やる事はあるだろう。なのにまず聞く事はそれなのか・・・と

「別に・・・減ってな・・・う／＼／＼／＼」

へレンは要らないと言おうとしたが、体は正直なもので、可愛いしいお腹の音が聞こえてきた。

「ははは、ちょっと待ってる。何か作ってくるから。」

「・・・／＼／＼／＼」

慧はへレンの頭を一撫ですると部屋を出て行く。因みにここは客室の一つだったりする。

「主、私も手伝います。」

「ふふ、それじゃあ、少し待っていてね。へレン。」

「・・・・・・・・」

美夜と銀も部屋から出て行きヘレン一人だけとなった。

「・・・・・・・・どうしよう・・・・・・・・」

ヘレンは孤児だった。気付いたら孤児院にいた。しかし、特に疑問も持たず、皆と遊び、笑い、怒り泣く普通の子供だった。しかし、ある時、自分の属性が『闇』と分かり周囲に知られると、自分を見る周囲の目が変わった。まるで、犯罪者を見る様な眼になったのだ。それはとても冷たい目だった。

だんだん誰も自分を見なくなり、いつしか笑う事も、怒る事も、泣く事もしなくなった。ある時、孤児院にいる皆で近くに遠足に行く事になった。ヘレンは行っても楽しいとは思えないので、一人残る事にした。そんなヘレンに声をかけようとする者はいなかった。

そして、事故が起こった。交差点にタンクローリーが突っ込んで来たのだ。そして、多くの人を轢いた車は最後に大爆発。多くの人が無くなった。そこには遠足帰りの孤児院の皆もいた。

その結果、孤児院を管理する者がいなくなり取り壊されることとなった。ヘレンは帰る場所も無くなった。冷たい冬の季節の事だ。

そんな時だ。エルと出会ったのは。エルが鍵守の一族で、ヘレンの両親もその一族だった事を知らされた。最初は拒絶したが、自分の『闇』を見ても顔色を変えず、凄い魔力だと褒めてくれた。そんな事は初めてだった。だから、一緒に行く事にした。

それからたくさん修行した。エルの力になるために・・・・。そし

て、いつしか自分の居場所ができた。でも、自分は失敗してしまった。エルの力になれなかった。

「・・・嫌われたかな・・・」

怖いのだ。エルに役立たずと言われるのが・・・そう言う人ではないと分かっている。だが、人は急に手のひらを返す。もしかしたらエルも・・・とってしまうのだ。だから、この家から出て行く事ができないでいる。はぐれた時の集合場所は解っているのに、動く事ができないのだ。

「どうしよう・・・」

再度呟く。これからどうすればよいのか、解ってはいるが、動けないのだ。

「慧、どう思う?」

「・・・訳ありなのは間違いないだろう。警察には連絡しない方が良さそうだ。」

「では、どうします?」

慧達は御飯の準備をしながら、今後の事について話あう。見つけた時の状況、刀傷、なにより・・・

「あの、異常な残留魔力・・・どう考えても何かの事件に巻き込まれているだろう。とりあえず、理事長にでも話すのが手っとり早い

か？」

「そうね。あの人なら何かしら知っていそうだからね。」

明日、未来に話を聞きに行く事に決め、改めて御飯の準備を始めるのであった。

そして、次の日の朝。慧達はいつもの様に登校している。

「……なあ、この視線の理由、分かるか？」

「さあ、分からないわ。なにかしらね？」

「……どうも、主への視線ばかりな様ですが……あまり好ましいものではありませんね。」

どうにも慧を見る生徒が多い様だ。その視線は好奇心や好意のものではなく、忌避、拒絶……あまり良い気持ちのしないものだ。

「まあ、気にしていても仕方がないさ。さっさと行くうぜ。」

考えていてもはじまらないため、その視線を無視し、学校へと向かう。

「おはよう」

「お……おはよう……」

校門で、董と挨拶を交わし、途中で美夜と別れ、教室へ入る。すると、朝、登校中に受けた視線と同じものが慧へと突き刺さる。

慧は不思議に思いながら、とりあえず席へ着く。そこへ、タイミングを見計らったかの様に、一人の生徒が近寄ってくる。

「何か用か？委員長？」

名前を覚えてはいないが、確かこのクラスの委員長であった事は思い出したのでそう呼ぶ。メガネをかけた見つ編みのおさげの少女。まさに『委員長』だ。

「黒澤君。聞きたい事があるんだけど？」

「ん？なんだ？」

銀がその間に立ちふさがろうとするが、止めさせ、聞き返す。

「黒澤君の属性って『闇』なの？」

その質問を委員長がすると、周りが息を飲む音が聞こえる。どうやら、ガイや東吾と戦った時の事を風紀委員長達が漏らしたのだろう。

「ああ、そうだが、それがどうかしたのか？」

その慧の発言に周囲はざわめき始める。『闇』は忌み嫌われるため、このような反応に慧は慣れている。昔も同じ様に騒がれたからだ。

『闇』属性を持つものは、悪人に多くいる。しかし、『闇』属性を持つものは世界単位から見れば実は少ないのだ。それはおそらく、

人は『闇』を恐れるものだからだ。そのため、闇を受け入れる事ができる『闇』属性を持つ者を忌避するのだろう。

「やっぱり・・・じゃあ、あなたも悪人なのね？」

その言葉は断定するものであり、その視線は蔑むものであった。銀はそれに反論しようとするが、慧が押しとどめる。

「悪人・・・ね・・・なら、逆に聞こう。君はどうなんだ？」

「何が？」

「君は善人なのか？そう言えるのか？目の前で困っているものがいたら無償で手を差し伸べられるのか？嘘を吐くことなく生きられるのか？誰かのために体を張れるのか？どうなんだ？」

慧は矢継ぎ早に問う。その勢いに、たじろぐ委員長。ざわついていた周囲も押し黙る。

「何が善人か、悪人か、法を犯したからか？法を犯さなければ非道徳的な事をして、悪人にはならないのか？」

「そ、それは・・・」

「更に言わせてもらえば、別に、『闇』だから悪ではないだろ？『火』だろうが『水』だろうが、犯罪を、罪を犯したものは大勢いるなのに、なんで『闇』だけ別の扱いを受ける？」

そこまで言われ、委員長は、気の毒な位、狼狽する。周囲も慧に敵意の視線を送り始める。

「ま、そう言う事だ。『闇』だからって、犯罪者とは限らない。あまり決めつけて掛かるな。」

最後に、委員長の頭を優しくなで、話を終わらせる。その結果、委員長は顔を真っ赤にし、周囲の視線からの敵意は消えて行く。

「主……」

銀はこれでひと段落と思い、慧を見つめる。慧は、その視線に気付いて、銀の頭に手を乗せ、最後に一言。

「まあ、俺は悪人だけだな。」

「……はあ!？」

「何を言っているんだ?」「さっきまでの振りは何だったのよ!」「結局どっちなんだ?」

再び周囲は騒ぎだし、收拾がつかなくなってきた。そこに

「おはよう! って、何この状況!？」

「緩奈!」

銀は緩奈に飛びつき、事情を説明している。その間、慧は笑っていた。

「はあ、相変わらずね。慧。」

一通り銀から説明を聞いた緩奈は教卓の前に立ち、教卓を叩き、自分に視線を集めた。

「え、皆！良く聞いてね。慧は確かに『闇』の属性持ちで、性格は捻くれているけど、悪い奴じゃないわ。自分を悪人とか言うけど、それは照れ隠しよ！」

言われた慧は、「照れ隠しって何だ！」と反論しようとするが、銀に「主は黙っていてください！」とボディブローを決められ、喋ることが出来なかった。

そこから、いかに慧が良い人なのか、緩奈の惚気が始まり、周囲はしらせ始めた。その行動を止められる者はここにはおらず、始業のベルが鳴るまでの間、聞くはめになったのであった。

なお、結果として

「ごめんなさい。変な事を言って・・・」「実は良い奴だったんだな。」「頑張れ！色々・・・」

と、同情交じりの視線と励ましの言葉を受けるはめになったのであった。

「はははは！それは面白いわね。なんで私も呼んでくれなかったのよ？」

「そうです。私も呼んでくれれば、お兄ちゃんの良いところを100個位言えましたよ！」

昼にいつもの場所で食事していると今朝の事を銀が言っ
てしまい、美夜には笑われ、董は自分も参加したか
つたと言いはじめた。慧は深い溜息を吐く。

「そんなことより、美夜？ 夢さんはどうしたんだ？
一緒じゃなかったのか？」

「それを言うなら、葛城君は？ 今日
は休みなの？」

現在屋上には、慧、美夜、銀、董、緩奈の5人
だけで、夢と真樹が来ていない。

「ああ、真樹の奴は休みだ。まあ、たまに
ある事見たいだから気にする事でもないさ。
で？ そっちは？」

「うん。それが、電話したら、入院して
いるって。どうやら、理事長からの依頼で怪我
したみたいなのよ。重傷って訳じゃないけど
検査もあつてね。退院は明日になる見たい。
他にも、長女や姫神さん、雷堂さんも見たい
ね。」

「そうなのか？ 董？」

「うん。日曜、御母さんに呼ばれた理由が、
お姉ちゃんが怪我したって聞いたからなの。
命に別状は無いつて。」

「これは、相当厄介な依頼だったんだな。」

夢、葵、氷、刹那はこの学園でも相当な力
を持つ魔法使いだ。公式の『魔法使い』でもA
～Bランクの者達であり、いくら実戦経験

が少ないとはいえ、そこらの魔法使いに劣るとは思えない。それだけ今回の依頼が高ランクだった事が伺える。

「どうする？お見舞いに行くか？」

「いえ、どうせ明日には退院だから、必要はないわ。それより、あの子の事を理事長に聞かないと。」

「あの子？」

美夜の言葉に反応を見せる緩奈。

「ええ、慧が昨日連れ帰って来た女の子よ。」

何故か慧の名前を強調する美夜。それを聞き、緩奈と董の視線が鋭くなる。

「慧、ナンパ？しかもお持ち帰り？言ってくれば私が・・・」

「お兄ちゃん・・・最低です！」

「美夜！人聞きの悪い事を言っな！怪我して倒れていたんだよ！後、美夜も一緒だったからな！」

慧はその時の事を話、なんとか場を収めたのであった。

「よつこそ、黒澤君。美夜さん。」

「お時間を頂、有難うございます。理事長。」

放課後、慧達は理事長を訪ねた。ヘルメの事を相談するためである。銀には一足早くヘルメの面倒を見に帰って貰っている。

「それでだ。この子なんだが・・・」

そう言っつて、慧は携帯で撮ったヘルメの写真を未来に見せる。

「この子は・・・黒澤さん。美夜さん。この子をこちらまで連れて来ては貰えないでしょうか？」

その写真を見て、何を思ったのか・・・未来は直ぐに連れて来て欲しいと答える。その答えに美夜は驚き、慧は眉を潜める。

「何故ですか？理事長。この子をどうするおつもりですか？」

「そう、怖い顔をしないでください。美夜さん。黒澤さんもです。ちゃんと説明しますから。」

そう言っつて話始めた内容は、夢達に依頼した内容とその結果だった。それは、ヘレンにはまるで関係ない様な話であったが・・・

「依頼自体は成功と言っつて良いでしょう。無事『遺物』が博物館につきましたから。しかし、本題はここではありません。問題はこの過程にあります。」

「夢さん達を襲った者達。そして、その襲撃者達を退いた者達だな？」

慧の言葉に頷く。未来の話は、依頼が『パンドラの箱』の護衛と、襲撃者達がいた事、そのため、夢達が負傷した。しかし、『箱』は無事、博物館へ着いた事。最初と結果だけで過程がところどころ抜けているのだ。

「ええ、そうです。まず、この襲撃者についてですが、私、独自の調査で分かった事ですが、『鍵守』と呼ばれる、『パンドラの箱』とその封印の鍵を守護する者達の事です。」

「・・・その『鍵守』達が襲撃してきた・・・つまり・・・」

「ええ、美夜さんの思っている通りです。ダリウスは『鍵守』達から『箱』と『鍵』を盗んだのです。そのため、彼女達は取り返しに来ました。しかし、失敗しました。『鍵守』達は全部で7人。内一人は死亡。もう一人は行方不明だそうです。」

「一体そんな情報を何処から持ってくるのか？不思議に思うが、聞いても教えてもらえないだろうと思い、話を進める。」

「それで、その話とヘレンと何が関係しているんだ？」

「その行方不明者の特徴ですが、小学生か中学生位の歳で、青い髪と青い瞳が特徴的の女の子だそうです。」

「まさか！ヘレンがその『鍵守』の一人だと言っているんですか？」

美夜は驚く。あんな小さな少女が、殺し合いをしていたなどとは思わなかった様だ。

「そうか・・・で？連れて来てその子をどうするつもりだ？」

「慧は未来の真意を計りかね問う。」

「私はただ、真実が知りたいのですよ。この事が本当なら、『六魔天』として、ダリウスを咎めなければなりません。」

確かに『六魔天』同士は裏で争っている。だがそれは何も『遺物』や『魔法』の独占権を奪い合っているためだけではない。未来の様に、過ちを犯した者達を裁くためでもある。しかし、未来の様な存在は数か少ない。そのため、『断罪の牙』など『七刻』が生まれたのだ。そして、美夜が目指すものもここにある。

「……わかった。連れてこよう。それと、一つ聞きたいんだが、『鍵守』達を退いたのは『六魔天』の人間か？」

慧が疑問に思うのも無理はない。『鍵守』達もかなりの腕前だと言う事はヘレンを見ればわかる。たかだかA〜Bランクの『魔法使い』ではどうにもならないだろう。数がいれば何とかなつたかも知れないが、高速道路で、走る車の上と言う状況では無理がある。それこそ、SやSSクラスでもなければ無理だろう。

「『影』と名乗る組織です。かなりの手練だったそうですが、黒澤さんは御存じですか？」

「……いや……聞いた事もない。」

慧も聞いた事が無いため、首を横に振る。そんな二人を美夜は目を細めて見る。

「そうですか……わかりました。『影』については私の方でも調

べてみます。美夜さん達はヘレンさんを連れて来てください。」

「わかりました。」「ああ。」

話を終え、二人は自宅にヘレンを迎えに行く。その道中、美夜が訪ねてきた。

「ごめん慧。急がなきゃならないことは解っているんだけど、どうしても聞きたいことがあるの。聞かせて・・・」

「何だ？」

慧は美夜が聞きたい事が分からず首を傾げる。しかし、次に美夜からかけられた言葉に、思わず固まる。

「もしかして、理事長と慧って、付き合い長い？」

「・・・・・・ど、どうしてそう思うんだ？」

慧はなんとか声を出し逆に問い返す。

「だって、最初理事長と会った時、初めましてとは言っていたけど全然そんな雰囲気じゃなかったし、慧の言葉使いを特に気にしないし、今日だって、『影』の組織について、慧に聞いたでしょ？まるで、慧なら知っているかも知れない様に。」

「・・・・・・」

「もちろん。慧の過去を無理に聞きだしたいじゃないけど、理事長と知り合いかだけでも教えて欲しいかな・・・」

既に何か確信がある様に言う美夜にこれは無理だなと思ひ慧は話始める。

「ああ、確かに俺は未来さんと昔からの知り合いだ。俺が『断罪の牙』にいた頃からの・・・な。」

その言葉に驚く美夜。『断罪の牙』と言えば、『七刻』の内の一つ。その中でも特別視されている3つの組織の内の一つだ。『六魔天』の関係者なら知っていてもおかしくはない組織だ。まさか、慧がそこにいたとは思わなかった。

「10歳位の頃だったかな。俺の属性が『闇』なのは知っているだろ？その事でいじめられていてな・・・そんな時、一人の女の子と友達になったんだ。その子も一人で、家に帰っても親はいないし、良く遅くまで遊んだよ。」

そんなある時、その子をつままえようとしている大人達がいたんだ。それを見て、助けようとした・・・でも、全然敵わなかった。そして、その子は連れ去られた。その時だよ。晟のオッサンがその場に現れたのは。オッサン達は攫った奴らを追っていた見たいでさ。そして、助けたいなら一緒に来ないかって誘われて、俺はその手を取った。

それから、オッサンや白河さん。フリードに魔法や戦い方を教えて貰った。そうして、攫った奴らを追いながら、たくさんの人を殺したよ。そうしなければ生き残れなかったし、見過ごすことが出来ない事ばかりだったからな。その途中で未来さんとも知り合ったんだよ。俺達、『六魔天』にも追われていたからな。」

そんな事を繰り返している内に『断罪の牙』が出来上がって言ったと、慧は語る。

そもそも、『断罪の牙』とは、本来、裁かれるべき人間が裁かれず、私腹を肥やし、涙を流す人達がいる。そんな理不尽な世界を嘆き、世界に牙を剥いた。世界の罪を切り裂くために作られたのだ。

「じゃあ、慧つて、『断罪の牙』の創設時のメンバーなの？」

「ああ、そつだ。」

『断罪の牙』が有名な理由の一つに名を上げてからわずか5年そこらで、『六魔天』や他の『七刻』に並ぶ力を付けたといく事もある。これは『王』の名を持つ三人がいた事もあるが、その三人の弟子である慧がいた事も含まれるだろう。

「そして、とうとう攫った犯人を見つけ出した。でも、遅かった。実験に耐えられず、死んだそつだ。犯人達は笑いながら言っていたよ。4年も良く持ったつて……だから、俺は殺してやった……生きている事を後悔させながら……」

慧は手を握りしめている。その手からは血が滴り落ちている。

「慧……」

美夜は慧の手を両手で包む。

「それから一年経った時だな。親父から再婚するつて連絡があつたのは。でも、俺は『断罪の牙』に所属しているだろ？このまま所属し続ければ再婚相手にも迷惑がかかる。そう思った俺は組織を止めた訳だ。完全に柵がなくなる訳じゃないが、所属し続けるよりは、ましになるだろうからな。それから後は美夜の知っている通りだ。」

そこまで話すと、これで全部だと、慧は話を終わらせる。

「そっか・・・そうだったんだ・・・ありがとう。話してくれて。」

そして、いつの間にか立ち止まっていた慧を、美夜は抱きしめる。

「・・・いいのか？俺はどんなに言い作ろうと、人殺しで犯罪者だぞ？」

慧は美夜に問う。自分が側にいても良いのかと。

「だから？それが何？慧は慧でしょ？狂ったわけでも、殺しが好きになわけでもないでしょ？それに、人殺しというのなら、私だって一緒よ。この属性を制御出来なくて、家の者を殺してしまった。人数も覚悟も違うかもしれないけど、人殺しである事には変りない。

やっと分かった。どうして、慧が欲しかったのか・・・一緒だからだ。」

「一緒？人殺しという点か？」

「違うわよ・・・迷っていたから、生きていて良いのか、幸せになつて良いのか、いろんな事に迷っていて、でも、無理矢理進もうとしていたから。そんなところが一緒だったから、だから一緒に悩んで欲しかったんだと思う。だから、欲しかったんだよ。」

その言葉に、慧は、軽くなった気がした。慧自身、自覚は無かった。迷っているつもりもなかった。だが、美夜にそう言われ、やっと自覚したのだ。その事実には。

実際、その事は晟達『断罪の牙』の面々は気付いていた。だから、慧が組織を抜ける事を許したのだ。迷いを自覚してくればと。銀は気付いていた。だから、常に慧の側にいた。何時倒れても、支えられる様に。

真樹と緩奈は慧に自覚が無い事までは気付いていない。だが、悩みながらも足掻く姿にそれぞれ、同調と尊敬を抱いている。

「そつか・・・俺、悩んでいたのか・・・現状に・・・」

そして、慧は一言、感謝の言葉を贈った。

「ありがとう！」

その顔は慧には珍しく、満面の笑みだった。それを間近で見た美夜は

「~~~~~／／／／／」

（その顔は反則でしょ！）

顔を真っ赤にして、目を逸らした。

しかし、慧は一つ言わなかった事がある。それは、

（あいつを黒姫を攫ったのが、『六魔天』の大アルカナ『死神』と、『神の使途』の一人『セラフィエル』だと言う事は、まだ美夜には話せないな。危険過ぎる・・・）

この事を知っているのは、慧意外では晟と白河だけ。あの二人が手を組んでいた事実と実験は表にだす訳にはいかない。『六魔天』

が曲がりなりにも築いた秩序が崩壊する恐れがあるからだ。

そして、慧は知らない。その時の、自身が使用した魔法を・・・それは、闇ではなかったのだ。

第十一話 消滅の抱擁（前書き）

完全に変更しました。

第十一話 消滅の抱擁

「……貴様ら、一体何者だ？」

「それはごつちの台詞だつてゝの。人の使い魔、傷つけといて、ただで済むと思つていいのか？」

「それと、あなたがその手に持っている少女は、家の客人なのよね。帰して貰えるかしら？」

慧と美夜は今、黒ずくめの男と対峙している。側には傷つき、倒れている銀。そして、目の前の黒ずくめの肩にはヘレンが担がれている。

どうしてこの様な事になったのか、それは時間を遡る必要がある。

銀は慧に言われ、自宅へ先に戻ってきた。最初はヘレンの面倒を見てくれという慧からのお願いだったが、帰宅途中、慧からの念話で、ヘレンが鍵守の一人だという事を聞き、少し早めに戻ってきたのだ。ヘレンが鍵守の一人なら、ダリウスに命の狙われる可能性があるからだ。そして、その心配は残念な事に当たってしまったのであった。

「ただいま！ヘレン、います……か!？」

銀が帰宅し、リビングに入ると同時に「水の弾」ウォーター・バレットが襲いかかって来た。それを部屋に飛び込む事で避ける。

「『氷の爪』!」アイス・クロウ

銀は『氷の爪』を展開すると、周囲を見渡す。ソファは切り裂かれ、壁には幾つもの穴。窓ガラスは割れ、テレビや食器棚は倒れ、食器や木片は散乱している。

「・・・そこ！」

『氷の爪』を投げ放つ。すると、金属同士がぶつかる様な音と共に、弾き落とされた。

「ほう、私の気配に気付くか・・・」

出てきたのは黒づくめの男が一人。その肩にはヘレンが抱えられていた。

「黒づくめ・・・あなたは『影』の一人ですか？」

「ほう、私達を知っているのか？これは凄い。本来なら、君を生かしておく事はしないのだが、今は優先する事があるので・・・失礼する。『アクア・コルムナ水柱』！」

男が叫ぶと水の柱が吹き出し、男の姿を隠す。

「『世界よ、凍れ！凍結の世界』！」
ゲリドゥス・ムンドゥス

銀はすぐさま水を凍結し、砕く。部屋には気配がない。窓から見ると、ヘレンを担ぐ男の背が見えた。屋上から屋上へ飛び移りながら逃げている。小学生位の女の子とはいえ、人一人担いでいながら中々早い。しかし・・・

「追いつけない速度ではありません！」

銀はすぐさま狼の姿に戻り、加速する。銀は元々狼のため、こちらの姿の方が早く動けるのだ。

「ほう、使い魔だったか……しかも……早い！」

男は逃げきれない事を悟ったのか、人気のない屋上で足を止め、ヘレンを降ろす。調度、銀が追いついたところだった。

『何故、その少女を攫うのですか？』

銀は止水の周りを、円を描くように動きながら問う。

「答える必要はないと思うが？」

止水は銀から視線を外さず、答える。互いに何時でも攻撃できる様に魔法を展開し始めている。

『なら、当てて見せましようか？その少女が『鍵守』の一人だからでしょう？そして、殺さないのはその少女を囮にして、他の『鍵守』をおびき出すか、若しくは、『パンドラの箱』を解錠する時、人質にして邪魔されない様にするため……違いますか？』

「ククク……そこまで読まれては仕方がない……死んでもらうー！」

男……止水は『水蛇』アクア・サーペントを銀に向けて放つ。10mを越えるだろ
う水の蛇が2匹、銀に襲いかかる。しかし、銀はその蛇を避け、高
速で止水へ接近し、『氷の爪』で一閃。切り裂かれた止水は水の塊

となつて崩れた。

『っ！これは！』

「『水分身……』」

その隙を突き、止水はいつの間にか抜いていた刀で銀に切りつける。銀はその攻撃にかろうじて反応し、『氷の爪』で受けるが、弾き飛ばされる。

『くう……』

屋上の柵に、背中を打ちつけるが、直ぐにその場から飛び退く。そこに『水蛇』が突撃しきていた。『水蛇』は柵を喰い千切り、再び襲ってくる。反対側からはもう一匹の『水蛇』そして、正面には止水が待ち構えている。

『……凍結の世界！』

銀は片方の『水蛇』を凍らせると、その背に飛び乗り、駆ける。凍っていない方の『水蛇』が凍った蛇を砕きながら突撃してくる。続いて、その背を飛び、上空から真下に向かつて『氷の息』アイス・ブレスを放出し、もう片方も凍らせる。さらに続けて止水へ『氷の爪』を投げようつとするが、視界から消えていた。

『どじこーっ！』

「上だ！」

銀の更に上空、そこから多数の『水の弾』が撃たれる。その弾を

『氷の爪』で捌こうとするが、数が多い。

『きゃうー!』

捌き切れず、直撃を喰らってしまう。水の弾は止むことなく降り注ぎ、屋上の床に幾つも穴があき、やっと止まった。

「……他愛もない……死んだか？」

止水は生死を確認するため、近づいて行く。

『誰が!』

銀が飛びかかる。が、その止水も『水分身』だった。

「残念だったな。」

そして一閃。刀が振り下ろされる。

「なっ!?!」

しかし、その銀は『氷の残像』により作られた銀だった。

『……『氷の爪』』

「くっ!」

そして、背後からの銀の攻撃に片腕を切り裂かれ、止水は直ぐに『水の弾』で弾幕を張り、距離を取る。

「……まさか、私が謀られるとは……やるな、氷の狼……」
『……………』

銀は言葉を返さず、考える。相手の方が自分より数段上手だ。今のは相手が油断していたから当てられたのであり、実力ではない事は重々承知だ。よって、このまま戦い続けるのは得策ではない。幸い自分の方が、ヘレンにより近い……なら

『『氷の残像』！』

銀は氷で自分の姿を作り、止水の視界を埋め尽くす様に飛びかからせる。その内に、ヘレンの下へ行き、人型へ戻ると、ヘレンを抱え、逃走しようとする。止水はまだ残像の相手をしており、うまく行く。そう思った時

「じほっ！」

ヘレンがどこから取り出したのか解らないが、刀で銀を貫いた。

「ゴホッ！ゴホッ！カハッ！」

銀はお腹を貫かれ、地に伏せる。そんな銀から、刀を抜くヘレン。その表情は冷酷な微笑みを浮かべていた。

「な、なんで……」

「ふふ、残念だったな。と、いったらどう？」

「な！まさか！」

ヘレンの口から放たれた声はヘレンのものではなく、野太い男、止水のものであった。足止めしているはずの止水に視線を送ると、その止水は水となって消えた。そして、ヘレンはその姿を止水に変えていた。

「理解したか？最初から君が相手にしていたのは俺の分身だったのだよ？本物はあそこだ。」

止水が指を指した方を見ると、縄で縛られ、猿轡を啜えさせられているヘレンが屋上にある給水塔の影に寝かされていた。

「使い魔にしては、強かったが、ここでさようならだ。」

止水は刀を振り降ろす。しかし、その刃は『闇の刀』に阻まれた。

「何!?!」

『闇の刀』の持ち主は、止水を弾き飛ばす。止水は吹き飛びながら体勢を立て直し『水蛇』を2匹放つ。しかし、鞭の様に伸びた『闇の刀』にまとめて切り裂かれた。

止水は、これは不利と判断し、すぐさまヘレンを担ぎ、逃げようとする。しかし、本能が危険と判断し、踏み出そうとした足を急いで退く。すると、すぐ目の前を半透明の球体が通り過ぎ、給水塔を水ごと消滅させた。

止水の背後と右側面からの殺気に、下手に動けずにいた。

「……貴様ら、一体何者だ?」

「それはこっちの台詞だつて。人の使い魔傷つけといて、ただ済むと思っっているのか？」

少年は銀の状態を確認し、命に別状は無い事を確認してから止水に『闇の刀』を突き出す。

「それと、あなたがその手に持っている少女は、家の客人なのよね。帰して貰えるかしら？」

少女は腕を組んで、そう言う。

少年と少女・・・慧と美夜が追いついて来たのだ。

二人は、未来の要望どおり、ヘレンを未来に合わせようとした。しかし、家に連絡しても誰も電話にでない。不審に思った二人が急いで戻ると部屋は荒れ果てていた。そこで、何者かに襲われたのは明白だ。銀も居ないことから、連れ去られたか犯人を追っている。判断し、慧が銀の存在を感じ取り追って来たという訳だ。これは使い魔契約の影響で、契約したもの同士は離れていても互いを感じ取ることができる。

「で？どうする？大人しく投降するなら、半殺しで済ませるが、抵抗するなら生きている事を後悔指せるぞ？」

慧は相当切れていた。理由は一つ。銀を傷つけられたからだ。美夜が許せば殺していただろう。しかし、相手から情報を得る絶好の機会・・・そのため、美夜が止めたのだ。それが無ければ美夜も殺す気でいただろう。慧には劣るがかなりの殺気を放っている。

「私としては、どちらとも遠慮したい・・・な！」

止水はいきなり、ヘレンを屋上から落とす。

「くそが！」

「逃がさない！」

慧は止水に向かい突進し、止水をどかせ、そのまま屋上から飛び降りる。美夜は、止水を逃がさないため、『無の弾丸』を放つが、『水の弾』に防がれる。『無の弾丸』は触れたものを消滅させるが、一つを消すのに一つの弾丸を使用するため、防がれてしまう。

それを確認すると、美夜はそのまま水の弾の中に突進する。

「馬鹿か！」

水の弾が降り注ぐ中に自ら飛び込んだのだ。ただで済むはずがない。それが、油断だった。

「誰が馬鹿よ！」

美夜は水の弾の中を突き破り、止水の腕にギリギリ触れる。もちろん止水の実態だ。分身を用意する暇も隙もなかったのだから・・・

「何を！？くあああ！」

そして、美夜が触れた部分が、消滅した。止水はあまりの痛みに叫び声を上げながら、膝を着く。

「『消滅の抱擁』・・・触れたものを消滅させる死の抱擁よ。魔力の消費が激しいのが難点だけだね。」

この魔法を展開する事で、水の弾を全て消滅させたのだ。そして、止水の腕までも消滅させた。しかし、この魔法は美夜が言ったものともう一つ弱点がある。それは、『身体強化』など他の魔法が使用出来ないことだ。

「ぐううう・・・これは、失敗・・・したな・・・。」

「観念しなさい・・・これ以上は命の保証はしないわよ?。」

美夜は止水との距離を縮めようとする。しかし、それは適わなかった。

「止水様!。」

止水と同様、黒ずくめの男が間に割って入ってきたからだ。

「お前達、何故出てきた! 奴らが出てくるまで待機していると・・・」

「そのためにあなたが死んでしまつては意味がありません。ここは私達が時間を稼ぎます。退いてください。」

割って入って来た男の他にも何人もの黒ずくめ達が次々と現れる。

「くっ・・・後は頼んだ!。」

止水は少しためらいを見せるが、後を男達に託し退く。

「待ちなさい！」

「それはこちらの台詞だ！」

しかし、美夜は止水を止めようとするが、男達が間に入り、止める事ができなかった。

「お前達、時間を稼ぐぞ！」

「おう！」

「はあ、まったく・・・馬鹿な人達ね・・・」

そして、まず、美夜の近くにいた者達が、美夜に触れようとしてその腕を消滅させられた。それを見た周囲の者達は、魔法を集中砲火する。しかし、その中から、無傷で美夜は飛びだし、近くにいた者の足に触れ、消滅させる。それはもう、一方的なものであった。黒ずくめ達の魔法は美夜に届く前に消滅し、刀や銃弾さえも効かない。その間に距離を詰められ、触れられ、体の一部を消滅させられる。

後に残ったのは死屍累々・・・その中に血一つ着かず、立ち尽くす少女はあまりにも異様だった。

「・・・・・・・・」

美夜は目の前にいる男に近づいて行く。

「ひっ！ば、化け物！」

その男の目には既に恐怖しか浮かんでおらず、美夜はそんな男を冷たく見降ろす。

「・・・・・・・・」

「や、やめ・・・」

美夜はゆっくり男に触れようとする。男は既に足を失っており動く事さえできない。そして、今まさに、美夜が男に触れようとしたその時

「美夜！やめろ！」

そう言っつて、慧が美夜を抱きしめた。『消滅の抱擁』を展開しているはずの美夜をだ。慧の体は『闇』の衣で包まれており、それが『消滅の抱擁』を防いでいるようだ。そして、慧に抱きしめられた美夜は、意識を戻す。

「け・・・い？」

「ああ、俺だ。もう、戦意は感じられない。これ以上やる必要はない。」

慧は屋上から落ちるヘレンに追いついた後、ヘレンを抱え、壁を蹴り、再び屋上へ戻って来た。すると、美夜が留めを指そうとしているところだったため、ヘレンを降ろし、急いで止めに入ったのであった。

「あ・・・うん。」

美夜は『消滅の抱擁』を解除すると、大人しく慧に抱かれる。その体は小刻みに震え得ている。

「ごめん・・・私・・・」

「いいさ。銀のために怒ってくれたんだろ？俺は嬉しいよ？」

美夜は本当に切れていたのだ。銀を家族を傷つけられて・・・しかし、まだ意識は保っていた。止水を捕らえるという目的があったから。だが、止水を逃してしまった。そしてその原因が目の前にいる邪魔もの達・・・その結果、美夜のタガが外れてしまったのだ。

「うん・・・」

美夜は再度、慧を強く抱きしめる。

「さて、それじゃあ、こいつらに「ごうも」・・・じゃない。質問するか・・・」

美夜が落ち着いてきた事を感じた慧はそう言い、周囲で呻いている者達に聞こうとする。

しかし、それは適わなかった。何故なら・・・

「悪いわね。そいつらを生かしておくわけにはいかないのよ」

声と共に、光の柱が慧と美夜の周囲に立ち上り、男達は光に呑まれ消えて行った。

「・・・あなたは？」

光が収まると一人の女性がヘレンの側に立っていた。

「初めまして。ヘレンが世話になった様ね。私はエル。鍵守の一人よ。」

「俺は、慧、こっちは美夜。そっちで倒れているのが銀だ。」

慧は油断なく様子をつかがい自己紹介をする。エルはその間にヘレンの縄と猿轡をはずそうとしている。

「何故、さっきの男達を殺した？なにか情報を持っていたかも知れないだろ？」

「うん・・・それは無いと思うわよ？下っ端だったから・・・っと、やっと取れた。」

エルはヘレンの縄と猿轡を外すと、ヘレンを起こそうとする。その間、慧達も銀の側に行き、簡単な手当てをする。

「ん・・・エ・・・ル？」

「そ、全く、探したわよ。さ、帰りましょう？」

しばらくし、ヘレンが目を覚ますとエルはヘレンへ手を差し出す。しかし、ヘレンはその手を取るのをためらう。銀の手当てを終え、その姿を眺めていた慧達も顔を見合わせる。

「どうしたの？ヘレン？」

その問いに、ヘレンは要約顔を上げ、エルを見る。その瞳は不安で揺れている。

「エルは・・・私の事嫌いに・・・なってない？」

「え？何でそんな事を聞くの？」

エルは予想もしなかった言葉に驚く。

「だって・・・私・・・役に立てなかった・・・箱も鍵も・・・取り戻せなかった・・・よね？」

ヘレンは役に立てなかったため、エルに嫌われたと想っていた。そのため、直ぐに手を取れなかったのだ。そんなヘレンをエルは

「~~~~可愛い！」

「きゃっ！」

思いつきり抱きしめた。

「まったく、可愛いわね、ヘレンは。そんな事心配していたの？」

「だって・・・エルに嫌われたら・・・私・・・」

そう言い、泣き始めるヘレン。その頭を実の娘を撫でる様にするエル。

「なに言っているのよ。ヘレンを私が嫌いになるはずが無いじゃない

い。例えヘレンに魔法の才能が無くたって、引き取っていたし、そもそも、本当はこんな危険なことさせたくなかったのよ？だから役に立てるとか立てないとか、気にしなくて良いのよ。」

そして、ヘレンはエルの胸の中で泣き始める。

「ん……主？」

「お、銀。気付いたか？」

その泣き声のせいか、銀が目を覚ました。銀はどうなったか聞いて来たので簡単に状況を説明した。

「さて、そろそろいいか？」

ヘレンが泣きやんで来たころ、慧はエルに声をかけた。

「ええ、待たせて悪かったわね。」

エルはヘレンを離し、慧達に向き直る。

「いや、構わない。あんたも鍵守の一人か？」

「ええ、鍵守達のまとめ役をやっているわ。あなた達は？」

「俺達は天城ヶ丘学院の生徒だ。『真の未来』から『パンドラの箱』が盗品だと聞いてな。その調査をしていたんだ。あんたらが、管理者なんだろ？話、聞かせて貰って良いか？」

その言葉にエルは悩む。その言葉が嘘という事もある。慎重に行

かなければなるまい。そのため、拒否しようとするが、ヘレンに引
つ張られたため、そちらを向く。

「・・・あの人たち・・・私を助けてくれた。御飯も・・・くれた。
さつきも・・・あの子、あんな怪我をしてまで・・・私を助けよう
としてくれた・・・だから・・・」

そのヘレンの言葉に、エルは、そつかと、言い、ヘレンの頭を一
撫でする。そして、再度、慧達に向き直る。

「分かったわ。でもここじゃなんだから、私達のアジトに案内する
わ。その子の怪我もちゃんと治療した方がいいでしょう?」

「ああ、頼む。」

こうして、慧達は屋上を後にした・・・

なお、このビルの管理者は、後に屋上のこの惨状をみて、涙を流
したと言っ

第十二話 鍵守と慧く説得く

「ピユラ！この子の治療をお願い！シオドスはお茶を用意して。」

「ちょっと待て、エル。帰ってきていきなりなんだ？ヘレンは見つかって何よりだが、後ろの3人は誰だ？」

エルはアジトに戻るなりピユラとシオドスに指示を出すのが、部外者が一緒な事に気付いたカリオが待ったをかける。

「この子達？私達の協力者になる・・・予定の子達よ。」

「予定って・・・あんな・・・」

カリオはエルの言動に呆れる。未確定な人物達をのこのことアジトへ連れてきたのだ。呆れる以外他にない。

「いいじゃねくか、別に。敵なら殺せば良いんだからな。」

ヘルメは敵対すればすぐさま殺すと、殺気を放つ。そんな中、ヘレンは一人いない事に気付き、エルに問う。

「・・・エル・・・メウスは？」

その言葉に、ピユラは動揺し、銀の治療のために出してきていた薬箱を落とし、シオドスは動きを止める。カリオは嘆息し、ヘルメは俯き、拳を握る。

「・・・メウスは・・・死んだわ・・・」

「・・・え・・・？」

ヘレンは何を言われたのか、分からなかった。いや、分かりはしたが、信じたくなかった。

「雷蔵とかいう『影』の一員に殺されたの。」

エルは構わず話を続け、ただ、事実を告げる。これは、誤魔化しの効かない、避けては通れない事だからだ。

「・・・私の・・・せい？」

ヘレンは自分が戦線から離脱したせいと、思った。でなければ、あれだけの力を持った老人が殺される訳ないと思ったからだ。自分が離脱したせいで、戦力のバランスが崩れたのか、それがメウスに隙を作らせたのかわ定かではないが、そうでなければ考えられなかったのであった。

「それはちが「ちがう!」・・・ヘルメ・・・」

エルの言葉を遮り、ヘルメが叫ぶ。

「俺が、御老功の忠告を無視して、戦い続けたからだ。それで・・・逃げるチャンス逃して・・・俺を逃がして・・・御老功は・・・」

ヘルメは再び俯き、拳を握り締める。その手には既に包帯が巻かれてあり、奥の壁には幾つもの罅が入っていた。その様子から、ヘレンは察し

「そう・・・」

とだけ呟いた。そして、沈黙が流れる。

「あー、なんか問題あるなら出直すが？」

慧達は気ますぐなり、一度帰ろうかと聞く。

「いえ、気にしないでください。それより、お茶を入れましたのでどうぞ飲んでください。」

シオドスは慧達に椅子をすすめ、テーブルの上にお茶を出す。

「え、えくと、君はこっちに、き、来てね。治療するから。」

ピュラは銀の治療をするため、着いて来る様に促す。

銀は慧に視線で問い、慧はそれに頷いて答える。それだけで伝わったのか、銀はピュラに着いて行き、この部屋から出て行く。銀はこれでも女の子だ。別室で治療するのは、気を使ってくれたのだから。

「エル、それで、この少年達が協力者の予定というのはどういうことですか？」

シオドスは慧と美夜にお茶つけを出し、エルに説明を催促する。その言葉を聞き、エルは気を取り直して話始める。

「この子達は『魔法協会』の『真の未来』が理事長を務める天城ヶ

丘学園の生徒達よ。どうやら、『真の未来』は『パンドラの箱』が盗品だって気付いた見たいなの。それで、この子達は話によっては協力してくれるっていうのよ。」

「『真の未来』は協力してくれないのか？」

エルの説明のためにカリオが問う。その問いに答えたのは慧だった。

「いや、『六魔天』同士だと、いろいろ手続きが面倒らしくてな。下手に手を出せば組織間の戦争になってしまつらしいから、展覧会には間に合わないらしい。」

その言葉にあからさまに落胆して見せるカリオ、シオドス。ヘルメは馬鹿にした様に鼻で笑う。

「はっ、たかだか学生に一体何が出来るって？」

だが、その言葉を否定したのは意外な事にエルだった。

「あら、わからないわよ。少なくとも『影』の下っ端が、彼女、ミヤ相手に束になって掛かってても、手も足も出なかったのだから。」

その言葉にカリオとシオドスは関心する。いくら下っ端だからといって、そこらの学生でどうこう出来るものではないからだ。しかし、ヘリオは納得しない。

「その女が例え使えるとしても、そっちのガキはどうなんだ？」

「さあ、私が見たのは、ミヤをケイが抑えているところだったから、

実際は解らないわ。」

慧は話の雲行きが怪しくなってきたので、割って入る事にした。

「あゝ、あのさ、別に俺達も手伝わせてくれって言っている訳じゃないんだが？あんたらが奪われた『パンドラの箱』が本物かどうか、その危険性しだいで、協力するかしないかを決めようと思っていたからな。お前らの様な管理者がいるから本物と仮定して動いているだけだぞ？」

慧達はそもそも、協力する義理などない。ヘレンと関わり、鍵守の存在を知り、もし『箱』が本物で、本当に災厄が溢れたとしたら不味いから、最悪を想定して動いているだけだ。大した事がなければ参加する様な真似などしない。

「まあ、未来さんはあの『遺物』が盗品である以上、『七大法典』の一人として、お前らの下へ戻すだろうがな。その辺をはっきりさせるために、ヘレンを未来さんの下へ連れてくるよう言われていたんだよ。調査するのは、そういうことだ。」

つまり、慧達は『箱』の危険性次第で協力するか否かを決めようとしていた。それとは別に、未来は盗品かどうかをはっきりさせたかったため、鍵守の一人であるヘレンに確認したかった。そこらへんを纏めて、慧は『調査』と言い、場合によっては協力するとこのアジトに来るまでの間に言っていたのだ。

「つまり、協力するか否かは、『箱』の危険性次第ってこと？」

「ああ、あくまで俺達は、だ。未来さんは盗品か否かはっきりすればちゃんと動いてくれるさ。まあ、展覧会には間に合わないけどな。」

「
慧はそこまで言うと、シオドスが淹れたお茶で口を潤す。美夜は会話を慧に任せお茶づけをつまんでいる。」

「なめた事を言いやがる・・・エル！こいつらの協力なんかいらねえだろ！お前ら、命まではとらねえでやるからとつとと帰れ！」

ヘルメはこれで話は終わりと打ち切ろうとするが、エルが待ったをかける。

「待ちなさい。ヘルメ。ケイ、ミヤ、あなた達は、『箱』の危険性が解れば手伝ってくれるのね？」

「ああ。」「ええ。」

「そう・・・分かったわ。教えてあげる。」

「エル！」

ヘルメは声を荒げる。他の者も、声は出さないが否定的である。ヘレンも、助けられくれたとはいえ、実際にどれくらいの力を持っているか分からないため、賛成しない。また、自分を助けてくれた恩人が、メウスの様に死ぬのが嫌だという気持ちもある。

「だけど、こっちも遊びでやっている訳じゃないのよ。悪いけど、あなたの力を見せてくれるかしら？」

エルはそう言い、慧に視線を向ける。

「・・・俺だけ？」

「ええ、ミヤの実力はあの状況を見ればわかるし、ギンは負傷している。あなた以外に試せて、その意味がある子、いないじゃない？」

その言葉に、結局こうなるのかと、盛大に溜息を吐き、重い腰を上げる。

「で？方法は？やるなら、さっさとやろうぜ？」

「そうね・・・ヘルメ、あなたが相手して。方法は・・・そうね、ヘルメを認めさせる事。それができたら、『箱』について、私達が知っている事を教えてあげる。」

「わかった。それで良い。」

慧は了承し、何処でやるのか聞くと、この近くの廃工場に結界を張って行くそうだ。

「慧？大丈夫？」

「ん？大丈夫だよ。心配するな。」

慧は美夜の頭を安心するよう撫でる。

「さて、それじゃあ、準備はいいかしら？」

エルは慧とヘルメに確認を取る。二人は問題ないと、それぞれの

方法で応える。周囲には鍵守達と、美夜、治療を終えた銀がいる。

銀の傷は応急処置が良かったため、傷後も残らないだろうとの事だ。しかし、それだけではなく、ピュラの治癒魔法の腕も大いに関係する。ピュラの腕前はプロの治癒専門の魔法使いにも劣らない腕だったのだ。

「それじゃあ、始め！」

「死ね！」

ヘルメは銃口を慧へ向け、引き金を引く。そこから出てきたのは風の弾丸。その弾丸を慧は軽く避ける。どんなに早かろうと、軌道が直線なうえ、引き金を引くという動作がある以上、タイミングは簡単に掴める。まあ、慧の場合は普通に風の弾丸を目視出来ているのだが……

「次！」

続いて、風の弾丸を散弾にして撃つ。慧はそれを、『闇』を盾の様に拡げ、防ぐ。その隙に、ヘルメは慧へと接近し、広がる『闇』を避け、至近距離から引き金を引く。その銃口からは、風の刃が無数に放たれる。しかし、その風の刃を慧の影から出てきた闇の腕、『カリゴ・ブラチウム闇に引き込む腕』が防ぐ。正確には、『属性武装』でその様な事を行っているだけだが。

そして、その腕は次に刃となり、ヘルメを襲う。

「何!？」

ヘルメは驚き、距離を取る。なぜなら、全くノータイムで違う魔法の形を取ったのだ。それは、周囲のもの達も一緒だ。エルやヘレン、シオドスはその魔法の形が月影の魔法に似ていたからという事もあるのだが……

「何だそれは!？」

ヘルメは叫ぶ。ここまで早く術式を変化させるものに会ったことがなかったからだ。

「ん? 『闇』の魔法だよ。それ以外にないだろ？」

慧はそう言うと、次に、闇の刀をその手に作り、ヘルメに接近する。

「早い!」

シオドスは声を上げる。『属性武装』により強化した脚力は、かなりの者で驚かせたのだ。そして、ヘルメに接近する。

「くっ!」

ヘルメはその斬撃や、拳、蹴りなどの打撃を交えた攻撃を何とか避けるが、次々と繰り出される攻撃を次第に避けきれず、攻撃を喰らう様になる。ヘルメは接近戦より、遠距離からの射撃が得意なため、慧の戦闘スタイルとは相性が悪いのだ。

「ちっ! 吹き飛ばへ!」

ヘルメはいい加減避け切れないと判断し、至近距離で『突風』を

使用する。至近距離で使用したため、慧とは反対側に自らも吹き飛ばす形になった。しかし、十分な距離を開ける事が出来た。

「喰らえ！ 『暴風狂竜』！」
ウインドストーム・デンジャー・ドラゴン

そして、上級魔法の『暴風狂竜』を使用した。その風の竜は通常の『風竜』とは異なり、その体の中と外は暴風の様荒れ狂い、風の向きがランダムに変る。しかも、その風は全て真空の刃で、それが竜を模り、暴れ狂う。なお、通常の『風竜』は竜巻が竜を模っている。その回転は一方向だ。回転が一方向だと対策が立てられやすかったりする。

『暴風狂竜』が慧に襲いかかる。しかし、慧は避けようとしな

「慧！」「主！」

美夜と銀が叫ぶ。

『暴風狂竜』の飲み込まれる・・・そう、思った瞬間。

「『黒弦』」
こくげん

闇の糸が、『暴風狂竜』を呑み込んだのであった。そして、『暴風狂竜』を撃った事で、硬直しているヘルメの喉元へ『闇の刀』を突き付ける。

「・・・俺の負けだ・・・認めてやる・・・」

ヘレンは負けを認め、慧を認めたのであった。

勝負が終わり、その光景を見ていた周囲は慧が何をしたのか分からず、質問する。

「ケイ、一体あなた何をしたの？何故『暴風狂竜』をかき消す事ができたの？」

「それは俺も知りたい。何だあの魔法は？」

エルとヘルメが聞いてくる。正直手の内を明かすのは嫌だが、ここで渋って『箱』について聞けなくなるのは避けたいため、教えることにした。

「あれは『闇の糸』だ。それを竜に向かって放出しただけだ。あれは風の竜だからな。後は勝手に糸を絡み取ってくれる。複雑に絡み合った闇がああ風の魔法に供給されている『魔力』や構成されている『術式』を阻害。後は、その闇で呑み込むだけ。それが『黒弦』だ。」

周囲は慧の魔法の技術と戦闘力に素直に関心する。

しかし、そんな中、ヘレンは首を傾げる。何故なら、自分の知る限りその様な魔法は『闇』属性の魔法に無かったからだ。何より、『侵食』以外の干渉を出来るのか？それとも自分の知らない『侵食』の応用なのか・・・

そして、もう一人、エルもケイの魔法にいや、属性に疑問を覚える。

「あれが『闇』？・・・そんな訳がない。あれは、闇にしては・・・もっと純粹な・・・」

「エル？・・・どうしたの？」

同じく悩んでいたヘレンが先に頭を切り替える。すると、エルも何か考え事をしていたようなので声をかける。すると、以外に大きな反応を見せる。それほど深い思考に入っていたのだろう。エルが謝ると、気にしないでと、頭を撫で、エルも切り替える。

（考えても仕方がないわね。それに、あれは一瞬だったし、見間違いかもしれないしね。）

「さあ、ヘルメも認めた事だし、話をしましょうか？」

そして、『鍵守』達・・・正確には『七鍵の守人』達の話聞く事になった。

第十三話 『パンドラの箱』〜エルの語り〜

「ダリウス様、少しお耳に入れたい事があるのですが、よろしいですか？」

「・・・いきなり現れて、一体何だ？月影」

月影は博物館にあるダリウスの部屋でダリウスが来るのを待っていた。訪ねてくるなどと、事前に連絡が無かったため、内心驚くダリウスであった。部屋の扉を開け、明りをつけると目の前に黒づくめの男がいたのだ。驚くのも無理はないが、表には出さず、自分の椅子に座りながら問う。

「私の部下達が『鍵守』達を搜索していた際、その内の一人である少女を発見し、捕らえようとなりました。」

「ふむ。それで？」

「しかし、邪魔が入り失敗に終わってしまいました。その邪魔というのが、氷属性の魔法を使う銀色の狼と、無属性の魔法を使う少女そして、闇属性の魔法を使う少年と言う事でした。多くの部下が死に、我が片腕である止水も腕を一本、失う事となってしまいました。」

「ふん！たかだか犬一匹と子供二人にやられるとは、無様だな。なんだ？自らの醜態をさらしに来たのか？」

ダリウスは月影を口汚くののしる。ダリウスからしたら、今もま

だ雇っているのは念のためでしかなく、『パンドラの箱』と『鍵』が手元にある以上、この者達を雇っておく必要はないのだ。

「いえ、確かに子供二人と狼一匹にやられたのは不甲斐なく思いますが、今回訪ねた理由は別です。その二人が天城ヶ丘学園の制服を着ていたからです。」

「何……？」

天城ヶ丘学園の生徒……つまり、未来の息がかかったものと言う事だ。何故、学園の生徒が鍵守を守る様な行動を取ったのか、偶然なのか……理由は不明だが、場合によっては未来に『箱』と『鍵』が盗品だとばれてしまっている恐れがある。

「いかがいたしますか？」

「……良い、捨て置け。『箱』と『鍵』は既に私の手元にある。その子供達の目的は知らないが、例え『鍵守』と組んだ所で、展覧会の日までは決して盗めない。専用の『遺物』で封じてある。私でも当日までは開けられないからな。未来に関しても正面切つて干渉は出来ないだろう。するにしても時間がかかる。展覧会には間に合わない。『箱』を解錠してしまえばこちらのものだ。」

全てはそのために準備を進めてきた。開けさえすれば誰も文句は言えなくなるとダリウスは言う。

「……そうですね。わかりました。こちらは念のため『鍵守』の搜索を続けます。ところで、一つ聞きたいのですが、ダリウス様は『パンドラの箱』を開けてどうするおつもりですか？あれは開ければ災厄が溢れるだけの代物です。空ける意味があるのでしょうか？」

「ふむ。そう言えば、話していなかったな・・・まあ、いいだろう。まず、勘違いを一つ正してやろう。あの中に災厄など入っていない。」

「災厄が入っていない？」

月影はその事に驚いて見せる。それは『パンドラの箱』の逸話自体揺るがしかなない事だ。

「いや、正確には入ってはいるのだろう。しかし、それが出てきたところでどうと言う事はない。かつて、『パンドラ』が箱を開けた際、災厄は世界に満ちたのだから。つまり、今の世界は既に災厄を当たり前に捕らえている。だから、今さら『箱』から災厄が出てきたところでどうと言う事は無いのだ。」

そう、かつて神話の通り、『箱』は開けられ、災厄は世界に満ちた。しかし、その後は？希望が残った？じゃあ、災厄はどうなった？答えはそのまま。人は災厄に慣れたのだ。妬みに嫉みに、怒りに悲しみに、怠惰に死、災害に・・・様々な事を体験し、人はそれに慣れてしまった。それらを含んで世界と捕らえてしまっているのだ。ではその前は？おそらく、さほど変りはしない。前後を比べて、後はその当たり前となった災厄、不幸の頻度が増えた程度だろう。

「なら、あなたの目的は？」

「決まっている。その中に残された『希望』だよ。『希望』が希望たるには絶望が必要だ。災厄は『希望』を希望たらしめるために必要な要素でしかない。つまり、その『希望』を手に入れば、災厄が既に満ちているこの世界で常に優位に立てると言う事だ。そして、

その『希望』はそれを起こすだけの力を持っている。その力を手にした者は神と言っても良いだろう。私は、その力が欲しいのだよ。」

つまり、『希望』が希望であるために、災厄は誘発される。つまり、『希望』の力を手にすれば、周囲は勝手に災厄に見舞われ、『希望』の力を手にしたものを崇める形となる。それは神に対する行為と同じだろう。

かなり歪んでいるが、この箱はそう言う物なのだろう。火を手にした人間達が、自分達、神に歯向かわない様に、信仰心を集めるために、神が世界に打ち込んだ楔なのだろう。そして、その代行者が『パンドラ』と言う事だ。

「・・・そうですか・・・話して頂、有難うございます。良く、理解できました。あなたが・・・どれだけ馬鹿なのかということがない！」

「な!?!?・・・ゲツ・・・」

月影は突如、影から触手の様なものを出し、ダリウスを貫いた。

「ゴホッ! な、何を・・・する・・・血迷った・・・か。」

「まさか、そんな訳あるまい。元々貴様を殺すつもりでいたのだよ。まあ、本当は解錠まで待つつもりだったのだが。貴様の馬鹿さ加減にいい加減呆れてしまって、な。まあ、今殺そうが、後で殺そうが、変りは無いがな。」

「な、・・・何?」

「『希望』を手に入れ神になる？馬鹿も休み休み言え、あれはそんな良いものではない。それを理解していない貴様が、あれに不用意に触れられてはこちらの目的が達成できなくなる。何、安心しろ。貴様の死体は有効活用してやる。」

月影はまさかここまでダリウスが理解してないとは思わず、予定を変え、殺す事にしたのだ。もし、その様な馬鹿な考えで中のものに触れられでもしたら月影達の目的を達成できないからだ。

「わ、私を殺せば・・・『箱』と『鍵』を取りだせなく・・・」

「その心配は不要だ。貴様が言ったのだらう？自分でも当日まで開けられないと。それは裏を返せば、その日になりさえすれば誰でも開けられると言う事だ。つまり、貴様は無用だと言う事だよ。さらばだ。」

そして、ダリウスは触手に・・・いや、『鵂』に呑み込まれ、声を上げる事も出来ず、喰われたのであった。

「ふむ・・・腐っても『十杖』と言う事が、中々の魔力だ。さて、では奴の死体を有効活用させてもらうか。」

月影はそう言い、何かの呪文を唱える。すると、『鵂』の体の一部が切り離され見る見る内に人型を取る。その姿は、ダリウスのものであった。

「さて、それでは『ダリウス』君。展覧会の準備をよろしく頼む。」

「ハイ・・・月影さま・・・」

そのダリウスの姿をした何かは月影に向かい、うやうやしく頭を下げるのであった。

「さて、話を聞く用意は良い？では、『パンドラの箱』の物語、始まり始まり〜」

そんな陽気な声と共に、『パンドラの箱』についての話が始まった。

慧達は廃工場からアジトに戻り、約束通り『箱』の危険性について教えて貰うこととなった訳だが、まずは『箱』についての知識からと言う事でエルが話始めたのである。

まあ、エルが話したいだけと言うのもある訳だが・・・

「今より遙か昔、それこそ神話の時代、神は人を創りました。そして、様々な知識や技術を教えました。しかし、火だけは人に与えませんでした。火は神だけの力。人が火を持てば互いに争い合い、それどころか神にさえその火を向けるだろうと思っただけでした。

しかし、人の世界には極寒の土地や季節、更には人の力ではどうしようもない場所もあり、火が無ければ生きていけない者達もいました。それだけでなく、物を作るにも、獲物を調理するにも火は必要でした。

ある時、人の管理を任されていた巨人は神の目を盗み火を人間界へもたらしました。その結果、人は火を手に入れ、巨人は神により殺されてしまいました。

そして、神は火を手に入れた人を恐れました。人は自分達自身を模して作ったもの。そして、火以外の知識や技術はほとんど教えて

いました。神と人の違いは火を使えるか否かだけだったのです。

そこで、神は火を手にした人に罰を与える事にしました。そうする事で、自分達に逆らう気を起こさせないようにするためでした。

そのために用意したのが『パンドラ』という名の女性。その女性は男も女も魅了する美貌を持っていました。家事なども有能で、女性として申し分ない人でした。しかし、この『パンドラ』には欠点がありました。人の世界の常識を理解しておらず、さらに好奇心が強いという困った人格の持ち主だったのです。

神は態と『パンドラ』をその様に創り、そして、一つの箱を与えました。その時、神は言いました。『この箱は、私が良いと言うまで開けてはいけません。この中には私達、神の力が入っているからね。いいかい？私が良いと言うまで決して開けてはいけませんよ？』と・・・好奇心の強い『パンドラ』が開ける様に、態と気にする様に言い含めたのでした。

そして、人の世界に降りた『パンドラ』は直ぐ、一人の男性と恋に落ちます。人の世界に降りた『パンドラ』は常識を知らず、あちらこちらで騒ぎを起こしてしまい、それを治めてくれたのがその男性でした。パンドラは幸せでした。『箱』の事を忘れる位に・・・

しかし、それは神にとって都合が悪い事でした。いつまで待つてもなかなか『箱』を開けようとしないう『パンドラ』に痺れを切らした神は、人の世界に干渉し、『パンドラ』が愛した男とその周囲に影響を与え、困らせる事にしました。

男と『パンドラ』は困り果てました。そして、一つ思い出しました。それは神に良いと言うまで開けてはいけないと言われた『箱』のことでした。神はその中に『神の力』が入っていると聞いていたのです。その力があれば、男を助ける事が出来ると思い、『パンドラ』は言いつけを破り、『箱』を開けました。すると、その箱から飛び出したのは『災厄』でした。」

そこで、エルは一息吐く。

「ここまでが良いかしら？」

「ああ、細かいところは違うが、大体の流れは知っているものと同じだ。」

「そうね、この後は、残されたものは希望でした・・・で、お終りよね？」

その言葉に頷く慧と銀。しかし、エルは首を振りまだ続きがあると言っ。

「希望の解釈は色々あるけど、一般に知られているのはそこまでね。でも、この話には続きがあるのよ。」

そうして、続きを話始める。その話は慧達にとって予想外としか言いようがない話だった。

「確かに『災厄』は世界に満ちました。しかし、それで何かが変わった訳ではありませんでした。何故ならその『災厄』は人にとって、当たり前前の事ばかりだったからです。」

それは、神にも予想外でした。人に罰を与えるはずが、人はそれを当たり前の様に受け入れたからです。本来なら、災厄の中で有一、希望を持つ『パンドラ』が『神の代行者』として、信仰心を集めるそのはずだったのだから・・・

そして、『災厄』が飛び去った後に残されたのは役立たずの『希望』だけでした。パンドラは初めて絶望というものを知りました。これではどうにもならない・・・どうしようもない。絶望した『パ

『パンドラ』はしかし、あるものを見つけました。それは、残された『箱』の中から無数に伸びる黒い光の糸の様なものでした。

『パンドラ』は残された『希望』に聞きました。

「これは何？」

『希望』は答えました

『これは、この箱から溢れた災厄が送って来る人の負の思念。この箱はそれらを集め、私に力として変換してくれるのです。それが強く、多い程、残された私の力となります。』

『パンドラ』はその言葉を聞き、閃きました。なら、自分がその中に入れば莫大な力を得られるのではないか……と……

そして、『パンドラ』はそれを実行しました。中から残された『希望』を追い出し自らが箱の中へと入ったのでした。しかし、その負の思念は人である『パンドラ』には荷が重すぎました。様々な人の負の思念を頭に流された『パンドラ』は壊れました。そして、その力で破壊と殺戮の限りを尽くしました。『パンドラ』がそれを繰り返す度により負の思念は強まり、多くなり『パンドラ』の力となりました。

その光景を目にした神は後悔し、せめてもの償いとして、『箱』を封じる『鍵』を作り、『パンドラ』が愛した男に託しました。狂った『パンドラ』はしかし、その男だけは殺せなかったのです。

そして、『鍵』を託された男は追い出された『希望』と協力し、『パンドラ』に『鍵』をかけました。すると、『パンドラ』の意識は正常に戻りました。その『鍵』は負の思念を遮断する力を持って

いたのです。そして、その鍵は七つに別れました。

男と『希望』は喜びました。『パンドラ』を助ける事ができたのだから・・・しかし、『パンドラ』は既に『箱』と同化しており、負の思念を遮断しているとはいえ、周囲に負の思念を撒く形となっていました。その事に気付いた『パンドラ』は男と『希望』にその七つに別れた鍵で『箱』に鍵をかけて欲しいと頼みました。そうすれば、負の思念をばら撒かずに済むと。

男と『希望』はためらいましたが、他に手はありませんでした。

そして、男は『鍵』を守り、『希望』は『箱』と共に、眠るのでした。

二度と、『箱』が開けられない様に・・・『パンドラ』が安らかな眠りにつき続けられる様に・・・と。

そして、男の子孫は『鍵守』となり、『希望』は『箱』と共に長い眠りにつきましたと、さ。」

「・・・そんな・・・事が・・・」

「グスツ・・・悲しい話です・・・」

美夜と銀はその話を聞きながら涙を流していた。

「・・・なあ、『箱』は持ち出されたんだろ？一緒に眠りについた『希望』はどうしたんだ？」

慧は感傷には浸らず、必要な事を聞こうと、頭を働かせる。もし『希望』がいれば、それは神代の存在のため、心強いと思ったから

だ。

「わからないわ。私達も『希望』とは会った事がないのよ。」

「・・・そうか・・・この事を知る奴は他にはいるのか？」

「いいえ、いないわ。鍵守だけに伝わる真実の話よ。外には出さない様に完全に秘匿されているわ。あなた達も他の人に喋らないでね。それが例え『真の未来』でもね。」

話したところで信じるかは解らないけどねと付け加えるエル。確かにこの話は知られていない事が多いため、信じる者はまずいないだろう。慧達とて、エル達『鍵守』本人から聞かなければ半身半疑だっただろう。エルの話はそれだけ真に迫っていたのだ。

そして、この話を広めないのは『パンドラの箱』の力が本当だという事が広く知られ、狙われない様にするためでもある。

「なら、ダリウスが盗んだのは？」

「まあ、『希望』の力を何かと勘違いしたのでしようね。『箱』を開けると女性が出てくるとは思わないでしょう。まあ、百歩譲ってそこまではいいのよ。問題は『パンドラ』の鍵を開け、反転させる事。負の思念に犯され暴走した『パンドラ』の力はそれこそ神のごとき力よ。正直、止める自身はないわ。だから、表だけ視てくれている事に期待しているわけよ。あっちは多分『パンドラ』を『希望』と勘違いしていそうだからね。」

そう言い、首をすくめるエル。一通り、話を終え、慧は美夜に視線を送る。どうする？と・・・その視線に笑顔で応え頷く。美夜は

慧の表情を見て手伝いたいんだろつなと察した。美夜自身、今の話を聞いた以上、開けさせるわけにはいかないという思いが強い。何より、安らかに眠っている『パンドラ』のためにも……

「話はわかったわ。私達も協力する。一緒に『パンドラの箱』と『鍵』を取り戻しましょう。」

「ええ、こちらこそよろしくお願いするわ。」

そして、握手をし、改めて自己紹介する。

「私はエル属性は『光』、あなた達に助けて貰ったこの子がヘレン、『闇』ね。あつちの坊主がカリオで、『土』の属性。ケイと戦った彼がヘルメ『風』よ。そして、さっきからお茶を入れてくれているのがシオドス、『氷』の属性ね。最後にその、みつ編みの子がピユラ、『火』属性よ。」

「次はこちらね。私は神凧 美夜、無属性よ。こつちが黒澤 慧、『闇』属性。それでこの子が銀、『氷』の属性で、慧の使い魔よ。」

「へ〜無属性だったのね。これは頼もしいわ。」

美夜の属性を聞いて、関心を見せるエル。しかし、美夜はそんな事はない、と首を振る。

「私より慧の方が凄いわよ？なんて言っただってあの『断罪の牙』に所属していたんだから。」

美夜は胸を張って自慢する。普段はこの様な事はしないのだが、どうやらそう言った方が、信頼されると考えたのだろう。慧もそれ

が解っていたから、何も言わない。

「……は!?!?!」

その事に『鍵守』達は目を丸くする。『断罪の牙』と言えば『七刻』の内の一つ。そこに所属していたと言う事はかなりの力を持つと言う事になる。

余談だが、『断罪の牙』は他の組織に比べると人数は少ない。しかし、一人一人が実力者であるのだ。

「んな、馬鹿な……君の様な学生が？」

カリオが代表して、その心情を吐露する。しかし、その言葉を以て外な人物が否定する。それは一緒に驚いていたエルであった。

「いえ……聞いた事があるわ……『王』の称号を持つ三人からその魔法と戦闘技術を教え込まれた少年がいると言う話を……確か、年齢は今だと、丁度一五歳位。黒髪、黒目の日本人で、属性は『闇』だったはず……特徴は一致するわ。まさか、こんなところで噂の『断罪者』に会えるとはね。ヘリオが勝てないはずだわ。」

「なんか、俺の知らない所で変な噂になってそうだな……なんだ? その『断罪者』って?」

その呼び名は慧も聞いた事がないため、問い返す。

「あら? 知らないの? こつちでは結構有名な通り名よ? 法で裁けぬものを裁く『断罪者』……その刃からは誰も逃れられない。目を付けられたら、最後、諦めるしかない……って。」

その事に、顔を赤くする慧。確かにその様な事をやっていた訳だが、人から聞くとまさかここまで恥ずかしいとは思わなかった。

「噂の『断罪者』が偶然とはいえ、こちらの味方に着いてくれるのは心強いわ。よろしくね。それじゃあ・・・今日の所は終わりにしましょう。細かい打ち合わせはまた後日。こちらから連絡するわ。何時までもここにいたら『影』の奴らに見つかるからね。」

エルが話を切り上げ、今日は解散となった。

第十四話 日常、されど問題は続く（主に慧と真樹）

「……いい訳……ある？」

「……そ、それは……」

慧は今、校庭のご真ん中で湊に、正座させられている。

「……無いの？」

「……大変申し訳ありませんでした！」

慧は思い切り土下座する。もの凄く気持ちの良い土下座だ。しかし、湊は許す気はないらしい。

「……許さない。『光の衝撃』」

「ぐはあー！」

慧はその衝撃波を喰らい、吹き飛んで行き、校門にぶつかってやつと止まる。

（何故……こんな事に……）

それは、自業自得としか言いようがない訳だが、慧は今の状況に至るまでの事を思い返す。

「ふあく……眠い……」

「慧、口を手で押さえなさい。見つともないわよ？」

「相変わらずですね、主。」

鍵守達から『パンドラの箱』の真実を聞いた三人は次の日いつも通り登校していた。向こうから接触があるまではいつも通りに過しながら、情報を手に入れ整理していくことにしていた。

なお、未来への報告は今日の放課後にでもするつもりだ。ヘレンを連れて行けないことは昨日電話で話しておいた。その際、詳細は明日話すように言われたからだ。もちろん、『箱』の真実は話す気はない。こんなことで『鍵守』達と争うのはゴメンだからだ。

「ところで美夜、今日はどうする？博物館へ下見にいてみるか？」

「うーん……とりあえず、今日は夢も退院して学校にでてくると思うから、夢にも事情を話しましょう。それに、直接、『パンドラの箱』見ているかも知れないから、何か情報も得られるかもしれないし。」

「なら、大変不本意ですが、葵にも聞いてみては？彼女も依頼を受けたのですよね？」

今回依頼を受けたのは夢と葵、氷に刹那の4人だ。しかし、氷と刹那とはあまり親しくないのです、仕方が無くと言った様に銀は提案する。

「そうだな・・・いや、止めておこう。下手に巻き込む人数を増やすのは得策じゃないし、夢さんに聞ければ十分だろ。」

しかし、慧はそれを否定する。あまり、花咲家の人間を巻き込みたくないという、慧なりの気遣いだったりする。正確には、桔梗と、董に迷惑をかけない様にだが。

「それじゃあ、放課後に生徒会室に集合ね。」

「ああ（はい）。」

そろそろ登校する生徒が増えてきたので、話を切り上げる。

「あ！おに・・・慧先輩！」

「あ！本当だ！け〜い！」

すると、タイミングよく董と緩奈に声を掛けられた。どうやら、二人で登校して来た様だ。慧達は一人が近づいてくるのを待ち、互いに改めて挨拶を交わし、登校する。

「なんだ？珍しいな。二人で登校してくるなんて。」

「うん？それが、私達が登下校へ使う道が途中まで一緒みたいでね、今日はたまたま会ったんだ。ね？董。」

「はい。緩奈さん。」

何気にこの二人、かなり仲が良い。休日も一緒に遊びに行ったりしている位だ。

「あ！そうだ！慧先輩、今度の土曜、空いていますか？」

「今度の土曜？・・・悪い、用事があるんだ。どうしたんだ？」

もうすぐ校門と言うところで董がいきなりそんな事を言って来た。その日は展覧会の日。『パンドラの箱』が解錠される日だ。そのため、慧には既に予定が入っていた。

「あ・・・そうなんだ・・・えつと・・・展覧会のチケットをお母さんから貰ったから、一緒に行ってくれないかなあって、思ったんだけど・・・用事があるなら、しょうがないよね。」

董はもの凄く残念だと、全身を使いあらわしている。その雰囲気、慧も気の毒に思うのだが、しかし、予定がある。そして、それを起こす場に董を態々近づけさせるのも躊躇われるが、下手に行かない様に言っても怪しまれるだけである。

「・・・董、展覧会は土日に行われるわよね？そのチケットは土曜しか使えないの？」

「え？ち、違います。日曜も使えますが・・・」

「なら、日曜でもいいんじゃない？『パンドラの箱』の解錠は見る事ができないけどな。」

その美夜の言葉に、董はハツとした表情になり、慧に視線を送る。その視線・・・と、いつか期待に満ちた表情を見た慧は苦笑しながら、董の頭を撫で、了承する。すると、董は恥ずかしそうに俯き、しかし、笑みを浮かべ喜ぶのであった。

それから、慧が一頻り董の頭を撫でた後、5人は校門をくぐり、校舎へ向かおうとする。

「……待っていた……黒澤 慧……」

しかし、その前に夜月 湊が待ち構えていた。

「あら、おはよう。湊。慧がどうかしたの？」

「うん……おはよう、美夜……それと……後輩諸君。」

美夜には普通に挨拶し、他の者はまとめて終わらせた。

「さて……慧、何故私が朝からあなたを待っていたか……わかる？」

その言葉に慧は首を傾げる。

（湊との関わりは『パンドラの箱』の研究の手伝いし……か……）

「……あ……」

それは、気付く機会はいくらでもあった。未来との会話。『パンドラの箱』。展覧会。キーワードはいくらでもあった。自分自身発言していた。しかし、完全に忘れていた。

「わかった？……昨日、どうして……こなかったの？研究はまだ、終わってない……」

湊は大分御立腹の様だ。約束をすっぱかされたのだから仕方がない。無表情だが、雰囲気に分かる。凄く、怒っていると。

「そこに正座……」

「……はい……」

慧は、素直に校庭に正座する。全面的に自分が悪い以上、何も言えない。いくら、ヘレンや『パンドラの箱』の件があったとして、それは湊に関係ない。そのため、ここは大人しく従うしかない。

「ちよ、ちよっと、湊？待ちなさい。昨日は、私が無理言って、慧付き合わせたのよ。だから……」

「……だとしても、事前に連絡を入れる事はできなかった。それさえもしなかった。」

しかし、それは湊にとって逆効果だったらしい。魔力が段々上がって行く。

「……いい訳……ある？」

「……そ、それは……」

問われた慧はしかし、何も言えない。

「……無いの？」

「……大変申し訳ありませんでした！」

慧は思い切り土下座する。それしかできなかったのだ。それは、もの凄く気持ちの良い土下座だが、湊は許す気はないらしい。

「……許さない。『光の衝撃』」

「ぐはあ！」

慧はその衝撃波を喰らい、吹き飛んで行き、校門にぶつかってやっとなまる。

「慧（主）（お兄ちゃん）！」

慧はその一撃を全く避ける気も、防ぐ気もなかったため、まともに衝撃を受け、気絶した。いや、衝撃自体は受け流そうとしていた。しかし、湊が『光』属性の魔法を使った事に思わず動揺してしまい、受け流せなかったのだ。

薄れゆく意識の中、思う。

（何で、『闇』属性のはずの湊が『光』の属性……を……）

「さて、それじゃあ、確認を……」

「……何を確認しようとしているんですか？ミレア先生？」

「え〜と……今の若い子の大きさを……」

「どこの大きさだ！」

「あら、私に言わせる気？」

慧が目を覚ますと、見知らぬ天井・・・もとい、医務室のベットの上だった。そして、ふと視線を降ろすと、ミアが慧のズボンを脱がそうとしているところだったのであった。

恐ろしい事に、その様な事をされているのに、視認するまで、全く分からなかった慧であった。

「まあ、冗談はここまでにして・・・」

「冗談？」

「・・・冗談よ。で、慧君？あなたはどこにしているのか理解している？」

「はい。湊の魔法の直撃を受けて気絶したんですよね？」

視線を逸らしながらそんな事を言うミアに、些か警戒しながらズボンを履き直し答える。

「ええ、その通りよ。異常はない？一応、一通り確認したけれど、気持ち悪いとか、吐き気とかは？」

「いえ、ないですが・・・ところで、確認って？」

慧は聞き捨てならない台詞を聞いた気がしたので問い返す。

「それは、もちろん・・・ふふ／＼／＼」

「・・・・・・・・」

両手を頬に当て、顔を赤らめる。そんな意味深な態度をとるミレアに慧は聞かない方がいい気がした慧は早々に立ち去ろうとするが、まあ、待ちなさいと止められる。

「さて、冗談はここまでにして、少し真面目な話をしましょうか。」

「はあ・・・」

慧はこれまでの雰囲気から一変し、真面目になるミレアに胡散臭さを感じながらも、従う。こんなでも、真樹がフリードに襲われ負傷した時、治癒魔法で治療した人物なのだ。病院では簡単な後遺症の確認などだけですんでいた。まあ、一応入院はしていたのだが。正直その必要はなかったと言える。

「で？なんですか？話って？」

「あなたの体を少し検査してみました。結果からすれば、現在の健康状態は問題ありません。」

「なら、何も問題ないのでは？」

「いえ、確かに健康状態は問題ありませんが、それとは別に一つ問題が。あなたの体は治癒魔法が効き辛い様です。全く効かない訳ではないですが、あまり危険な事はしない事をお勧めします。」

この様な体質には先天的なものと後天的なもの二つがある。先

天的なものは元から他人の魔力を受け付けられない体質。後天的なものは治癒魔法の受けすぎで抗体ができ受け付けなくなるのだ。そして、治癒魔法を受け付けにくいという事は、それだけ命が助かりにくいということだ。

慧の入院が長引いたのもそれが原因の一つである。それなのに、あれだけの傷が短期間で治った事に、医者は驚いていたが・・・

「・・・まあ、気を付けます。」

「そう・・・なら、もう行っていいわよ？あなたの事、美夜さん達が心配していたわよ。もうすぐ3時限目が終わるわ。お昼も直ぐだから、顔位出してあげなさい。」

「・・・はい。それじゃあ、ありがとうございます。」

慧は礼を言い、立ち去る。その背中に、ミレアは余計な事を言う。

「なかなか、たくましい体だったわよ？」

「おい！」

「あつ！慧！やっと起きたの？」

「主！大丈夫ですか？」

「よっ！緩奈、銀。良く眠ったよ。」

慧が教室に戻ると、緩奈と銀が話かけてきた。慧は大丈夫だと答え、自分の席に着く。

「ふむ、何やら朝から大変だったようだな。」

「よう、真樹。まったくだ。で？昨日はどうでした？また、バイトか？」

「まあ・・・そんな所だ。」

「？」

真樹は苦い顔をして、言いよどむ。そんな真樹は珍しいため、慧はどうしたんだと問おうとした。しかし、それは遮られる事となった。

「真樹はいるか？」

その声を聞き、真樹は固まり、緩奈は笑いを堪えている。一体なんだと、視線を声のした方、入口に向けると、『姫神 氷』が真樹を見ていた。

そして、氷は堂々と入って来る。真樹はその姿にたじろぎ、窓際まで後退していく。

「いったい何なんだ？」

「ふふ、それはねえ〜どうやら、真樹、姫神先輩に気に入られたみたいなのよ。」

「今朝から、休み時間の度に、真樹を魔法部へ勧誘しに来ているん

です。」

緩奈と銀の説明に、それは大変だなあ、と人ごとの様に暢気な感想を口に出すが、しかし、人ごとでは無かった。

「慧……」

その声に振りかえると、湊と刹那も来ていた。どうやら氷の付き添いで来たようだ。

「な、なんの御用でしょうか？」

「そんなに怯えなくていい……。別に何かしに来た訳じゃない……。ただ、今日はちゃんと手伝って……」

しかし、直ぐには頷けない慧である。『箱』の件があるからだ。

「あ……それなんだが、ちょっと困った事になってな……手伝えなくなった。この埋め合わせは必ずするから……駄目か？」

「……納得する理由を言って……」

湊は不満げに問う。それはそうだ。一度交わした約束を反故しようと言うのだ。そうなるのは仕方がない。

「あ……生徒会長から直接の命令でな。無視はできないんだよ。すまない……」

「……そう、わかったわ。氷、もう時間よ。」

「あ、ああ・・・わかった。またくるぞ。真樹。」

湊、氷、刹那は休み時間の終了のベルが鳴ると教室から出て行った。

その帰り間際、湊は一言、言い残す。

「・・・覚えておきなさい・・・黒澤 慧・・・」

その視線は人をも殺せるのではないかと言っほどに、殺気を放っていた。

第十五話 疑心

「……何故、美夜はあんな男を……」

現在、湊はかなり不機嫌だ。もちろん、理由は慧にある。

湊は慧がどのような人物か調べていた。

物心着く前に母親と死別、父親は家に殆ど帰宅せず、ほぼ一人で暮らしてきた。そのため、家事全般は得意。

小学校、中学校共、必要最低限しか学校には来ず、その間、何をしていたか不明。また、中学に入学し、『葛城 真樹』と知り合ってから非合法的なバイトをいくつか手伝っている。その際に『仙海 緩奈』とも知り合った様だ。

学校での生活態度は自由奔放。他者からは倦厭されており、友人と言えるのは前述2名他数名しかない。授業中も居眠りが多い。しかし、何故かテストの点は毎回高いため、教師も踏みいった事は言えなかった模様。

女性遍歴は皆無と言ってよい。性格、顔とも悪くはなく、また、普段はやる気のない顔だが、真面目な顔はカツコイイと評判でそのギャップから、女生徒にもてていた様だが、『仙海 緩奈』が事前にもその目を潰していった様だ。なお、この事は『黒澤 慧』は知らない。

中学3年の冬休みに父親の再婚が決まり、再婚相手の家で共に暮らす。再婚相手は『花咲 桔梗』、花咲三姉妹の母親。つまり、花咲三姉妹と『黒澤 慧』は義理の兄妹となる。

しかし、詳細は不明だが、『黒澤 慧』は使い魔と共にその家を出て行き、『神凧 美夜』と共に暮らす事になる。

高校入学当初に起きた誘拐事件の犯人を使い魔と共に単独で撃破。その事からも魔法の腕はかなりのものだろうと推測できる。しかし、その腕を何処で磨いたかは一切不明。『属性武装』『侵食』といった難易度の高い魔法、特性を軽々使用し、何より制御の腕は最高クラスと言って良い。独自に磨いたにしては精練されている。

これらは、氷に頼み調べて貰った事だ。氷の家は『姫神組』といういわゆるヤクザ者だ。しかし、『魔法協会』を構成する一財閥でもある。そのため、こういった情報収集はお手の物だったりする。

「極々普通の少年・・・とは、言えない。・・・一部、不明な点がある。何より、あれだけの魔法を使うのは独学ではまずあり得ない。・・・親から教わったという事も。それだけの天才・・・という事も考えられるけれど・・・詳細は解らない。」

美夜が慧と一緒に暮らしている事を知った時から調べている訳だが、いくら調べてもその部分が解らない。そのため、信用する事が出来ない。何よりそんな慧を何故あそこまで信頼し、甘える事が出来るのか？それが不思議でならないのだ。

だからこそ、自分の研究の手伝いをさせ直接観察する事で、何故美夜が慧を信頼出来るのか、調べる事にした。そして、美夜の側にいるべきではないと判断できたら排除するつもりだった。

少し、調べ物を手伝って貰い、ある程度使えるという事は解った。しかし、それだけだ。これから、更に手伝って貰い、結論を出そうとしていた訳だが・・・慧は約束を破った。埋め合わせはするとはいうが、約束を破る者の言葉を信用できるはずが無い。

「ふふ・・・交わした約束を簡単に破る・・・そんな男が、美夜の側にいていいはずがない・・・約束を破るといふ事は、突き詰めれば平気で人を裏切る事が出来るといふ事・・・美夜だって、裏切るかも知れない・・・」

それは、極論に過ぎない訳だが、頭に血が上っている湊はそこまです考えが至らない。湊は、謹慎扱いを当たり前に受ける魔法部の部長だ。自分の都合通りに運ばない事に不満がたまるのは当たり前と言っていていいだろう。

「出来るだけ早く排除しなければ・・・そうね・・・そのためにもまず、慧の行動を把握・・・しないと・・・ふふふ・・・」

これは、いわば独り言、誰に言った訳でも、聞かれていた訳でもないのだが、現在は授業中。その雰囲気、何人かの例外を除き教室の生徒は震えあがっていた。もちろん教師も・・・

「で、どうした真樹？」

今は昼休み。緩奈と銀には先に屋上に言っただけ、二人は相変わらず踊り場で話をしている。

「ああ、慧も『パンドラの箱』関連に首を突っ込んだみたいだから。情報交換でも思っただけな。」

腕を組み、壁にもたれながら、言う真樹に、慧は窓に背を預けながら、いったいどこからそんな情報を・・・と思うのであったが、

今回に関しては情報源はかなり限られる。

「・・・はあ、今回のお前の雇い主は未来さんか・・・まあ、いいだろう。いくつか話せない事もあるが、話せる限りは話すさ。」

それから、慧は『鍵守』について、真樹は『遺物』襲撃についてその目で見た事と感じた『パンドラの箱』について、互いの情報を簡潔に交換した。

「へー、夢さん達はシオドスに負けたのか。で、お前はその後、女神先輩を助けて気に入られた・・・と。」

「む・・・そ、それは置いておけ。」

「ははは、悪い、悪い。女神先輩を安全な場所へ送った後、再度、護送車を追うと、『鍵守』達が追い詰められていた・・・と。」

真樹が受けた依頼は、夢達の援護と情報収集だった。そのため、戦闘には介入せず、監視に専念していたのだ。

「ああ、『蛟』、『影分身』、『鶴』・・・前者二つはオリジナリティが強かったり、東洋術だったり、珍しい上に強力ではあったが、あくまで普通の魔法だった。」

『蛟』は使い魔などではなく、あくまで『蛟』を模った水の魔法だ。『影分身』も同様に、かなりの錬度ではあるが、ごく普通の魔法である。

「だが、『鶴』、そして、あれを操る『月影』は異常だ。詳しくは解らないが・・・慧、お前の『属性武装』に感じが似ていた。」

真樹と緩奈には以前に『属性武装』の事は教えていた。その危険度、難易度も知っているため、二人は慧の力を疑わないのだ。

「つまり、己の魔力を餌に魔素を操っていたと？」

「ああ。だが少し違う気がする。うまくは言えないがな。」

真樹自身、何が違うかは言葉に出来ないらしい。だが、月影がどれだけ危険で厄介な存在かは理解できた。

「そうか、大体わかった。それから後は一人離脱させられ、『鍵守』達は全員撤退。しかし、一人逃げきれず死亡・・・といったところか。」

「ああ、そうだ。しかし、途中で離脱した少女を拾うとは・・・思ってもみなかったぞ。」

「俺だって、思ってもなかったよ。まさか、血を流して倒れていた少女が『鍵守』の一員だったなんてな。まあ、首を突っ込んだ以上、最後まで付き合うがな。」

血を流して気絶していたら、普通何かしらの事件に関わっていると推測できるものだ。しかし、だからといってそれを見捨てる様な真似をしないのが慧や美夜である。今回はその結果、『パンドラの箱』に関わってしまっただけだ。そこに後悔などはないのである。

「ふっ・・・そうか。その結果、『夜月 湊』を怒らせてしまった様だがな。」

「う……言わないでくれ。鬱になる。」

慧は湊が最後に残して言った言葉を思い出し、暗くなる。

「それで、慧は『パンドラの箱』を取り戻すために動く訳だ。」

真樹はそんな慧を無視し、話を続ける。

「あ、ああ。そういう事になる。今回はダリウス側に非があるからな。未来さんもあの『箱』が盗品だという情報は持っていたが、確証は持てなかったみたいだった。だが、今回の『鍵守』の証言からそれも確信となるだろうからな。罪には問われないだろう。」

「襲撃は展示会の開催当日に行うんだろ？一般人やメディアはどうする？」

「まあ、顔を隠して騒ぎを起こせば一般人は逃げるだろうさ。けが人はできるかも知れないけどな。そこはうまくフォローするしかない。メディアに対しては『闇』でも使って目をくらまして気絶させるとかな。まあ、詳しい事は『鍵守』達と詰めるさ。」

「そうか、わかった。俺も協力したいが、『真の未来』からの依頼がまだ残っててな。確約はできない。すまないな。」

真樹は未来から今回の事の情報収集と整理の手伝いも依頼されており、未来は真樹のお得意様であるため、断り切れないのである。急ぎはするが、当日までは間に合うか分からないため、一応の断りを入れておいたのだ。

「まあ、いいさ。今回は生徒会メンバー全員と『鍵守』で事に当た

るからな。戦力は十分だ。」

相手の戦力や数は不明なのだが、『鍵守』達の實力、生徒会メンバーの力を考えると、十分と言えるだろう。Sランク以上の魔法使いが数多くいるならまだしもAランク程度なら慧は問題無く倒せるだろうと踏んでいる。よっぽど特殊な『魔法』の使い手が相手でない限りは。

そして、今回はSランク以上の『魔法使い』はまずないと踏んでいる。『パンドラの箱』は眉唾物というのが常識だ。いくらダリウスでもそのために貴重なSランク以上を無理矢理に働かせることはできないだろうという考えからだ。

通常、依頼を断ると『六魔天』の印象が悪くなる訳だが、それがSランク以上だと少し話が違ってくる。Sランク以上の『魔法使い』は貴重な戦力だ。そのため、自分の組織に置いておこうとする。もし無理矢理命令して、批判を買おうと最悪、別の組織に移られてしまう。それを避けたいからだ。また、フリーの『魔法使い』のSランク以上も同様だ。

「そうか。それじゃあ、話はここまでにして、屋上にいくとしよう。緩奈達が待ちくたびれているであろう?」

「そうだな。」

慧と真樹が階段で会談している同時刻、美夜達は屋上で慧達を、夢達の先日の依頼の話を聞きながら待っていた。この場には何故か湊、氷、刹那もいる。

まあ、湊は情報収集、氷は真樹がお目当て、刹那は面白そうだからという理由だ。

「……という訳で、私達は途中でリタイアしてしまいました、後から無事『遺物』が博物館に着いたと聞いてほっとしました。」

「そうだったんですか、大変でしたね。」

夢の話に緩奈が相槌を打ち、労いの言葉をかける。

「でも、何者だったのでしょうか？襲撃者もそうですが、その襲撃者を喰い止めた黒尽くめの人達は？」

「ん〜……予想としてはダリウス様が直接雇った魔法使い……だろうね〜。」

董の問いに、刹那は予想と言うが、状況から判断すれば、実際そうなのだろうと言う事は解る。

「だが、奴ら……普通の雰囲気ではなかった。少なくともカタギの魔法使いではないだろう。」

「そう、まあ、全員無事でよかったわ。御苦労様。」

氷の感想に相槌を打ち、全員無事だった事に本当に安堵する美夜相手が『鍵守』だった事が幸いだっただろうが、一歩間違えばただでは済まなかっただろう。

「ところで、姫神先輩。何故真樹にそんなに拘るんですか？」

話がひと段落した頃を見計らって緩奈は氷に質問する。真樹と氷の接点が思い当たらない事もだが、この先輩が何故ここまで真樹に拘るのか分からないからだ。

「ん？ そうだな・・・理由はいくつかあるが・・・一つ、魔法使いとして、おそらく私以上の実力の持ち主。それに、少し話してみてもわかったが、真樹の考え方は面白い。内の部員として欲しい。もう一つ、お姫様抱っこをされたのは初めてでな・・・／／／／存外嬉しいものだな。女性扱いされるといいうものは。」

氷は姫神組の組長の娘であり、その性格などから女扱いをほとんどされた事が無かったため、初めて女性扱いした真樹に興味を抱いたのだ。

「は、はは・・・そう、ですか。」

（状況がつかめないけど、この人に興味を抱かれた真樹が大変なのか、真樹に興味を抱いたこの人が大変なのか・・・どっちかな、ふふふ。）

緩奈は苦笑しながら、内心面白がっていた。そんな緩奈に珍しい事に湊が話かけてきた。

「仙海さん・・・私からも聞きたい事がある・・・あなたは どうして、『黒澤 慧』や『葛城 真樹』と知り合ったの？・・・いえ、 どうして、仲が良いの？」

「え？二人と知り合ったのは、同じ中学出身ですし、仲が良いのは単に波長が合ったとかそういうものですか？」

その問いに、不思議そうに答える緩奈。周囲も何故その様な事を聞くのか不思議そうに湊を見る。有一、銀は警戒した視線で湊を見据える。

そんな緩奈の答えに、納得いかないのか、再度、湊は問う。

「そうね……。でも、あの二人は普通とは違う。『黒澤 慧』は普段はやる気のない、ごく普通の生徒だけど、あの魔法や技術は並の域を超えているし、『葛城 真樹』は裏のバイトを平然と行っている。ここ最近始めた訳じゃない。こんな異常な二人と、何故、属性が特殊以外は極普通の生徒があんなに仲が良いか……。私はとても興味がある。」

確かに、一見したら、三人の関係はごく普通だろう。同じ中学、波長があって仲良くなって、同じ高校に通う。しかし、慧と真樹を少し踏み込んで調べると普通の枠から逸脱している事はわかる。そうすると、何故、この三人がここまで仲が良いのか不思議になる。

「……話すと長くなるので簡潔に説明します。私は中学校に入学して直ぐ誘拐されたことがあります。理由は私の属性で、何処かに売られそうになりました。そこに助け来てくれたのが慧と真樹でした。二人はその犯人達を一掃し、私を助けてくれました。」

それが二人と仲良くなる切っ掛けです。」

「切っ掛け……?」

湊は不思議そうに首を傾げる。それが理由ではなく、あくまで切っ掛け……。なら、他に理由があるはずと、続きを催促する。周囲も黙って話に耳を傾ける。

「はい。仲良くなったのはその後です。私の属性は特殊な『植物』で、制御は全然ダメでした。周囲からも馬鹿にされていました。そんな私を庇ってくれて、魔法を覚えてくれたのが慧でした。

それと、事件の後、私、大きな事件が近くであると、外出さえ出来なくなっただけです。怖くて……だけど、そんな時、慧と真樹と一緒にいてくれたんです。

理由を聞くと、『見るに耐えなかった……それだけだ。』『助けた以上アフターケアもせんと、仕事として中途半端だからな。』って、二人とも照れくさそうに言うんですよ。それからです。二人と本当に友達になったのは。」

その話を聞き、ほとんどの者は微笑ましそうに緩奈を見る。しかし、湊と湊を観察していた銀だけは違った。湊はその返答に、更に疑問を抱き、問い返す。

「そう……なら、そんなあなたに『魔法』を教えた『黒澤 慧』はかなりの使い手と言う事……どこで、それだけの魔法をならったのか、分かる？」

「さあ？そんな事知らなくても、慧が慧で有る事に变りは無いですから。」

緩奈はそれがどうかしたのか？と言うが、湊はそんな緩奈へ鋭い視線を向ける。

「……そんな事で済むレベルではない……正直、あれは脅威と呼べる代物……そんな危険人物が……そこまでにしなさい。湊。」「……美夜。」

湊の言葉を遮り、美夜は声を出す。そして、ふと見ると、銀が美

夜に抑えつけられており、こちらへの敵意をむき出しにしている。それに反応した氷と刹那は湊の前に出るが、問題無いと言い、湊は二人を下がらせる。

「あまり、慧を悪く言わないで頂戴。この子、慧一筋だから、すぐ噛みつくわよ？それと、私も、少し怒っているわ。いくら付き合いの長いあなたでも、これ以上は・・・ね？」

しかし、湊もここで引き下がらない。慧の近くにいる人物達から情報を引き出すためにここに来たのだから。

「悪く言った様に聞こえたなら・・・謝る。だけど、慧の魔法が異常である事に、変りはない。あれがどれほど危険なものか、美夜は知っているわ。」「・・・え？」

「知っているって言ったの。」「なら・・・」確かにあれは、危険な魔法らしいわね。使用者本人にとって・・・。「・・・」でも、慧は完全に制御出来ているみたいだし、そこまで気にする事ではないと思っつわよ？」

美夜は湊の言葉を遮り、それ位知っていると語る。知ったのは湊が知った後だけどねと苦笑しながら続けた。

「それだけじゃない。『黒澤 慧』の過去にはいくら調べても分からない空白の「それも知っているわ」・・・じゃあ、なんで！何で『黒澤 慧』をそこまで信じられるの！」

激昂する湊に周囲は驚く。湊がこの様に激しく感情を表に出すのを見るのは初めてだからだ。それはこの中で付き合いの長い、美夜や夢、氷や刹那も同様だ。

しかし、その驚きから最初に戻って来たのは以外な事に夢だった。そして、次に発した言葉は湊を擁護するものだった。

「確かに・・・湊の言う通りですね。何故、美夜がそこまで信頼できるのか分かりません。彼には不明な点が多すぎます。」

「そ、それは・・・そうだけど・・・」

美夜は夢の言葉に言い淀む。確かに、慧を中途半端に知ってしまった。怪しむのは当たり前だ。緩奈や真樹の様な人間が珍しいのだ。自分自身、慧を始めて見た時、感じ入るものが無ければ同じ様に思っていただろう。そのため、何も言えない。本心からの言葉なら「自分と一緒にだと思ったから」なのだが、その言葉でどうにかできるとも思えない。

その時、思わぬ所から、加勢があつた。それは・・・

「すみません。先輩方、さっきから聞いていて思ったのですが、皆さんは隠し事や秘密は無いのですか？」

董だった。その表情は董には似合わない、本気で怒っている表情だ。

「私もお兄ちゃんと知り合つてまだ五カ月かそこらです。分からない事は一杯あります。小さい頃、どんな遊びをしたとか、別の学校に通っていた時のお兄ちゃんとか、魔法だつて・・・ですが、優しい人だつて事は解ります。葛城先輩が傷付けられて、緩奈さんが誘拐されて、友人とはいえ、他人のためにあんなに怒つて、あまつさえ、銀ちゃんと二人だけで、緩奈さんを助けに行くような、そんな

人です！そんな優しい人が悪い人な訳有りません！」

そこまで、一息で言い、一度息を整えて再び口を開く。周囲は、美夜さえ、何も口に出そうとはしない。

「秘密がある事がそんなに不満ですか？なら、先輩方には秘密や隠し事は無いのですか？有りますよね？その癖、お兄ちゃんの秘密は許さないの・・・グスツ・・・ですか？」

しまいには泣きだしてしまった董を緩奈はそのペツタンコな胸に抱きしめる。周囲は居たたまれない雰囲気になってしまった。

「ふふ・・・ありがとう。董。」

そんな董にお礼を言い、美夜は改めて湊と夢を見る。その目に二人は怯む。本気で怒っている目だったからだ。

「二人の言いたい事は解るわ。私も人の事言えた義理じゃないし、慧の秘密は気になっていたわ。でもね、私が慧を信頼しているのは秘密の有無じゃないの。」

私が初めて慧を見た時、慧ね、血だらけの銀を抱いて泣いていたのよ。そして、使い魔の契約を交わしたの。謝りながら・・・しばらくつける事になってしまってごめんって・・・それを見てね、この人なら、信頼できるって、そう思ったのよ。私が慧を信頼する理由はそれよ。まあ、欲しいと思った理由や信頼し続ける理由は別に有るのだけだね。」

その言葉に目を丸くする銀以外の者達。緩奈と董も使い魔にしたと言う話は聞いていたがその時の状況までは今初めて聞いたからだ。

「そう……分かった……。でも、私は『黒澤 慧』を警戒する。」

「……私も、そうさせていただけます。信頼出来るかどうかはこれから黒澤君を見て決めさせていただきます。」

「ええ、それで良いわ。それより、話で大分時間使ったわね。慧達もなかなか来ないし、先に食べちゃいましょう。」

美夜は湊と夢の答えに、満足いくまで好きにしないで、と返し、昼休みがもうそれほど残っていない事を時計で確認すると、食事をする事にした。皆も、残り時間に驚き、急いで食べ始めるのであった。

一方、慧と真樹はと言うと

「……出遅れたな。」

「ふっ……そうだな。」

「教室で食べるか？」

「……そうしよう。」

男二人、寂しく弁当をつつくのであった。

そして放課後……

「・・・そう言う事ですか・・・」

現在、生徒会メンバー全員で理事長室に訪れている。事前にも夢に夢からも情報を得ている。そして、夢も協力してくれる事となり、全員で報告に訪れたのだ。

なお、『パンドラの箱』の真実と慧が元『断罪の牙』である事は今は伏せてある。『鍵守』達から了承を得なければならぬし、余計な混乱を避けるためでもある。夢に話したのは『パンドラの箱』が盗品で有る事、『影』の事、既に『鍵守』の一人が『影』に殺された事等だ。

「これで、一応は動かせるか？」

「ええ、そうですね。後は証言だけでしたから・・・直接聞けなかったのは問題あるかも知れませんが、あなた達の事は信頼していますから、大丈夫でしょう。しかし、やはり、展覧会には間に合いません。すみません。」

慧の問いに、未来は答える。やはり、組織間の問題となると、色々面倒なのだろう。

「いえ、おきになさらず。理事長がバックに着いてくださるおかげで私達は堂々と動けますから。」

「そうですか・・・やはり、あなた達も？」

「はい。『鍵守』達と協力して、解錠を防ぎ、『箱』と『鍵』を取り戻します。」

美夜の答えに、仕方ありませんね。と、溜息を吐く未来。自分の学園の生徒が今回の事に首を突っ込むのは不安ではあるのだ。前回の依頼は相手がどれだけの者かわからなかったが、多くの『魔法使い』が一緒ということもあり了承した訳だが、今回は違う。更に言わせれば、慧が関わる事件は的の強さも相応に跳ね上がる。正直、美夜や夢はもの凄く心配なのである。

「そう……ですか……くれぐれも御気おつけください。一筋縄ではないかない相手でしょうから。黒澤さん、よろしくお願いしますね？」

「ああ、分かっていますよ。」

全員に注意を促し、最後に慧によろしくと頼む。慧も何の事は直ぐに察し、了承の意を伝える。

そのやりとりに美夜と銀は何の反応も見せないが、夢だけはとても不思議そうな顔をしていた。

第十六話 作戦会議

「態々、ありがとうね。足を運んでもらって。」

「いえ、仕方が無い事だと思うから気にしないでいいわ。」

「そう言っただけだと助かる。それで、その子が？」

「ええ、電話で話した協力してくれる味方よ。」

「『源藤 夢』です。よろしくお願いします。」

美夜の言葉に従い、頭を下げる夢。その顔を見たエルは「あ！」と声をだす。

「あゝ、あの時の・・・シオドスが言っていたわ。腕の立つ『幻』の魔法使いだっただって。なら、実力の問題はないわね。よろしくユメ。」

エルは手を差し出し、夢はその手を取り、握手を交わした。

未来に『鍵守』の事を話した次の日、美夜の携帯にエルから電話があった。新しいアジトに移ったため、ヘレンを使いにくくすから来てくれとの事だった。

電話を終えるとタイミングを見計らった様にヘレンが現れたので着いて行き、現在に至る。

「さて、それじゃ始めましょうか。『パンドラの箱』奪還のため

の作戦会議を。」

エルはその言葉で会議は始まった。

「まずは現状の確認と行きましようか？シオドス。お願い。」

「はい。今回の目的は『パンドラの箱』の奪還ですが、現状、博物館への襲撃は無謀と言って良いでしょう。博物館の構造は不明であり、『箱』と『鍵』が何処に封印されているか分からない事が一つ。今回の首謀者が『賢者の知恵』のダリウスであることから、何かしらの遺物を『箱』と『鍵』を奪われないうために使用している事が考えられる事がもう一つ。

そして、『影』の戦力を性格に把握しきれていない事、特に『月影』への対抗策が思いつかない事が一つ。以上の理由から事前の奪還は無謀と判断します。」

「私達が博物館に客の振りをして確認に行くのは？」

シオドスの言葉に美夜は一応提案するが、却下される。

「いえ、それは無理でしょう。ユメさんは既に顔を見られているでしょうし、あなた方も『影』と交戦しています。すぐに正体が割れてしまい、むしろ危険です。お知り合いに頼むと言うのも止めておいた方が良いでしょう。むしろ危険にさらされてしまうでしょうから。」

「……そうね……その通りだわ。」

美夜はシオドスの言葉に納得し、続きを促す。元々、美夜達もそれは無理があると解っていた。しかし、エル達には他に考えがある

かも知れないと思念のため聞いたのであった。

「では、続けます。よって、展覧会当日に襲撃をかけるのが得策と思います。『箱』と『鍵』の形状を知っているのはこの中では私達だけでしようから、ミヤさん達には私達と組んで行動して貰います。もし、襲撃をかけてその『箱』と『鍵』が偽物だと、目も当てられないでしょう?」

「そうだな。それが、确实だろう。どう組むかは後で考えるところ。・・その前に、一般人はどうするつもりだ?」

シオドスの答えはこちらも予想していたもの。しかし、問題点が一つ、一般人をどうするかだ。展覧会当日、博物館で戦闘する事になると多くの人間を巻き込む事になる。それは避けなければならぬ。

「そうね。本当は、一般人を無視して喰い止めようとしていたんだけど、あなた達が手を貸してくれると言うなら話は別ね。ヘルメも良い?」

「・・・ふん!勝手にしろ!俺は雷蔵とか言う奴を殺せばそれで良い。」

エルは念のため、ヘルメにも声をかけるが、ヘルメは雷蔵を殺す事以外はいつでもよいらしい。好きにしろと言うので、そうさせて貰う事にした。

「そう・・・それじゃあ、一般人への対処ね。一番は関心を別の所に向ける事よね。そうすれば人も減るし、ボヤでも起こせば逃げて行ってくれると思うのだけど・・・」

「別の所に関心ねえ・・・」

一同に黙る。別の所に関心を向けると言ってもそうそう、方法は思い付かない。と、思われたが・・・

「あ！そうだ！ねえ、夢。あなたの『幻』でどうにかならない？」

「私の『幻』で？・・・そう言う事。でも、それをすると、色々問題が・・・」

美夜が何かを思いついた様で、夢に確認を取る。夢も美夜が何を言いたいのか分かったようだが、渋い顔をする。何か問題がある様だ。

「大丈夫！なんとかなるわよ！」

「・・・はあ、分かったわよ。美夜が譲るとは思えないからね。その役目は私が受けましょう。」

その言葉に他の者は何が何だか分からないため説明を求めると、夢がそれに答えた。その方法を聞き、皆、納得した。夢の『幻』だからこそできる芸当だ。まあ、著作権の侵害とか、色々問題はあるが・・・

「ですが、注意を引く数にも時間にも限界はあります。」

「ええ、そうね。でも数が減れば、被害も少なくて済む。後はこちらのピュラが博物館に火を付けてボヤ騒ぎ。それでも残る様な馬鹿は強引に排除。そうすれば、後は結界を張って準備完了。って、と

ころね。」

一応、一般人への対応が決まり、続けて当日の組み合わせに移る。

「それじゃあ、次はどう組むかね。まずユメは陽動で決まりね。後、その護衛にそちらのインで良いかしら？」

「はい。」

「……主と一緒にではないのが不満ですが、仕方ありません。」

夢と銀が陽動とその護衛に決まった。これは戦闘力から見ても妥当な判断だろう。そのため、銀も不満は言うが了承する。まだ、力が足りないのは仕方が無い。

「次に、ダリウスを中心とする『魔法使い』と月影、雷蔵、止水を中心とする『影』への対処ね。隙を見て、『箱』と『鍵』どれか一つでも取り戻せれば良いけど、そう簡単にいくとは思わないからね。各自当たって、解錠の隙を与えないのが一番有効でしょう。」

そこで、珍しく慧が手を上げ自己主張する。そのため、皆、慧に視線を集中させる。

「月影……と言ったか？ 奴の相手は俺一人でする。」

その言葉に最初に喰いついたのは夢とヘレンだった。

「黒澤君？ 相手がどれだけの力を持っているか解っているの？ 少し見たただけけど、あれは普通じゃないわ。いくらあなたでも無理よ。」

「そうです・・・わたしもユメと・・・同意見です・・・エルとシオドスと私の三人掛かりでも倒せなかった・・・それどころか、撤退させられた。・・・それ位の敵。いくら、あなたが、元『断罪の牙』と言っても難しい・・・」

そのヘレンの言葉に「え？『断罪の牙』？誰が？」と夢は多少の混乱を見せるが、美夜が後で説明すると宥め、なんとか元にもどった。

「・・・慧、勝てるの？」

美夜は慧に問う。その瞳は心配の色が濃い。いくら慧が強く、『断罪の牙』の一人だったと言っても、相手の力は未知数で、目の前の『鍵守』達ですら撤退を強いられる程の者だ。それは当然だろう。

「ああ、問題ない。それに、確かめなければならぬ事があるからな。」

しかし、慧はそれに自身満々に答える。その眼を見た美夜は、仕方ないなあと溜息をつき了承する。

「話はまとまった様ね。それじゃあ、ケイ、月影はあなたに任せろけど本当に良いの？あいつの魔法は得体が知れないわよ？」

「ああ、問題ない。それに、多分だが、そいつの魔法の正体に心当たりがある。確かめなければいけないけどな。もし、予想通りだとすると、俺が決着を着けるべきだろう・・・だから、任せてくれ。」

「・・・分かったわ。月影はケイに任せろ。皆もそれで良いわね？」

エルの言葉に、それぞれ頷くなり返事をするなりで了承の意を伝える。

「じゃあ、続けて雷蔵ね。これには……」「エル……」「……分かってるわ。ヘルメ、好きに暴れなさい。でも、一人だと心配だから……カリオ、手伝って上げて。」

「足、引つ張るなよ……カリオ。」

「それはこっちの台詞だ。」

男二人は互いを睨みながら、軽口を叩く。

「次に止水だけど……ピュラ、ヘレン。二人に任せるわ。」

「は、はい！頑張りますー！」

「……倒す。」

ピュラはリベンジのチャンスに、ヘレンも今度こそエルの役に立とうと燃える。

「最後に、私、シオドス、そしてミヤ……私達でダリウスと他の『魔法使い』、『影』の相手をしましょう。全てとは言わないわ。『箱』ないし『七つの鍵』の内の一つを必ず奪いましょう。」

「ええ」

「了解しました。」

美夜とシオドスの二人は普通に頷く。

「それじゃあ、良い？手順としては、ユメとインが一般人の注意を引きつける。続いてピュラが火災を起こし、他の者を追い出す。それでも逃げないもの、逃げ遅れたものは、強引にでも排除し、結果を張る。そして、互いに今決めた相手と戦う。夢と銀は陽動が終わったら私達と合流。『魔法使い』や『影』の掃討を手伝って。そして、最悪、『七つの鍵』の内の一つだけでも良いから奪う事。良い？」

「……ああ（はい）。」「」

エルは全員の返事を聞き、満足そうに頷く。

「なあ、最後に一つ良いか？何であいつらは態々展覧会なんて開いたんだ？そんな事しなくても解錠は出来るだろう？」

慧の疑問ももつともだ。と言うより、何故今までその疑問が出てこなかったのか不思議な位だ。しかし、これにも理由がある様だ。

「それにも理由はあるわ。『パンドラの箱』の解錠には人の『好奇心』が必要なのよ。展覧会はそれを集めるためのものよ。」

今のままでも十分に人の『好奇心』は集めているだろうけど、どれくらい集めればよいか分からないから、展覧会までは解錠しないと思うわ。一度解錠に失敗すると、集めた『好奇心』が消えうせるだろうからね。

また集めるには時間がかかるわ。そうなったら、盗品である以上、『六魔天』に動かれてゲームオーバーね。」

どうやら、『好奇心』という人の感情を集める方法があり、それが『パンドラの箱』を開けるために必要なものの一つの様だ。

確かに、神話でも『好奇心』に負けたパンドラが・・・と言うくだけりがある事から、それは一つの要因だったのだろう。

だからダリウスは大きく、展覧会の事を広めたのだ。

納得のいった慧は礼を言い、続きを促す。

「それじゃあ、解散ね。後は3日後まで、各自体調を整えて置く事。」

こうして、エル達との会合は終了した。互いに会って数日、相手の事など良く分からない。しかし、お互いに『パンドラの箱』を開けさせる訳にはいかないと思っっている事は確かだ。そのために互いに手を取るのであった。

「それで、黒澤君。あなたが元『断罪の牙』だと言う事は解りました。辞めた理由も・・・しかし、分かりません。なら、誘拐事件の事もそうですが、何故この様な事に関わるのですか？それはあなたが辞めた理由と相反すると思いませんか？」

あれから、慧達は美夜の家に戻り、夢に慧の事について話をした。生徒会の中で知らないのが夢だけと言うのも問題がある事、夢なら話しても問題ないと言う事から話す事にした。既に、『鍵守』との会話で有る程度知られている事もある。

「まあ、結局俺は、あの『家族』の中には入る事は出来なかったかな。それに、再婚相手がああ『花咲家』なら、そこまで心配する

事は無いだろう。

後、例え組織を辞めようと、俺の仲間に手を出すなら関係ない。誘拐事件は緩奈を攫われたからだし、今回は銀を傷つけられた。なにより、『パンドラの箱』が解錠されればそれは俺の今の生活を崩す事になる。俺は今の生活が気に入っているんだ。邪魔するなら、潰す。それだけだ。」

これが、迷い続けている慧が戦い続ける事が出来る理由だ。迷い続ける慧が、無理矢理にでも進もうとする、進む事が出来る理由。もう二度と、大切なものを失いたくないために・・・それが、迷いを自覚しなかった理由でもある。

しかし、今は違う。美夜に言われ、迷いを自覚した慧。だが、それでも、その部分は変わらなかった。自分自身を突き動かす、大切な人を守りたいと言う感情に迷いは無かったのだ。だからこそ、他の何に迷おうと、その事についてだけは迷わないのだ。

「・・・はあ・・・わかりました。あなたがそれで良いのなら私もその事については何も言いません。あなたの力は美夜の目指すものに必要な様ですし・・・ですが、もし、あなたの存在が美夜にとつて危険と感じたら、容赦なく排除します。よいですね？」

夢はあくまで美夜のため、慧に忠告する。そんな夢に敵意を向けようとすると銀を制止し、頷く。

「ああ、構わない。俺も、美夜を傷つけたくはないからな。もし、俺の存在が危険と感じたらそうして貰って構わない。」

「・・・わかったわ。改めて、これからよろしく。慧君。」

「ああ、よろしく。夢さん。」

そして、互いに握手を交わす。夢も慧を信じる事にした。その瞳には、守るといふ言葉には偽りは無かったからだ。

「美夜・・・同性にもモテるんですね。」

「・・・夢、私そっちの趣味は無いわよ？」

「私もそっちの趣味はない！」

美夜の言葉に本気で怒る夢であった。

「・・・そうか、やはり見つからないか・・・」

「はい。どうやら、奴ら定期的に拠点を変えている様で、中々足取りはつかめません。」

止水は月影に『鍵守』達の搜索の経過報告をするが、難航している様だ。

「ふむ・・・お前が遅れを取った学園の生徒の方はどうだ？」

「それが、『真の未来』の監視が厳しく、発見できません。監視に置いていた部下が何者かによって倒されていました。」

「・・・そうか、お前や雷蔵は共に負傷しているからな。展覧会までは休んでもらう必要がある。かと言ってこのまま監視を続けても、

部下の数が減るだけだ。いくらダリウスの人形を使っても、言う事を聞く『魔法使い』の中にそれほど使えそうな奴はいない。

止水、雷蔵にも伝えて全員呼び戻せ。展示会の日まで温存しておく。」

「はっ……わかりました。」

止水はそう言うと、その場から立ち去った。

残った月影は『箱』が封印されている『遺物』を眺める。月影の目にはその中身が見えているのかもしれない。

「もうすぐだ。もうすぐ、手に入れられる。待っている……俺はその力で今度こそ……」

月影の言葉は部屋に響きもせず、ただ、闇に吞まれ消えて行った。

第十七話 偶には訓練も

「ニヒル・ブレット
無の弾丸」

「ダイク・エッジ
闇の刃」

美夜の放つ『無の弾丸』を慧は同数の『闇の刃』で防ぐ。

「アイス・クロ
氷の爪！」

その間に銀が慧へ接近し『氷の爪』を振るうが、『闇の刃』で防がれ、その状態で『闇の刃』が鞭の様に伸び、銀を囲む様渦を巻き、締めつけようとする。

「『消滅の抱擁』」

しかし、美夜が触れることにより、『闇の刃』が消される。

「大丈夫？銀。」

「ええ、ありがとうございます。美夜。」

慧は二人から一度、距離を取り、『闇の刃』の再び発生させ、肩で担ぎ構える。

二人はすぐさま、慧へと向かって行く。銀は『氷の残像』グラス・ミラーで分身を作り、惑わしながら、『氷の爪』を振るう。しかし、慧は巧みに攻撃を避けながら、刀や拳、蹴りを用い、分身を順番に破壊してい

く。おそらく本物がどれか分かっているながら、遊んでいるのだろう。分身を全て破壊し、最後に残った本物の銀を攻撃しようとしたが、足が動かない。見ると足だけでなく、腕や『闇の刀』も凍り着いていた。

「あら？何時の間に・・・ああ、『氷の残像』か。」

『氷の残像』とは氷で自分の分身を作り出す魔法だ。つまり、全て氷できていく。その氷のいくつかに『凍結の世界』ゲリドゥス・ムンドゥスの魔法陣を刻んでいたのだろう。破壊させる事で、その破壊した部分を凍りつかせたのだ。

「それじゃあ、動けませんよね！」

銀は再び『氷の爪』で切りかかる。

「んゝそんな事もないぞ？」

「え！？」

飛びかかって来た銀に『闇に引き込む腕』カリゴ・ブラチウムが絡みつき、動きを止める。その間に、腕と足に着いた氷を闇で侵食し、砕く。しかし、その間に近づいていた美夜が『消滅の抱擁』を展開した腕を背後で止めていた。

「ふふ、私達の勝ちね。」

「いや？それは早計だな。美夜。」

慧はそのまま振りかえると美夜の腕を掴んだ。

「ええ!?!」

美夜が驚くのも無理はない。なぜなら、未だ『消滅の抱擁』は展開しているのだ。なのに、自分に触れている。触れれば消滅するはずなのだが、それが起きていない。その事に動揺し、動くのが遅れた。以前も同様に触れたことがあるのだが、その時は暴走気味だったため、すっかり忘れていたのだ。

「せい!」

「きゃ!」

慧はそのまま、美夜を投げ飛ばし、関節を決めた。

「さて、俺の勝ちだな。」

銀は『闇に引き込む腕』に捕まり逃げ出せずにいる。『凍結の世界』を展開しようとするが、『闇の腕』が巧みに邪魔をし、使えない。

美夜は慧に間接を決められ逃げ出す事が出来ない。

「うう・・・また、負けました。」

「ちょ、慧!痛いってば!」

「あ、悪い。」

今は、魔法学の時間。今日は闘技場を借りて慧一人対美夜、銀の

二人で模擬戦をしている。なお、慧は『属性武装』を使用していないが、本気ではない。もし、本気なら、今の二人では10秒と持たない。なら、何故使用しているか、それにはいくつか理由があり、一つは、魔素の操作レベルを上げるためである。

『闇黒武装』と『属性武装』の違いは纏う『闇』の量と、『闇』に吞まれるかどうかだけだ。『闇』が多くなればなるほど『闇』に吞まれやすくなる。なら操る『闇』の量を増やし、さらに『闇』に吞み込まれない程の精神力があれば、『闇黒武装』のような制限なしとはいかなくとも、それに近づく事はできる。それに慣れるには、早い話、『闇』を常態的に纏えば良い。『属性武装』を使用しているのはそのためだ。

そして、もう一つは、美夜のお願いだ。『属性武装』がどういう魔法か、身を持って体験したかったらしい。

「はあ、また負けちゃったわね。それにしても、どうやって私の『消滅の抱擁』を防いでいるの？」

美夜はそれが不思議でならない。常時展開している無属性の魔法、これは魔力の消費量は大きいが、展開し続けている限り、美夜に干渉する事など出来ないはずなのだ。しかし、慧は美夜に触れた。それが解らないのだ。

「ああ、それは簡単だ。美夜と同様に『闇』を発生させ続けているんだ。俺に届く前に常に闇が消されるからな。」

一つの無属性魔法で消滅させる事が出来るのは一つだ。『消滅の抱擁』は常に発生させる事で一つという制限を無くしている訳だが、慧も同様、常に闇を発生させ、消滅された次の瞬間にはまた闇を発生させる。それが瞬時に繰り返される事で、慧自身に『消滅』が届かないのである。その結果、美夜に触れる事が可能なのだ。

通常の魔法であれば、魔法を維持する術式が消されて終わる訳だが、『属性武装』の場合、『魔素』を魔力で集め、『術式』でその姿を変えさせている。つまり『魔素』を単に纏う位は、魔力が完全に消されなければ問題なく行使できるため、美夜に触れる事を可能としているのだ。

「・・・そうかぁ・・・この魔法、コストが高い分、使えるんだけどなぁ・・・そんな弱点があつたなんて・・・うん。ありがとう。参考になる。」

「主、私はどうでしたか？」

「銀は大分強くなってきたと思うぞ？『氷の残像』に『凍結の世界』を刻む発想は良かった。だが、それで気を抜いたら駄目だな。」

慧に言われ最初は喜んでいたが、駄目だしされ、うなだれる。

「はは、でも、確実に強くなっているよ。そろそろ、違う魔法も教えないとな。」

「あ、はい！」

銀が元気よく返事をする。美夜はそんな銀を微笑ましそうに見つめる。そんな時・・・

ヒュン！と、空気を切り裂く音と共に、慧の耳元を何かが通り過ぎた。視線を移すと、闘技場の結界を破り、観客席との間の壁に突き刺さっている太々とした鳶が、慧のすぐ目の前にあった。

「こ、これは・・・緩奈？」

「ゴメン！慧！」

口元を引くつかせながら、その原因であろう人物の方へ視線を向けると・・・案の定、緩奈が暴走していた。

「緩奈さん！ちよっ！落ち着いて！」

「慧！源藤先輩！助けて！止まらない！」

緩奈は魔力の制御の訓練をしていた訳だが、軽く暴走し、いきなり成長した植物が暴れだした。周囲の生徒を巻き込んで・・・。

この闘技場は広く、慧達三人はその一角を使い、訓練していた訳だが、ここは離れた場所で他に申請していた生徒達が訓練していた。緩奈もその一人な訳だが、どうやらまた制御できず、暴走させている様だ。

その結果、緩奈の近くにいた生徒からその植物の餌食となっている様だ。

緩奈も、どうにか抑えようとするが、慌ててしまい更に暴れる事になってしまっている。

仕方が無いと、慧が止めに入ろうとするが、美夜がそんな慧を留める。何故？と美夜に視線を送ると、笑いながら、夢を見るよう促された。慧が夢へ視線を送ると、呪文を口に行っている所だった。

「『幻の縄で動きを止めよ！幻縄』！」

夢が唱え終わると縄が突如出現し、一瞬その動きを止める。

「緩奈さん！今の内に！」

「は、はい！」

緩奈は植物の動きが止まった事に落ち着きを取り戻し、今度は退化させ、元の鉢植えサイズの植物に戻った。

「はあ、はあ・・・あ、ありがとうございます。」

緩奈は息も絶え絶え、夢にお礼を言う。

「いえ、あなたに魔法を教えるのが私の役目ですから・・・当然の事をしたまです。それより、大丈夫ですか？」

夢は、問題ないと返し、緩奈の体調を気遣う。あれだけの現象を起こす程の魔力を消費したのだ。心配するのも無理はない。しかし、緩奈は全然平気な顔をしている。

「はい、大丈夫です。私、魔力量だけは凄いですから。まあ、だからこんな事になっているんですけどね。ははは・・・。」

「そう・・・ですか、それは、まあ、仕方が無いです。これから覚えて行きましょう。」

「はい！ところで、源藤先輩の魔法ですけど、なんで『幻』なのに物質に干渉できるんですか？」

そう、本来『幻』は惑わせるだけで、物質に干渉する事は不可能なのだ。しかし、夢は今、確かに幻の縄で植物を止めた。これは、どういう事か？

「その事ですか・・・それはですね・・・秘密です。」

ウインクしながらそんな事を言う夢。

慧はその魔法を見て感心する。

「『幻』の魔法に属性外魔法である『障壁』の術式を組み込む事んだのか。」

『幻』に『障壁』の『術式』を組み込むことで、その障壁が、幻の周囲に同じ様な形で展開され、物質への干渉を可能としているのだ。しかし、この術式の組み合わせは相性が悪く、干渉出来るのは数秒〜良くて数十秒なのだ。しかし、その分、相手の意表を突く事ができ、また、攻撃手段にも使えるため、良い点も多い魔法だ。

なお、属性外魔法と属性魔法の合成は相性がまず悪いため、通常は使用しない。例外は、元からそれらの合成属性を持っている場合位だ。

慧はその『術式』までは視えないが、緩奈の植物に触れた際の『幻の縄』の反応からそう推測する。それに気付かなかった緩奈は教えて欲しいと詰め寄るが、誤魔化される。

なお、夢に詰め寄る緩奈。しかし、そんな緩奈の背後から、迫る一つの影、それは・・・

「か〜ん〜な〜・・・」

「きゃあ！い、痛い！痛いよ！慧！」

慧が緩奈の背後から現れ、そのこめかみに両手の拳をあて、グリグリと攻撃する。緩奈はその痛みに、騒ぐが、慧は中々解放しない。

「ちょ、慧君、その辺で・・・」

「・・・夢さんがそう言うなら。」

「はあ、はあ・・・い、痛い・・・凄く痛かったよ！慧！何するのよ！」

夢に諭され、緩奈を解放する慧であったが、そんな慧に、緩奈は抗議の声を上げる。

「あのな・・・周りを見て見る・・・」

慧は溜息を吐きながら、緩奈に周囲を見渡すように言う。緩奈は言われた通り周囲を見渡し、何を言われているか理解すると、苦笑いをする。むしろ、それ以外出来ない。

「ハ、ハハハ・・・ごめんなさい。」

緩奈の近くで訓練していた者達は床にのび、離れた所にいた者達も訓練を止め、壁際まで離れていた。

「ハア・・・」

全員が溜息を吐き、負傷者を医務室へ運んでいると

「これは……一体、何が有ったんだい？」

「何をやっているのだ……慧、緩奈……」

「よう、真樹、何だ？今来たのか？」

真樹と『雷堂 和希』が現れた。和希はこの惨状に驚き、真樹は何が起こったか、大体察し、慧と緩奈に声をかける。

なお、和希と刹那は同じ雷堂な訳だが、どうやら双子の兄妹らしい。

「因みに二人は『双頭の雷竜』と呼ばれているとかいないとか……」

「何を言っているんだい？葛城君？」

「いや、何でもない。」

挨拶もそこそこ、とりあえず、負傷者を医務室へ運ぶ手伝いを始める慧達。幸い、皆、軽傷で、負傷者もそれほど多くないので、直ぐに運び終えた。

「まあ、とりあえず、それほど大ごとにならずに済んで良かったな。」

「ふむ。そうだな。負傷者もそれほど多くない。それに……被害

もこの程度・・・全く問題ないな。」

「ハハハ！」

慧と真樹は被害がそれほどないため、軽く笑い合うが、そんな二人に和希がツッコミを入れる。

「いや、二人とも、これを、『この程度』済ませられるのかい？」

幸い、負傷者はそれほどいなかった訳だが、闘技場は散々たる状態だ。結界は破られ、壁には幾つもの大きな穴、床もそこかしこ抉られている。これを慧と真樹はこの程度で済ませているのだ。

「いや、この闘技場が植物で埋め尽くされないだけましですから。」

「ああ、以前なんか、公園一つ、約半年程、植物が異常繁殖したからな。」

その時の事を思い出し、二人はそれに比べたらと言う。言われた緩奈本人は

「もう！二人とも！それはもう言わないでよ！」

と、慧と真樹を叩いているが、本気ではないため、二人は平気な顔をしている。

「ははは・・・そうかい。さて、それは置いておこうか。そろそろ、始めないと時間がなくなるからね。」

「ふむ・・・結界は破壊されているが、まあ、問題ないか・・・そ

れでは、よろしく願います。」

和希と真樹は少し距離を取り、手合わせを開始する。和希は『雷刃』を発生させ、構える。真樹は風を纏い、自然体で相対する。

真樹の風を纏う方法は、慧の『属性武装』を参考にした真樹独自の戦闘法である。これは『属性武装』に似てはいるが、魔力を餌に魔素を引きこんでいる訳ではないので『属性武装』とは異なる。

この魔法は複数の『魔法』の『術式』を展開し、相互に干渉させ、いくつかの現象を任意に起こす事ができる。例えば、『飛行』『風刃』『身体強化』『竜巻』などの術式を同時に展開させ、状況によって使い分けるのだ。一つの『魔法』を使用して『術式』が消えても他の『術式』が干渉し、再びその『魔法』の『術式』を完成させる。

真樹の場合、最大同時に5つの『魔法』の『術式』を同時に展開する事が出来る。そのため、この魔法を使用できるのだ。

なお、普通に風を纏ったり、拳に炎を乗せたりする『魔法』はある。しかし、同時に5つも展開し干渉させ合うなど、普通はできない。2種類の『魔法』を同時に展開するだけでも難易度が高いのだ。それが5つ・・・驚異的と言っていいだろう。

そして、和希と真樹の手合わせが始まった。

真樹の『風刃』を纏った拳を和希は避け、『雷刃』で切りかかる。真樹は『雷刃』を風に巻き込み、受け流し懐に潜り込み一撃を入れるが、雷が弾け、その拳を弾く。真樹がすぐさま飛び退くと、先ほどまでいた場所に雷が落ちる。正確には『雷刃』を放出した結果な訳だが・・・

慧達はそんな二人から距離を置き訓練を眺めていた。

「葛城君、凄いですね。雷堂君と互角に戦っています。」

「まあ、真樹だからな。それより、雷堂先輩だっけ？あの人も中々やるな。『雷刃』を部分的に放電させ、攻撃を防いだり、出力を上げて攻撃に使ったり・・・器用だな。」

和希は一つの魔法を複数の用途に使い、真樹は複数の『術式』を同時に展開し、用途ごとに分けて使用する。中々面白い組み合わせである。

「まあ、和希は技、刹那は力の方面に適正が高いからね。それより、私達も再会しましょうか。土曜日に影響を残さない程度に。」

「ああ、そうだな。」

慧達もそれぞれ訓練を再開する。その際、緩奈が「土曜日？」と聞いて来たので、慧は、以前話した通り、用事がある旨を伝え、納得させた。

その途中・・・

「ん？」

慧が何かを感じたのか、不意に動きを止め周囲を警戒する様に眺める。

「慧？どうしたの？」

「主？何か有りましたか？」

美夜と銀がそれぞれ聞いて来たので、警戒しながら答えようとしたところに

カー・・・カー・・・

鴉の鳴き声が聞こえてきたので、警戒を解き、二人に視線を移す。

「いや、誰かに見られている気がしたんだが・・・どうやら、勘違いだったらしい。さあ、続きを始めようか。」

そして、訓練は続く。

「危なかったです。まさか、あの距離で気付かれるとは・・・」

「ああ、何なんだあの坊主・・・距離も離れていたし、気配も消していたつてえのに、俺達に気付きやがった。まあ、バレテはいないだろうがな。」

「そう・・・ありがとう。二人とも。それで、何かわかった？」

どうやら、慧が察知した視線の主はクスとメラの二羽だったようだ。湊が二羽に頼んで観察して貰っていたのであった。

「そうですね・・・慧様自身かなりの強さですが、その友人である仙海様は『植物』という属性と美夜様並の魔力を持っています。葛城様もかなりの技術をお持ちの様で、同時に5つの『魔法』の『術

式』を展開、相互干渉させるなど、普通は出来ません。凄い人達が集まっていますね。』

『ああ、だが、やはり、驚くべきはあの坊主だな。『属性武装』の『魔素』の量が以前見た時より確実に増えていやがる。それでいて、自身への影響は少ない。あれが一番異常だな。戦闘だって、美夜の嬢ちゃんが手玉に取られていやがった。ありゃ、かなりの戦闘経験を積んでいやがるぜ?』

「……そう……他には?」

湊は二羽が慧の事を褒めるのが不愉快の様だが、そこは我慢し、更に何かないか聞く。

『そうですね……あ!そう言えば、次の土曜日に何か用事があるような事を言っていましたね。』

『ああ、そうだな。美夜の嬢ちゃんも一緒らしい。どんな用事かは解らなかったが……』

「次の土曜?……!」

湊は少し考えると何か、心当たりが有ったのか、何かを思いついた様な顔をする。

「そう……私を無視して、美夜と……ふふふ……」

言っている事は、まるで焼きもちを焼いている様であるが、実際は違う。その事を知る二羽は震えるのであった。

『（なあ、クスよう。あの坊主の属性だが・・・）』

『（メラも思いましたか・・・時々ですが、確かに感じましたね。）』

『（だよな・・・だが、まだ確証は持てないよな。）』

『（ええ・・・まれに混ざる事も有りますから、そうとはまだ言えませんね。ほとんどが『闇』の様ですし・・・）』

『（だが、これまで感じたより強い事は確かだ・・・どうするんだ？坊主が『あれ』だとしたら？）』

『（どうもしませんよ。むしろ、好都合じゃないですか。私達のやる事は有りません。）』

『（・・・それもそうだな。）』

そして、日は過ぎ、いよいよ展覧会の日となる。

第十八話 展覧会

「・・・君、何故集まりが悪いのだ？」

展覧会当日、もうすぐ、『パンドラの箱』の解錠を行うのだが、集まりが悪い。朝方は多くの人で埋もれていた会場に、『ダリウス』も安心していただけのだが、もうすぐ解錠という時になり、人が減って行ったのだ。

「え？あ！ダ、ダリウス様！そ、それが・・・近くにある臨海公園で、『天使の鐘』^{エンジェル・ベル}がゲリラライブを始めた様で、そちらに人が流れてしまっているんです。」

「『エンジェル・ベル』？なんだそれは？」

聞き慣れない単語に眉を潜め、『ダリウス』は疑問を口にする。

「ご存じありませんか？今話題の美少女3人のアイドルグループです。顔もさることながら、三人の歌声も超上級で、今、最も注目されているんですよ。」

事務員の言葉に「そうか」とだけ答え、『ダリウス』はその場を離れて行く。事務員は首を傾げながら、『ダリウス』の背を見送った。

「お聞きの通り、『エンジェル・ベル』とかいう者達のせいで集まりが悪い様です。」

『ダリウス』は自室に戻ると、その場にいた月影に、その様に報

告した。

「そうか、まあ、構うまい。『好奇心』は十分に集まっている。それに、その方がこちらとしては好都合だ。後は解錠するだけだ。この場で開けても良いのだが、どうせなら奴らの目の前で解錠しよう。歴史的瞬間になるのだからな・・・いや、最後の瞬間か・・・。」

「どうやら、夢はうまくやってくれている様ね。」

美夜は博物館の状況を見て、夢がうまく人を引きつけている事を確信した。

「そうみたいね。それにしても凄いわね。アイドルのライブを『幻』で再現なんて・・・音はどうしているの?」

エルの疑問に美夜が答える。

「それは、録音ですよ。著作権とか、色々問題が有るけど、ばれなければ問題なし!」

堂々と言う美夜に、慧は苦笑しながら、頭を軽く二回程叩き、直ぐに切り替える。そろそろ、解錠の時間だからだ。

「解錠を行うのは博物館の中央広場でいいんだよな?ピュラの方はどうだ?」

『こちらは、何時でも可能です。台図をお願いします。』

現在、美夜達は三つに別れている。一つは夢と銀の陽動班、もう一つはピュラとヘルメ、カリオの放火犯、最後に慧、美夜、エル、シオドス、ヘレンの強襲班だ。陽動班は臨海公園に、放火犯は、監視網ギリギリの博物館の裏手に、そして、強襲班は放火犯とは正反對の監視網ギリギリの場所で、双眼鏡を使い状況を確認している。

なお、全員顔に白い布を巻き付けている。これは顔を一般人に見られない様にするためだ。服装も、白いパンツに白いスウェット、更にその上に白い上着を着ている。これを決めたのはエルで、曰く

「敵は黒づくしなんだから、こちらは白で行きましょう！」

とのことだ。

これには何故か美夜と銀も賛成していた。理由は

「慧（主）は黒しか着ないから、たまには違うのも見たいのよ（です）！」

らしい。

その三人の言動に溜息を吐く他一同だが、この服はエルがどうやってか用意したもので、天城ヶ丘学園の制服と同様、魔法等に対する抵抗力が高く作られている。

「ええ、分かっただよ……来た！『パンドラの箱』よ！それに……鍵も七つ……確かにある。」

エルは双眼鏡をシオドスへ手渡し、確認させる。

「ええ・・・こちらでも確認しました。ダリウス直々に運んでいきますね。」

そして、今度はヘレンへ渡す。ヘレンも確認し、エルを見て頷く。

「よし！それじゃあ、皆、準備は良い？」

「「はい（ああ）！」「」」

「ギン、ユメ、それじゃあ、これからこちらでも襲撃を開始するわ。そちらも10分したら切り上げてこちらへ合流して頂戴。」

『「はい（わかりました）」』

「それじゃあ、始めましょうか！」

エルのその言葉で奪還作戦が始まった。

「キヤー！」「火事だ！」「逃げろ！」「そこをどけ！」「押さないで！」

博物館から急に火の手が上がり、中から次々と入場していた人々が逃げだしてくる。更に追い打ちをかける様に、土の蛇と風の犬が人々を追いかけまわし、博物館の敷地から追い出そうとしてくる。

「クソ！一般人の避難とダリウス様の護衛を優先させる！」

「前衛！時間を稼げ！後衛！詠唱を開始しろ！」

『魔法使い』達が、土の蛇と風の犬を潰そうとする。しかし・・・

「『アイス・バード』」

「『ダーク・エッジ』」

氷の鳥と闇の刃が後衛を潰し、うろたえた前衛を土の蛇と風の犬が吹き飛ばす。さらに、

「『レイ・インパクト』」

「『イレイズ・フィックス』」

「おらっ！」

エルが『光の衝撃』で敵を博物館の外に吹き飛ばし、美夜は『消失する空間』（対象の空間にあるものを消滅させる魔法）を使用し、後方の空間を消滅させる。すると、消滅した個所を埋めるために、周囲のものを引き寄せる。それを使って、博物館の敷地から外に吹き飛ばす。慧は『闇の刀』から切れ味を無くし、鞭の様に長さを伸ばし、振り切ることで外へと吹き飛ばす。

さらに放火後、建物内に人が残っていないか確認していたピュラも合流し、掃討に強力する。まさに電光石火の勢いで、人が減って行く。その間、どういう訳か、ダリウスは傍観しており、『影』の姿も見受けられなかったが、気にしている暇はない。

「・・・そろそろ、いいかしら？」

「ああ！一般人の気配も消えたし、雇われの『魔法使い』達も弾き飛ばした！いいと思うぜ？」

エルの言葉に、慧が答え、それに頷く。

「それじゃあ・・・ヘレン！お願い！」

「はい！エル！『闇が包む不可侵の結界』」

エルが魔法名を唱えると、周囲を闇が包み込んだ。この魔法は、闇により周囲を包む事により、侵入を拒むと同時に、外から中を見えなくさせる結界魔法だ。

「『光よ』^{ライト}」

そして、結界内部は暗闇に包まれる訳だが、エルが光を常時放つ魔法を使用したため、結界内部は光で照らされた。そして、ダリウスの方を見ると・・・

「ふふふ・・・ようこそ、解錠の義へ『鍵守』達と、『天城ヶ丘学園』の生徒達、よく来たな。」

そこには、『パンドラの箱』と『鍵』を抱えた『ダリウス』と右腕を失った雷蔵、左腕を失った止水そして、月影が現れた。その周囲には黒尽くめの集団がいる。

「別に招待されたつもりはないのだけれど？」

エルは、何を言っているのやらと、呆れながら言う。

「いやいや、招待したさ。うちの者達は貴様達が一般人を排除して
い際、手を出さなかつただろ？」

「・・・あら、出せなかつたのではないの？」

確かに、月影の言う通りであるが、それをする理由に思い至らな
いエルはとりあえずそついう。

「くくく・・・いや、出さなかつたんだよ。せつかくの解錠の義
・余計なもの達はいて欲しくないのな・・・」

「余計なもの達？何を言ってるの？むしろ『好奇心』を集めるのに
必要なんじゃないの？」

エルは疑問を口にするが、月影はそれを笑い飛ばす。

「ハハハ！何を言っている？忘れたのか？『パンドラ』は人の負の
念が多ければ多い程狂うのだぞ？解錠の際、最初からそれでは不都
合というものだ。まあ、ダリウスはそれを知らずこの様な会場を用
意した様だがな。わざわざ結界まで張ってくれた事には礼を言う。」

その言葉に更に疑問があつた慧はエルに問う。

「どういふ事だ？『負の念』を集めるのに結界とか関係あるのか？」

「いえ、結界は関係ないわ。ただ、距離とか『負の念』の強さは関
係してくるの。より近者の『負の念』の影響を一番受けやすく、『
負の念』が強い程『パンドラ』の力や狂うスピードは上がるわ。」

「そついう事だ。こちらとしても、直ぐに狂われては困るのでな。」

正直、有りがたく思うよ。殺したりしたら、場に『負の念』がこもるのでな。」

エルが説明を終えるまで待っていたのか、その言葉に引き継ぐ様に、語る月影。

「さて、余計な話はこのままで。それでは解錠と行こう。ダリウス。」

「はい。」

ダリウスは月影に命令され、『パンドラの箱』に鍵を差し込もうとする。しかし、一つ目の鍵を開ける事さえ適わなかった。何故なら……

「させる訳ないだろう?」

「ガハッ!」

いつの間にか接近していた慧が、ダリウスを蹴り飛ばしたからだ。そして、

「こっちは任せたぞ美夜!」

「グフツ!」

そう言いながら、慧は続けて月影へ接近し、超近接からの当て身で、吹き飛ばす。さらに……

「月影様!」

「あなたの相手は俺だ。付き合っただけで済むぞ。」

吹き飛んでいる最中の月影に接近し、『属性武装』で強化された拳を叩きこみ、博物館の館内へと吹き飛ばし、慧自身も中へと入って行く。

「……いつの間に？じゃあ、この慧は？」

「すみません。彼に頼まれて……」

シオドスがエルに謝りながら指を鳴らすと、氷の破片となって消えた。ご丁寧にマイクも仕込んである。

「『グラス・ミラー氷の残像』……まったく、こつちも驚いたじゃない。」

「ふふ、まあ、慧ですから。」

憤慨するエルに、美夜は仕方が無いと呆れた口調で言う。慧の事を知ってまだ日は浅い美夜であるが、慧がどういう人間かほぼ、把握してしまっているのであった。

それだけ、1日1日が濃密だったのだろう。その事に、内心嬉しく思う美夜だが、今はその様な事を考えている訳にはいかない。

「はあ、それじゃあ、手はず通りに行くわよ！」

「「「おう！（はい！）」「」」

エルの言葉に全員が答え、それぞれの相手へと向かって行く。

「やっとだ……やっと……貴様を殺せる！」

ヘルメが雷蔵へ正面から突撃していき、雷蔵は、その場から距離を取る。そこに土の蛇が襲いかかるが、すぐさま『雷刃』を高出力で一閃し、真つ二つに切り裂く。

「ふむ……『雷』の刃で『土』の蛇を一撃か……相当だな。」

「つべこべ言つてねえ〜で、殺るぞ！カリオ！」

「！……ふはは、ああ、ヘルメ！」

自分の名前を久々に呼んだヘルメに驚き、それだけ本気なのだと察したカリオもヘルメに答え、構えを取る。

「クク……あの老人の敵打ちといったところか？いいだろう……この俺が……相手をしてやる。」

「『アクア・サーベント』
水の蛇」

止水は雷蔵を追って行くこととするヘルメに向かい水の蛇を放つが

「『イクニス・ドラゴン』
火の竜」

ピュラの放った火の竜に呑み込まれ、蒸発される。

「『カリゴ・ブラチウム闇に引き込む腕』」

更に、ヘレンが闇の腕を止水のいた場所に発生させ、動きを止めようとするが、それに気付いた止水はその場から飛んで離れる。逃げ遅れた黒尽くめ達は、闇の腕に叩き伏せられていた。

「あなたの相手は私達です！」

珍しく、どもらずにそう宣言するピュラ。ヘレンもその隣で首を縦に振る。

「あの時の小娘共か・・・いいだろう。」「まずは貴様達を叩きつぶそうとしよう。」「

止水は『水分身』を作りながら答えるのであった。

「さて、それじゃあ、私達は・・・」

「ダリウスとその他大勢を片づけましょう。いいですか？ミヤさん？」

「ええ、大丈夫よ。さっさと片付けましょう。」「

『影』の『魔法使い』達、数はざっと100人程度、そして、その奥にダリウス。

「この程度、楽勝よ！」

「はは、これは頼もしいですね。」

「それじゃ、『無』属性の魔法を存分に見せて貰いましょうか。」

3人は掃討戦を開始する。

「ふむ……中々どうして……小僧、貴様、何者だ？」

月影は慧に殴られた箇所を触りながら、問う。ダメージはそれほどないが、攻撃を当てられたのは久しぶりのため、驚いているのだ。

「俺が何者か？それはこれを見れば分かるだろう？」

そして、慧は『属性武装』の密度を上げながら、逆に聞き返す。その『魔法』に月影は更に驚く。

「な！それは『属性武装』！貴様、その歳で……いや。それよりも……何処でそれを覚えた！」

「やはり、この『魔法』を知っていたか……」

慧は一人つぶやくとその問いに答える。

「何処で？誰に？の間違いだろ？これを使えるのは俺を除けば、貴様の他にもう一人しかいないんじゃないか？」

その言葉に、目を見開き、そして、納得言った様に、落ちつきを取り戻した。

「良く、俺がそれを使えると分かったな……。だが、奴の……『鋼王』フリード・ディゼンダー……の関係者なら、当然か……。貴様は奴の弟子か？」

「まあ、そんなところだな。」

そう、慧の気になっていた事とはこの事だったのだ。『鍵守』達の話の聞いていて、以前フリードが話していた人物の魔法にそっくりだったからだ。まさかと思い、今回、この男の相手を一人すると申し出たのだ。

「そうか……。奴が弟子を取るとはな……。ククク……。面白い。貴様を殺せば奴はどんな顔をするかな？」

「あんたごときが俺を殺す？笑わせるな。『魔素』に吞まれたあんなじゃ俺には勝てねえーよ！」

そして、実際に会って、魔法を見てから確かめようと思ったのだが、存外、自分から話してくれたのでその必要はなかった。そして、その通りなら、その人物の辿った末路は『属性武装』の使用限界を超え、『魔素』に吞まれた。そして、人外と也果てた……。ならば、慧がしなければならぬ事の一つ。

慧は鼻で笑うと、構えを取る。

「何の目的で『パンドラの箱』を狙ったか知らんが、『魔素』に吞まれた貴様は、多くの人をその手にかけて……。そして、今もかけ

続けているのだろうか？何の罪もない人達を・・・『異形化』した以上、それは、他の魔物と同じ、ただ、人に害を成すだけ・・・なら、この手で殺す。」

「ククク・・・何も知らぬ若造が！貴様ごとくではこの俺には勝てぬわ！行くぞ！格の違いを、経験の違いを教えてやる！」

そして、『属性武装』と『異形化』した『属性武装』の戦いが幕を開けた。

第十九話 ヘルメ・カリオ VS 雷蔵

ヘルメとカリオ 対 雷蔵の戦いは雷蔵が優勢の状態が続いていた。

「ぬう……早い……ヘルメ！奴の足を止められぬのか!？」

「うっせ！こつちも手が離せねんだよ！そつちでどうにかしろ！」

カリオは『土の蛇』では直ぐに『雷刃』に切り裂かれるため、『石』を棒状に展開し、接近戦に変え、雷蔵と交戦している。雷蔵の『雷刃』も『石』の棒には通りづらい様で、カリオは雷蔵の攻撃を棒で捌きながら打付や払いを繰り返しているが、雷蔵の動きが早く、捉える事ができない。（なお、この『石』は正確には蛇紋石系や角閃石系の鉱物により作られているため、電気を流さない。）

一方、ヘルメも『雷蔵』と交戦している。正確にはどちらかは『影分身』な訳だが、本体と何ら変わりないため、どちらが本物かはカリオとヘルメには解っていない。

つまり、どちらも動きが早く、ヘルメの風の弾丸も避けられている。また、雷蔵も風の弾幕のせいでヘルメに近づく事ができない。しかし、ヘルメは二丁拳銃による弾幕で近づかせていないため、カリオの援護に回すには手が足りない。

現状、拮抗している様に見えるが、実際のところ、魔力の消費はヘルメが一番激しい事、また、『箱』と『鍵』は未だ敵の手にあるため、時間的、精神的余裕がない事から、雷蔵が優勢なのだ。

「ふ……どうした？」 「その様な攻撃、かすりもしないぞ？」

「ちっ……だったら……」

ヘルメは片方の銃の魔法を『風刃』に変えて撃ち続け、もう片方の銃は弾を入れ替え、魔力を込める。

そのため、弾幕が薄くなり、絶好の機会となる。そして、それを見逃す雷蔵ではない。

「もらった！」

「ヘルメ！」

『雷蔵』は弾幕が一番薄い所にこれまでよりさらに速度を上げ、飛びこむ。いくつかの『風刃』が掠めるが気にせず、そのまま接近し、『雷刃』で切り伏せようとする。カリオはヘルメの援護に向かおうとするが、雷蔵に阻まれ、行くことができない。

そして、『雷刃』がヘルメに当たる直前……魔力を充填していったはずの、まだ充填しきっていないはずの銃を『雷蔵』に零距离で突きつける。その顔には不敵な笑みが浮かんでいた。

「ウイン・下ストーム・デンジマー・下リユニ暴風狂竜！」

「しまっ……！」

そして、引き金を引いた。

『雷蔵』は至近距離から無差別に渦巻く風の刃……それにより形作られた竜のアギトに呑み込まれ、跡形もなく、引きちぎられた。

すると、その『雷蔵』が本体だったのか、カリオが相手をして
いた雷蔵も跡形もなく消え去った。それを確認したカリオはヘルメ
へ駆け寄る。

「ヘルメ！今のはなんだ？あのレベルの魔法を撃てるだけの魔力を
あの短時間で込められたというのか？そも、何故もつと早く使わな
かった？」

カリオは今の魔法をあれだけの時間で撃てたこと、出来たなら、
何故もつと早う使わなかった、文句を言う。以前、慧と勝負をした
時は魔力を込める時間は十分にあり、その上で使用していたため、
カリオも今回の魔弾がどんなものか知らなかった様だ。

「うるせー！今のは一発しか使えないんだよ！仕方が無いだろ！」

どうやら、ヘルメの魔銃では今の弾を一度しか使えないため、確
実に当てられるまで控えていたらしい。そして、一度しか使えない
と言う事が、今回のヘリオが使った魔弾の答えでもある。

そもそも、魔銃とは、魔法を撃つ銃の事であるが、この弾には二
通りのものがある。一つは、『術式』だけを刻み、魔力は撃つ際に
充填するもの。一般的に知られているのはこちらの方だ。なお、弾
と言っても、『術式』が刻まれた弾は実際には発射されない。その
様に作られている。なので、魔力が尽きるまで弾切れというものは
無い。

そして、もう一つ。こちらが、今回ヘルメが使用した弾だ。ここ
らには予め『術式』を刻み『魔力』も込めてある。こちらは実際に
弾を撃つ事で使用する使い捨てだ。しかし、魔力を込めるという予
備動作がないため、便利である。しかし、現在の技術ではこの弾で
使用できるのは中級が限度、上級以上だと銃身が持たないのだ。

現に、先ほど『ウインドストーム・デジキヤー・ドリコリン暴風狂竜』を撃つた銃は銃身が弾け飛んでいる。

なお、通常の弾だと、このような現象は起こらない。この違いは予め『魔力』を込めているか否かの違いによるものだ。予め魔力を込めておく場合はその魔力が外に漏れない様にふたをしている。それを壊すのが撃鉄なのだが、壊した際、上級魔法を使用するための魔力量が一気に流れ込むため、銃自身に刻まれた、魔力を供給するための『術式』が耐えられず破壊されるためである。

「そ、そうか。しかし、よくわかったな。お前が相手をしている方が本物だ……」

もし偽物なら、今のは使い損だ。さらに、不利になる。

「ああ、俺の魔弾が掠めたのに血が流れていなかったからな、それで確信を得た。まあ、例え偽物でも、そのままカリオが相手をしていた雷蔵も纏めて呑み込ませるつもりだったからな。」

「そうか、こちらは終わったな。エル達の所へ戻るぞ。」

カリオは先行して、エル達のところへ向かう。

「ああ、御老功の敵も討てたからな。とつとつ、取り戻すっ!？」

ヘルメも後に続きエル達のところへ向かおうとするが、その動き、言葉が途中で止まる。

「ヘルメ?・・・ヘルメ!」

カリオはヘルメの言葉が途中で止まった事に疑問に思い振り向く。すると、腹部から『雷刃』を生やしたヘルメが血を口から吐き出していた。

そして、その背後には殺したはずの雷蔵がいた。

「ゴホツ！はあ・・・なんで、テメエが・・・」

「ふははは！俺を殺せたと思っていたのか？残念だったな。貴様達の相手をしていたのはどちらも分身だったのだよ。」

そして、次々と分身が現れる。その数、本体含めて全部で13人。

「この数は流石に」「維持するのに魔力を大分消費するが」「一人は死に体」「もう一人は力重視」「この数の我らを」「捉える事は出来まい・・・」「これで決めさせて貰う」「まずは、一人目！」

「ぐわあああ！」

雷蔵はヘルメに突き刺している『雷刃』、その刀身に蓄えられている雷の属性を解放した。その結果、ヘルメは雷に撃たれた様に痙攣し、体中から煙を上げ倒れた。その体はところどころ炭化していた。

「ヘルメ！」

カリオは駆け寄ろうとするが、雷蔵達が待ち構えているため、下手に駆け寄る事が出来ない。

「さて、これで一人目だ。」「貴様一人では何もできまい。」「これで終わりだな。」

そして、全ての雷蔵が駆けだそうとする。しかし、雷蔵にも予想外の事が起こった。それは……

「ぬっ!」「動けぬ!」「これは……」「まさか!」

雷蔵達は足を地面に吞まれ、さらに風の縄にその身を捕らわれ動けなかったのだ。

「へ、へへへ……やっと、姿を見せやがったな、ゴホッ!……はあ……クソが……」

「……待ちわびたぞ。この時を……」

「貴様ら……」「まさか……」「知っていて……!」

ヘルメとカリオの言葉と、完全に捕らえられた事から、初めて雷蔵は焦りを見せる。しかし、それも、もう遅い。

「ああ、その魔法は以前見せてもらったからな……ゴホッ……はあ……テメエの事だ……最初から本体が出てくれるとは思ってなかったぜ。」

「だから、一芝居打たせてもらったと言う事だ。案の定、トドメを刺すために本人がでてきたな。ヘルメは貴様の部下を殺した。貴様はそんなヘルメを怨んでいる。この絶好の機会、本人が出てこないはずがないからな。」

「くっ……ははは……俺が本体?何を言うかと思えば……もし違っていたらどうする気だ?」

そう、『影分身』も血を流す。この雷蔵も分身の可能性があるのだ。しかし、本人達は確信を持っている。

「いいや・・・テムエが本体だ。確かに、分身もほとんど本体と変りがない。はあ・・・普通なら区別はつかない。だが・・・知っているか？『雷針』を・・・」

「『雷針』？・・・まさか！あの老人か！」

「そういうことだ。メウス老が残した目印・・・それに気付かなかった貴様の負けだ。」

『雷針』は発信機のようなものだ。対象に打ち込むことで微弱な電気を放出し、位置を教えるものだ。本来は使用者本人にしか分からないのだが、メウスは良くこの魔法を使用するため、仲間内には分かる様に専用の受信機を作っていた。

本来の雷蔵なら気付いていたかもしれないが、撃ちこまれたのが、失った片腕、感覚がなく、気付く事ができなかったのだ。

しかし、ヘルメ達も、本体がここまで近づくまで、本体がどこにいるか解らなかった。それは、打ちこんでから時間が立っており、『雷針』の効果が大分弱まっていたからだ。

「さて、それではこれで終わりだ。『地に立つ者、全てを引き裂く大地の牙、大地の脅威をその身に刻め』」

「ゴホツ・・・はあ、はあ・・・『鋼鉄をも切り裂く真空の刃よ、我が捕らえし咎人をその身に抱いて切り刻め』」

「や、やめ……」

二人は呪文を詠唱する。その間も、抜けだそうと雷蔵は必死に足掻くが、完全に捕らえられ抜け出す事ができない。そして……

「『グラントレイジ大地の猛牙』！」

「『風縄・風刃の抱擁』」

地に立つもの全てを切り裂く大地の牙と、風縄に捕らえたものを切り刻む真空の刃が、雷蔵を今度こそ、引き裂いた。

カリオは雷蔵の死体を今度こそ確認し、安堵すると、ヘルメへ向かう。

「ヘルメ、雷蔵は死んだぞ。メウス老の敵は討った。」

「……」

しかし、ヘルメからの返答はない。なぜなら、あれは芝居ではなく、その身を犠牲にした罔だったからだ。

「……まだ、やる事があるのだ。俺は行くぞ。すまない……このままにしていくな。」

そして、カリオはエル達の下へと向かう。後には無残にも引き裂かれた雷蔵の死体と、満足な顔をして微動だにしないヘルメの死体が横たわっていた。

第二十話 ピュラ・ヘレン VS 止水(前書き)

更新が遅くなります。すみません。

第二十話 ピュラ・ヘレン VS 止水

「・・・面倒・・・」

「無駄に数だけ多いですね。」

ヘレンとピュラは止水の『水分身』を相手に足止めを喰らっている。ダーク・エッジ『闇刃』やイグニス・ドラゴン『火の竜』で薙ぎ払っているのだが、次々出て来るため、それが水の壁となり、詠唱している止水を止める事が出来ない。

『水分身』を無視したい所ではあるが、所詮分身と侮る事はできない。強引に突破しようとする、その水に絡めとられ動きを制限されてしまう。そのため、遠・中距離からの攻撃をして徐々に近づこうとしている訳だが、破壊した傍から勝手に出てくるため、それもできない。

「え、詠唱に集中しているのに、こ、これだけでてくると言う事は・・・」

「・・・魔方陣が仕掛けてある・・・と、思う。」

二つ以上の魔法を同時に使用する事は難易度が高い。特に上級になると更に難易度が上がる。現在止水は詠唱に集中しており、それだけ上級の魔法を使用しようとしているのに『水分身』が次々と現れるのはおかしい・・・だとすると、自然発生する様に魔方陣を仕込んでいる可能性が高い。

「へ、ヘレンちゃん！わ、私が一掃するから、じ、時間稼ぎを、お願いできる？」

「・・・わかった。『一刀を隠す黒死蝶〈ブレイド・ハイド・ダーク・デス・バタフライ〉』」

ピュラはヘレンに後を任せ詠唱を開始する。ヘレンは魔法を『闇刃』から『一刀を隠す黒死蝶〈ブレイド・ハイド・ダーク・デス・バタフライ〉』へ切り替える。この魔法はある範囲に侵入したものに生物・無機物・魔法問わず闇の蝶が集まり、蝶が刃となり切り裂く魔法だ。範囲を限定する事で、使用者の魔力が無くならない限り、蝶が次々と現れる魔法である。

そして、これはヘレンが最も得意とする魔法で、上級ながら、無詠唱で行うことができる。

「・・・・・・」

そして、蝶と『水分身』が入り混じる中、ヘレンは止水を観察する。止水が動きを止めて有る程度時間は経っている。しかし、未だ魔法は放たれない。直接対峙した訳ではないが、以前『蛟』を使用した時はもっと早かったはずだ。いや、そうじゃなくとも遅すぎる。

「・・・なに？」

更に良く観察するヘレンは違和感を感じる。そして、その違和感に直ぐに気付いた。詠唱しているはずの止水の口が全く動いていないのだ。

「・・・まさか！ピュラ！早く！」

ヘレンは何かに気づき、ピュラを急かす。そして、丁度その時、ピュラに詠唱が終わりを迎えた。

「『……祖が紅蓮の火で纏い焼き尽くせ……』フレイム・マグヌス・イケニス 燃え広がる大火』
」

殲滅系の魔法『燃え広がる大火』が三つ、ピュラとヘレンを中心に丁度三角形を描くように落下し、当たりは火の海に包まれた。その中心にいる二人にはその影響はない。

「ど、どうですか？」

ピュラは周囲を見るが、火が広がり、止水の姿は見る事は出来ない。

「……ピュラ、次の魔法の準備をして……多分終わっていない」

ヘレンがピュラにそう言つと同時に、いきなり上空から水の塊が降り注ぎ、火の海が鎮火されて行く。その光景を目を見開いて二人が見つめる中、複数の巨大な影が降りてくる。

「さて、これで準備は整った。」

『蛟』が5匹、10m級の『アクア・サーベント水蛇』が5匹、空中から現れた。

「い、いつの間に!？」

「……たぶん、あれも分身……口が動いていなかった。いつ入れ替わったかはわからないけど……」

そう、先ほどまで、目の前で詠唱していたのも分身だったのだ。なぜなら、先ほどヘレンが見た時、詠唱しているはずの口が全く動いていなかったからだ。最初は確かに詠唱していたはずだが、いつの間に入れ替わったのか……

しかし、状況は動いている。いつまでも先ほどの事にこだわっている場合ではない。

「この数を貴様らは凌げるか？」

「……詠唱が長いと思ったら……このため……」

「で、ですが、これだけの魔法……魔力の消費が激しいはず……これさえ凌げば……」

ヘレンはピュラの言葉に頷き、互いに行動を開始する。ピュラは『炎槍』を展開し、まずは『水蛇』へ向かって行く。止水もそれを迎撃する様に『水蛇』や『蛟』を二人に向かわせるが、ヘレンは展開していた『刃を隠す黒死蝶』を外側へ一気に解放する。

すると、出現していた蝶が『闇刃』とは異なる、大きく、質量を感じる程に黒々とした10本程の剣を形作り、止水達に向かい放たれた。

「ほう……やるな……」

止水は関心する。ヘレンが放った剣はピュラの援護と自らを守るために使用され、向かってくる『蛟』を3本の剣で串刺しにすると、『水蛇』2体を2本の剣で薙ぎ払い、破った。しかし、その際、『水蛇』達は弾け飛び、剣も一緒に消失した。

ピュラはその『炎槍』と炎の魔法で10m級の『水蛇』を蒸発させる。放たれる水の弾丸や刃を『炎柱』や『火の玉』で迎撃、蒸発させ、『炎槍』を突きいれ、沸騰させる事で『水蛇』本体を蒸発させていく。

いとも簡単に倒されていくその光景を、しかし、止水は落ち着いて見ている。そして、とうとう二体目の『蛟』も消され、残りは自分が乗っているものも含め3体である。

「・・・残りは、後三体・・・」

「た、たいした事有りませんね。以前の方が歯ごたえがありましたよ？数を増やした結果、一体一体が弱くなっただんじやありませんか？」

ヘレンとピュラは強気に言う。思っていたより手応えが無く、行けると判断したからだ。しかし、止水は不気味に笑うだけだ。

「そうか・・・なら、この二体も倒してみるのだな。」

その言葉が命令となったのか、残りの内、二体の『蛟』が襲いかかって来る。しかし、ヘレンは無詠唱で『刃を隠す黒死蝶』を展開し、迎撃。その間にピュラは詠唱で『火の竜』を生み出し、攻撃する。

黒い剣と火の竜が数回ぶつかり合い、『蛟』2体は破られた。それでも止水は未だ笑っている。

「いや、いや、凄い、凄い。こんなに簡単に俺の魔法を破るとは・・・」

全く余裕そうに言う止水に二人は眉を潜める。

「なぜ・・・そんなに余裕？」

「も、もう、あ、あなたが乗っている『蛟』しか残っていません。降伏すれば、これ以上は手を出しません！」

二人の言葉に笑う事を止めた止水は、呆れた様に肩を竦める。

「ふっ・・・まだ気付かぬか？自分達の置かれた状況に・・・」

「・・・何？」

「つつ！へレンちゃん！ここから離れ・・・」

しかし、既に、止水の魔法は完成していた。

「もう襲い！『魔霧』！」

そして、二人は霧の結界に包まれた。

「・・・これは？」

へレンはポツリと呟く・・・周囲は霧で包まれ何も見えない。側にいたはずのピュラさえも・・・

「・・・ピュラ！・・・どこ？」

叫んでみるが全く返答が帰ってこない。じっとしていても埒が明かないため、『蝶』を周囲に展開しながら、前に進む。

「・・・これは、どういう事？」

しかし、何時まで経っても霧から出る事が出来ない。かなりの距離を歩いたはずだが、何も無い。ヘレンは一度立ち止まり、再度考える。

「・・・この霧を晴らせれば・・・でも私の魔法じゃ・・・」

手持ちの魔法でこの状況を打破出来る者を探すが、自分が使えるものの中に該当はない。何か応用は出来ないか再び考え始める。

「つつ！」

その時、物音が聞こえた。振り返ると、止水が刀を構え、突きを放って来る所だった。

ヘレンはすぐさま、展開していた『蝶』で剣を構成すると、迎撃する。

「ヘレンちゃん！どこですかー！」

ピュラは霧の中を『炎槍』片手にヘレンを探す。

「はぁ・・・いったい、何ですか・・・この霧は・・・」

ピュラは乱れた息を整えながら一人ごちる。止水の攻撃を警戒しながら、状況を打破すべく動いてはいるが、ヘレンが何処にいるか

分からないため、大規模な火の魔法を使えない。かといって小規模なものではどうしようもなく、結果ヘレンを探す事を優先する事になった。

「ヘレンちゃん！・・・ヘレンちゃん？」

正面に人影が見えた。ピュラは走って近づいて行く。そして、はっきり見える程に近づくと、それはヘレンのものではなかった。

「つつ！止水！」

ピュラはその背に向かいすぐさま『炎槍』を突き出す。すると、止水も気付いた様で、振り向きざま、刀を振るってくる。そして・

「え・・・？」

ヘレンの剣がピュラの腹部を、ピュラの『炎槍』がヘレンの肩を貫いていた。

動揺を見せた二人は展開していた魔法を解き、それぞれ血を流し倒れる。すると霧が段々晴れて行く。二人は先ほど、霧に包まれる前にいた場所から一步も動いてはいなかった。

「はははっ！どうだ？『蛟』の霧、『魔霧』を味わった気分は？」

そう、二人が止水と誤認し、互いに刺しあつたのは『魔霧』の効果だったのだ。この『魔霧』は毒を含んだ霧で構成されており、包んだ対象の認識を狂わせ、幻覚を見せる魔法だ。この魔法の恐ろしい所は、姿だけでなく、気配や立ち振る舞い、魔力など全てを惑わ

せる事だ。その結果二人は同士撃ちしてしまったのである。

止水が『水蛇』達をわざと消させたのは、この魔法を発動させるためである。この魔法には大量の水が必要となり、それを掻き集めるために、長い詠唱を必要としたのだ。そして、集めた水で作った『水蛇』達をわざと壊させる事で周囲に水をばら撒いたのである。また、毒を含んだ水を二人に被せるためでもある。

「ゴホツ！・・・ヘレン・・・ちゃん・・・だいじょう・・・ぶ？」

「・・・私は・・・平気・・・でも、ピュラが・・・」

ヘレンは『炎槍』で肩を貫かれたものの、急所は外れているのでまだ大丈夫だが、ピュラは腹部を剣が見事に貫いていた。急いで治療しなければ間に合わない領域だ。しかし・・・

「さて、それじゃあ、死んでくれ！」

止水がそれをさせない。最後まで『蛟』を放ち、自らも突撃してくる。

「・・・つく・・・」

ヘレンは蝶で剣を作り、『蛟』に放つが、今度の『蛟』は先ほどまでのものとは違い、貫く事が出来なかった。

「残念だったな！」

止水も刀を抜き、攻撃に参加してくる。ピュラは立とうとはしているが、出血の量が多く、足が震え中々立てないでいる。

ヘレンはそんなピュラを庇おうと必死に魔法を繰り返すが、『蛟』

がそれを防ぎ、接近して来た止水に蹴り飛ばされる。

「さて、終わりだな。どちらから殺そうか・・・そうだな、まずは・・・貴様からしよう。」

止水は、ピュラへと近づいて行く。ヘレンは必死にその足を止めようとするが、『蛟』の突進を受け跳ね飛ばされる。

「う・・・ピュラ・・・」

再度立とうとするヘレンだが、距離があり過ぎる。

「さて、最後に言い残す事はあるか？」

ピュラに近づいた止水は刀を振りかぶり問う。

その言葉にピュラは不思議な事に、笑いながら言う。

「ははは・・・そうですね・・・それじゃあ、不本意ですが、一緒に死んでくれますか？」

「!?!?」

ピュラは止水の足を掴む。油断していた止水は反応する事が出来なかった。

「は、離せ!」

止水はピュラを殴り、離させようとするが、けして、離さない。

「へ、ヘレン……後、よろしくお願いしますね？」

「ピュラー！」

止水はいくら殴っても離さないため、『水刃』で腕を切断しようとするが、生み出した『水刃』は直ぐに蒸発したため、かなわなかった。

「な！？ぐわあああ！」

ピュラはとんでもない熱量を発生させ、『水刃』を蒸発させただけでなく、止水の足も燃やし始めた。その痛みに、叫ぶ止水。

「き、貴様！自爆するつもりか！」

その言葉に、ピュラは笑って答えた。

「……『イグニス・エンド命終える最後の火』！」

そして、巨大な火が立ち上り、爆発……二つの命が消えた。

「ピュラー！」

ヘレンはその爆風により、吹き飛ばされながら、仲間の名前を叫んでいた……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2153x/>

闇の断罪者と無の還元者～世界の秘密と魔法使い～

2011年12月24日01時55分発行